

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書VI

みつ や ばら 遺跡
三屋原遺跡

みつ や ばら B 遺跡
三屋原B遺跡

つか こし 遺跡
塚ノ越遺跡

よつわり すぎ さわ 遺跡
四割・杉沢遺跡

1988

新潟県教育委員会

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書VI

みつ や ばら
三屋原遺跡

みつ や ばら
三屋原B遺跡

つか こし
塚ノ越遺跡

よつわり すぎさわ
四割・杉沢遺跡

1988

新潟県教育委員会

序

北陸自動車道は、昭和42年に基本計画が発表されて以来昭和62年までには新潟から名立までと、滋賀県米原から富山県朝日までが開通し、残り朝日から名立の早期開通が待たれています。北陸自動車道の開通により新潟県は首都圏はもとより近畿圏とも1本の太いパイプで結ばれ、新潟県の西部も高速交通時代の恩恵に浴することも間近となっています。

糸魚川市を含む西頸城地方は、ヒスイの産地として全国的に知られ、縄文時代の国指定史跡長者ヶ原遺跡などでつくられたヒスイ製品は、北海道から九州まで渡り、また姫川周辺には弥生時代から古墳時代にかけての玉作遺跡が多く存在しています。このようにこの地域では多くの埋蔵文化財が残されているところであり、先人達により、多くの調査が進められていました地域もあります。

今回の調査により、三屋原遺跡では新潟県内でも数少ない縄文時代前期の住居跡を確認し、また縄文時代中期の蛇紋岩製の磨製石斧の未完成などが出土し、石斧の製作技術の一端を認めることができました。このことが今後の当該期の研究の一助となることを期待しています。

なお、計画から発掘調査全般に対し、格別の御配慮を賜った日本道路公団と、本調査に際し、多大な御協力・御援助を賜った糸魚川市教育委員会に心から謝意を表するものであります。

昭和63年3月

新潟県教育委員会

教育長 田 中 邦 正

例　　言

1. 本書は北陸自動車道の建設に伴う新潟県糸魚川地区の発掘調査報告書の第6冊目である。
昭和63年3月までに中原・岩野A・岩野E遺跡(糸魚川地区発掘調査報告書I), 岩野下遺跡(同II), 立ノ内遺跡(同III), 原山・大塚遺跡(同IV), 小出越遺跡(同V)の各報告書が刊行されており, それらにつづくものである。
2. 本書は糸魚川地区のうち, 糸魚川市大字蓮台寺字塚ノ越および同字竹屋原に所在する塚ノ越遺跡・三屋原遺跡・三屋原B遺跡と, 同市大字一の宮字四割および同字杉沢に所在する四割・杉沢遺跡の発掘調査報告書である。なお四割遺跡と杉沢遺跡については尾根上の幅10mほどの浅い沢によって分けられているが, ここではひとまとまりとして四割・杉沢遺跡として取扱った。
3. 発掘調査は, 新潟県が日本道路公団より受託し, 新潟県教育委員会が主体となって実施した。調査は昭和60年度と61年度の2年度, 整理作業も61年度と62年度の2年度にわたった。調査体制については第III章5で記述している。
4. 三屋原B遺跡については, 昭和59年度に実施した確認調査において存在が明らかとなり, 三屋原遺跡と谷を挟んで隣接しているので「三屋原B遺跡」と仮に登録した。その後, 同年糸魚川市教育委員会が発行した「新潟県糸魚川市遺跡詳細分布調査報告書」に記されている大原A遺跡は本遺跡のすぐ南に存在する。糸魚川市教育委員会発行の分布図には三屋原B遺跡の部分には遺跡の範囲は示されていないが, 大原A遺跡がのびる可能性がある。本書では「三屋原B遺跡」として取り扱う。
5. 四割・杉沢遺跡については, 昭和55年糸魚川市教育委員会が実施した長者ヶ原遺跡範囲確認調査(第5次)において, 一部試掘坑を入れており, 長者ヶ原遺跡の北辺がここまで伸びないと指摘されていた。しかし, 地形的に平坦面が存在すること, 遺物が採集されることから, 今回発掘を行うこととなった。
6. 出土遺物は一括して新潟県教育委員会が保管している。遺物の注記は各遺跡を略して三屋原遺跡は「MT」, 三屋原B遺跡は「MTB」, 塚ノ越遺跡は「TU」, 四割・杉沢遺跡は「YS」とし, 次に遺物台帳の番号および遺構名を記した。
7. 発掘調査は, 糸魚川市蓮台寺・一の宮地区をはじめ, 寺町・南寺町・中央区・早川・岩野・上荅などの地区の方々の参加で行った。
8. 石質の鑑定については新潟県教育センター地学研究室村松敏雄氏のご教示を賜った。
9. 石器の実測について磨り面および敲打面をスクリーントーンで示し, 必要に応じて磨りの

- 方向・範囲を矢印で表わした。磨製石斧については原則として磨り面には矢印で方向を示したが、磨製石斧未成品については研磨面をスクリーントーンで示した。
10. 土器の実測図は縄文土器・土師器・近世陶磁器は断面白ヌキとし、須恵器・中世陶器については断面黒ヌリとして区別した。
11. 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。作成した図面のうち既成の地図を使用したものは、それぞれの図に出典を記した。その他は日本道路公団が測量した地形図を用いた。
12. 本書では遺物の番号は一連のものとし、挿図の番号と図版の番号とは一致している。
13. 遺構名は記号で表わし溝S D・土坑S K・竪穴住居跡S Iとし、性格不明なもの・風倒木痕はS Xとした。なお、記述にあたっての遺構名は調査の時点で使用したものを使用し、欠けている番号も存在する。
14. 本書の執筆は、池田敏郎（教育庁文化行政課文化財主事）・柳恒雄（同課文化財専門員）・山本肇（同）・竹田和夫（同）が行い、山本・竹田が中心となりまとめた。なお執筆分担は以下のとおりである。
- 池田敏郎 第I章、第III章2～4、第IV章4、第V章4
- 柳恒雄 第II章、第IV章4、第V章4、第VI章4
- 山本 肇 第III章1・5、第IV章1～3・5、第V章1～5、第VI章1～3・5、第VII章、第VIII章
- 竹田和夫 第VII章4
15. 本書作成にいたるまで下記の方々から有益なご教示、ご助言を賜った。記して謝意を表する。（敬称略）
- 木島勉、齊藤基生、土田孝雄、西井龍儀

目 次

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境	2
1. 地理的環境	2
2. 周辺の縄文時代の遺跡	4
3. 石器の素材产地	4
第Ⅲ章 調査の経過	6
1. 昭和59年度	6
2. 昭和60年度	6
3. 昭和61年度	8
4. 整理作業	8
5. 調査体制	9
第Ⅳ章 三屋原遺跡	10
1. 地形と層序	10
2. グリッドの設定	11
3. 遺構	11
4. 遺物	19
5. 小結	36
第Ⅴ章 三屋原B遺跡	38
1. 地形と層序	38
2. グリッドの設定	38
3. 遺構	38
4. 遺物	45
5. 小結	62
第VI章 塚ノ越遺跡	63
1. 地形と層序	63
2. グリッドの設定	63

3. 遺構	63
4. 遺物	65
5. 小結	66
第Ⅶ章 四割・杉沢遺跡	67
1. 地形と層序	67
2. グリッドの設定	67
3. 遺構	67
4. 遺物	77
5. 小結	88
第Ⅷ章 まとめ	91
1. 遺跡について	91
2. 遺物について	91
引用文献	94

挿図目次

第1図 周辺の地形および遺跡の分布	3
第2図 西頸城地方の各水系における採集可能岩石種類一覧	5
第3図 遺跡調査工程図	9
第4図 三屋原遺跡土層柱状図	10
第5図 三屋原遺跡・三屋原B遺跡・塚の腰遺跡地形およびグリッド設定図・折り込み	
第6図 グリッド図	11
第7図 三屋原遺跡遺構全体図	12
第8図 三屋原遺跡遺構平面図	14
第9図 三屋原遺跡土層断面図	15
第10図 三屋原遺跡土坑平面図	15
第11図 三屋原遺跡土坑平面図	16
第12図 三屋原遺跡土坑平面図	17
第13図 三屋原遺跡土坑土層断面図	17
第14図 三屋原遺跡遺構平面図	18
第15図 三屋原遺跡土層断面図	18
第16図 三屋原遺跡出土縄文土器 (1)	20
第17図 三屋原遺跡出土縄文土器 (2)	22

第18図	三屋原遺跡出土石器 (1).....	24
第19図	三屋原遺跡出土石器 (2).....	25
第20図	三屋原遺跡出土石器 (3).....	27
第21図	三屋原遺跡出土石器 (4).....	28
第22図	三屋原遺跡出土石器 (5).....	29
第23図	三屋原遺跡出土石器 (6).....	31
第24図	三屋原遺跡出土石器 (7).....	33
第25図	三屋原遺跡出土近世陶磁器ほか	36
第26図	三屋原B遺跡土層柱状図.....	38
第27図	三屋原B遺跡遺構全体図.....	39
第28図	三屋原B遺跡遺構平面図.....	40
第29図	三屋原B遺跡土層断面図.....	41
第30図	三屋原B遺跡遺構平面図.....	42
第31図	三屋原B遺跡土坑平面図.....	43
第32図	三屋原B遺跡遺構平面図.....	44
第33図	三屋原B遺跡出土縄文土器 (1).....	46
第34図	三屋原B遺跡出土縄文土器 (2).....	48
第35図	三屋原B遺跡出土縄文土器 (3).....	49
第36図	三屋原B遺跡出土縄文土器 (4).....	50
第37図	三屋原B遺跡出土縄文土器 (5).....	51
第38図	三屋原B遺跡出土石器 (1).....	53
第39図	三屋原B遺跡出土石器 (2).....	54
第40図	三屋原B遺跡出土石器 (3).....	56
第41図	三屋原B遺跡出土石器 (4).....	57
第42図	三屋原B遺跡出土石器 (5).....	58
第43図	三屋原B遺跡出土近世陶磁器ほか	61
第44図	三屋原B遺跡出土錢貨.....	61
第45図	塚ノ越遺跡土層柱状図.....	63
第46図	塚ノ越遺跡遺構全体図.....	64
第47図	塚ノ越遺跡土坑平面図.....	64
第48図	塚ノ越遺跡土坑平面図.....	65
第49図	塚ノ越遺跡出土石器.....	65
第50図	四割・杉沢遺跡地形およびグリッド設定図.....	68

第51図	四割・杉沢遺跡土層柱状図	69
第52図	四割・杉沢遺跡遺構全体図	70
第53図	四割・杉沢遺跡遺構平面図	74
第54図	四割・杉沢遺跡遺構土層断面図	72
第55図	四割・杉沢遺跡遺構平面図	74
第56図	四割・杉沢遺跡遺構平面図	76
第57図	四割・杉沢遺跡出土縄文土器	78
第58図	四割・杉沢遺跡出土石器 (1)	81
第59図	四割・杉沢遺跡出土石器 (2)	83
第60図	四割・杉沢遺跡出土石器 (3)	85
第61図	四割・杉沢遺跡出土石器 (4)	87
第62図	出土剝片・打製石斧長幅分布図	92
第63図	出土磨製石斧および未製品長幅分布図	93

図 版 目 次

図版1. 周辺地域の空中写真

三屋原遺跡

- 図版2. 近景(発掘調査前 東から) 住居跡周辺完掘状態(西から)
- 図版3. 西側沢部土層断面(北から) 西側沢部土層断面(南から)
- 図版4. 西側沢部完掘状態(南から) 北側地区完掘状態(南から)
- 図版5. S I 39土層断面(東から) S I 39完掘状態(東から)
- 図版6. S K 44完掘状態(西から) S I 39調査風景
- 図版7. ①S K 45完掘(西から) ②S K 45土層断面(西から) ③S K 41完掘(南から)
 ④P 4完掘(西から) ⑤S K 20土層断面(東から) ⑥S K 42土層断面(南から)
 ⑦S K 33完掘 ⑧S X 06 (風倒木痕) 周辺の状態
- 図版8. ①S K 18完掘(西から) ②S K 18土層断面(西から) ③S K 19完掘(西から)
 ④S K 19土層断面(北から) ⑤S K 40完掘(南から) ⑥S K 40土層断面(南から)
 ⑦S K 02完掘(東から) ⑧S K 61完掘
- 図版9. 出土縄文土器 (1)
- 図版10. 出土縄文土器 (2)

図版11. 出土繩文土器(3) 近世陶磁器ほか

図版12. 出土石器 (1)

図版13. 出土石器 (2)

図版14. 出土石器 (3)

図版15. 出土石器 (4)

図版16. 出土石器 (5)

三屋原B遺跡

図版17. 調査前の状態(東から) 完掘状態(東から)

図版18. 完掘状態東側(南から) 完掘状態西側(南から)

図版19. S I 17土層断面(東から) S I 17完掘状態(南東から)

図版20. ①S I 08完掘(北から) ②S I 08土層断面(北から) ③S K10土層断面(南から)

④S K10完掘(西から) ⑤S K25土層断面(東から) ⑥S K25完掘(北から)

⑦S K09完掘(南から) ⑧S X20(風倒木痕)土層断面(南から)

図版21. ①S K21完掘(西から) ②S K21土層断面(東から) ③S I 26完掘(南から)

④S I 26土層断面(南から) ⑤S D40・S D41完掘(南から)

図版22. 出土繩文土器 (1)

図版23. 出土繩文土器 (2)

図版24. 出土繩文土器 (3)

図版25. 出土繩文土器 (4)

図版26. 出土石器 (1)

図版27. 出土石器 (2)

図版28. 出土石器 (3)

図版29. 出土貨銭・近世陶磁器ほか

塚ノ越遺跡

図版30. ①完掘状態(西から) ②S K01土層断面(東から) ③S K01完掘(西から)

④出土石器

四割・杉沢遺跡

図版31. 発掘調査風景(北から) 発掘調査風景(南から)

図版32. S K05発掘風景(西から) S K05土層断面(北から)

図版33. S K05・S D37周辺完掘状態(西から) S K05完掘状態(西から)

図版34. 東側完掘状態(奥は長者ヶ原遺跡) 溝群完掘状態

図版35. ①S K39土層断面 ②S K39完掘 ③S K38土層断面 ④S K38完掘

⑤S K40土層断面 ⑥S K40完掘 ⑦S K36土層断面 ⑧S K36完掘

図版36. ①S K35土層断面 ②S K35完掘 ③S K04土層断面 ④S K03完掘

⑤S K21土層断面 ⑥S K21完掘 ⑦S K03土層断面 ⑧S K03完掘

図版37. 出土土器

図版38. 出土石器 (1)

図版39. 出土石器 (2)

図版40. 出土石器 (3)

表 目 次

第1表 周辺の遺跡地名表

第2表 三星原遺跡出土石器観察表 (1)

第3表 三星原遺跡出土石器観察表 (2)

第4表 三星原B遺跡出土石器観察表 (1)

第5表 三星原B遺跡出土石器観察表 (2)

第6表 塚ノ越遺跡出土石器観察表

第7表 四割・杉沢遺跡出土石器観察表 (1)

第8表 四割・杉沢遺跡出土石器観察表 (2)

第9表 磨製石斧製作工程表

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

北陸自動車道は、滋賀県坂田郡米原町で名神高速道路から分岐して、新潟県西蒲原郡黒埼町を終点とする延長476kmの自動車道路である。路線は、広々とした新潟平野を南下し、長岡・柏崎・糸魚川を経て、日本海沿岸を国道8号に沿って西進する。現在、昭和63年度の全線開通を目指して、糸魚川～朝日区間の工事が急ピッチで進んでいる。関越・北陸自動車道の開通は、従来の交通網をかえ、日本海側の各県と首都圏、近畿圏を太いパイプで結び、新潟県の経済・観光面での躍進がおおいに期待されている。西頸城地方の埋蔵文化財の調査は、昭和49年3月、日本道路公団（以下公団と略す）上越工事事務所より、新潟県教育委員会（以下県教委と略す）に対する、上越～糸魚川間の埋蔵文化財調査の依頼によって始まった。昭和49年11月の県教委の回答には、法線協議未了としながらも69遺跡の存在を示し、糸魚川市内25遺跡を明記している。昭和50年2月、法線決定に際しては、①埋蔵文化財の分布する地点は極力回避すること、②確認したものがすべてでないこと、③確認調査が必要であることなどの文化財に対する方針が県教委から公団に通知された。この後、昭和52年7月公団新潟建設局において公団から路線が示された。

昭和54年4月、上越～糸魚川間の県教委による現地踏査、昭和58年4月にも分布調査が実施された。昭和58年5月の回答には、糸魚川市内13遺跡が明示された。内訳は、塚ノ越遺跡など新発見の7遺跡と四割・杉沢の2遺跡の確認を必要とする地点を含めて報告している。昭和59年6月、県教委と公団との協議では、名立～糸魚川間は65年度供用開始を前提に、昭和59年確認調査を実施し、昭和60～61年度で発掘を完了してほしいと公団から要望が出された。これに対して県教委は調査面積の増加の可能性を示唆し、分布・確認調査の早期実施を確約した。

昭和59年6月、北陸自動車道全線開通を63年度に早めたい旨、公団から協力要請がなされ、君知事も快諾したことから、発掘調査の日程や調査体制の充実などについて、再検討された。

昭和59年8月、確認調査の協議がもたれ、蓮台寺地区、四割・杉沢地区で調査員延べ18人、9日間の数字が提示され、これを受け、8月下旬、塚ノ越遺跡と三屋原B遺跡・三屋原遺跡の2か所について確認調査を実施した。この調査は、ところどころに未買収用地が存在したり、雑木林が存在したため、範囲も限られたものであった。その後、条件が整うにしたがって、未調査地区に対して確認調査を実施し、その結果は、昭和59年11月教文第917号で回答されている。

昭和60年2月、県教委と公団との協議で、用地買収の促進や工事工程に沿っての発掘調査を始めることが確認され、三屋原遺跡への進入路の確保、四割・杉沢遺跡でのプレハブ設置箇所等、具体的な内容を討議した。昭和60年4月、早川～海川間の立ノ内遺跡・小出越遺跡から発掘に着手し、8月下旬より、海川～姫川間の三屋原遺跡・原山遺跡の調査を開始した。

第II章 遺跡周辺の環境

1. 地理的環境

ここで報告する4遺跡は互いに隣接して、新潟県南西部の糸魚川市に発達する海岸段丘面上に位置する。この地域は東西を海川・姫川で限られ、南は西頸城山地に接し、北は日本海に面している。

姫川沿いにはいわゆる糸魚川-静岡構造線がほぼ南北方向に走っており、地質地形的に山地が東西を2分している。東側の西頸城山地は、海岸から南に高度を増し、火打山(2462.0m)を最高点として長野県境に達する。主に新第三紀の砂泥岩層からなり、とくに最高約400m以下の小起伏山地では地質が大きな要因となって地すべりが多発する。県境に源をもつ能生川・早川・海川などがいずれも北流(ないし北西流)して日本海に注ぎ、それらの河口付近すなわち山地前面には段丘地形が発達する。構造線西側の白馬山地は北アルプスの北端にあたり、山地名由来の白馬岳(2933.0m)は富山・長野との3県境にある。主に石灰岩からなる黒姫山(1221.5m)などが日本海からそそり立つように構え、西頸城山地とは全く異なる山容をみせる。いくつかの断層で接しながら古生代-中生代の石灰岩や頁岩・砂岩および変成岩の各層からなり、また、この山地はヒスイの産地でもある。山地前面の険阻な親不知海岸は古くから交易には障害となってきた。

4遺跡が位置する姫川右岸の段丘面は、深い谷で開析され、舌状の形態をなし、高度差により新旧数段に分けられる。最も西側の四割・杉沢遺跡と他の3遺跡が深い谷で区切られたり、比較的平地面の広い他の3遺跡に比べ、三屋原B遺跡の立地が瘦尾根上であったりするが、總

第1表 周辺の遺跡地名表

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	茶畠	奈良・平安	14	塚ノ越	縄文	27	久保角地	奈良・平安
2	火葬場裏	縄文	15	大原A	縄文	28	姫上	奈良・平安
3	原山	縄文	16	大原B	縄文	29	苗代坪	奈良・平安
4	苦竹原A	縄文	17	姫御前	古墳	30	神角地	奈良・平安
5	苦竹原B	縄文	18	笛吹田	古墳	31	二本松	奈良・平安
6	苦竹原C	縄文	19	一の宮	古墳-近世	32	菊畠	奈良・平安
7	苦竹原D	縄文	20	清崎城	近世	33	新割	平安
8	長者ヶ原	縄文	21	城跡	奈良・平安	34	大塚	先土器・縄文ほか
9	四割・杉沢	縄文	22	城垣	奈良・平安	35	道者ハバ	奈良・平安
10	船野	縄文・古墳ほか	23	下畠	奈良・平安	36	美山	奈良・平安
11	後生山	縄文・弥生	24	東角地	奈良・平安	37	鶴口下	平安
12	三屋原	縄文	25	福場	奈良・平安	38	茶畠	不詳 ヒスイ等出土
13	三屋原B	縄文	26	宮屋敷	奈良・平安	39	山崎塚群	不詳

日本海



第1図 周辺の地形および遺跡の分布
糸魚川市1980年製作1万分の1地形図を使用

じて4遺跡は標高約60~75mの範囲で隣接しており、高位の段丘群の中に位置する。この高位の段丘には、長者ヶ原遺跡などがある。西方には縄文時代の遺跡が分布する段丘群が広がる。そして、東方は標高200m以下の丘陵を経て海川に達する。また、北方は2km弱の距離に日本海があり、南方はこの段丘面から引き続き西頭城山地へと延長する。これらのこととはこの付近一帯が山海の幸に恵まれた良好な生活舞台であったことを示唆している。

2. 周辺の縄文時代の遺跡（第1図、第1表）

姫川と海川にはさまれた地域で縄文時代の遺跡を概観すると、いずれも前述のとおり段丘面上に立地する。石斧、石錘が出土する大原A・大原Bの両遺跡は、塚ノ越・三屋原B・三屋原の3遺跡に隣接し、また、後生山遺跡は三屋原遺跡と同一段丘面上先端部に位置する。そして、早期~晚期の土器を伴出する住居跡とヒスイ製品生産で有名な長者ヶ原遺跡（国指定史跡）および、後期の苦竹原D遺跡は、四割・杉沢遺跡と同一段丘面上に立地する。さらに西方の深い谷を越えると、中位の段丘群には苦竹原A~C遺跡および火葬場裏遺跡のほか、最近の調査により梵鐘鑄造関係遺構や弥生土器でも注目される原山遺跡・大塚遺跡がある。

これらの遺跡が位置する段丘面は深い谷で開析されながらも、その内陸側では段丘間の高度差および谷幅が小さくなり連続した形となる。遺跡は同時期には存在しえなかつたが、当時の広い行動範囲の中に入るものと考えられる。

3. 石器の素材产地（第2図）

4遺跡には多種類の石器が出土している。その素材となる石質も豊富である。肉眼観察によると、砂岩・泥岩・頁岩・粘板岩・凝灰岩・花崗岩・はんれい岩・斑岩・玢岩・流紋岩・安山岩・玄武岩・黒曜石・チャート・ヒスイ・蛇紋岩・結晶片岩・タンパク石などがある。しかし石器によっては石質を限定することがある。磨製石斧・剥片石器・礫石錘・敲石・磨石は比較的出土点数が多く、その傾向が顕著である。また、扁平な河床礫を加工することが多い。

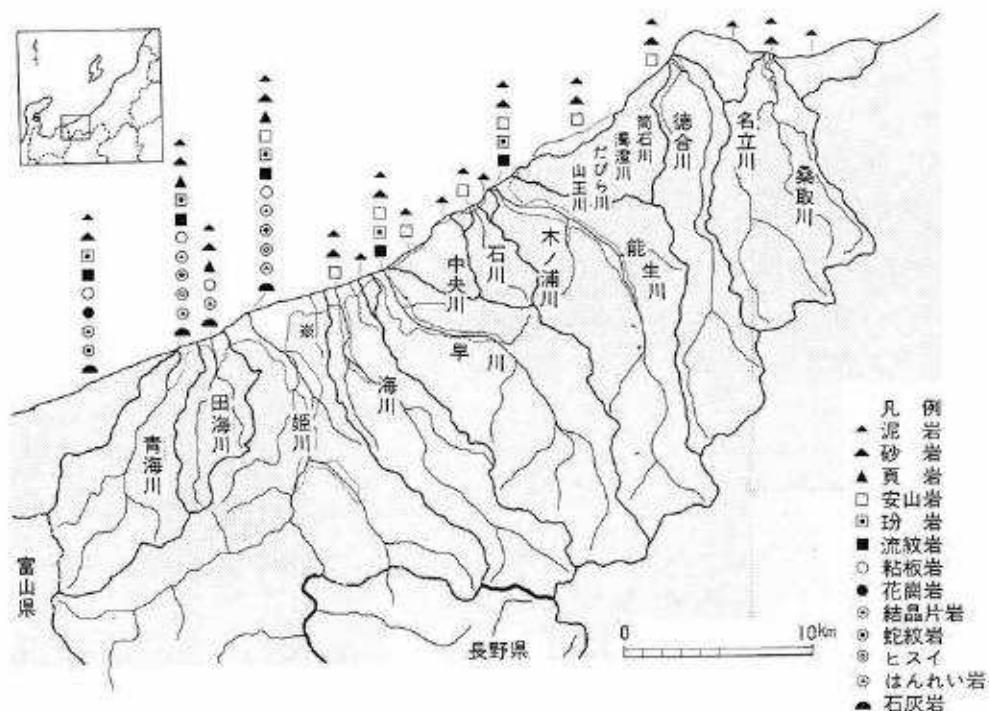
本地域の地質について、石器の素材产地の視点でもう一度ふれてみたい。第2図は国土地理院発行の5万分の1地形図をもとに、河川間の分水嶺から河川の流域すなわち水系範囲を求め表したものである。東から、主に桑取川水系・名立川水系・能生川水系・早川水系・海川水系・姫川水系・田海川水系・青海川水系などがある。そして、次の作業として、新潟県(茅原ほか1977)の20万分の1地質図から、それぞれの水系内に分布する岩石を拾いあげてみた。すなわち、それぞれの河口に、どんな石質の河床礫が集まりうるのか、その可能性を示した図になる。

前述のように、姫川沿いの構造線を境に河口に集まる河床礫の様子は東西で異なる。桑取川・名立川・能生川・早川・海川の河口では、新第三紀の砂岩・泥岩・頁岩が大半を占めそうである。能生川と早川の分水嶺を形成する鉢ヶ岳・権現岳を中心とした石英閃緑玢岩の岩体、同じく犁山・江星山を中心とした玄武岩質安山岩の岩体が、単調な地質に一部変化を与えていている程

度である。一方、姫川・田海川・青海川の河口では、先第三紀の硬質砂岩・頁岩のほか、黒姫山・明星山を中心とした石灰岩の岩体、そして、数多くの断層で接する深成岩・半深成岩の火成岩および変成岩などの分布を反映して、豊富な石質の河床礫が採取できそうである。とくに姫川の河口では、黒曜石を除いて、4遺跡で出土する石器の素材のほとんどを準備できる。

おそらく、垂飾などの装飾品が限定するヒスイ・蛇紋岩、そして磨製石斧が限定する流紋岩・蛇紋岩・結晶片岩は、姫川の河床礫であると考えられる。4遺跡から姫川までの陸上経路はいくつか考えられるが、いずれも2km以内の道程となる。また、剥片石器・礫石錐・凹石・敲石・磨石そして石皿などの素材となる砂岩・安山岩の礫は、4遺跡の舞台である段丘地形、円磨された段丘礫の中に十分なほど用意されている。これは、磨製石斧の素材よりもさらに容易に、段丘面を開析した谷を少し下るだけで採取できるのであるから、当然この方法がとられたはずである。

以上のように、本地域は豊富な石材産地であって、加工者が現地で直接素材を選ぶことができたと考えられる。



第2図 西頸域地方の各水系における採集可能岩石種類一覧

*印は長者ヶ原遺跡である。

第III章 調査の経過

北陸自動車道・糸魚川工事区の蓮台寺・一の宮地区の発掘調査は、塚ノ越遺跡・三屋原B遺跡・三屋原遺跡・四割・杉沢遺跡の4遺跡を対象に、昭和60・61年度の2年度にわたり実施された。対象面積は合計22,900m²で、いずれも糸魚川市内が一望できる北向きの段丘上に位置する。実質的な作業日数は97日、延べ3,200人、1日平均31.6人が発掘調査に従事した。以下、調査年度・調査日程に従って記載する。

1. 昭和59年度

8月下旬に1週間の日程で塚ノ越遺跡・三屋原B遺跡の旧水田および畑地部分について確認調査を実施した。9月には約1週間の日程で前回実施できなかった部分と三屋原遺跡・四割・杉沢遺跡内の畑地・伐採後の地区について確認調査を実施した。調査は2m×2mの試掘坑を塚ノ越遺跡では14か所、三屋原B遺跡では10か所、三屋原遺跡では幅1m、長さ約10mのトレンチを3本、四割・杉沢遺跡では長さ2m幅1mの試掘坑を8か所設定し、確認を実施した。塚ノ越遺跡・三屋原B遺跡・三屋原遺跡では石器の破片や土器の破片が出土しているが、かなり削平をうけており明確な遺物包含層は確認できなかった。また、四割・杉沢遺跡についても遺物包含層は確認できなかったものの、国指定史跡の長者ヶ原遺跡に隣接し、石斧の破片などが採集されることから発掘調査が必要であろうと判断された。調査対象面積は三屋原遺跡13,200m²、三屋原B遺跡4,300m²、塚ノ越遺跡400m²、四割・杉沢遺跡4,600m²である。

2. 昭和60年度（8月21日～11月21日）

事前準備 8月21日、調査担当者が現地へ赴き、現場の下見・作業員の募集・導入路の確保の任にあたる。8月26日、本格的な作業が開始される。器材の搬入・プレハブ設置の準備作業を行う。三屋原・三屋原B遺跡の現地は高さ1mもの草で覆われていたり、雑木が切り倒されたままとなっていたため、これより5日間、草刈・雑木の後片付けを実施する。発掘調査の基本工程は、①深さを確認するため人力によるトレンチ調査、②重機による表土削ぎ、③精査および遺構検出、④遺構実測と決める。①のトレンチ調査は三屋原遺跡－三屋原B遺跡－塚ノ越遺跡の順とし、②の表土削ぎは重機を用地内で搬入・搬出しやすいように、東側から塚ノ越遺跡－三屋原B遺跡－三屋原遺跡の順に調査することとした。重機は搬入路が確保されなかつたため、通称「ドス谷」（三屋原遺跡西側斜面）を自力でつづれ折れ状に道を切り開き、9月25日に現場へ到着した。

トレンチ調査 9月3日～9月25日、トレンチ調査を開始する。トレンチは、調査区全面にわたって、グリッドにそって段丘の平坦面の中央部に「十」字・「キ」印になるように、幅2mで

細長く設定することにした。

9月3日～9月12日、三屋原遺跡のトレンチ調査を実施する。遺跡の現況は、昭和30年代前半の開墾によって階段状に整地し、一時期水田化された。現在は杉林や畠地となったりしている。トレンチは20B～V・14～22R・13～22N・16～22F区の半印に4本を設定する。南北方向トレンチでは、南側は開墾によりローム層まで削平され、北側は盛土により厚いところでは最大1.2mの堆積状態を呈している。約30mごとに段切りが施されており、包含層は削平地区では存在せず一部盛土下で認められる。15N・16N区の沢部では、茶褐色の間層をはさんで2枚の黒褐色土が堆積し、下層からは縄文土器が出土する。遺物は希薄ながらも調査区全面にわたる。とくに18R・19Rの盛土下では濃密に散布する。東側斜面は盛土が厚く堆積し、遺物の流れ込みがみられた。

9月13・14日、三屋原B遺跡のトレンチ調査を実施する。トレンチは26～30V・28S～Wに2本設定する。表土下はローム層で、包含層は存在しない。28T・28V区は黒褐色土が厚く、遺物・遺構が検出される。三屋原B遺跡から東側の沢部へかけて、27～33Rにトレンチを設定する。

9月21日～9月25日、塚ノ越遺跡のトレンチ調査を実施する。トレンチは36～39N・36L～P区にかけて「十」字に設定する。36L・36M区では黒褐色土が厚く堆積する。

塚ノ越遺跡 9月26日、重機による表土削ぎ。並行して地山精査と遺構確認をする。表土下20cmでローム層となり削平が著しい。10月1日、36L・36M区の沢部を人力で調査する。10月2日、遺構の半剖が終了し全容を把握した。土坑1基を検出する。10月7日～10月15日、メインセクション・SK01の実測・写真撮影を行う。

三屋原B遺跡 10月3日、Vラインの南側より表土削ぎに入り、精査も逐次行う。10月14日、遺構掘りを開始する。調査の主体は、28S・29S・28R・29R区の斜面を中心に行い、土坑・焼土を検出する。27S・27R区(西側斜面)では、縄文中期前葉の土器・石皿・磨石など数多くの遺物が出土する。10月16日、27N～27Q区尾根先端部の表土削ぎを行う。精査の結果、焼土・寛永通宝が出る。10月21日、遺構掘りが終了する。10月18日～11月1日、実測。11月6日、完掘状態の写真撮影をする。

三屋原遺跡 10月19日、14～16・N～Q区(西側沢部)から調査を開始する。沢の中心部では地山面までの深度約1.5mを測る。対象面積約1,000m²である。沢の両斜面から溝状遺構・土坑1基を検出する。10月25日～10月29日、実測・写真撮影を行う。

10月29日、段丘上の調査を実施する。重機は先行しながら表土削ぎを行い、作業員による精査は21V・21W・22V・22W区から、逐次段丘先端部へと移動する。大半の地区では包含層が削平されているが、18R～20R区・18S～20S区については盛土によって保存されている。11月5日、18R・19R区の遺構掘りを開始する。地形は北西に緩く傾斜し、遺構確認面より石匙・凹石・丸玉が出土する。サブトレンチを入れ土層観察後、完掘する。11月14日、遺構清掃・遺構の完掘状態の写真撮影をする。11月15日、レベル読み。11月18・19日、器材整理。11月20日、

曾和分室へ器材搬出をする。11月21日、昭和60年度分についての発掘調査を終了する。

3. 昭和61年度（4月14日～6月14日）

三屋原遺跡 4月14日、公団・糸魚川市教育委員会・地元区長への挨拶をしたのち、現場状況を把握するため現地に赴く。4月15日、作業員投入。中央公民館に保管してあった器材の搬入を行う。4月17日、調査は17K～23K・17J～23J区の精査から開始する。中島係長が来跡。調査の現状と今後の方針を打合せる。遺物・遺構が少ない場合は、トレント掘りで終了するよう指導がある。4月22日、23～24・D～E区の遺物集中地区を精査する。遺物は出土するものの遺構は確認できない。24F～24I区の東側斜面では盛土が厚く堆積し、遺物も多く出土する。5月9日、トレント調査の結果、遺物の希薄な16～20ライン・C～Iラインの地区に、南北5本(4m×60m)のトレントを設定する。精査後、遺物・遺構が確認されなかたため調査終了する。5月13日～5月24日、レベル読み・実測・写真撮影をする。5月22・23日、四割・杉沢遺跡へ器材を搬入する。5月24日、発掘調査を終了する。

四割・杉沢遺跡 4月16日、調査員3名、現場の下見をする。現場は国指定史跡・長者ヶ原遺跡の北側で、緩やかな傾斜地である。遺跡中央部に小さな沢が入り、2つの尾根からなっている。4月17日、中島係長が来跡。プレハブ設置場所・器材の搬入路・作業員通路の確保などの問題を協議する。なお、7月末日までに終了するため、早目にトレント調査を行うこととした。

4月18・19日、測量会社による杭打ちを実施し、10m×10mのグリッドを組む。4月21日～4月24日、トレント調査を開始する。尾根にそって8C～8F・3F～3I・2F～10F区にトレントを設定する。遺物・遺構はともに希薄ながらも散布し、3H・3I区では黒褐色土の堆積を確認する。5月の連休中、重機は西側斜面(大塚遺跡側)をシグザグに切り開き、搬入路を開通させる。5月12日、2E・3E・3D区のプレハブ予定地の先行調査を開始し、溝状遺構1本を完掘する。5月21日、9B・10B・10C区の地山精査から逐次南下する。5月23日、アレハブの完成と器材の搬入をする。5月27日、2・3ラインの調査に入り、南北にのびる溝状遺構を検出する。7ラインの斜面では、円形・方形のプランで炭化物を多量に含む土坑を検出する。5月28日～6月5日、調査の主体を6E・7E区の沢部東側斜面に集中する。登窓状の遺構を検出する。6月11日、SK05(炭窯)の実測・レベル読みを終了する。6月12・13日、器材整理・器材の搬出をする。6月14日、公団・市教委・区長への挨拶回り。この日、すべての調査を終了する。

4. 整理作業

整理作業は、昭和61年度と62年度の2年度にわたって実施した。整理は特に冬期間とし、61年度は61年12月から62年3月までの4か月間、三屋原遺跡・三屋原B遺跡・塚ノ越遺跡の遺物整理および報告書の原稿作成までを目処として実施した。62年度は11月から63年1月までに四

割・杉沢遺跡の出土遺物の整理および報告書の作成を行った。報告書の編集は63年1月に行い、2月から3月にかけて印刷・発行した。

5. 調査体制

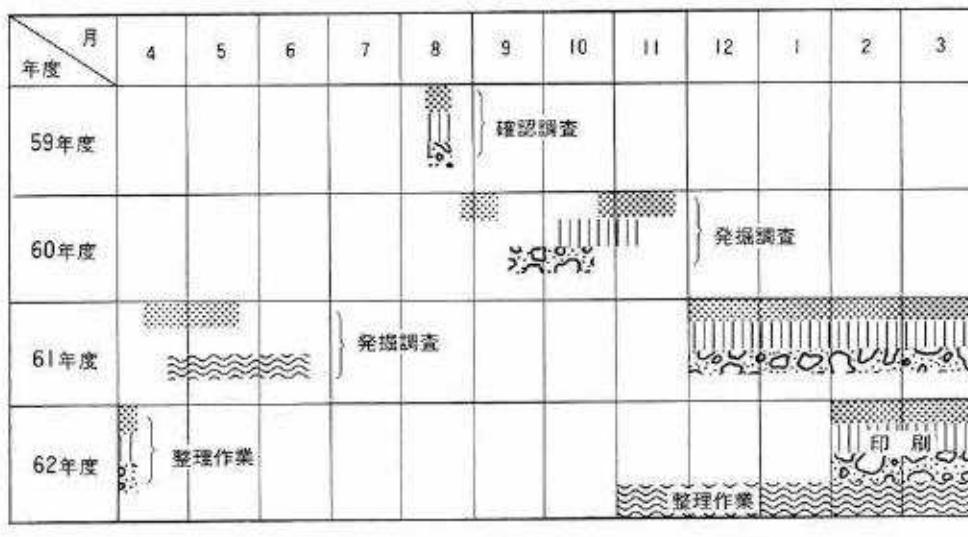
発掘調査を開始してから、報告書完成までは足かけ3年を費やした。調査員にも多少の変動があった。以下、各年度の調査体制は下記のとおりである。

昭和60年度	調査主体	新潟県教育委員会 教育長	有職邦男			
総括	新潟県教育庁文化行政課長	高橋 安	調査担当	同	文化財専門員	山本 肇
管理	同	課長補佐 田中浩一	調査職員	同	文化財専門員	池田敏郎
庶務	同	主事 高橋幸治	調査職員	同	文化財専門員	柳 恒雄
調査指導	同	埋蔵文化財係長 中島栄一				

昭和61年度

総括	新潟県教育庁文化行政課長	高橋 安	調査担当	同	文化財専門員	山本 肇
管理	同	課長補佐 田中浩一	調査職員	同	文化財専門員	池田敏郎
庶務	同	主事 土田 玲	調査職員	同	文化財専門員	小池義人
調査指導	同	埋蔵文化財係長 中島栄一				

昭和62年度(整理・報告作業)	調査主体	新潟県教育委員会 教育長	田中邦正			
総括	新潟県教育庁文化行政課長	大塚克夫	整理指導	同	埋蔵文化財係長	中島栄一
管理	同	課長補佐 矢部 亮	整理担当	同	文化財専門員	山本 肇
庶務	同	主事 土田 玲	整理職員	同	文化財専門員	竹田和夫

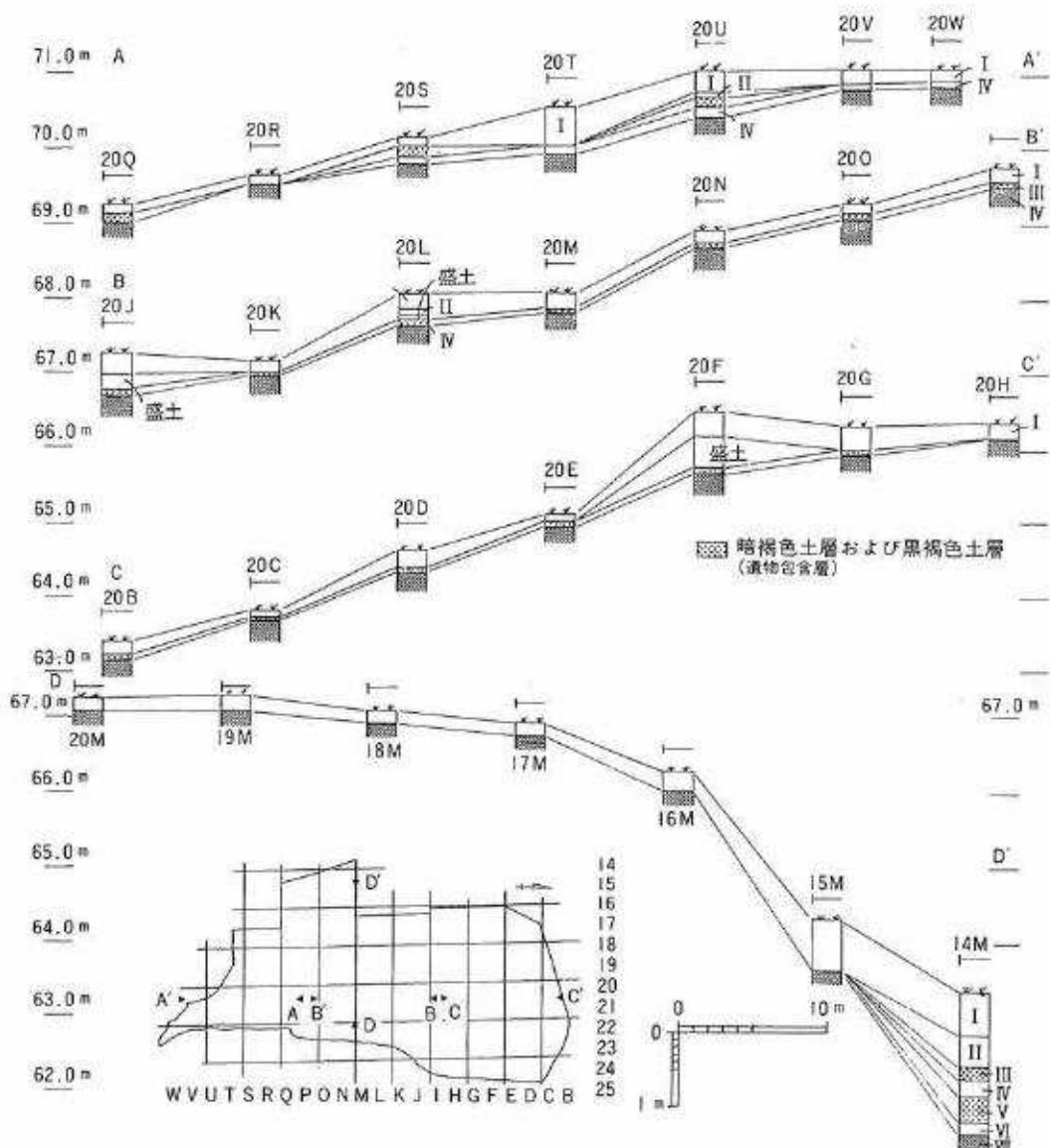


第3図 遺跡調査工程図

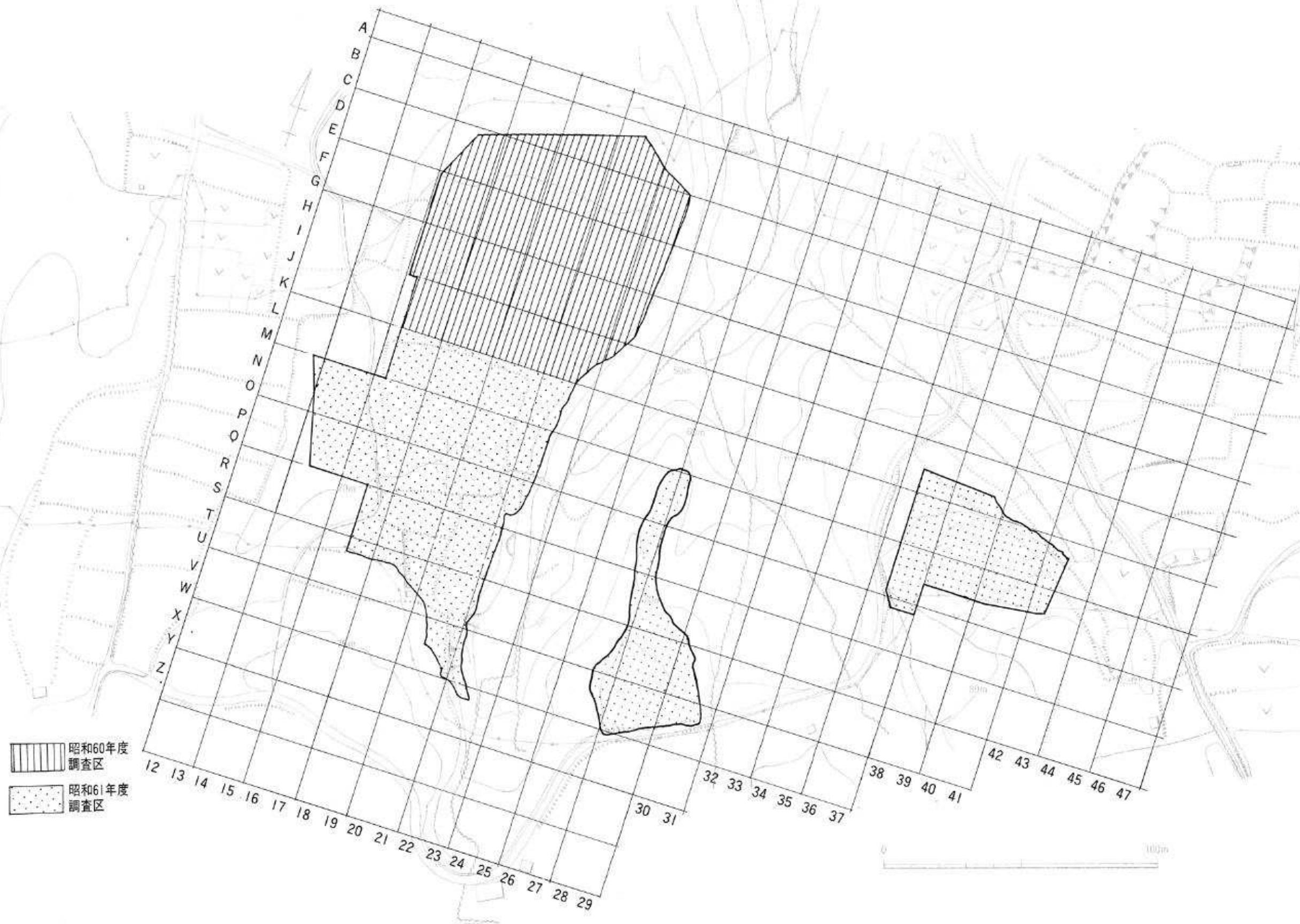
第Ⅳ章 三屋原遺跡

1. 地形と層序（第4図・第5図）

三星原遺跡は南北に舌状にのびる幅50mほどの段丘上にあり、東側は深い谷となっている。平坦面の幅は約50mほどで緩やかに北に傾斜しており、標高は50~70mを測る。西側には比高差3mほど、幅20mの沢がある。尾根中央の平坦部は削平されており、厚さ20cmの耕作土の



第4図 三塚原遺跡土層柱状図



第5図三屋原遺跡・三屋原B遺跡・塚ノ越遺跡、地形およびグリッド設定図

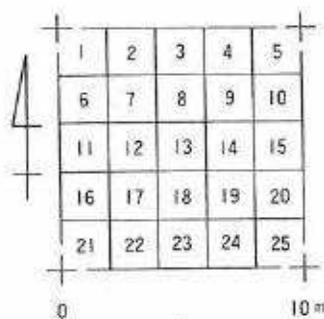
下は直ちに地山面となる。一部盛土された地区において、暗褐色土層の遺物包含層が残存するのみである。そのため西側沢部のトレンチ調査の結果から基本土層を設定した。

基本土層は西側沢部の土層観察から7層に大別される。I層表土層、II層褐色砂質土層、III層暗褐色土層、IV層黄褐色砂質土層、V層黒褐色土層、VI層茶褐色砂質土層、VII層黄褐色粘質土層（地山層）である。遺物はIII層上面からわずかに土器片が出土したのみである。段丘上の平坦面において、削平や耕作により、III層・V層などの黒褐色系の土層はほとんど認められなかった。しかし段切りによる盛土がなされたところには、V層の黒褐色土層からは縄文土器が、II層の褐色砂質土中からは近世陶磁片が出土している。

2. グリッドの設定（第5図・第6図）

グリッドは三屋原遺跡の調査区のほぼ中央、工事用センター杭No376から40m西にあるセンター杭を基準とし、主軸を真北に合せて、東西・南北に設定した。大グリッドは10m×10mであるが、調査区が約20,000m²と広いことと、重機による表土削ぎには杭がじやまになることから20mに1本ずつ杭を打設することにした。なおグリッドの設定は、三屋原遺跡のみならず東の三屋原B遺跡、塚ノ越遺跡も同一の基準杭から打設することにし、調査区全域にわたって杭打ちを行った。各大グリッドの名称は基準となった工事用センター杭を20Mとし、北へはK・J・L……、南へはN・O・P……とし、東へは21・22……、西へは19・18……と名付けた。それぞれのグリッドは2m×2mの25の小グリッドに細分し、北西隅の1から南東隅の25までを設定した。グリッドの呼称は南東隅の杭を大グリッドの名とした。各小グリッドは、20M2区と呼ぶこととする。三屋原遺跡の調査区は12~24、B~Xまでの範囲内におさまる。

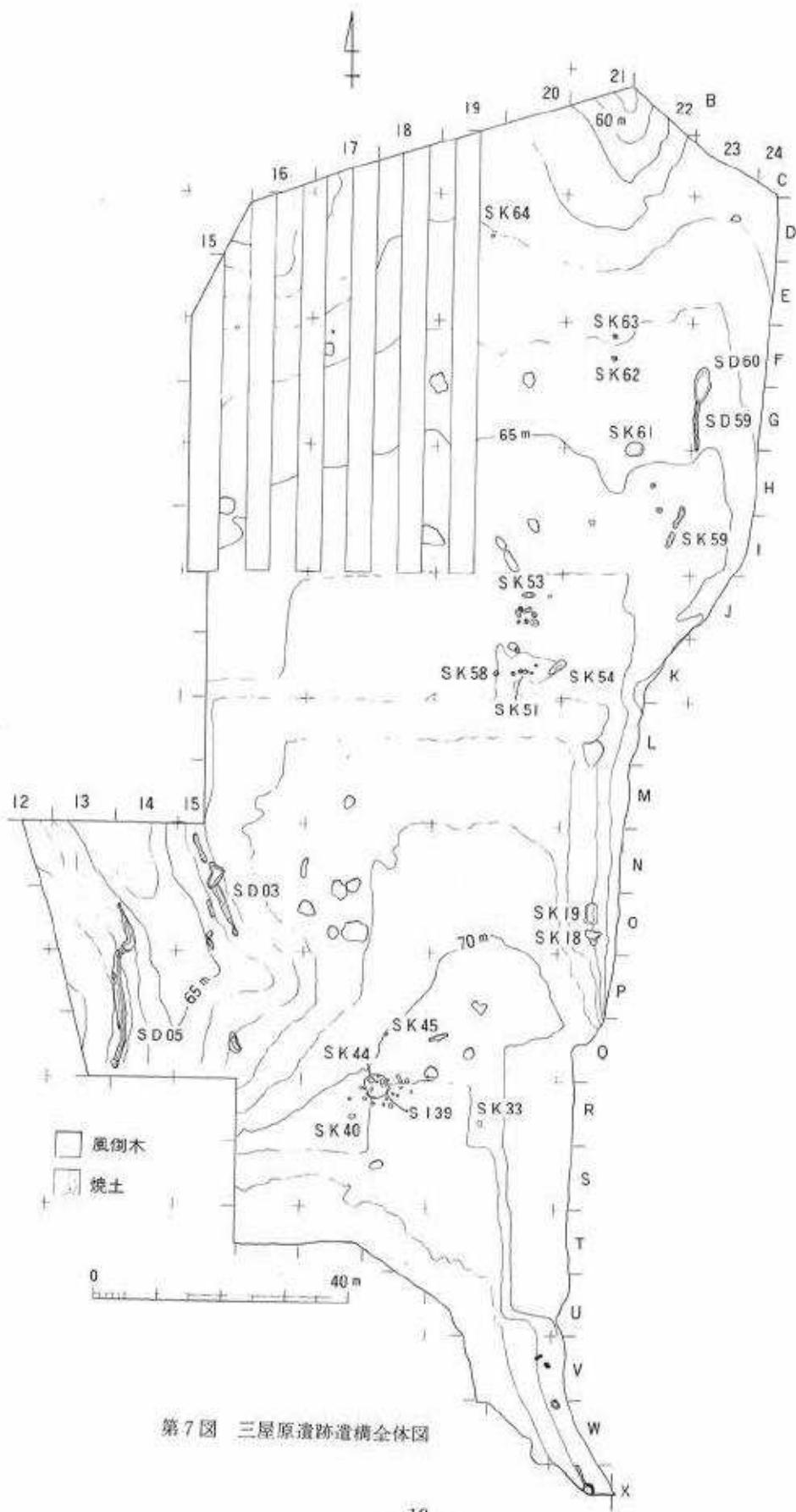
3. 遺構（第7図～第15図・図版2～図版8）



第6図 グリッド図

三屋原遺跡は杉の植林や開墾などにより大きく段切りや削平をうけており、遺物包含層はほとんど存在しない。遺構の集中地点は、標高70mほどの段丘上の比較的高い所に集中する傾向が認められる。住居跡は19Q区、19R区の段丘の中央にあり、また土坑群は21J区・21K区に集中する。また、23F区～23I区には沢に沿って溝が巡り、その段丘の中央平坦部には土坑などが存在する。また、南側の沢には、平坦面から沢となる斜面の肩口に沿って沢の両斜面に溝があり、覆土から近世陶磁器などが出土したことから、根切り溝などの性格が考えられる。また風倒木痕も散在している。

検出された遺構は、住居跡1棟、土坑14基、溝4条である。ほかに掘り方は明瞭ではないが、径50cmほど、深さ5cmほどの地山面が焼けたものが4か所確認された。



a) 住居跡

S I 39 (第8図・第9図 図版5) 19Q 5区を中心に検出された。段丘の中央平坦部にあり、長軸4.3m、短軸3.5mの不整円形を呈し、表土および、暗褐色土層(Ⅲ層)を削平して確認された。暗褐色土を掘り下げた際、繊維を含む縄文土器片や、石器が集中しており、同層からの掘り込みが考えられたが、遺構の確認は困難であった。遺構の掘り込みは約10cmと浅く、覆土は地山の褐色砂質土よりわずかに暗い色調を呈する暗褐色砂質土でわずかに炭化物粒子を混入している。床面はほぼ平坦であるが、北側にわずかに傾斜している。壁は緩く立ち上っている。ピットは径20~30cmの深さ15~20cm前後のものが、周辺に20基検出された。これらが建物の柱穴であるかは不明である。焼土などではなく、炉跡は不明である。住居跡内に確認されたSK41は、住居跡の覆土を掘り進めて確認できたもので、1辺1.0mほどの隅丸方形を呈し、深さ約30cmである。覆土は褐色砂質土の単層で縄文土器の細片が出土している。前述したように、平面形がどうにくかったため、住居跡に確実に伴う遺物は認識できない。しかし遺物は19Q 5区を中心として半径4m前後の中にしか分布しておらず、この地区の遺物はこの住居跡に共伴した可能性が高い。縄文土器の15・16などは床面直上から出土している。柱穴にはP 9~P 16の径15cm、深さ20cm前後のものと、P 1~P 6・P 17~P 20の径40cmを超える、深さ20cm前後のものの2種が存在する。小さいものは内側(径4m前後)、大きいものは外側(径6m前後)を巡るものが多い。

b) 土坑

土坑はS I 39に伴うSK41以外に14基がある。平面形により3種に大別される。さらに大きさや、覆土の状態によっても細分が可能である。

I類 円形もしくは梢円形を呈するものである。SK33・40・44・45・49・51・52・58・64・65である。このうちSK49・64は焼土を覆土とするものである。

SK33 (第11図) 20R 6区に位置する。径0.88mの円形を呈する。深さは42cmと深い。覆土は2層あり、水平に堆積していた。底面は中央がやや凹む。縄文前期の土器が出土している。

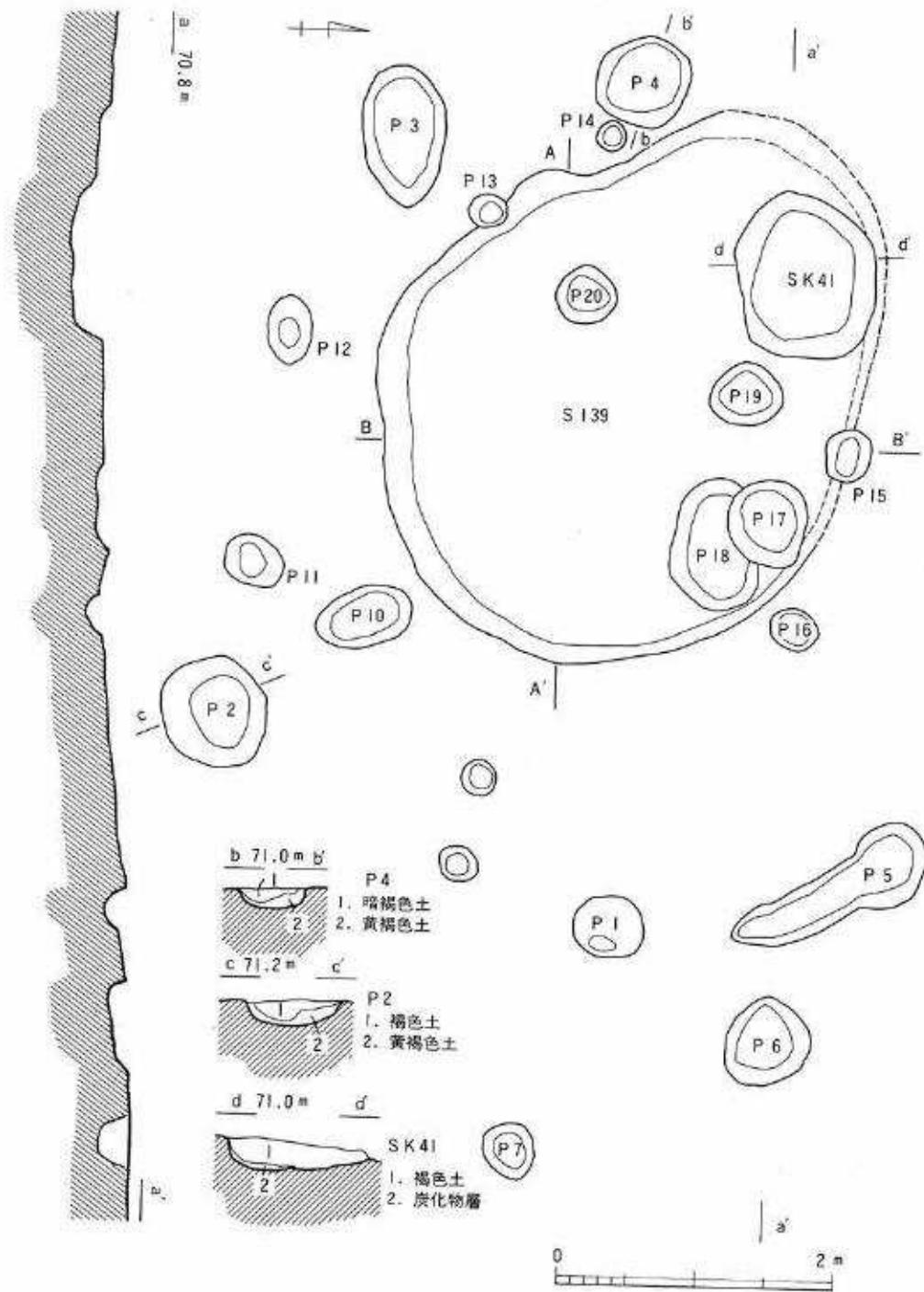
SK40 (第11図) 19R 6区に検出された。長軸1.2m、短軸0.9mの梢円形を呈する。深さ22cmを測る。底面は中央がややへこむが、覆土は3層に分けられる。

SK44 (第10図) 18R 8区に検出され、S I 39の西側約6mの位置にある。長軸0.6m、短軸0.44mを測る梢円形を呈し、深さは7cmと浅い。覆土は単層であるが、人頭大の自然石が出土している。

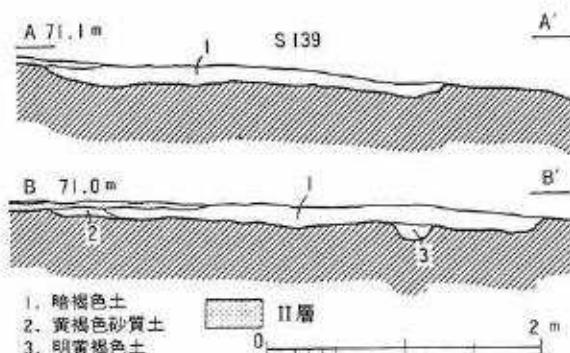
SK45 (第11図) 19Q 24区に検出された。長軸0.54m、短軸0.4mを測る梢円形を呈し、深さは約40cmと深い。底面はへこんでいる。覆土は暗褐色土の単層である。

SK49 (第11図) 20H 13区に検出された。長軸0.6m、短軸0.4mを測る梢円形を呈し、深さ10cmと浅いものである。底面は平らである。覆土は焼土を多く混入する暗褐色土である。

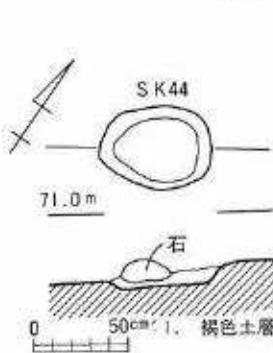
SK51 (第11図) 21K 8区に検出された。底面は東側が深くなるものである。覆土は3層に分



第8図 三屋原遺跡遺構平面図



第9図 三屋原遺跡土層断面図



第10図 三屋原遺跡土坑平面図

けられ、レンズ状の堆積を呈している。径0.7mの円形を呈し、深さ58cmを測る。

SK52 (第11図) 21K19区に位置し、橢円形を呈し、長軸55cm、短軸45cmの橢円形を呈する。深さ30cmを測る。覆土は2層に分けられ、レンズ状堆積を呈している。

SK58 (第11図) 22H23区に検出された。南北に長い橢円形を呈し、長軸80cm、短軸75cm、深さ20cmを測る。底面はすり鉢状を呈している。覆土は暗褐色土の単層である。遺物は出土していない。

SK64 (第11図) 19D14区にある。長軸0.84m・短軸0.42m、深さ15cmを測る。橢円形を呈している。底面は火をうけて硬化している。覆土は焼土のみである。

SK65 (第11図) 23H12区に検出された。長軸1.4m、短軸1.2mを測る橢円形を呈し、深さ30cmと深いものである。底面はすり鉢状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。暗褐色土を覆土とし、炭化物をわずかに混入する。

II類 隅丸方形を呈するもので、立地・覆土から2種に細分される。

IIa類 尾根中央の平坦部にあり、I類のSK33などと同様、暗褐色土を覆土とするものである。SK61の1基がこれである。

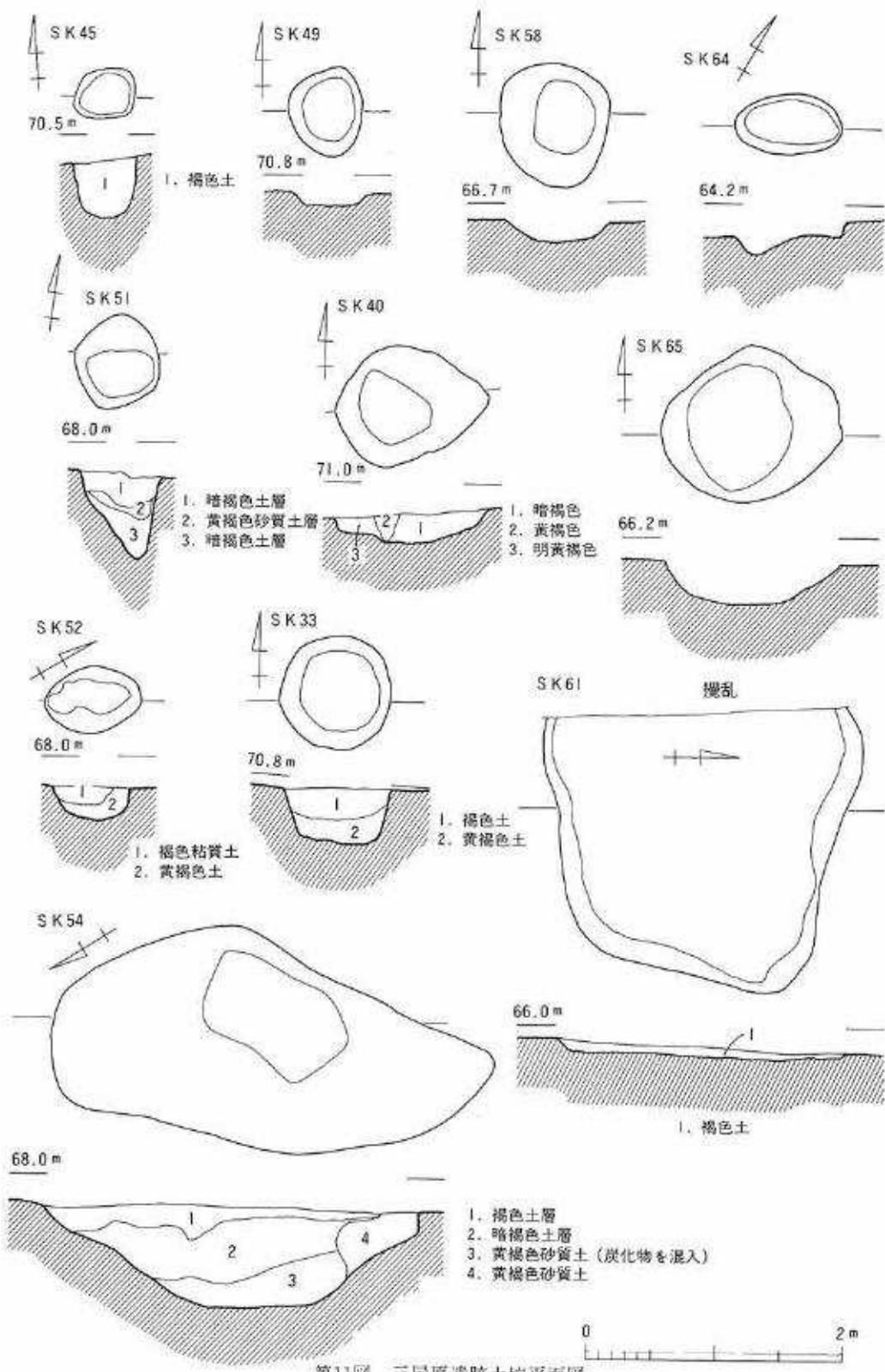
SK61 (第11図) 23G5・23I25区にまたがって位置する。長軸2.5m、短軸2.1mを測る隅丸方形を呈し、西側は攪乱のため削平されている。深さは約10cmと浅いものである。底面は平らで中央部は硬くしまっている。覆土は暗褐色土の単層であり、半截竹管文を主体とする縄文土器 (第17図45・46) が出土している。

IIb類 隅丸方形の平面形を呈するが、覆土に焼土・炭化物を混入し、東側斜面の段切りされたところに位置するもので、SK18とSK19の2基がある。

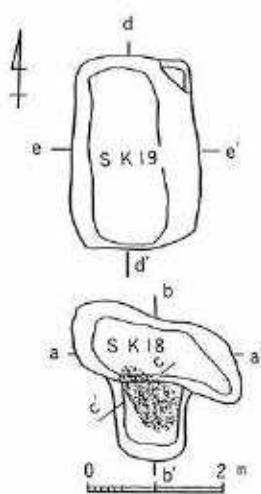
SK18 (第12図・第13図) 22O区にあり、表土削ぎ後確認された。長軸2.5m、短軸1.1mの隅丸方形を呈し、南に長軸1.2m、短軸1.0mの張り出しを有する。覆土上層に焼土層を有する。床面は平坦で深さ30cmを測る。

SK19 (第12図・第13図) 22O区・SK18の北に隣接している。長軸2.94m、短軸1.9mの方形を呈し、底面はほぼ平坦で、覆土は炭化物の多い暗褐色土がレンズ状に堆積している。底面は火をうけ硬化している。遺物は出土していない。

III類 不整形なものでSK54のみである。



第111図 三屋原遺跡土坑平面図



第12図 三屋原遺跡土坑平面図

SK54(第11図)長軸3.4m、短軸1.7m、深さ1.1mを測る。底面はわずかに平坦面となるが、壁は緩やかに立ち上がる。暗褐色・黄褐色砂質土が、レンズ状の堆積を呈している。底面は硬くしまっている。遺物は出土していない。

以上、土坑については、I・IIa類は覆土及び出土遺物から縄文時代前期末から中期前葉のものと考えられる。IIb類については年代は確定できないが、伏焼きの方法による炭窯の可能性が大きい。III類の出土遺物がないため、時期は確認できない。

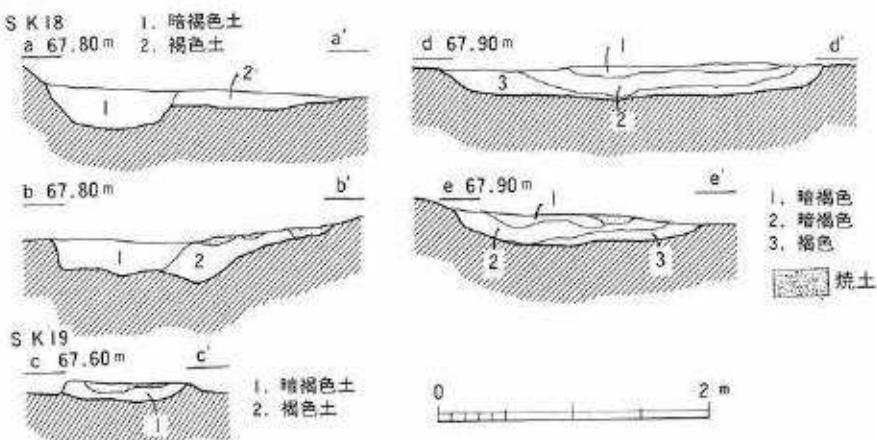
c) 溝(第7図・第14図・第15図、図版3.4)

溝状遺構は、合計3群5条が検出されている。

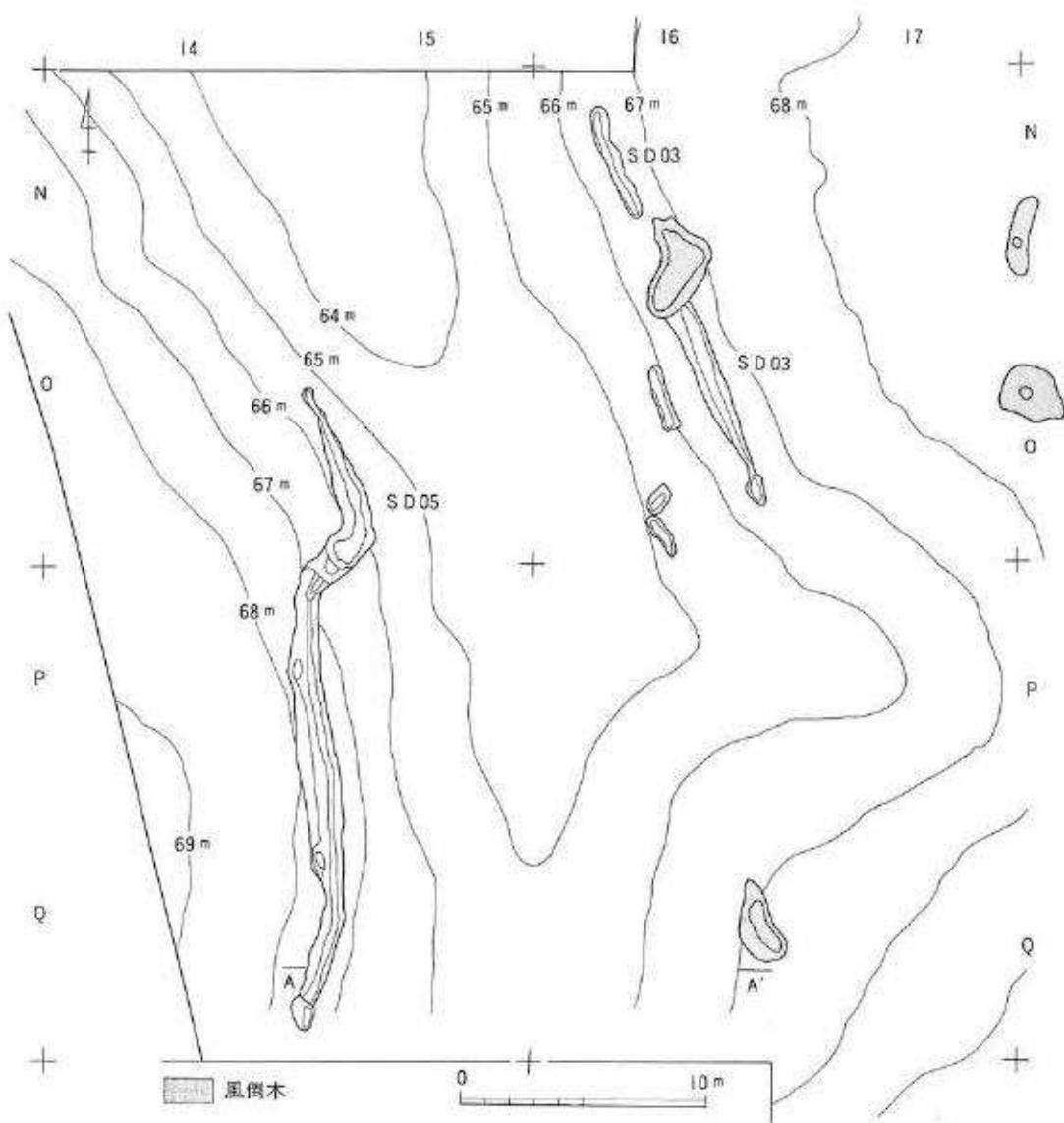
SD03・SD05(第14図・第15図)調査区の西側15O・15P・16Q・16N・16O区の沢にあり、平坦面から沢に下る肩口に検出された。沢の西側と東側に対となってある。沢の流れる方向に沿っており、

2層ある墨褐色土の縄文時代の遺物包含層を切って掘られており、断面U字形を呈し、深さ30cmを測る。覆土から近世陶磁器片が出土していることから、江戸時代以降に掘られたものと考えられる。沢に沿ってあることと、段丘縁辺に存在することから、耕作地に対しての根切り溝などとも想定される。

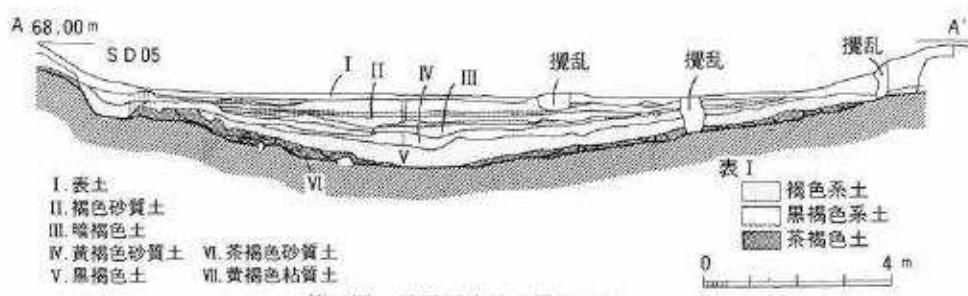
SD59・SD60(第7図)24F-231区にかけて、平坦面の東側、崖の縁辺に沿って南北に流れるもので、ところどころ削平により寸断されている。幅約30cm、深さ15cmほどの断面U字形の溝である。斜面が北に緩やかに傾斜しているのに伴い、底面も北側が深くなっている。24E-5区においては、地形が平坦面となることに影響をうけ、底面も平坦となり、溝の幅も1.8mと広がり、深さも10cmと浅くなる。この周辺から北側においては溝は確認できない。覆土は暗褐色土である。遺物は出土していない。性格・時期などは不明である。



第13図 三屋原遺跡土坑土層断面図



第14図 三屋原遺跡遺構平面図



第15図 三屋原遺跡土層断面図

d) 風倒木痕（第7図）

風倒木痕は、段丘の平坦面においてはあまり確認されず、沢への肩口およびやや傾斜が大きくなる斜面に認められる。分布は180・191区など北西に面する斜面に検出される傾向が認められた。調査にあたっては平面プランでは明確に黒褐色土のドーナツ状のプランを呈するものは少なく、半割した後に土層断面で確認し、平面図にはプランのみ記入した。いずれもすり鉢状を呈し、褐色土が入りこむが、中央部の土層において地山と分けることが困難であり、底面は明確でない。

e) 焼土（第7図）

その他の遺構として、地山ローム面が30cm～50cmほどの範囲で焼けて硬化しているものがあり、主にJラインより北側の斜面に分布する。半割したか掘り方は明確でなく、また上部も耕作により擾乱を受けていて不明確である。ただ段丘の平坦面には存在しないことから、住居跡とは考えられず焚き火などの跡と考えられる。時期は決め手となる土器などが出土せず、不詳である。

4. 遺物

遺物は平箱で14箱である。ほとんどが縄文時代の土器と石器であり、土師器・須恵器・近世陶磁器がわずかに出土している。以下、縄文土器から順に記述する。

a) 縄文土器

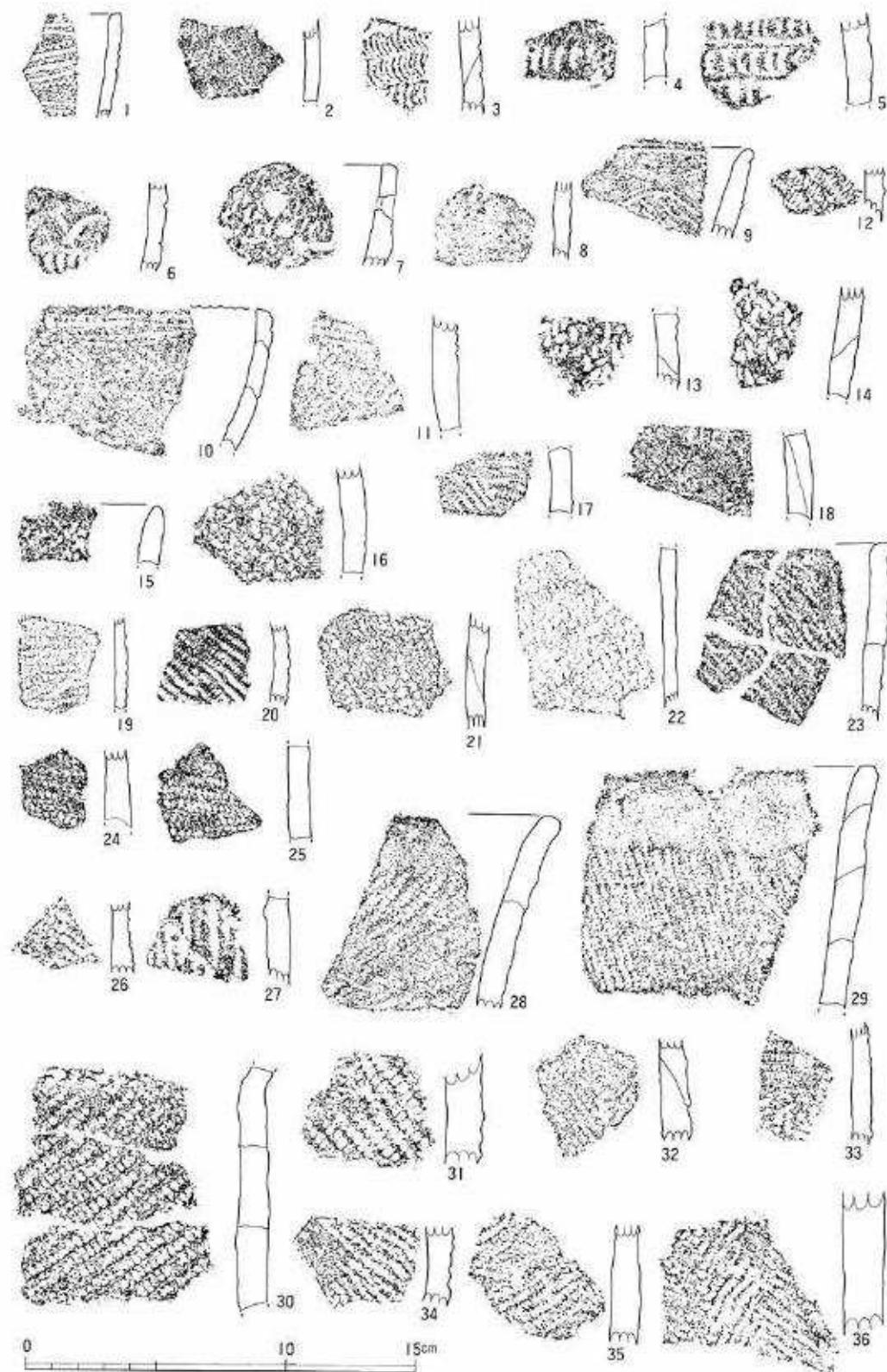
本調査における縄文土器は平箱1箱と少量で、広範囲から散漫な状態で出土している。主体は前期前葉から中期前葉と時期幅があり、前期の土器は17Q・17R・18Q・18R区に集中する。一括資料に乏しく、少量で細片が多いため、文様・胎土を基準として分類する。

1類 貝殻条痕文を施文するもの	9類 羽状縄文を施文するもの
2類 無文のもの	10類 斜位の平行沈線文を施文するもの
3類 爪形文を施文するもの	11類 交互刺突文を施文するもの
4類 細半隆起線文を施文するもの	12類 細隆起線文に刻目を施文するもの
5類 連続刺突文を施文するもの	13類 格子目文を施文するもの
6類 路条体压痕文を施文するもの	14類 半截竹管文を施文するもの
7類 組紐を施文するもの	15類 底部
8類 縄文を施文するもの	

以下、上記の分類に従って記述する。

1類（第16図1, 図版9） 1点のみ出土する。斜め上方に開く口縁を有し、口唇端部は断面方形を呈する。3条の直線的な貝殻条痕文により区画し、沈線間は貝殻腹縁文を押圧する。口唇端部には1条の沈線が施文される。器厚は5mmと薄くきわめて堅緻で、内面に炭化物が付着する。暗灰褐色を呈し、長石粒・雲母粒が混入する。

2類（第16図2, 図版9） 無文の胴部片で、胎土・器厚・焼成などは1類と類似する。暗灰褐



第16図 三屋原遺跡出土縄文土器(1) S=1/2.5

色を呈し、二次焼成をうけている。内面はササラ状の撫で痕があり、炭化物が付着する。

3類（第16図3～7、図版9） 多条の連続爪形文で充填するものを一括する。爪形はC字状を呈し、爪形幅は1～1.2cmを測る。爪形の密度や併用する文様でa～dに細分する。

3a類 3は3条の爪形文を密に押圧し、ヘラ状工具による沈線文を併用する。外面は灰褐色、内面は黒褐色を呈し、長石粒・砂粒が混入する。

3b類 4・5は3a類にくらべ、爪形の間隔を3～4mmとやや広く施文する。胎土は長石粒・雲母粒が多く混入し、焼成が不良で軟質なものである。4は暗灰褐色・5は茶褐色を呈する。器厚に差がみられ、5は1.2cmと厚く二次焼成をうけている。

3c類 6は1条の爪形文に連弧状の沈線を併用する。胎土に水晶粒が混入し、器厚は6mmと薄く、きわめて堅緻である。

3d類 7は爪形文に穿孔をもつものである。斜め上方に開く口縁を有し、口唇端部は断面方形である。口縁下約1cmのところに焼成後、外側より穿孔されている。植物纖維が混入する。

4類（第16図8～11、図版9） 斜縞文を地文に細半隆起線文と爪形文を施文するものを一括する。器が荒れ不明な点が多い。9は斜め上方に開く平口縁で、口唇端部は丸く仕上げられる。口縁にそって1条の細半隆起線文がまわり、頸部は曲線で区画しR.Lの斜縞文を充填する。外面は暗茶褐色を呈し、炭化物が付着する。内面は二次焼成をうけ細かなヒビ割れが多い。10は斜め上方に開き、口縁部で直立気味に立ち上がる。口唇端部は棒状工具による刻目を入れ、細かな波状を呈する。口縁にそって2条・無文帶をはさんで1条の細半隆起線文にC字状の爪形文を施文する。器厚は7mmと薄手である。8、11も同様な文様構成をとる胴部片である。

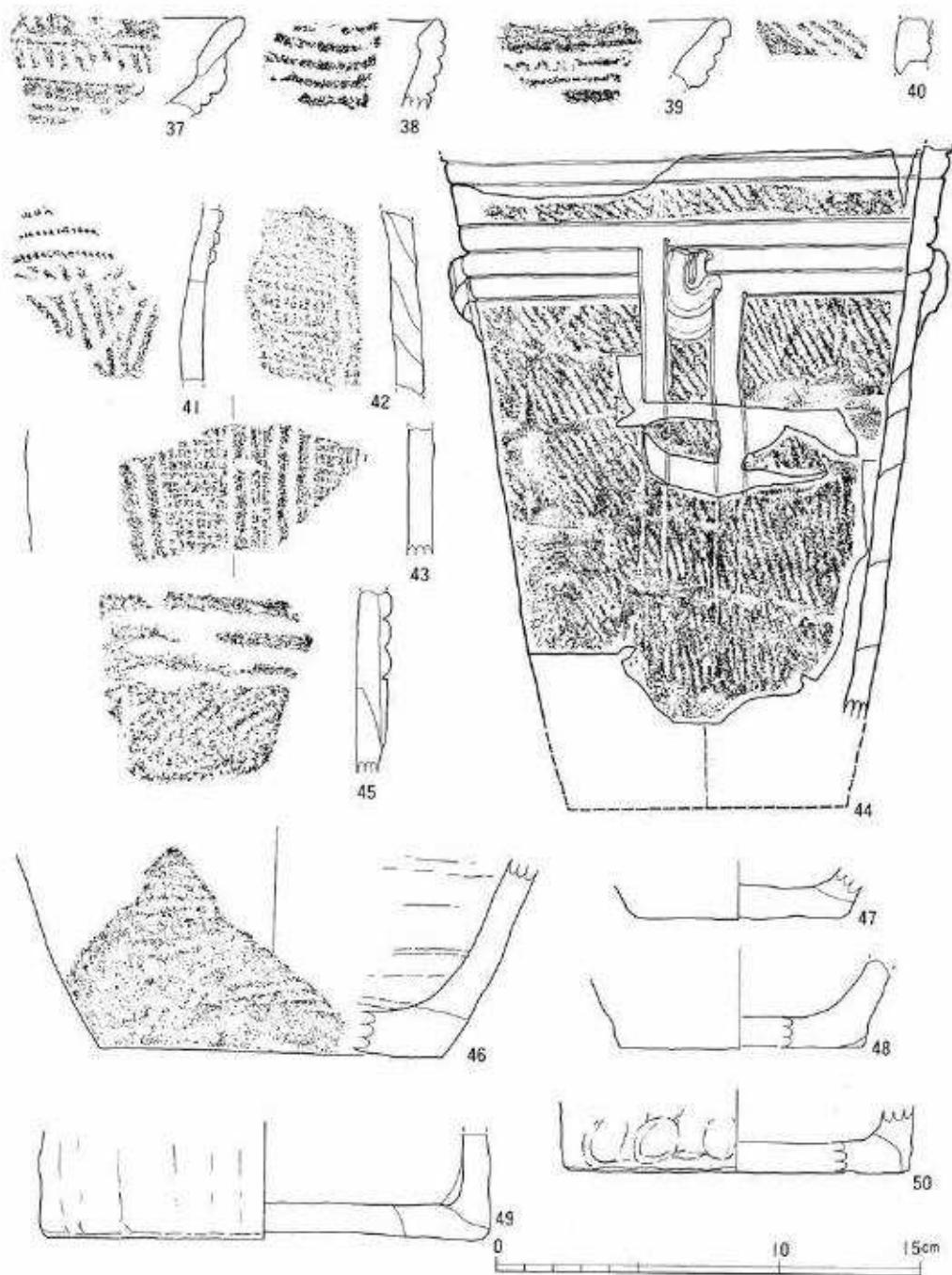
5類（第16図18、図版9） 1点のみ出土する。小形爪形文(C字状)を器面垂直に押圧し同心円状に連続刺突を施文する。内外面とも橙褐色を呈し、二次焼成をうけている。焼成は良好できわめて堅緻である。

6類（第16図12、図版9） 1点のみ出土する。原体はR.Lで直径6mmを測り、押圧による格条体压痕を施文する。内外面とも黒褐色を呈し、わずかながら雲母粒が混入する。植物纖維を含む。

7類（第16図13～16、図版9） R・L各2本の組紐を撫合せ原体とし、回転圧痕を施したものを一括する。2本ずつ撫の組合せが異なり、圧痕の様子にも違いがみられる。胎土には石英粒・長石粒・雲母粒が混入し、植物纖維を含む。内面はていねいに調整され、13・15には炭化物が付着する。15は直立気味に立ち上がる平口縁で、口唇端部は丸く仕上げられる。

8類（第16図17、9～26、28～31、34・35、図版9・10・11） 縞文を施文するものを一括する。時期差があり細片が多いため不明な点が多い。胎土・器厚などから細分して記述する。

8a類（19～26） 器厚が4～6mmと薄く、微量の植物纖維を含むものを一括する。胎土・器厚から1・2類と近似する時期のものと思われる。19・20は単節L.Rの斜縞文で、21は細かな節をもつR.Lの斜縞文である。内外面とも暗灰褐色を呈し、焼成は良好できわめて堅緻である。20は外面に炭化物が付着する。



第17図 三屋原遺跡出土縄文土器(2) S=1/2.5

8 b類 (17) 胎土は緻密であるが非常に軽い土器を一括する。単節R Lの斜縄文を施し、植物繊維を多量に含む。多条の爪形文が施文されると思われる。外面は灰褐色、内面は黒褐色を呈する。

8 c類 (28・29) 胎土にわずかながら長石粒・雲母粒を含み、器厚は1cmと厚手のものを一括する。いずれも斜め上方に開く口縁を有し、24はやや外傾する。口縁部に幅2~3cmの無文帶をもち、胴部にR L・L Rの斜縄文を施文する。25は一部撫でにより縄文が消されている。

8 d類 (31~34・35) 胴部の斜縄文を一括する。器厚は1~1.5cmと厚く、胎土に長石・石英・砂粒を多量に含む。

9類 (第17図27・32・33・36、図版10) 羽状縄文を一括する。33は器厚は6mmと薄く胎土に植物繊維を含む。内外面とも暗灰褐色を呈し二次焼成をうけている。焼成は良好で堅緻である。27・32は胎土に長石粒が混入し、微量ながらも植物繊維を含む。橙褐色を呈し、器表面は二次焼成により、器肌が荒れヒビ割れが著しい。36は縦位の羽状縄文で、器厚が1.4cmと厚く、27・32・33とは異なり胎土に砂粒などを多く含む。

10類 (第17図37・40、図版10) 半隆起線文で横位の区画をし、空白部に竹管状工具を使って斜位の平行沈線で充填するものを一括する。40は接合面から欠損し、胎土に水晶粒を多く含む。37は頭部で強く屈曲し口縁はやや外傾する。器面は荒れており、胎土には長石粒・雲母粒が多く混入する。どちらも暗茶褐色を呈する。

11類 (第17図38・39、図版10) 鋸歯状の交互刺突を施文したものを一括する。いずれも斜め上方に開く口縁を有している。38は内面が肥厚する波状口縁である。口縁にそって多条の半隆起線文が横走し、その一部に棒状工具による交互刺突が施文される。二次焼成をうけ、器面はひび割れが目立つ。胎土は砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。39は平縁の口縁部である。文様は38と同様で胎土には砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。焼成は良好である。

12類 (第17図41、図版11) 1点出土した。横位の細隆起線文で区画し、竹管状工具を約45°の角度で押引きし、C字状の爪形文を施文する。胴部は半隆起線文を斜位に施文し、空白部に三角形印刻文を施文する。胎土に細砂粒を含み、二次焼成をうけている。灰褐色を呈する。

13類 (第17図42・43、図版11) いずれも胴部片である。縦位の半截竹管文で区画し、格子目を充填するものを一括する。ヘラ状工具により、縦・横の順に平行沈線を引き、正位の格子目を施文している。沈線の間隔は不規則で粗雑な文様である。胎土には1mm大の砂粒を含む。

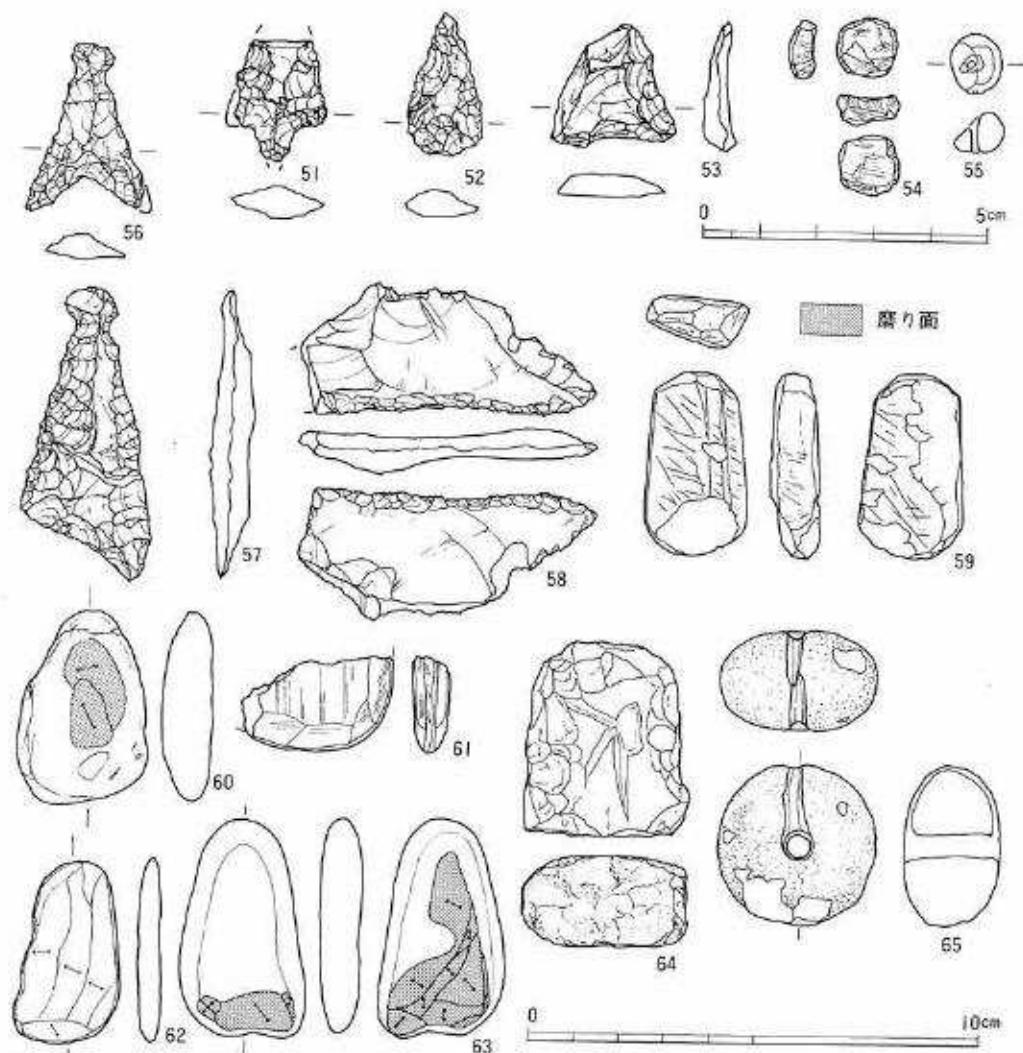
14類 (第17図44・45、図版11) 斜縄文を地文に半截竹管文で縦・横位の区画を施したものの一括する。44・45とも、器形は同筒状の深鉢になるものと思われる。44は口縁部・底部は欠損するが口縁部がキャリバー型の深鉢と思われる。単節R Lの斜縄文を地文に3条の半截竹管文が横走する。瘤状突起を竹管で「し」字状に調整し、そこから2条の半截竹管文が垂下する。文様は4単位で構成される。内外面とも暗褐色で、胴部外面下半は二次焼成により橙褐色を呈する。胴部上半に炭化物・内面には一部黒斑状を呈している。45は同様であるが地文は単節L R

の斜縞文である。灰褐色を呈し、胎土はきめが細かい。焼成は良好で堅緻である。

15類（第17図46～50、図版11）底部を一括する。いずれも二次焼成をうけ、器面にはひび割れが目立ち、橙褐色を呈する。49・50は、底部から胴部下半にかけて垂直気味に立ち上がる。内面には炭化物が付着する。底面は撫でられており、網代痕などは認められない。

b) 石器

石器は88点出土している。礫石錘18点、剥片石器17点、小型磨製石斧未成品を含めた磨製石斧12点、砥石7点、その他、敲石・磨石・装飾品未成品・凹石・石錐・石皿・石匙・玉・打製石斧・搔器・スタンプ状石器である。礫石錘の点数は、本遺跡の出土石器の20.6%を占める。また、磨製石斧や装飾品の石材となる蛇紋岩、流紋岩、結晶片岩の石核および小剥片が20数点、石錐等の石材となるチャートの小剥片が10数点出土している。遺構から出土しているものはき



第18図 三屋原遺跡出土石器(1) 51～55: S = ¼, 56～65: S' = ½

わめて少ないが、S I 39の位置する19Q区と19R区および現在の耕地化で盛土がなされた23D・23E・23F・24D・24E・24F区に出土が集中している。

その他に、土鍤が1点出土しているので、ここで記載する。

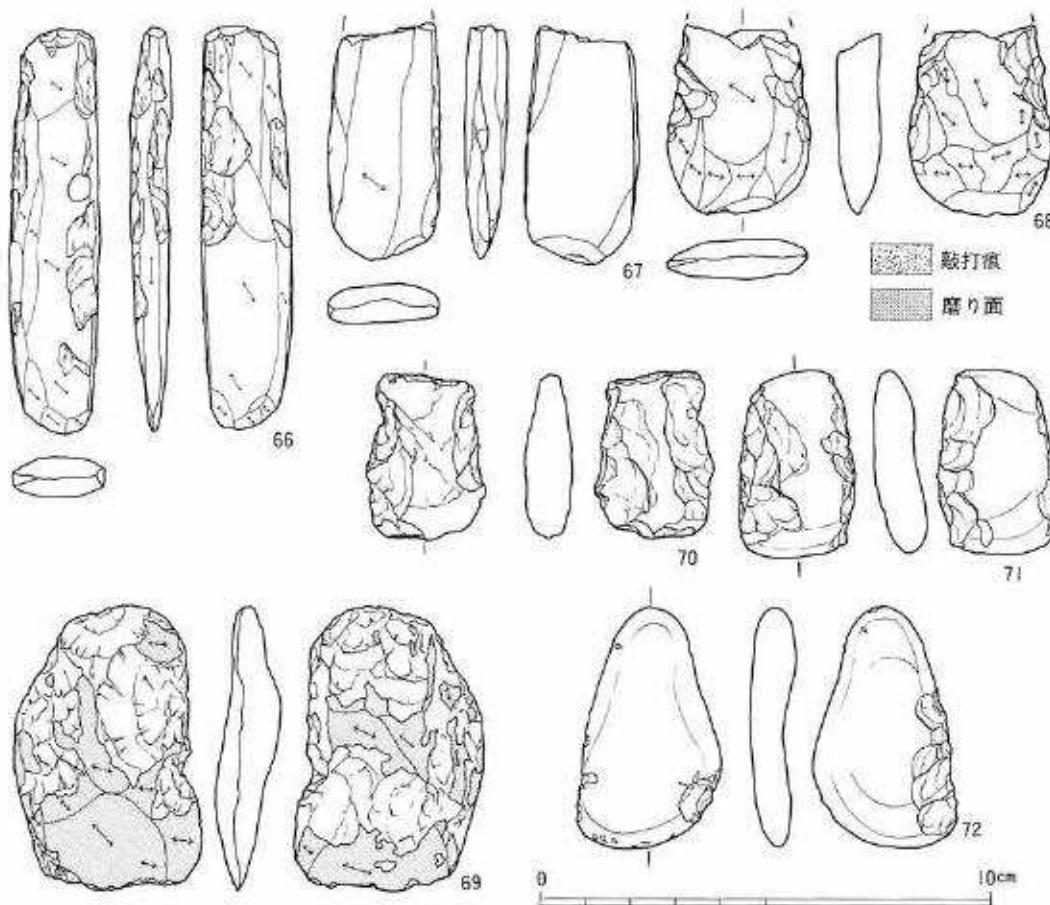
石鏃（第19図51～53、図版12） 有茎石鏃1点、無茎石鏃2点が出土している。

51は平基有茎鏃であるが、先端部が半分近く欠損している。石質は頁岩。正・裏両面に主要剝離面が残っているが、周縁部から長く薄い剝離がくり返し施され、全体として薄く仕上げられている。

52は円基鏃である。石質はチャートである。正・裏両面に主要剝離面を残しているが、その剝離方向は直交する。周縁部からの連続した小さな剝離で、全体として薄く、しかも鋭利な先端に仕上げられている。

53は平面形が正三角形をなしており、石鏃の未成品と考えられる。石質は頁岩。裏面には主要剝離面を大きく残しているが、基部は浅く抉られており、凹基無茎鏃の様相を呈す。

石匙（第19図56～57、図版12） 上端部につまみ状の小突起をもち、周縁部に刃部をもつが、平



第19図 三屋原遺跡出土石器(2) S = %

面形が特殊であつたり、刃部が両面調整を施されたりしている。2点出土した。

56の平面形は、縦長で、下半部が二股状に開いている。刃部を両側縁部と下端凹部にもつ。石質はチャートである。両面調整であるが、正面の深い剝離に対し、裏面は主要剝離面を残す。そのため、横断面形は三角形になる。

57の平面形は縦長の不等辺三角形になる。刃部を両側縁部と下端部の3か所にもつ。両側縁部の刃縁は直線状および外にふくらんだ弧状を呈すが、下端部のそれは緩く内湾した凹刀である。石質は頁岩である。正・裏両面に主要剝離面をわずかに残すが、その剝離方向は逆である。刃部は両面調整であり、とくに下端部の刃部が肉厚であることが注目される。また、中央を横断する石質上の節理の方向と下端の刃縁のそれが平行であること、そして、刃部が不自然にも肉厚であることから、下端部の刃部は、節理方向の欠損後、再調整を受けた可能性もある。

搔器（第18図58、図版12）1点出土している。大きく主要剝離面を残した横長剝片の加工品で、石質は頁岩。左端部が欠損しているが、下端部に、両面調整で刃部が作り出されている。

玉（第18図54～55、図版12）小型の玉が2点出土している。

54は平面形を多角形とし、いくつかの研磨痕のある面で構成される玉の未製品である。石質は茶褐色のチャートである。

55は球状を呈すが、かなりゆがんでいる。石質は透明のタンパク石で、正・裏両面から穿孔されている。

装飾品未成品（第18図59～63、図版12）褐色、緑灰色、濃緑色、淡緑色などの色調を呈す蛇紋岩およびヒスイ系の石質を素材とし、そこに研磨痕が観察される未成品が5点出土している。形態・法量・石質・そして加工方法から、垂飾型装飾品の未成品かと考えられる。

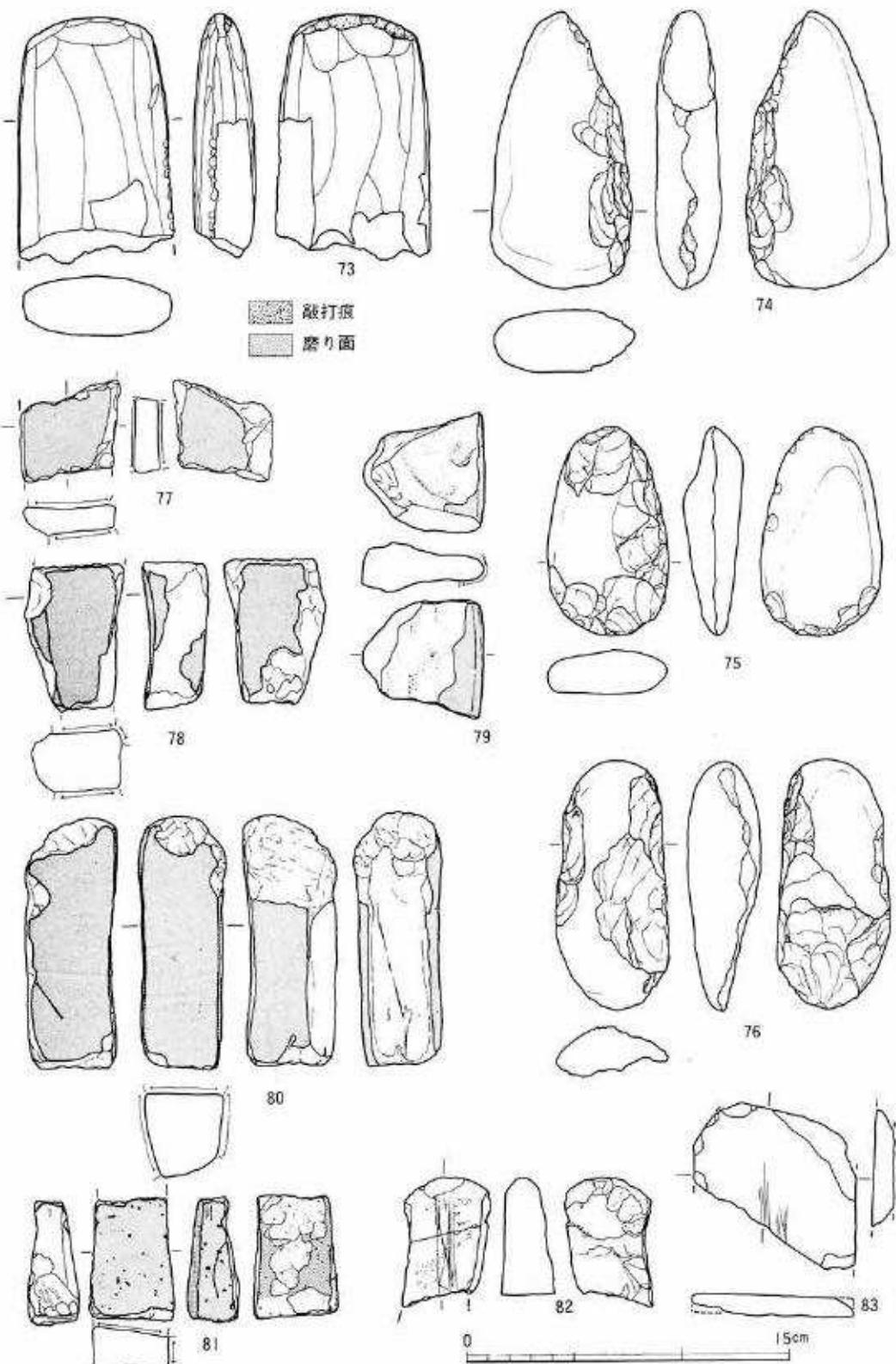
S I 39から出土した61は欠損しているので全体は不明であるが、60・62および63は扁平礫から加工されている。それに対し、59は全体を研磨によって面取りされている。59・60はとくに荒い擦痕が観察される。

スタンプ状石器（第18図64、図版13）1点のみ出土している。スタンプ状の形態をしており、握りやすい。底面は橢円形で、細かい敲打によってほぼ平坦な面に加工されている。石質は安山岩である。

砥石（第20図77～83、図版13）7点出土している。その内訳は、平坦面を使用している砥石が4点、筋状擦痕のある砥石が2点、内磨き砥石が1点となる。欠損品が多い。遺構より出土したのは1点だけである。

77・78は正・裏両面に使用面のある板状もしくは棒状砥石と考えられるが、78の欠損した側面には、新たに局部的に使用している痕跡が観察できる。77は細粒砂岩、78は中粒砂岩製である。

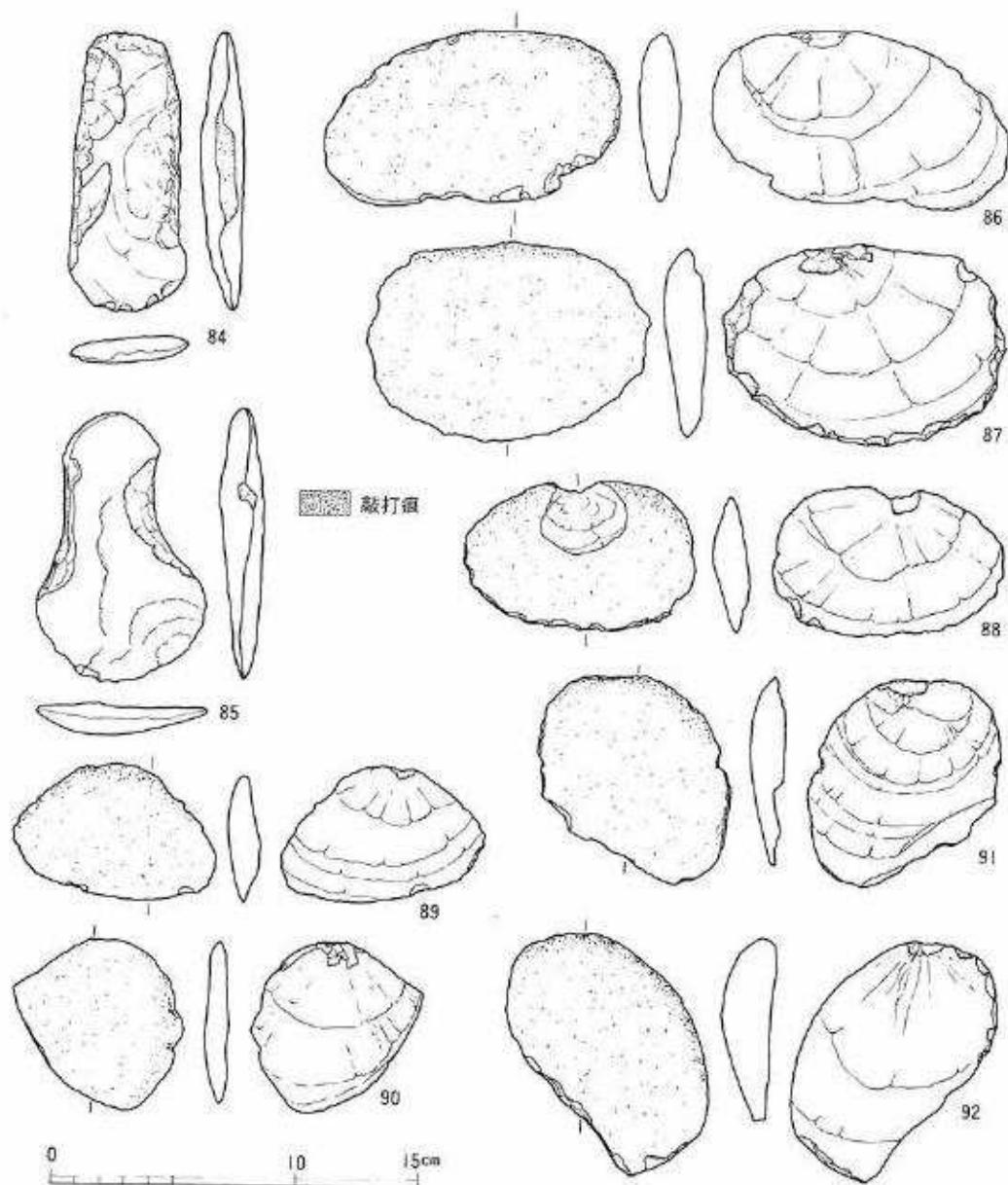
79はその使用面の断面形が角のとれた方形で丸みを呈しており、内磨き砥石と考えられる。使用面の最大厚は約12mmを計る。



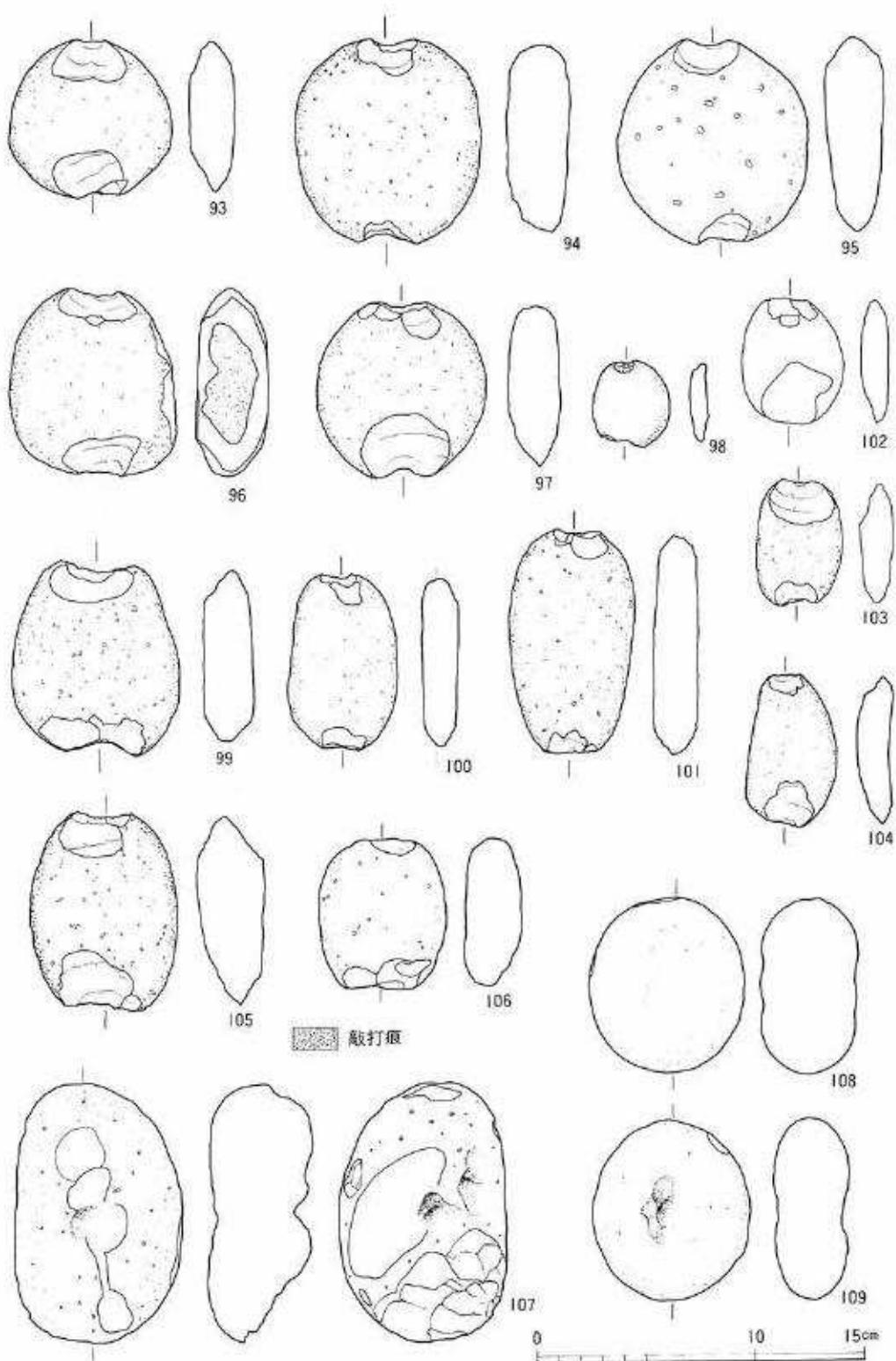
第20図 三屋原遺跡出土石器(3) S=1/2

80・81は角柱状の形態を呈し、ある程度定形的に整えられている。80は細粒砂岩製で、滑らかな使用面を3面もつ。81は凝灰岩製で、滑らかな使用面を2面もつが、左側面には筋状擦痕、裏面には敲打痕の間に滑らかな面も観察できる。いずれも表土より出土しており、時代は不明である。

82・83は正面に数条の筋状擦痕をもつ。いずれも硬く鋭利なもので擦ったと考えられる。82の石質は玄武岩であり、これはSK41より出土している。83は板状に整形しやすい粘板岩よりなる。正面はきわめて平坦であるが、数条の筋状擦痕の他にも小さな擦痕が多方向に観察で



第21図 三星原遺跡出土石器(4) S = 1/3



第22図 三屋原遺跡出土石器(5) S = 1/3

きる。さらに、裏面には幅6.5mm程の鋭利なものによる整形の痕跡がある。上・下端部は欠損しているが、その後の研磨痕が観察できる。

磨製石斧（第20図66～76、図版12・13）未成品を含めて11点出土している。そのうち、遺構から出土しているのは1点のみである。最大長・最大幅から、おおよそ大型磨製石斧と小型磨製石斧の2つに分類できるが、特に細長い磨製石斧も認められる。これは、本遺跡群出土の磨製石斧の最大長と最大幅の平均比（およそ2：1）にあてはまらないものである。石質は、蛇紋岩4点、流紋岩2点、結晶片岩2点の3種類の他、安山岩、玢岩が各1点となる。扁平の河床礫を利用したものが多い。

大型磨製石斧は、刃部欠損品1点、未成品3点を合わせて4点になる。

刃部欠損品の73は、下半分が欠損しており、全容をつかむことはできないが、頭部と両側縁部が研磨され、定角式磨製石斧に分類される。また、頭部には細かい敲打痕がみられる。石質は安山岩である。

未成品3点の最大長は、95.2～127.8mmの範囲に入る。

74は側縁部に、75は刃部および頭部に打撃が加えられている過程である。

76は刃部および両側縁部に大きな剝離面がみられ、さらに、両側縁部の剝離面が細かく敲打されている過程にある。

小型磨製石斧は未成品5点のみである。欠損品を除く4点の最大長は36.3～61.5mmの範囲に入る。

68・69は研磨の工程にあり、刃部までつくり出されている。さらに詳しく観察すると、68は側縁部に敲打を受けているが、そこにわずかに研磨された面が残っていることから、完成後の欠損したものかもしれない。S X67（風蝕木痕）から出土している。69はまだ側縁部が研磨されておらず、全体の形も整っていない。

他の3点は、敲打による整形段階にある。

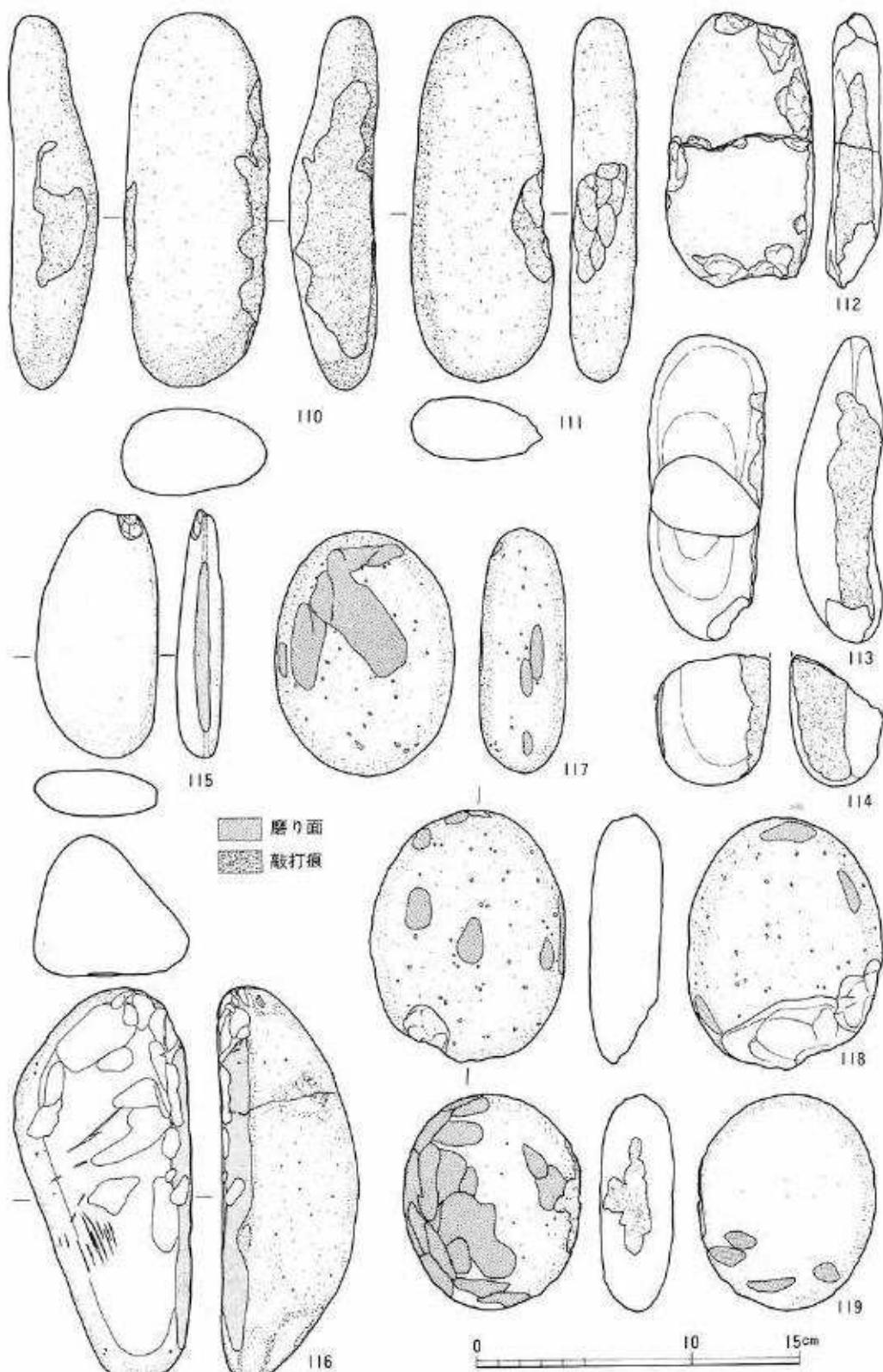
細長の磨製石斧は2点である。66の最大長と最大幅の比は4.4：1となる。66・67とも両側縁部が研磨されている。

以上の磨製石斧と同じ石質であり、一部に細かい敲打痕がみられる扁平な河床礫が2点出土している。しかし、これは未成品というより敲打の道具と考えられる。

また、石質、法量ともに磨製石斧の条件を満たす扁平の河床礫4点も出土している。

打製石斧（第21図84・85、図版）2点出土している。84は短冊形、85は分銅形の打製石斧である。石質は安山岩および砂岩である。いずれも、河床礫の自然面を片面にもった剝片を加工しており、側縁部はかなり敲きつぶされている。磨耗のため、刃部の細かい調整は不明であるが、片刃である点も共通する。

剝片石器（第21図86～92、図版14）角のとれた河床礫（おそらく大きい礫）に打撃を加えて得た剝片は、一面に自然面を残し、他面に主要剝離面をもつ。これは、未加工・未使用のものを含め



第23図 三星原遺跡出土石器(6) S = 1/3

て24点出土している。そのうち、遺構より出土しているのは1点のみである。石質は、玄武岩・玢岩、そして安山岩・輝綠岩が各2ないし1点ずつ含まれるのみで、ほとんど砂岩・泥岩からなる。

打撃の方向を長さとし、これに直交する方向を幅として剥片の大きさを求める。その結果、最大幅はおよそ40~70mm, 50~100mmの範囲、最大厚はおよそ10~20mmの範囲に集中する。しかも、最大長より最大幅が長い「横型剥片」と、その逆の「縦型剥片」に分けられ、それぞれは、19点、5点を数える。

87は主要剥離面の周縁部に細かい剥離による刃部をもつ。

86は自然面の周縁部に、91は主剥離面の打点から遠い下端部に、それぞれ研磨による刃部らしきものをもつ。

88や92には、使用痕の可能性をもつ刃こぼれが観察される。

また、剥離調整はないが、刃縁が磨耗し、使用された可能性のある剥片石器は、89・90をはじめ12点を数える。

礫石錐（第22図93~106、図版15） 18点出土している。素材の河床礫の石質は、玄武岩、石英斑岩が各1点である他、安山岩11点と砂岩5点で全体を占める。

最大厚、最大長が、およそ20~30mm, 70~100mmの範囲に集中する扁平礫である。さらに、最大長と最大幅の比をみると、1:1から5:4の範囲に入るものが多いが、5:3前後のものもあり、三屋原B遺跡より楕円形の礫石錐がめだつ。また、最大長60mm以下の小型のものもみられる。重量は13.2~310.0gと幅がある。

全点とも、剥離による抉りは礫の長軸方向の両端2か所にある。ただし、その抉りは、一端では両面剥離、もう一端では片面剥離で施される場合があり、それは4点を数える。

凹石（第22図107~109、図版15） 4点出土している。いずれも安山岩で、角のとれた河床礫が素材となっている。

107は正・裏両面のほぼ中央に敲打で抉られたくぼみを1個ずつもつ。周縁部には局部的に敲打痕が観察される。

108はそれぞれ正・裏面のほぼ中央に各2個ずつ、109は正・裏面に各1個ずつのくぼみをもつ。深さ2~3mmほどの浅く磨りくばんだ程度のものである。また、周縁部には小さな磨り面が観察される。

他の1点は、正面にのみ1個のくぼみをもつ。

敲石・磨石（第23図110~119、図版15） 角のとれた扁平な河床礫を素材とした敲石が6点、磨石が6点出土している。

敲石の石質は、蛇紋岩・流紋岩・安山岩・玄武岩・はんれい岩・砂岩とさまざまである。欠損している114をのぞくと、最大長は119.3~171.5mm、最大幅は53.8~90.8mmの範囲に入り、平面形が楕円形を呈するものがめだつ。重量は314.5~725.0gの範囲に入る。いずれも、両側縁

部もしくは片側縁部に細かい連続した敲打痕が観察できる。ただし、112の両先端部には剥離痕、114の側縁部には研磨痕も観察できる。

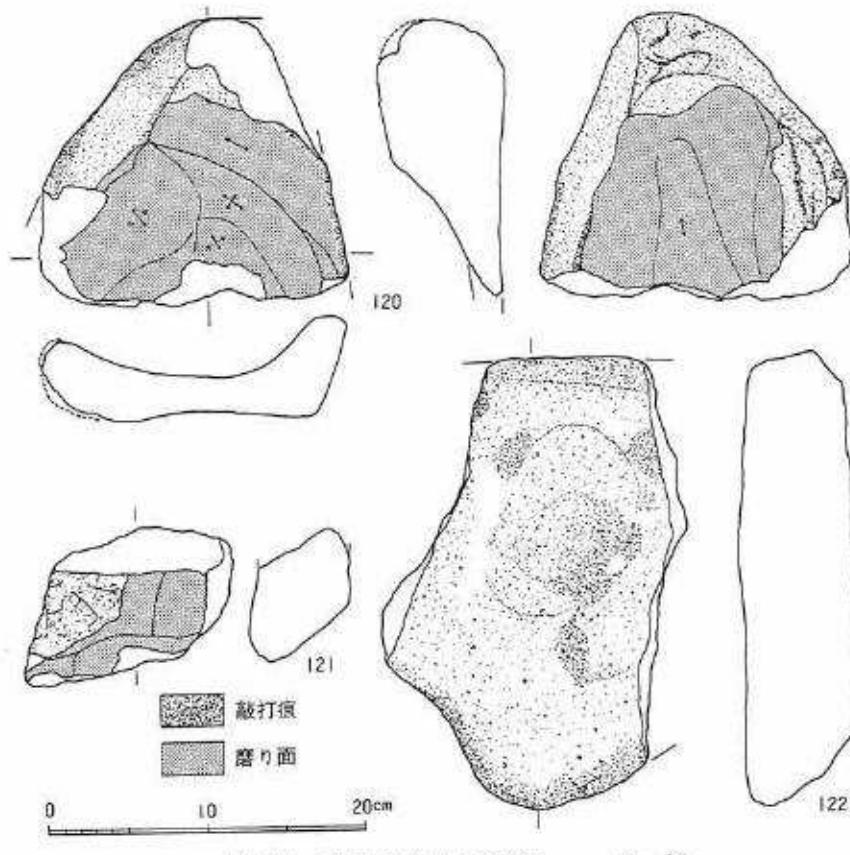
磨石の石質は、115の玄武岩を除くと、その他はすべて安山岩で占める。

116は大型で、三角柱状の形態をとる。磨り面は、その辺の部分に施されており、細長い。

115も扁平礫の側縁部に細長い磨り面をもつ。

119を含めた他の4点の磨石は、最大長99.6~117.0mm、最大幅82.6~93.7mmの範囲に入り、いずれも平面形が円形もしくは橢円形を呈す。小さな磨り面をいくつもつが、69の側縁部には連続した敲打痕も観察できる。

石皿（第24図120~122、図版16）3点出土している。120は人頭大の河床礫を使用し、正面・裏面とも凹んでいる。正面の凹みは大きく、裏面はわぶかで、底部状を呈している。71は小片のため全体の形は不詳である。磨り面は正面のみでついでに磨られており、磨り面は滑らかとなっている。72は長軸30cmほどで一辺40cmほど三角形の2層を欠損している。正面中央部が径10cmほどの浅い凹面を呈し、すらされている。凹みは浅い。裏面は平坦となり、すわりの良い形状を呈している。



第24図 三屋原遺跡出土石器(7)

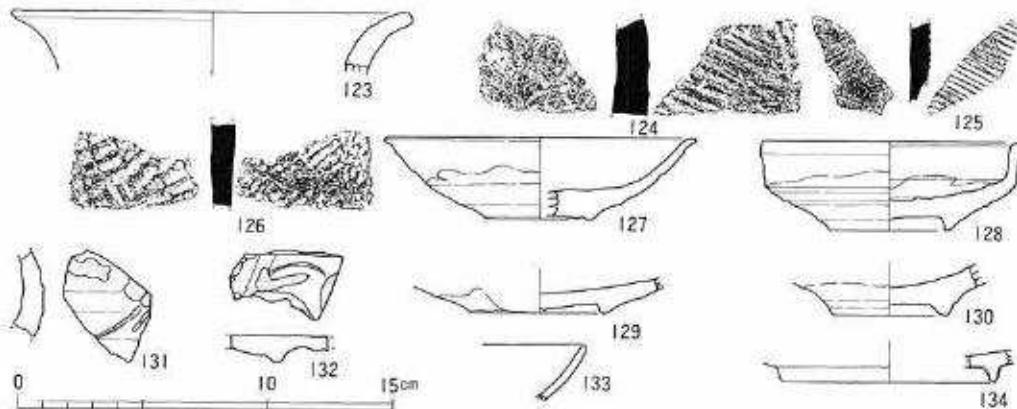
S = 1/4

第2表 三屋原遺跡出土石器観察表(1)

No	分類	注記No	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量	石 質	出土区	土層	
51	石鎌	欠損	125	21.0	16.3	5.6	1.6	真 岩	23F 5	II
52	石鎌		104	24.5	12.9	4.5	1.1	チャート	20R 25	I
53	石鎌	未成品	141	21.3	21.1	4.5	2.1	真 岩	20Q 21	II
54	玉	未成品	206	10.3	9.8	5.6	0.8	チャート	19R 8	II
55	玉		109	8.9	9.9	7.4	1.1	タンパク石	19R 1	I
56	石匙タテ	欠損	99	35.2	12.2	10.2	24.2	チャート	20Q 20	I
57	石匙タテ		230	52.0	20.0	9.0	12.0	真 岩	19R 2	III
58	搔器ヨコ	欠損	170	27.6	65.5	6.7	13.0	真 岩	19O 16	I
59	裝飾品	未成品	422	40.1	21.8	11.2	15.1	蛇紋岩	16J 1	II
60	裝飾品	未成品	—	42.1	28.8	10.9	21.8	蛇紋岩	—	表 採
61	裝飾品	未成品欠損	283	20.8	34.0	7.1	7.2	蛇紋岩	S I 39	II
62	裝飾品	未成品	25	40.0	22.5	4.8	7.7	蛇紋岩	20S 20	II
63	裝飾品	未成品	398	47.4	27.3	9.1	20.1	ビスイ	—	表 採
64	スタンプ状石器		298	42.4	35.5	19.5	54.5	安山岩	18M 5	I
65	土錐		182	34.9	34.1	20.6	23.3	—	19L 6	I
66	磨製石斧		390	88.0	20.0	9.0	25.0	片 岩	23G 21	II
67	磨製石斧	欠損	392	51.3	24.3	8.9	17.5	片 岩	23H 4	II
68	磨製石斧	欠損	397	41.4	31.1	9.2	19.0	蛇紋岩	S X 67	覆土
69	磨製石斧		398	61.5	38.5	11.8	38.0	流紋岩	—	表 採
70	磨製石斧		11	36.3	25.2	11.5	14.5	片 岩	—	表 採
71	磨製石斧		107	40.3	25.5	9.7	15.0	蛇紋岩	—	表 採
72	磨製石斧		78	52.0	30.6	9.4	21.5	蛇紋岩	21N 3	I
73	磨製石斧	欠損	121	113.3	72.4	28.7	365.0	安山岩	23F 3	II
74	磨製石斧		157	127.8	65.0	28.8	345.0	流紋岩	19Q 20	II
75	磨製石斧		268	95.2	55.9	26.4	155.0	碧 岩	19R 4	II
76	磨製石斧		428	115.5	52.1	32.2	225.0	片 岩	24E 6	II
77	砥石	欠損	332	92.2	61.2	35.5	235.0	流紋岩	22L 11	I
78	砥石	欠損	352	68.0	63.1	29.7	120.5	砂 岩	21D 22	I
79	砥石内磨		123	55.6	55.2	22.9	66.5	砂 岩	23F 4	II
80	砥石		176	118.4	40.3	42.4	290.0	砂 岩	19O 15	I
81	砥石	欠損	179	56	37.2	27.2	220.0	凝灰岩	22L 11	I
82	砥石	欠損	281	48.7	24.2	14.6	17.5	玄武岩	S K 41	覆土
83	砥石	欠損	80	87.5	64.5	9.8	74.2	粘板岩	22N 4	I
84	打製石斧		430	113.0	48.5	17.5	119.0	安山岩	22H 3	II
85	打製石斧		385	109.0	69.2	17.0	104.5	砂 岩	24E 21	II
86	剥片		169	71.7	122.6	16.5	144.5	砂 岩	16N 16	II

第3表 三星原遺跡出土石器觀察表(2)

No.	分類	注記No.	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量	石質	出土区	土層	
87	剥片	290	82.5	115.1	15.8	193.0	砂岩	—	表様	
88	剥片	65	60.8	93.6	13.6	91.0	砂岩	16R 5	II	
89	剥片	353	55.5	80.3	12.5	57.0	砂岩	23D 16	I	
90	剥片	127	70.2	65.3	11.0	53.5	砂岩	19Q 23	覆土	
91	剥片	119	84.7	77.4	13.4	79.0	砂岩	23F 1	II	
92	剥片	398	97.8	68.1	20.7	150.5	玄武岩	—	表様	
93	礫石錐	204	71.9	73.3	70.4	150.5	砂岩	16S 24	II	
94	礫石錐	341	92.8	84.5	28.8	290.0	安山岩	23K 4	I	
95	礫石錐	202	93.0	88.0	26.4	290.0	安山岩	23J	盛土	
96	礫石錐	176	85.8	75.4	34.6	310.0	砂岩	19O 15	I	
97	礫石錐	422	80.7	77.1	23.6	193.0	安山岩	16J 1	II	
98	礫石錐	388	38.9	35.2	8.0	13.2	安山岩	23F 8	II	
99	礫石錐	156	89.4	76.5	23.4	230.0	安山岩	19Q 19	II	
100	礫石錐	406	80.4	49.3	16.8	105.5	砂岩	24G 15	II	
101	礫石錐	143	102.5	57.0	19.7	179.5	寒碧岩	19Q 23	II	
102	礫石錐	168	57.5	46.5	14.0	53.0	砂岩	15N 8	II	
103	礫石錐	398	58.0	38.9	15.3	48.0	玄武岩	—	表様	
104	礫石錐	381	70.4	39.9	14.6	58.0	砂岩	24I 4	II	
105	礫石錐	203	91.2	67.7	30.4	255.0	安山岩	18R 5	III	
106	礫石錐	143	68.5	58.0	26.4	153.0	安山岩	19Q 23	II	
107	凹石	357	118.0	76.6	49.0	485.0	安山岩	24F 5	I	
108	凹石	123	78.7	70.0	45.1	350.0	安山岩	23F 4	II	
109	凹石	195	82.0	72.5	35.0	225.0	安山岩	19R 3	I	
110	敲石	399	171.5	66.0	41.0	725.0	はんれい岩	24G 13	II	
111	敲石	40	168.0	65.2	27.9	480.0	砂岩	20K 10	III	
112	敲石	399	171.5	66.0	41.0	725.0	はんれい岩	24G 13	II	
113	敲石	366	141.4	53.8	42.2	455.0	蛇紋岩	23E 25	I	
114	敲石	293	55.3	49.8	34.5	180.0	流紋岩	18Q 25	盛土	
115	磨石	428	113.3	56.4	21.1	200.0	玄武岩	24E 6	II	
116	磨石	334	181.7	82.0	64.0	106.0	安山岩	19Q	I	
117	磨石	156	112.6	83.3	41.0	615.0	安山岩	19Q-19	II	
118	磨石	190	117.0	90.5	33.0	525.0	安山岩	22O 21	I	
119	磨石	177	99.0	82.6	33.9	415.0	安山岩	22P-1	I	
120	石皿	欠損	438	178.5	195.5	83.5	2760.0	砂岩	23F 6	II
121	石皿	欠損	428	132.3	97.1	69.5	790.0	砂岩	24E 6	III
122	石皿	欠損	68	277.5	191.5	70.2	5700.0	安山岩	24D 3	I



第25図 三屋原遺跡出土近世陶器ほか S=1/3

c) 土製品

土鍤（第18図65、図版12） 1点のみ出土している。やや扁球状の土鍤である。中央に孔があり、その孔から上方にかけて、正・裏両面に竹管状の工具で溝がつけられている。正面の孔と溝の接点に、溝づくりの工程でついたと考えられる胎土のめくりあがりが観察できる。また、上端部において正・裏両面の溝の重なり部分も観察でき、溝づくりは、中央の孔から上端部に向かってなされたことがわかる。すなわち、焼成前に、穿孔→正面の溝づくり→裏面の溝づくりが行われている。

胎土は緻密で、焼成は良好である。孔から下部に黒い部分が観察できる。

d) 繩文時代以外の遺物（第25図123～134、図版11）

三屋原遺跡における出土遺物のなかで縄文時代以外の遺物には、土師器表1、須恵器表2、中世陶質土器1、瀬戸焼皿4、唐津焼片2、染付碗1がある。遺物の全体量からはごく少量である。出土地区は主に14～16・N～Q区にある溝状遺構S-D03・S-D05および23D区周辺の段切りでできた盛土層の下層から出土したものや、調査区全域に散在している。

123は土師器表の口縁部である。外反する口縁部で端部は丸く撫でられている。胎土は緻密。色調暗褐色を呈し、口径17.0cmを測る。21Q16区出土。124・126は須恵器表の体部片である。124は外面平行叩き、内面同心円文。内外面とも磨られて滑らかとなっている。19N11区出土。126は粗い格子叩き、内面は車輪状の同心円文を呈している。17L3区出土。いずれも小片で詳しい時期は不詳であるが、奈良の平安時代の所産であろう。

125は珠洲焼の体部片である。薄いつくりである。21Q11区出土。小片のため時期は不詳である。

127・131・132は唐津焼である。131・132の器種は不明である。灰色の釉の他に茶褐色釉がかかる。鉢か壺と考えられる。127は削高台の皿である。内面および、外面の上半部に濱けがけによる灰色の釉がかかる。底部外面には沈線状を呈する削りにより、高台を削り出す。底部の内外面に胎土目の痕跡を残す。128～130・133は瀬戸焼の碗である。128～130は底部外面をへラで

削り出して高台を作り出している。胎土は灰褐色を呈し、体部下半外面は回転ヘラ削り調整。128には淡黄色釉、129には朱色の釉が漬けかけにより施される。底部、内外面には釉はかかっていない。133は淡黄色の釉のかかる碗である。134は染付碗の高台部である。内面に横に1条、台部外面に2条、底部外面に1条の図線が巡る。江戸時代後期のものと推定される。

5. 小結

三屋原遺跡は昭和30年代初めに水田などに開墾され、北にゆるやかに下る斜面の一部を削平し、その土を盛土して、平坦面を造成した。そのため削平部と盛土部では遺物包含層および遺構の状況が異なり、盛土を施された部分については遺構・遺物が比較的残存していた。

遺構には、S I 39のように住居跡と推定されるもの1基、ほかに土坑や溝がある。S I 39は長軸4.3m、短軸3.5mを測る。不整円形を呈する掘り込みと径6m・径4mほどの円形に巡る2つの柱穴群から成るもので、掘り込みは浅く、平面形は不明瞭であった。しかし、この周辺にのみ遺物が集中することから住居跡と推定した。遺構の年代は明確ではないが、床面から集中して出土する土器が、胎土に纖維を含む土器などであることからやや幅はあるが、縄文時代前期のものと推定される。他に土坑の中で、東側斜面に検出された土坑SK18・SK19の2基は床面が焼けて硬化していることや、覆土に炭化物、焼土を多量に含むことから炭窯と考えられる。年代は不詳であるが、近世以降のものと推定される。

遺物は縄文土器と石器が大半であり、わずかに土師器、近世陶磁器などがある。縄文土器については平箱1箱で非常に少ない。前期のものと中期のものの2種がある。前期のものは、胎土に纖維を含む縄文を施すもので、S I 39周辺にのみ分布している。中期の土器は竹管文を施すものでSK61がある調査区北東隅に多く出土している。これらから広い段丘上で、時期により利用される地域が異なっていた可能性も考えられる。また磨製石斧の未成品や拳大の扁平な円礫の上・下端を打ち欠いた礫石錘も三屋原B遺跡、四割・杉沢遺跡などと比べて多く出土している。また石鎌に類似した石匙もある。

第V章 三屋原B遺跡

1. 地形と層序 (第4図・第26図)

三屋原B遺跡は、舌状台地の先端に位置し、東・西・北の三方は比高差5m以上の深い谷で閉まれている。30m×30mほどの平坦面の北側に、幅10mにも満たない細尾根が、南北に約60mほどつづく地形である。遺構は細い尾根の先端では、錢貨の出土した焼土が検出された。しかし、遺構の多くは、T～Wの間の平坦な地区に検出された。なお30U・30V区では表土の下は旧地形が東に下る斜面であり、上に1m以上の盛土があり、300mほどの平坦面をつくり出している。基本層序は29V25区の平坦面で4層に分けられた。I層表土層、II層暗褐色土層(遺物包含層)、III層茶褐色砂質土層、IV層黄褐色粘質土である。東側斜面においてはI層とII層の間に盛土層が厚いところで1.5mほど存在する。I層・III層は厚さ10cmほどである。

2. グリッドの設定 (第27図)

三屋原遺跡と同じ座標軸を使用し、東西は27～31まで、南北はM～Xまでの範囲にわたっている。各小グリッドの呼称も三屋原遺跡と同様であり、28M15区などと呼称する。

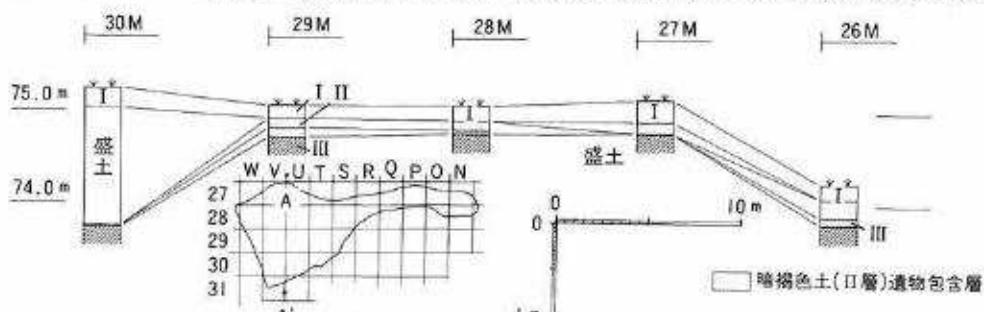
3. 遺構 (第27～32図)

住居跡状の遺構3基・土坑14基・溝2条・風倒木痕11基である。いずれも杉の根による擾乱を受け、遺構の遺存状況はよくない。

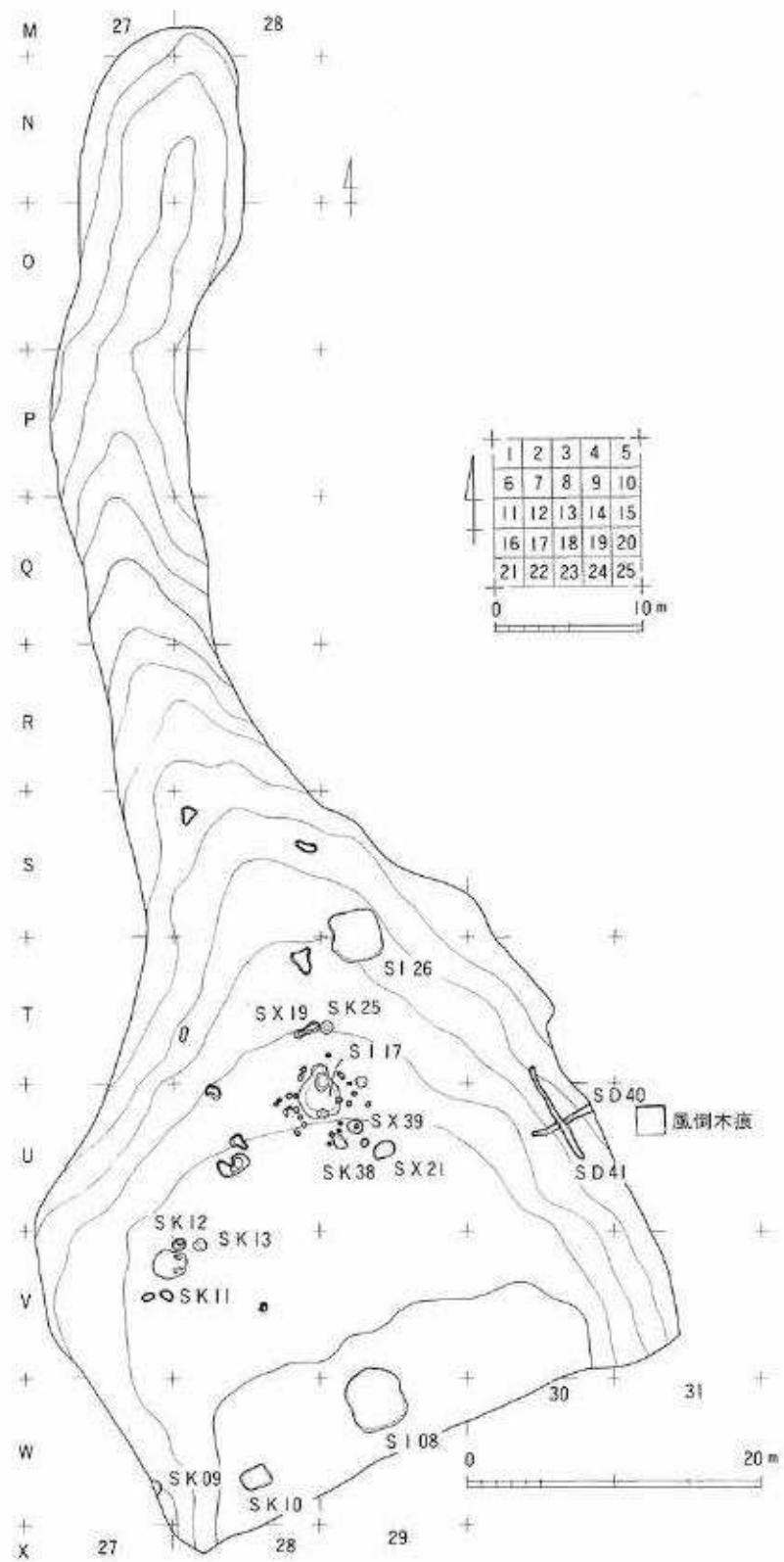
a) 住居跡

平面形が1辺4mに近い、方形もしくは不整方形のものを一括した。平らな床面と、直立ぎみの壁をもち、わずかではあるが遺構から遺物が出土している。いずれも段丘中央部に南北に並んで存在している。

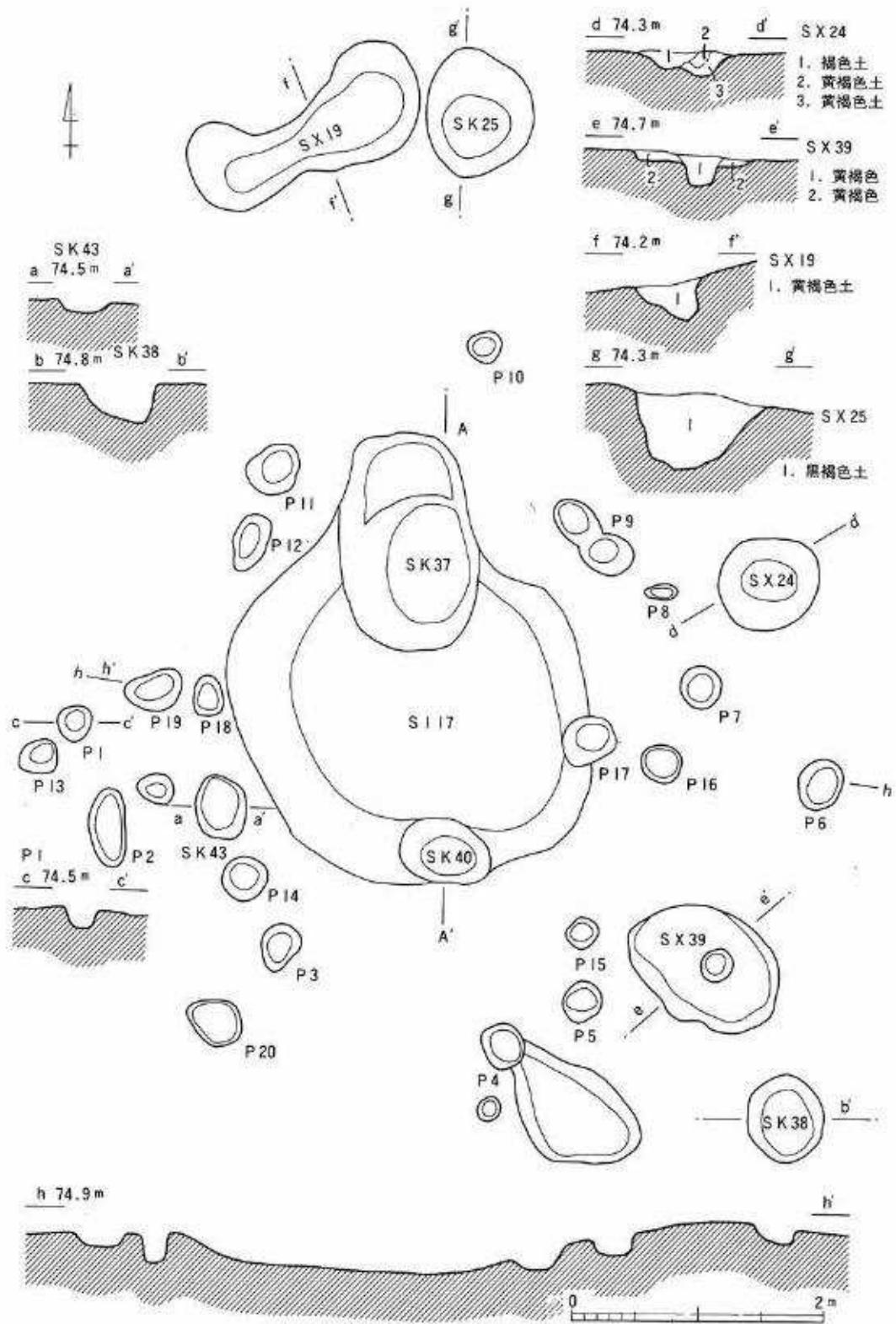
S117(第28図・29図、図版19～20) 尾根の中央部わずかに北に緩く傾く斜面の28U5、29U1区に位置し、遺構は、長軸3.5m、短軸2.7mを測る洋梨形を呈する掘り込みと、それを巡るピット群からなっている。北側の張り出しはSK37による擾乱を受けたことによるもので、本来は1



第26図 三屋原B遺跡土層柱状図

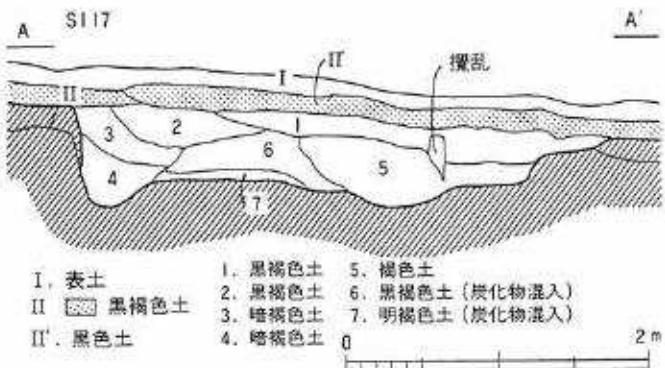


第27図 三屋原B遺跡遺構全体図



第28図 三星原B遺跡遺構平面図

辺3mほどの方形を呈していたと考えられる。掘り込みはIII層(漸移層)を切って構築されており、壁高は南壁で45cmと深い。底面は平坦でピットなどはないが、掘り込みの外側にはP1~P13まで13基の柱穴が長軸4.7m・短軸3.8mの範囲に巡っている。これらのピットは壁柱穴とも考えら



第29図 三屋原B遺跡 土層断面図

れる。いずれも径20cm、深さ15~20cmほどのものである。覆土は7層からなるが2~4層はSK36の覆土であり、1~5層はSK37の覆土である。S I 17の覆土は6・7層のみである。7層は底面に厚さ5cmほどで水平に堆積している。

S I 08 (第30図、図版20) S I 17の南側約20mのところ、台地の中央(29W 2区)で検出された。長辺3.6m・短辺4.4m、壁高約10cmを測り、隅丸方形を呈している。上部は開墾時の削平を受け、床面とわずかな壁を確認したのみである。床面は平坦で、中央は硬くしまっている。覆土は浅いため暗褐色土のみであった。炉跡、柱穴は確認できなかった。縄文土器片がわずかに出土したのみである。

S I 26 (第30図、図版21) S I 17の北側に位置し、台地から尾根への遷移点に立地する。グリッドは28J 5区である。隅丸方形を呈し、1辺3mほどである。周辺は根による攪乱が著しく、床面にも凹凸が激しい。床面はほぼ水平であるが、わずかに北側に傾斜している。覆土には焼土の混入する層が北側部に認められる。炉跡、柱穴などは根の攪乱が多いため判別できなかった。縄文土器の細片がわずかに出土しているが、この住居跡に伴うものは不明である。

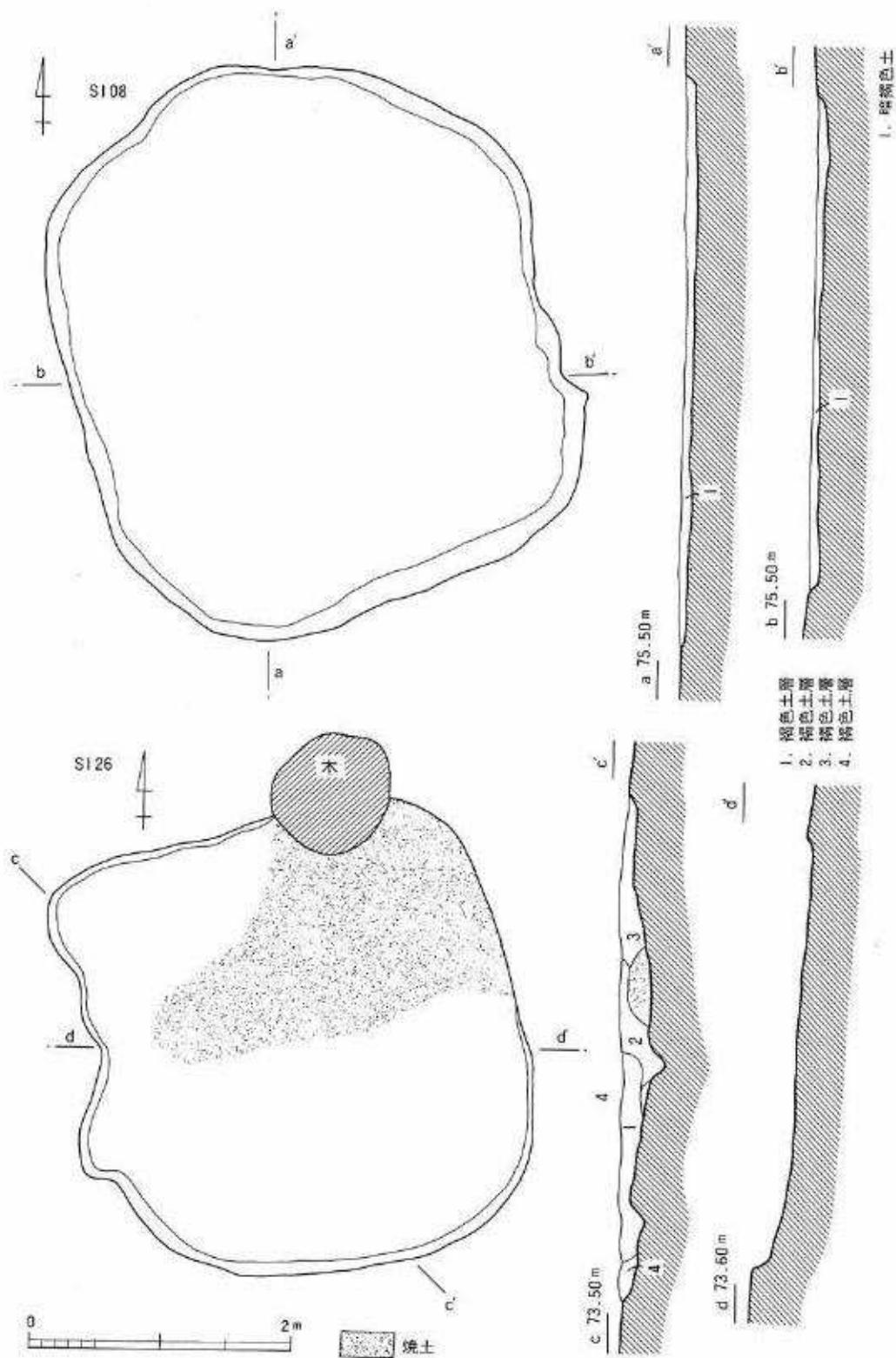
b) 土坑 (第28図~第31図)

住居跡などと考えられる以外の土坑は13基である。このうちSK19は不定形を呈しており、根の攪乱とも考えられるため分類からは除外し、ほかの12基について述べる。平面形態による2種に大別される。

I類 方形もしくは隅丸方形を呈するものでSK10とSK11の2基がある。

SK10 (第31図、図版21) 調査区の南側、28W 18区で検出された。長軸1.95m・短軸1.5m、壁高約10cmと浅く、隅丸方形を呈している。床面は平坦で、覆土は暗褐色砂質土である。遺物は縄文時代の土器細片、弥生時代末から古墳時代初頭の表(273)などが出土している。なお縄文土器は纖維を含む土器がわずかに出土している。

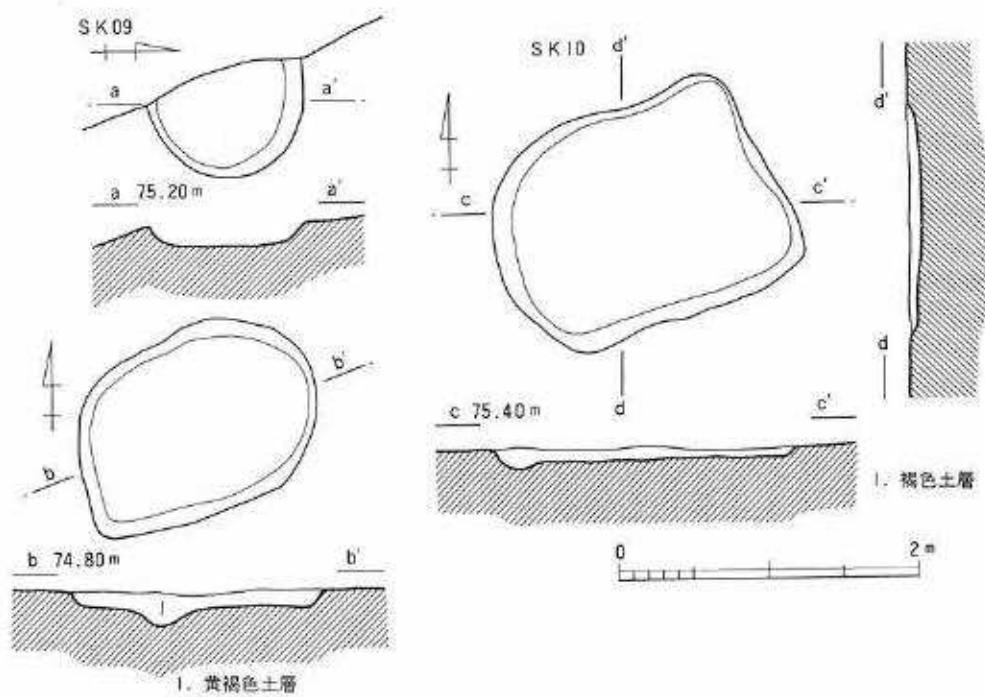
SK11 (第31図、図版21) 調査区の南西隅、27V 10区で検出された。長軸2.4m・短軸2.2mの隅丸方形を呈している。床面は緩やかな凹凸が認められ、径50cm、深さ20cmほどのピットが2基存在する。北側にSK12・SK13が近接している。



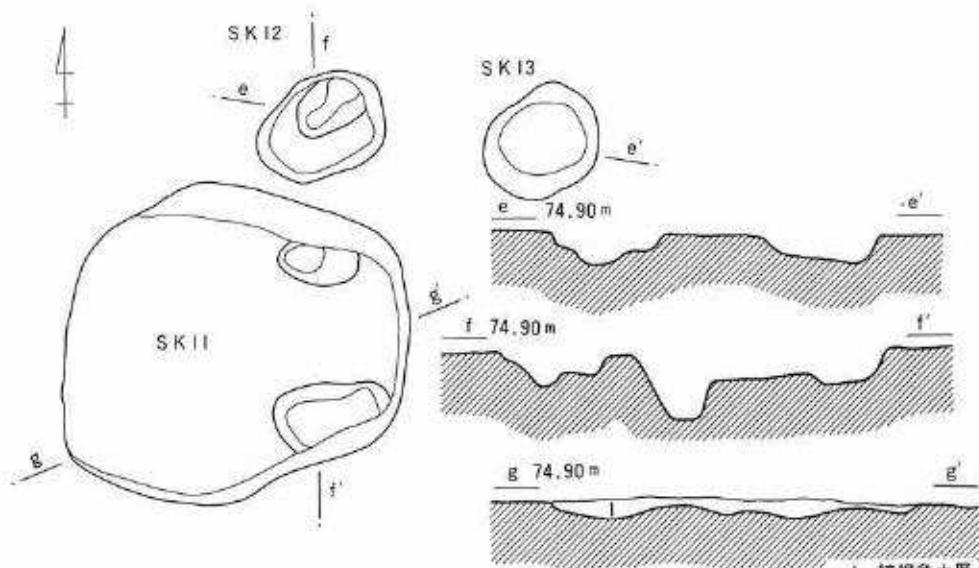
第30図 三星原B遺跡遺構平面図

II類 円形もしくは橢円形のもので、両者の区別が明確でないため同一の項にまとめた。大小にかなり差が認められる。径0.5mほどと小さいSK12・13・24・25・38と、やや大きいSK9・21・37・39・40などである。大きいものは橢円に近い形を呈している。

SK12・13(第32図) 28V1区にある。2基並んで、SK11の北側に近接している。どちらも長軸0.55m・短軸0.5m、深さは20cmである。断面U字形を呈し、覆土は暗褐色土の単層である。



I. 黄褐色土層



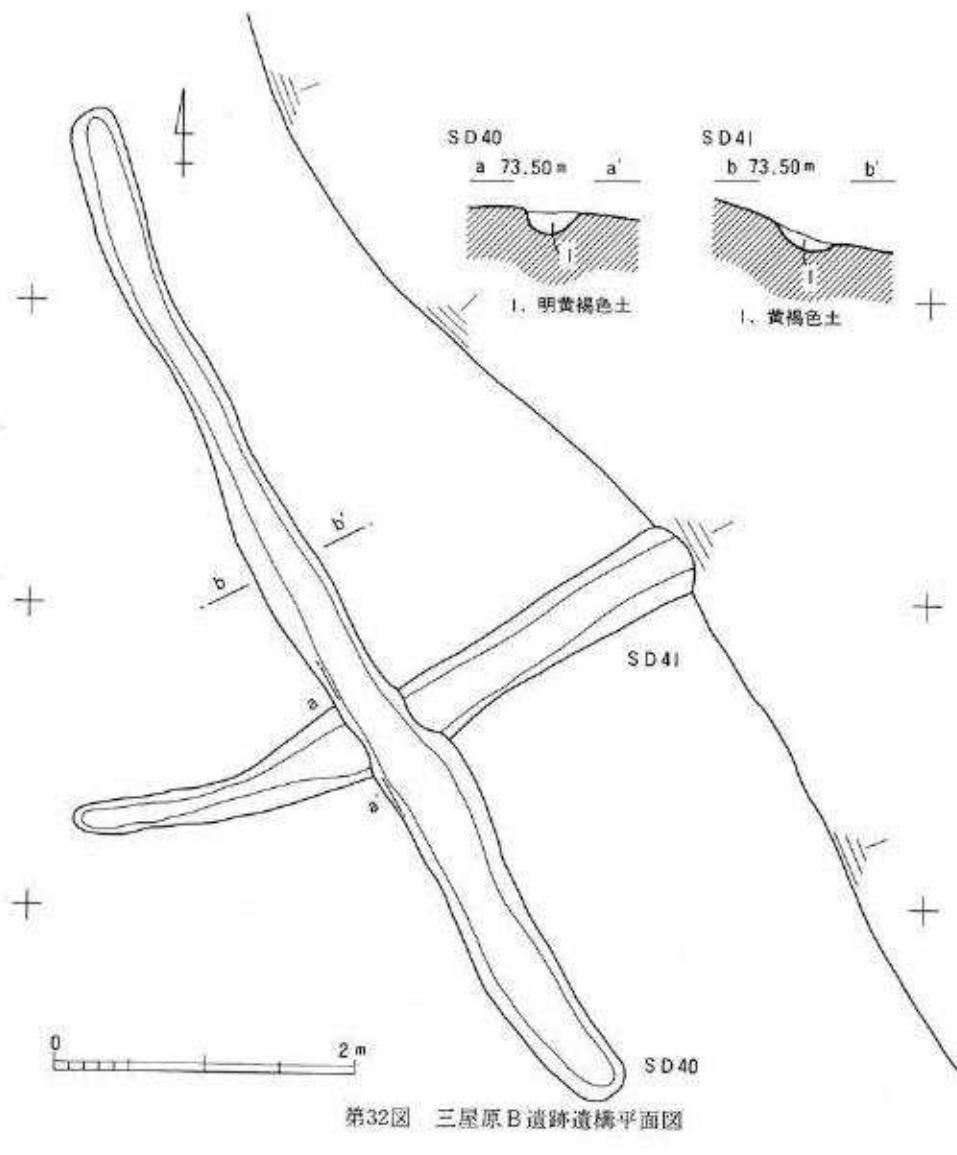
第31図 三屋原B遺跡土坑平面図

SK24 (第29図) 29V2区の台地の中央部に位置し、SI17の東側約2mに近接して検出した。底面は中央がへこんでいる。覆土は3層に分けられ、最下層には炭化物が混入する。遺物は出土していない。径0.5m、深さ20cmを測る。

SK25 (第28図) 29T11区にある。SI17の北側約2mのところに位置する。長軸0.9m・短軸0.7m、深さ40cm、断面U字形の土坑である。覆土は暗褐色土の単層である。

SK38 (第28図) 29V7区、SI17の南東側約2mのところに位置する。径・深さともSK24に類似する。覆土は暗褐色土の単層である。

SK09 (第31図) 調査区の南西隅、27W20区に存在し、崖により西半分が削平されたものである。径0.9mをこえる円形を呈していたものと思われる。深さは約15cmで底面は平坦である。暗褐色土を覆土とし、わずかに炭化物を混入する。



第32図 三星原B遺跡遺構平面図

S K21 (第31図) 尾根中央27U13区に検出された。長軸1.8m・短軸1.1m、深さ15cmを測る。長楕円形を呈している。底面はほぼ平坦であるが、一部に凹んだところも認められる。覆土は暗褐色土層のみである。

S K39 (第28図) 29U6区に位置し、S I 17の南側に近接している。東南方向に長い楕円形を呈し、長軸1.2m・短軸0.7mを測る。深さは10cmほどと浅い。中央に径0.2mのピットがある。覆土は黄褐色土で炭化物を混入する。

S K37・40 (第28図・第29図) S I 17を切って北側と南側に各々検出された。どちらも径0.5mほどの平面形楕円形を呈する。土層観察から、まずS I 17をS K40が切ってその後、北側のS K37が1.5mほどの範囲にわたって掘り下げられている。新旧関係は以上からS I 17→S K40→S K37の順である。S K40からは小型磨製石斧未成品が出土している。

c) ピット (第28図)

ピットは主にS I 17の周辺に集中しており、S I 17をとり囲むように3.8m×4.7mの範囲に集中する。径はいずれも30cm前後で、深さは斜面上にあることから10cm前後の浅いものから、30cmをこえる深いものも認められる。S I 17の壁柱穴とも考えられる。

d) 溝 (第32図、図版22)

2条検出されており、段丘の東側斜面30V22区を中心に位置している。この地区は、傾斜がほぼ30°の斜面を10m×10mの範囲で高さ2mほど盛土し、平坦面を作り出し、その後植林した部分である。遺物を包含する暗褐色砂質土層が平坦面からつづく旧斜面に沿って残存しており、この層を掘り下げる構造を確認した。等高線に平行する溝(S D41)と直交する溝(S D40)があり、中心部で交わっている。まず直交するS D40を掘り、その後約7.8mにわたってS D41を掘ったものと考えられる。どちらも幅40cm、深さ15cmほど測り、断面はU字型を呈している。

e) 風倒木痕 (第27図)

風倒木痕はいずれも不整円形を呈しているもので、径70cm前後のものから1.5mをこえるものまで11基ある。いずれも西北斜面側に分布しており、東側斜面には認められない。

f) 焼土

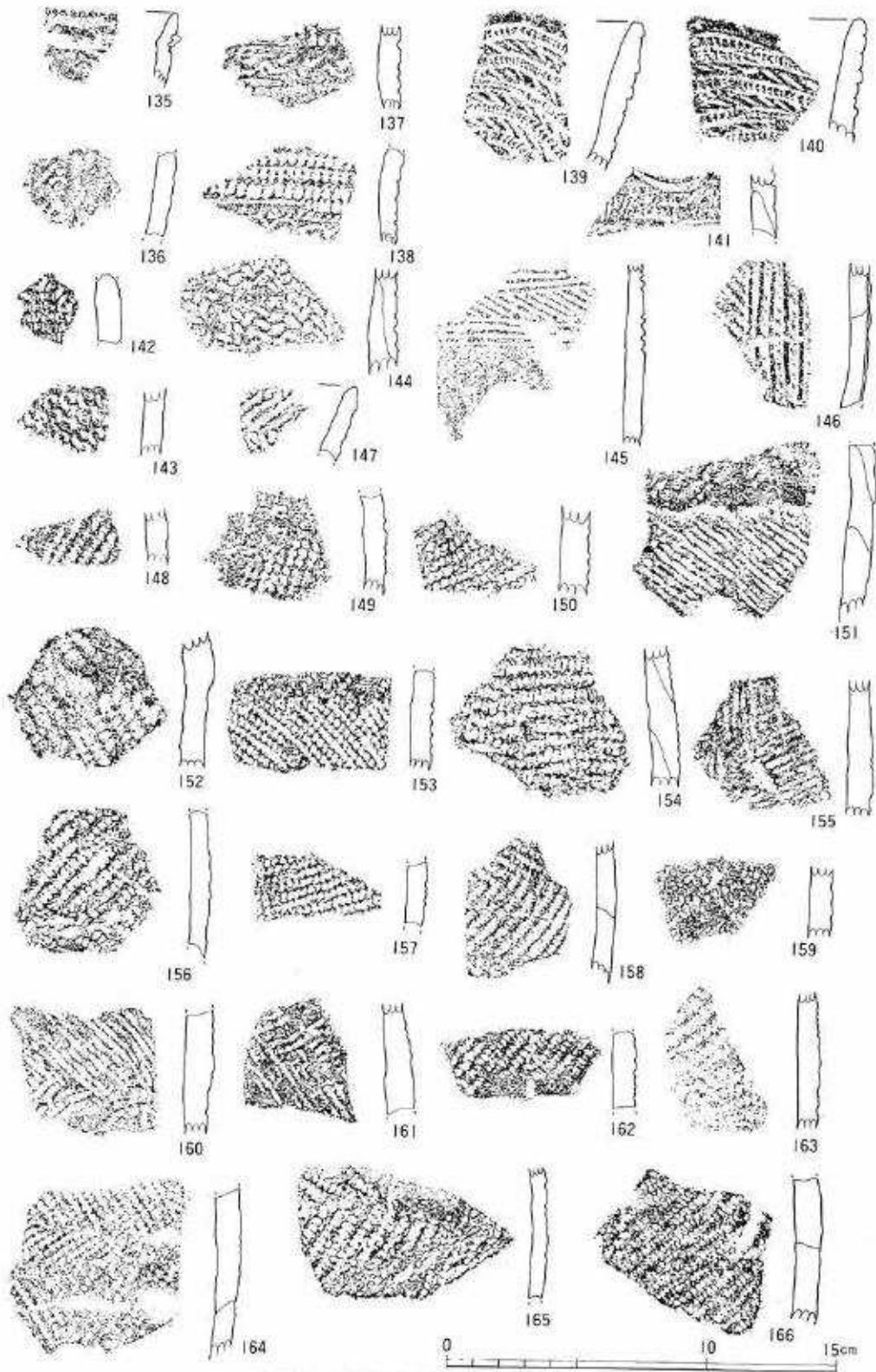
段丘の先端27N16区にあり、径30cmほどの間に焼土が3cmほどの厚さで堆積していた。周辺からは寛永通宝が検出された。このうち4枚は完形で出土し、ほかに細片となつたものがある。

4. 遺物

三屋原B遺跡から出土した遺物は合計で平箱約9箱である。縄文土器2箱・石器7箱・他にわずかの弥生土器片・近世陶磁器片・錢貨などである。以下、縄文土器から概要を述べる。

a) 縄文土器 (第33図~37図、図版22~25)

いずれも細片となっているものが多く、全体の器形を推定できるものはごく一部のみである。また胴部の破片などが多いため、器形による分類はできない。このため文様から分類した。



第33図 三屋原B遺跡出土縄文土器(1) S = 1/2.5

1類 竹管文と口縁端部に竹管で刻目を施すもの	9類 半截竹管と爪形文を組合わせるもの
2類 爪形文と連続を施すもの施すもの	10類 B字状文を施すもの
3類 半截竹管文を押し引きして文様を作り出すもの	11類 縦位の竹管文を施すもの
4類 組紐による施文のもの	12類 蓮華文を施すもの
5類 地文繩文に細い粘土紐を貼りつけるいわゆるソーメン貼りを施すもの	13類 軌軸文を施すもの
6類 繩文(斜繩文)を施すもの	14類 摯糸文を施すもの
7類 羽状繩文を施すもの	15類 粗い竹管文を施すもの
8類 斜行の格子目文を施すもの	16類 太い竹管文を施すもの
	17類 沈線文と刻目文を施すもの
	18類 無文のものおよび底部

1類 (第33図135・図版22) 口縁部上半に竹管文による横位の沈線文を施すもので、口唇端部は上方から刻目が施される。沈線の上方にわずかに隆帯が巡る。色調は暗灰色を呈し、胎土は緻密で長石粒・雲母粒が混入し、焼成は良好である。

2類 (第33図137・138、図版22) 爪形文および小さい爪形文の連続刺突文を施すものである。137・138は上半に竹管による刺突文を3段以上施し、C字形の137Aは爪形文を施すものである。色調は灰褐色で、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良で軟質である。下半には波状文をさらに数段巡らすものである。胎土は1類の135に類似する。

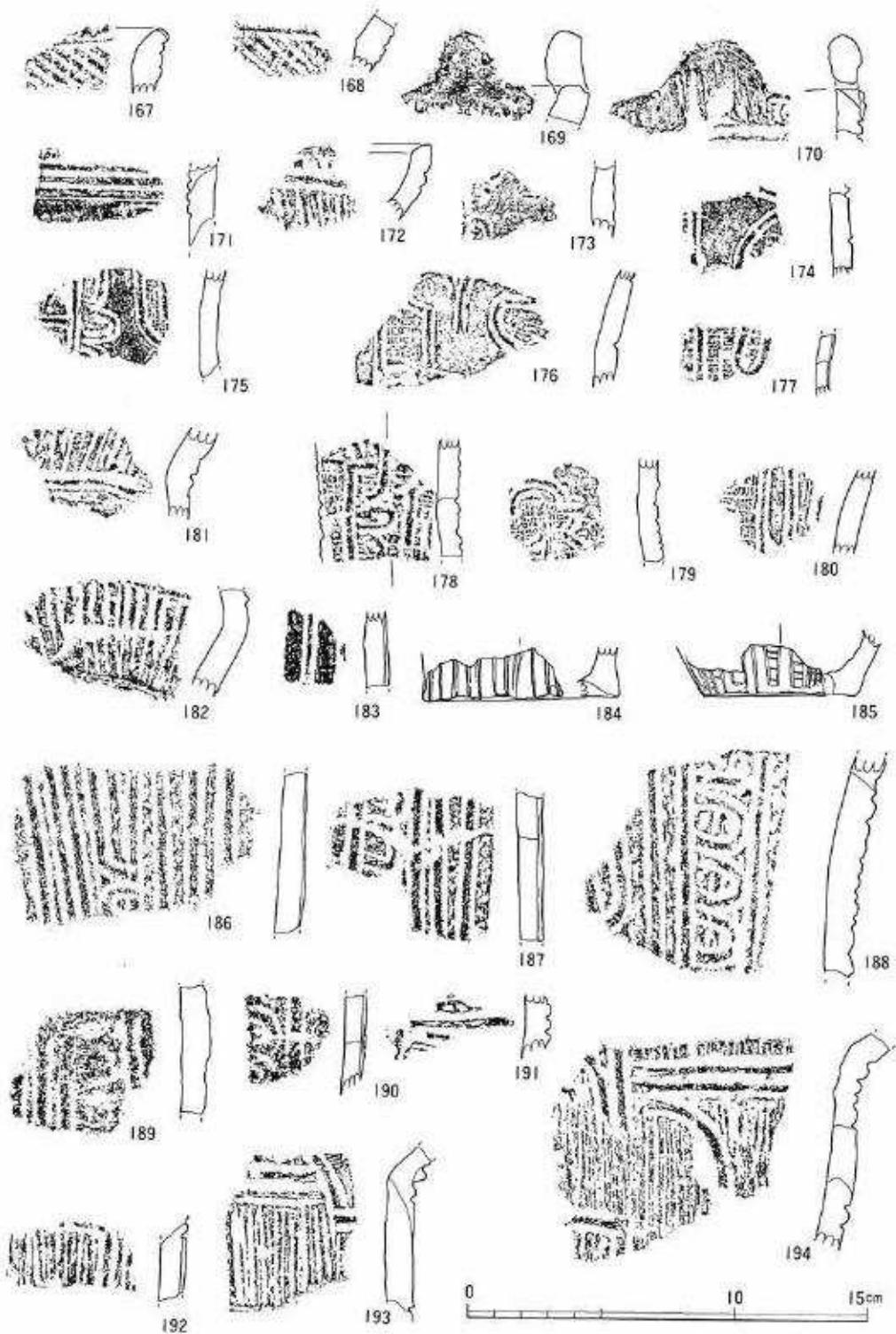
3類 (第33図139・140図版22) 斜位の竹管文を施した後、半截竹管文を45°ほどに傾けて押し引きしながら施文し、うず巻文を表現したものである。赤褐色を呈し、胎土に長石粒・雲母粒を混入する。焼成はやや不良。2点は同一個体と考えられる。139はSK12から出土している。

4類 (第33図143・144図版22) 組紐を施すものである。2点とも暗灰色を呈し、胎土は緻密で、長石粒・石英粒・雲母粒を含む、焼成は良好である。内面にササラ状の工具で撫でた痕跡があり、胎土に纖維を混入していたとも考えられる。胎土の状態は1類・3類に類似する。

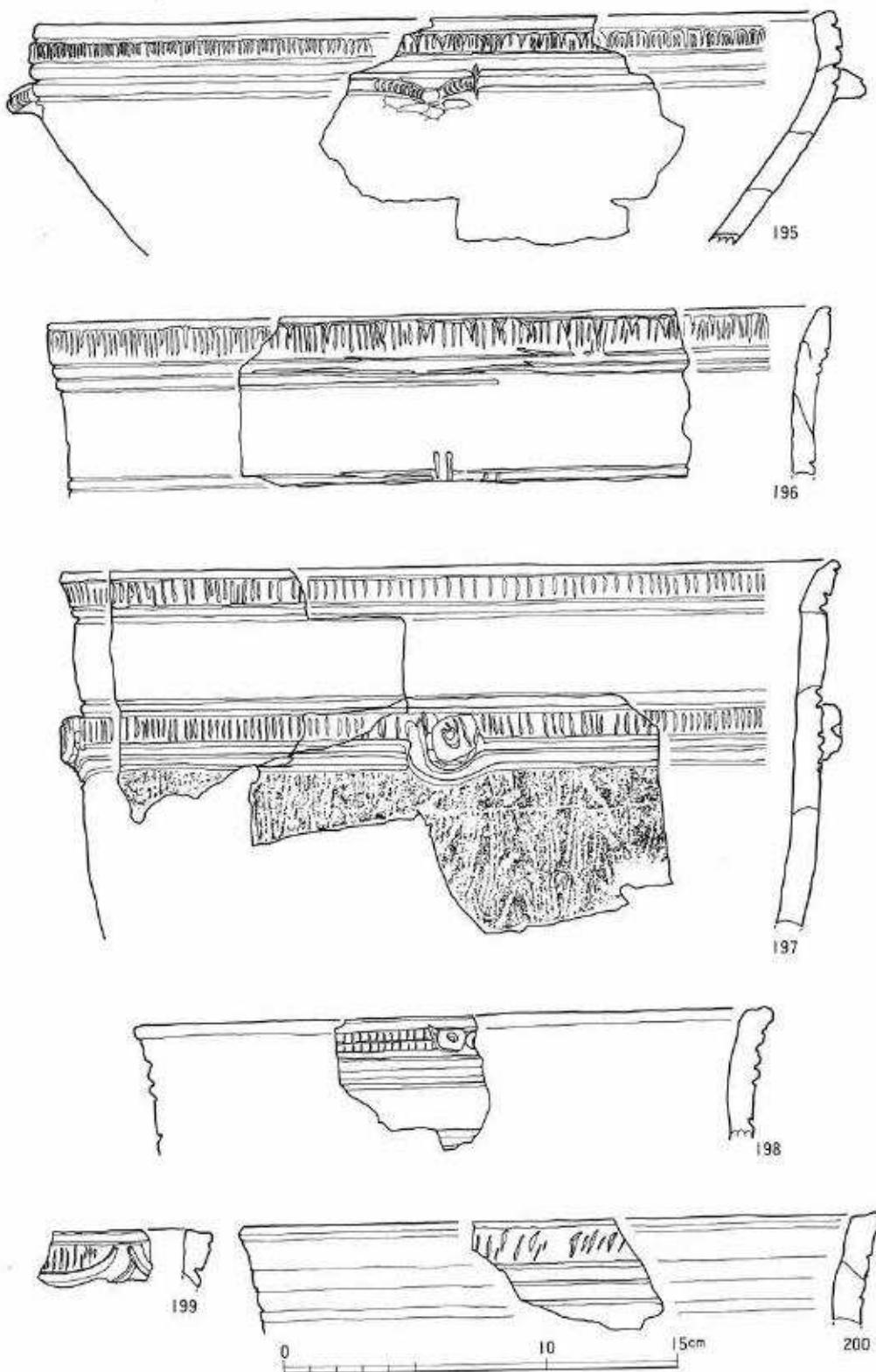
5類 (第33図146、図版22) 繩文単節RLを地文とし、縦位に細い粘土紐をソーメン貼りするもので、胎土に長石粒を含み、色調は茶褐色を呈する。焼成は良好である。

6類 (第33図136・142・147-157・162・163・166、図版22・図版23) 繩文を地文とするもので、単節LRの150、157、159と無節の151以外はすべて単節RLである。136・142・147-151は灰褐色を呈し、胎土に纖維を含み、焼成不良で軟質ものである。ほかは茶褐色を呈し、長石粒・石英粒を含む焼成のやや軟質なものである。136はSK13、144はSX20(風洞木痕)、132はSI10、157はSX20(風洞木痕)から出土している。

7類 (第33図158-165、図版23) 羽状繩文を施すものである。いずれも茶褐色を呈し、長石粒・石英粒を多く混入している。164は胎土に纖維を少量含むものと思われる。全般的に焼成は軟



第34図 三屋原B遺跡出土繩文土器(2) S=1/2.5

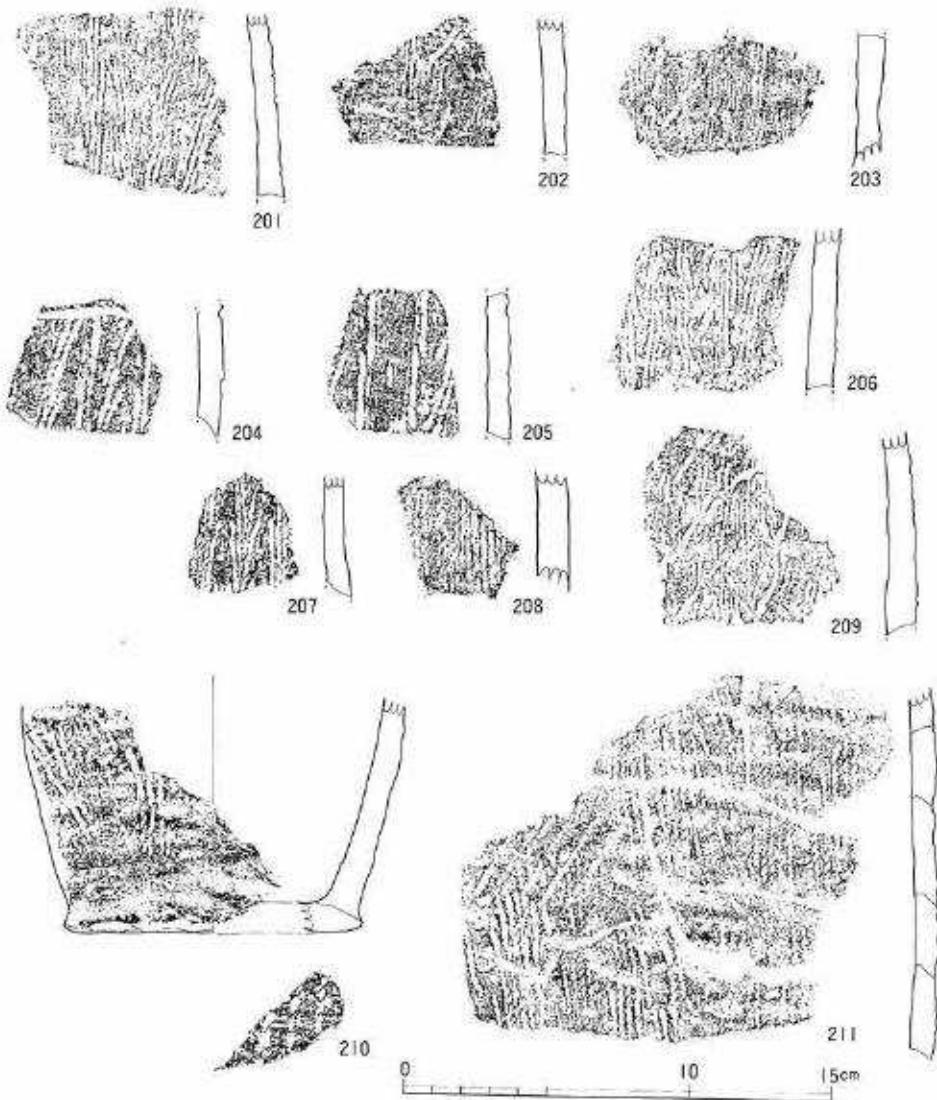


第35図 三屋原B遺跡出土縦文土器(3) S=1/2.5

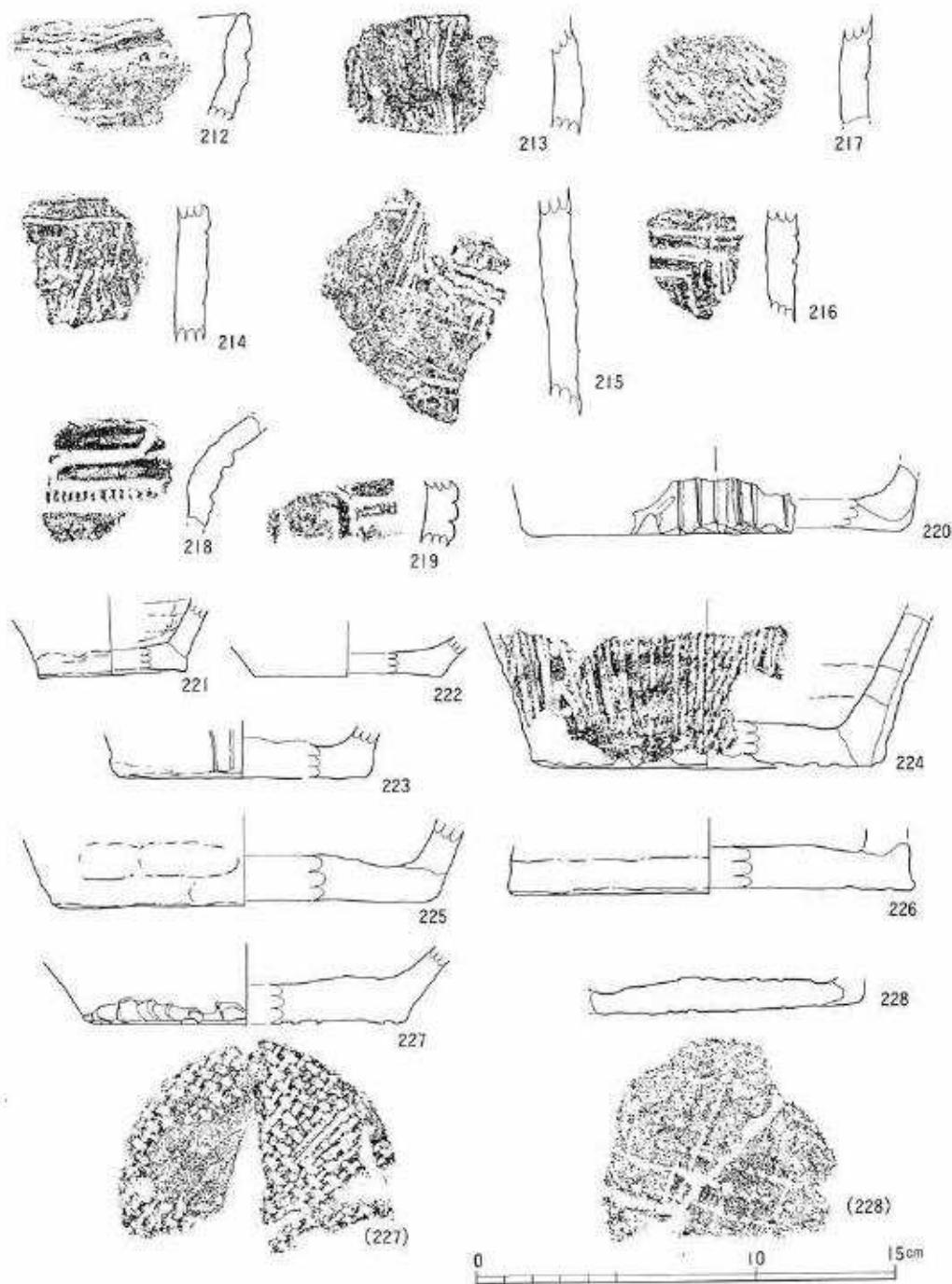
質で不良である。157はS X23(風倒木痕)から出土している。158はSK19から出土している。

8類(第33図・第34図153・167・168、図版23) 斜行の竹管文を施すものである。格子目文と斜行文の2種がある。167・168は格子目文を施すもので暗灰色を呈し、胎土は緻密である。石英粒および雲母粒をわずかに混入する。焼成は良好である。153は斜行の竹管文を施したのち、横位の竹管文を施すもので色調は茶褐色を呈し、胎土の状態は5類に類似する。

9類(第34図171・172、図版23) 半截竹管文を施すもので、いずれも爪形文も併用する。172は内湾ぎみに聞く平縁口縁を呈する深鉢の口縁部と考えられる。灰褐色を呈し、胎土は緻密、焼成は良好である。



第36図 三屋原B遺跡出土繩文土器(4) S=1/2.5



第37図 三屋原B遺跡出土縄文土器(5)

 $S = 1/2.5$

10類 (第34図173~180・185~190、図版24・図版25) B字状文を施すもので、地文の無文の類と地文繩文のB類がある。

10A類 (173~180・185) 文様の間をヘラ状工具による格子文を充填するものもある。地文部は撫でられている。緻密な胎土で砂粒の混入は少なく、焼成は良好である。178は径の細いものである。胎土・手法から185はこの類の底部と考えられる。

10B類 (186~190) 繩文を地文とするもので胎土に砂粒の混入が多く、焼成は不良である。

11類 (第34図169・170・181~184・190~194、図版24) 竹管文を多用するものである。頸部から外反して広がるキャリバー形の深鉢の破片と考えられる。181・182は頸部に横位に半截竹管文がめぐり、これより上は縦方向の竹管文が施される。183・184は体部・底部の破片である。縦位に竹管文が施される。いずれも茶褐色を呈し、胎土は緻密で、焼成は良好である。190~194は、粗い竹管文を縦位に施したあと半隆起線文により、頸部下半にY字の文様を施す192~194もある。色調は灰褐色を呈し、胎土は緻密で、焼成は良好である。169・170も粗い縦の竹管文を施すもので、平縁口縁に円形の突起がつく。どちらも暗灰色を呈し、長石粒を含む胎土である。

12類 (第35図195・196・200、図版24) 三角形印刻文による蓮華文を施文するものである。蓮華文は全般的に退化しており、200は特に退化が著しい。195は一部に突起がみられ、半截竹管による連続刺突が認められる。いずれも深鉢と考えられ、195のようにキャリバー形を呈するものと196・200の円筒形を呈するものがある。

13類 (第35図197~199、図版25) いわゆる軌軸文を施すもので、直立気味に立ち上がる口縁である。12類の196と同じように無文帯を設けて、もう一段文様帯がめぐる197もある。突起は4単位と考えられる。体部下半は木目状撚糸文を施す。198は眼鏡状の突起がある。軌軸文はヘラ状工具による格子文風である。199は連弧文の中にヘラ状工具で軌軸文を描いている。いずれも灰褐色を呈し、砂の混入が少ない胎土を使用している。焼成は良好である。

14類 (第36図・第37図201~211・213・217・224、図版25) 撥糸文を施すものである。201~211は木目状撚糸文である。上部に沈線がめぐる204もある。多くは13類の体部下半となるものと思われ、色調・胎土・焼成も同じものが多い。204は茶褐色を呈している。210には網代痕を残す。209はS.K10から出土している。202の内面、205の外面に炭化物が付着する。213・217・224は粗い撚糸文を施すものである。胎土に砂粒を含み色調は茶褐色を呈し、201~211とは別のものである。224は粗い撚糸文に縦位の竹管文を施すものである。胎土は緻密で、灰褐色を呈しており、16類と同様の胎土である。焼成は良好である。

15類 (第37図214・215・220~223、図版25) 粗い半截竹管文を施文するものである。いずれも胎土は緻密で砂の混入は少ない。色調は灰褐色を呈し、焼成は良いものである。竹管の深さが浅く文様が明確に認められないものである。212は波状口縁を呈する深鉢の口縁部と考えられる。爪形文は深く施文されている。9類・11類に胎土・焼成・色調など類似する。

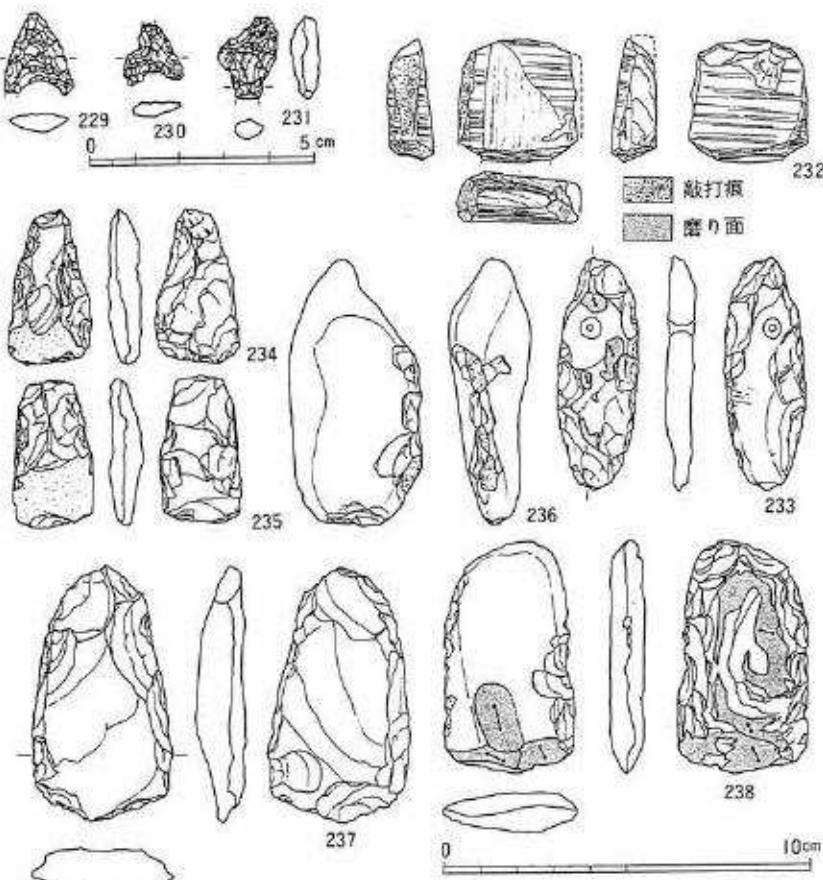
16類（第37図219・220・223、図版25） 幅広の竹管文を施文するものである。色調は茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。

17類（第37図218、図版25） S字状に沈線をめぐらし、隆帶には椭状工具による刻目を縦位に施すものである。胎土は緻密で外面は茶褐色、内面は黒褐色を呈している。

18類（第37図221・222・225～228、図版25） 無文のものをこの類とした。底部のほとんどがこれで、内・外面とも撫でられている。底部に近くなるにつれて、強い指頭圧痕がのこる。227・228には網代痕が残る。225はSK11から出土した。

b) 石器（第39図～43図、図版26～図版28）

石器は59点出土している。小型磨製石斧を含めた磨製石斧未成品が13点、貝殻状の剥片が11点、礫石錘が8点、その他、磨石・打製石斧・凹石・磨製石斧・鐸・砥石・敲石・石皿・石錐・垂飾・块状耳飾未成品となる。磨製石斧未成品の点数は、本遺跡の出土石器の21.9%を占める。また、磨製石斧の石材となる蛇紋岩、流紋岩、結晶片岩の石核および小剥片が20数点出土している。これらは、グリッド27～29・T～Vに集中して出土しているが、遺構と関係しているものは少ない。その中で、グリッド28Uと29UにかかるSK40から出土している小型石斧2点と



第38図 三屋原B遺跡出土石器(1) 229～231 S=34%, 232～238 S=3%

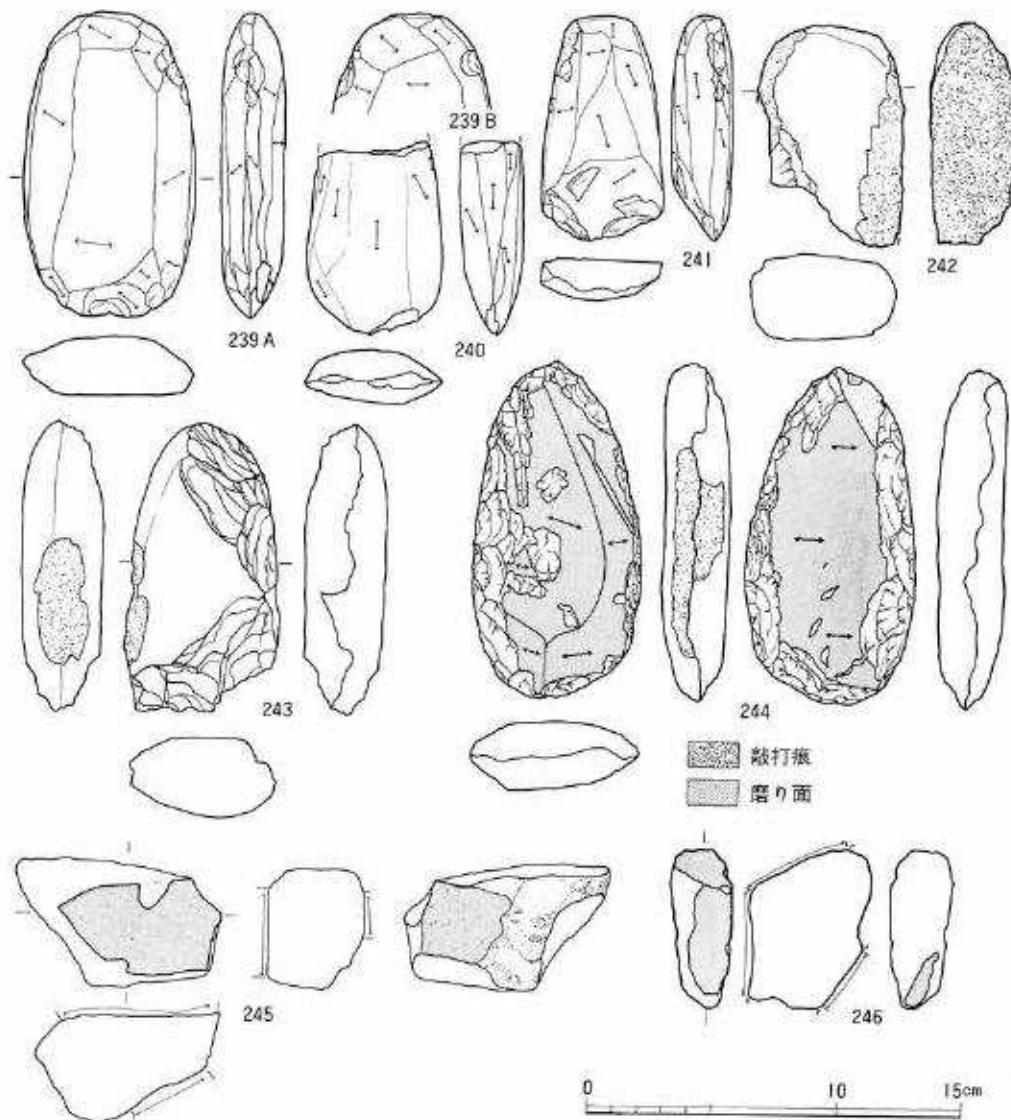
それと同石質の小剥片10数点が注目される。

石鎌 (第39図229~230, 図版26) 基部に抉りをもつ無茎石鎌が2点出土している。

229は一部欠損している。石質は頁岩で、裏面に主要剝離面をわずかに残すが、小さな剝離のくり返しで全体が仕上げられている。

230は先端部が欠損している。石質は黒曜石で、主要剝離面はほとんど残っていない。S X20より出土している。

石錐 (第39図231, 図版26) 1点のみ出土している。錐部は欠損している。つまみをもち、錐部の断面形は菱形を呈す。石質は黒曜石である。裏面に主要剝離面を残し、つまみ部分が厚く加工されている。



第39図 三屋原B遺跡出土石器(2) S = 1/3

块状耳飾（第39図232、図版26） 1点のみであるが、粗削りを経て、整形の工程に入った块状耳飾の未成品と考えられる。平面形は方形で、最大厚12mmの板状をなす。石質は蛇紋岩である。上端・右側縁部に剥離面、左側縁部に自然面、下端部に擦り切り技法の痕跡が観察できる。整形のための粗い擦痕の方向は、平面形の長軸方向に平行もしくは直交している。

垂飾（第39図233、図版26） 1点のみであるが、仕上げの研磨工程に入る前の垂飾の未成品と考えられる。平面形はカツオブシ形で、厚みの少ないヒスイ系の剝片である。裏面に主要剥離面が大きく残っているが、側縁部からの小さい剝離によって全体が形づくられている。全体の上方、やや左よりに、正・裏両面から穿孔がなされ、一部正面に研磨が施されている段階である。

砥石（第40図245～246、図版26） 2点出土している。いずれも欠損しており、その全容は不明である。

245は、中～細粒砂岩製で、2面の磨り面をもつ。246は、粗粒砂岩製で、3面の磨り面をもつ。

磨製石斧（第39図234～238・第40図239～244、図版26・27） 未成品を含めて16点出土している。そのうち、遺構より出土しているのは3点のみである。石質は、蛇紋岩6点・流紋岩6点・結晶片岩4点の3種類に限られており、扁平な河床礫を利用するものも少なくない。

三屋原遺跡の磨製石斧と同様、最大長・最大幅から、大型磨製石斧、小型磨製石斧の2つに分類できる。

大型磨製石斧は、完形品3点、未成品4点を合わせて7点になる。欠損品を除く完形品の大きさを計ると、完形品2点のそれぞれの最大長は、120.5mmと89.0mmとなり、未成品3点のそれは、98.3～131.5mmの範囲に入る。

239は、平面形を楕円形とする。その両側縁部および頭部の研磨された面は小さく、全体として、凸レンズ形の縦・横断面形を呈している。刃部は両刃で、円刃の刃縁には刃こぼれがある。また、頭部に近い両側縁部には敲打による小さな抉りがある。（239B）

240は、上半部が欠損しており、全体をつかむことはできないが、平面形は頭部に向かってやや幅狭くなる。さらに、両側縁部が研磨されており、定角式磨製石斧の形態をなす。刃部は239同様平面形は円刃で、刃部断面は両刃である。刃こぼれが観察できる。

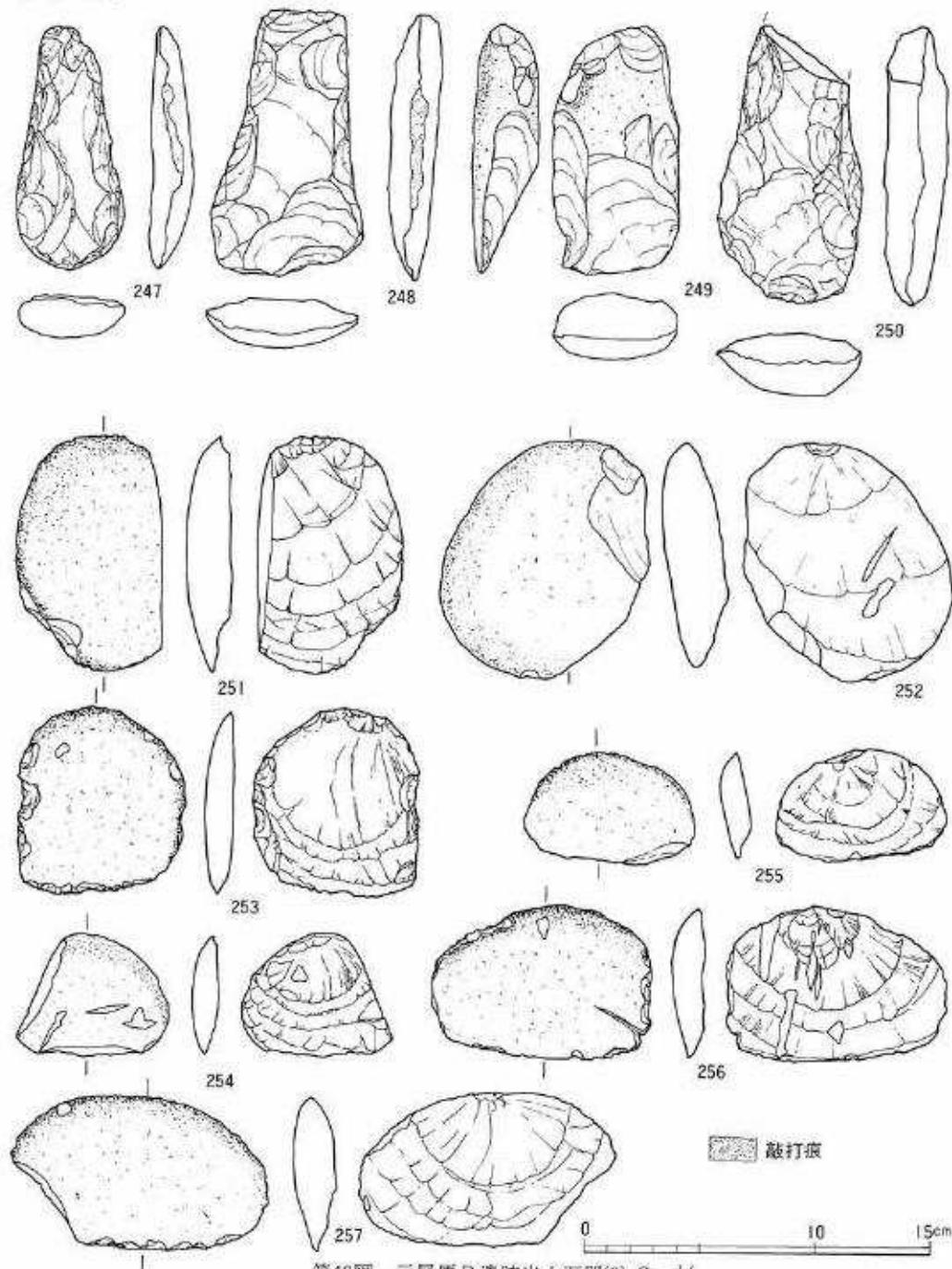
241も、頭部、両側縁部が研磨されており、定角式磨製石斧の形態をなす。刃部は片刃であるが、再調整の跡がうかがえる。

未成品からは、磨製石斧のおおまかな製作過程が考えられる。

すなわち、243は扁平な河床礫を素材としているが、打撃による大きな剝離面と敲打痕が観察できる。

242は欠損しており、その全体をつかむことはできないが、扁平な河床礫を素材とし、その両側縁部に細かい連続した敲打痕が観察できる。単に敲石の疑いもある。S X15(風倒木林)から出土している。

244は、自然面（＝河床礫の表面にみられる自然に磨かれた面）を裏面頭部にわずかに残すだけで、加工が進んでいる。すなわち、周縁部に連続した敲打痕を残して、正・裏両面に広い研磨された面が観察できる。これは、大小の打撃によって石斧の概形が作られた後、重なった剥離面の凹凸をとるための研磨工程に入った段階と考えられる。研磨の方向は、石斧の長軸方向に直交している。



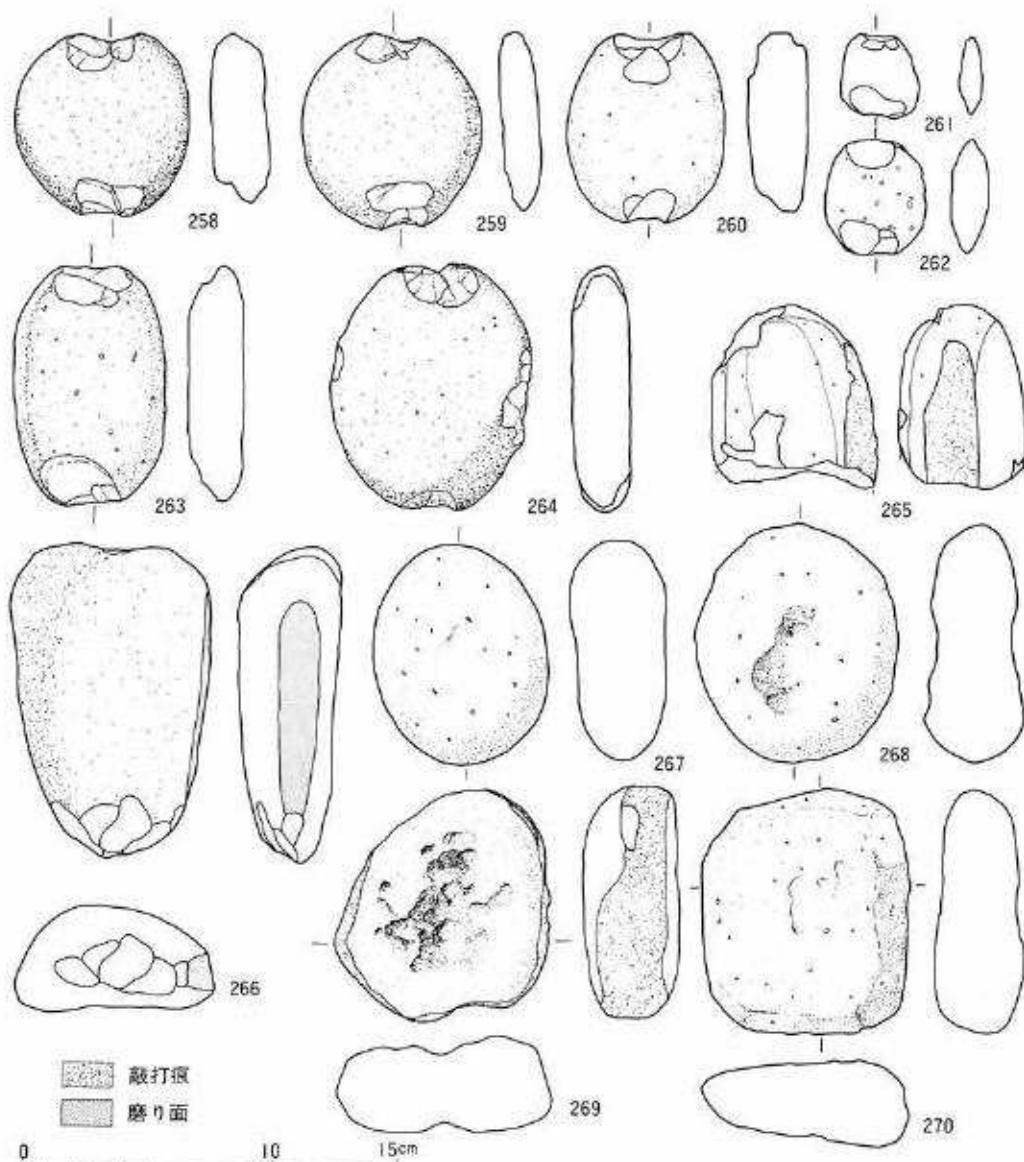
第40図 三屋原B遺跡出土石器(3) S = $\frac{1}{3}$

小型磨製石斧は未成品のみ9点出土している。最大長は39.0~70.8mmの範囲に入る。正・裏両面に自然面を残し、1個の河床礫をそのまま利用して加工しているものが2点、片面に自然面を残しているものが5点、そして、全く自然面を残さないものが2点である。

236はまだ河床礫1個の姿を残している。不整形な礫であり、側縁部に剥離面と敲打痕が観察できる。

237は細かい連続した敲打によって全体の形が仕上げられている。研磨の工程には入っていない。234・235もわずかに自然面を残しているが、この段階にある。SK40から出土している。

238は扁平な河床礫の両側縁部および裏面を敲打によって整形し、自然面のある正面および敲



第41図 三屋原B遺跡出土石器(4) S=1/2

打痕のある裏面を研磨している段階にある。さらに、正・裏両面からの研磨によって刃部を作り始めている。

以上の磨製石斧の素材となった、蛇紋岩・流紋岩・結晶片岩の扁平河床礫は、①青色、緑色などの鮮やかな色調をもつこと。②一定方向の節理が発達しており、打撃による剥離の方向がある程度予想がつくこと。さらに、扁平河床礫の長軸方向は、剥離方向とはほぼ一致し、すでに石斧の概形に近いこと。③研磨することによって容易に滑らかな面ができるなどの性質がある。

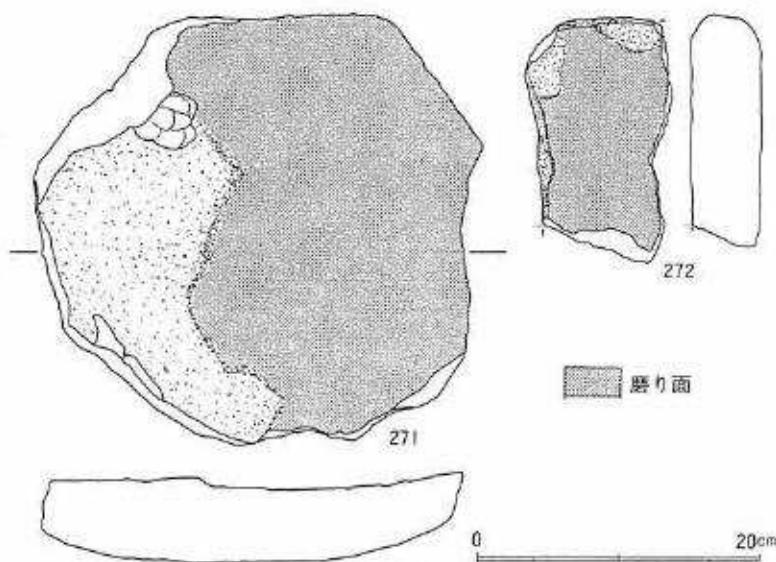
全く加工はされていないが、以上のように限定された石質で、磨製石斧完形品と同様の大きさである扁平な河床礫が6点出土している。

打製石斧（第41図247～250、図版27） 4点出土している。最大長は105.9～116.6mmの範囲にまとまるが、重量は89.0～220.0gと幅がある。石質は、砂岩2点・玄武岩・安山岩各1点で、角のそれた河床礫を素材としている。

247・248・250の3点は、片面に自然面をもったものである。ただし、247・248の両側縁部は細かい敲打によって整形されており、全体として撥形を呈している。また、とくに247は、側面からみると大きく湾曲している。248の刃部は、自然面のある面を剥離調整し、作り出されている。

249は扁平礫を素材としているが、その刃部は大きな剥離面で形づくられている。刃縁は磨耗されており、調整の様子は詳しく観察できない。

剝片（第41図251～257、図版27） 貝殻状の剝片は19点出土している。ただし、遺構より出土しているのは1点のみである。石質は、砂岩・泥岩・頁岩が主で、他は玄武岩、玢岩が各1点である。



三屋原遺跡出土の貝殻状の剝片と同様に最大長と最大幅を計測した。その結果いわゆる「横型剝片」が12点、もう一方の「縦型剝片」が7点を数える。最大厚はやはりおよそ10~20mmの範囲に集中している。

これらの剝片のうち、打点から遠い下端部や側縁部に、二次加工の刃部をもつものや、剝離調整にはよらない磨耗部をもつものがある。刃部調整のある剝片石器は、253・255・257をはじめとして4点、磨耗部をもち使用された可能性をもつ剝片石器は、251・252・254・256をはじめとして7点を数える。

礫石錐（第42図258~264、図版28） 8点出土している。円磨された扁平な河床礫を素材とし、その石質は、安山岩5点・玢岩2点・砂岩2点となる。素材を生かし、その長軸方向の両端に打撃を加えて抉りをつけただけであり、その大きさは、最大長およそ70~100mm、最大幅およそ60~80mm、最大厚20mm前後の範囲に集中する。最大長50mm以下の小型のものもみられるが、概して、扁平で、平面形は円形もしくは橢円形を呈している。重量は13.5~240.0gと幅がある。

両端の抉りは、礫石錐の長軸方向に紐状のものを巻きつけるためのものと考えられるが、264は4か所に抉りをもち、十字に紐状のものを巻きつけたことがうかがえる。

263を除くすべてに、正・裏両面の両端に剝離面をもって抉りをなすが、そこに敲打を重ねたり、使用で磨耗されたりして、丸みを帯びた抉りも少なくない。

凹石（第41図267~270、図版28） 角のとれた扁平な河床礫にくぼみをもつ凹石が4点出土している。最大長は86.4~96.8mm、重量は310.0~390.0gの範囲に入る。269は泥岩であるが、他の石質は安山岩である。

267・270は、正・裏両面のほぼ中央にくぼみをもつが、深さ1~2mmほどの浅く磨りくぼんた程度のものである。

268・269は、正・裏両面のほぼ中央に敲打で抉られたくぼみをもつ。深さは3~6mmほどである。268は、正面に2、裏面に1、269は、正・裏両面に2つずつ複数のくぼみをもつ。

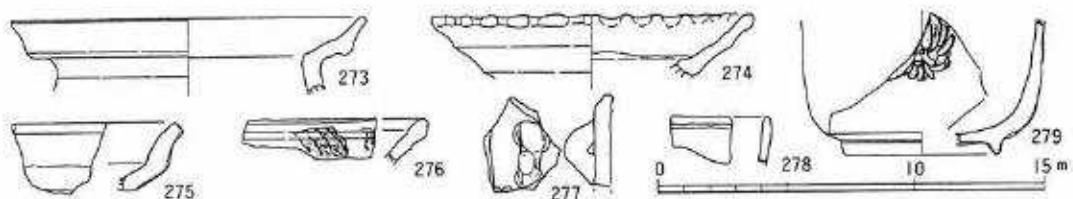
また、267・268の周縁部には局部的に小さな磨り面が観察できる。そして、多角形の平面形をもつ269・270の周縁部には敲打痕が観察できる。

第4表 三屋原B遺跡出土石器観察表(1)

No.	器種	種類	注記No.	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	出土区	土層
229	石錐	欠損	224	18.0	15.0	4.7	1.0	真岩	S X 20	覆土
230	石錐	欠損	2	12.9	13.5	4.0	0.5	黒曜石	28 U 10	II
231	石錐	欠損	23	18.7	13.2	6.4	1.3	黒曜石	28 V 3	II
232	块狀耳飾	未成品	165	32.3	33.0	12.0	21.1	蛇紋岩	27 U 9	II
233	垂飾	未成品	171	61.5	21.2	6.9	11.6	ヒスイ	27 S 25	II
234	磨製石斧	未成品	222	39.7	23.7	8.9	8.9	流紋岩	S K 36	覆土
235	磨製石斧	未成品	222	39.0	21.0	9.1	8.7	流紋岩	S K 36	覆土

第5表 三屋原B遺跡出土石器観察表(2)

No	器種	注記No	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	出土区	土層	
236	磨製石斧	未成品	139	70.6	34.8	21.5	70.0	蛇紋岩	29V11	II
237	磨製石斧	未成品	61	67.2	37.0	13.5	47.0	片岩	29V16	II
238	磨製石斧	未成品	81	60.5	34.9	9.4	32.5	流紋岩	29U19	II
239	磨製石斧		66	120.5	68.6	25.7	260.0	蛇紋岩	29V12	II
240	磨製石斧	欠損	233	80.0	54.6	26.2	172.0	蛇紋岩	27T10	II
241	磨製石斧		215	89.0	48.0	24.7	160.0	蛇紋岩	27T25	II
242	磨製石斧	未成品欠損	230	188.1	55.5	34.9	250.0	流紋岩	28U13	II
243	磨製石斧	未成品	123	114.8	60.8	32.4	325.0	蛇紋岩	28V23	II
244	磨製石斧	未成品	44	131.5	66.0	26.4	385.0	蛇紋岩	28W11	II
245	砥石	欠損	304	50.5	46.3	21.6	54.0	砂岩	27V8	II
246	砥石	欠損	43	59.7	45.0	23.3	82.0	砂岩	27W10	II
247	打製石斧		8	105.9	45.5	14.3	90.0	玄武岩	28V-3	表採
248	打製石斧		326	114.8	65.5	21.4	182.0	砂岩	—	表採
249	打製石斧		123	107.9	54.2	30.1	205.0	安山岩	28V23	II
250	打製石斧	欠損	64	116.6	61.2	27.0	220.0	砂岩	27V5	II
251	剥片		126	105.0	63.2	20.3	162.0	砂岩	28V17	II
252	剥片		165	95.5	86.5	24.9	275.0	泥岩	27U9	II
253	剥片	—	79.6	69.8	31.5	95.0	頁岩	—	表採	
254	剥片		163	54.0	66.4	11.8	45.5	泥岩	27T25	II
255	剥片		306	51.5	80.5	16.6	74.0	砂岩	—	表採
256	剥片		284	67.8	95.6	15.3	112.0	砂岩	27U8	II
257	剥片		170	67.5	112.3	18.2	139.0	砂岩	28S21	II
258	礫石錐		51	77.8	69.0	23.8	173.0	砂岩	28W13	II
259	礫石錐		159	78.0	71.5	19.0	137.5	砂岩	28T11	II
260	礫石錐		67	75.0	62.5	24.3	168.0	安山岩	30V10	II
261	礫石錐		88	34.0	31.0	9.8	13.5	安山岩	30U17	II
262	礫石錐		66	45.5	40.0	15.2	39.0	安山岩	29V12	II
263	礫石錐		138	94.5	61.0	22.0	203.0	安山岩	28V3	II
264	礫石錐		138	98.0	79.5	73.0	240.0	安山岩	28V3	II
265	敲石	欠損	3	73.0	66.0	51.0	280.0	花崗岩	28T20	II
266	磨石		237	125.0	79.0	42.0	555.0	安山岩	28T1	II
267	凹石		270	86.4	69.0	38.5	310.0	安山岩	28W11	II
268	凹石		249	96.0	81.0	43.0	360.0	安山岩	28W21	II
269	凹石		237	87.7	87.0	37.5	360.0	泥岩	28T1	II
270	凹石		263	96.8	82.6	36.6	390.0	安山岩	27N19	II
271	石皿		218	523.0	498.0	60.0	7500.0	安山岩	27V13	II
272	石皿	欠損	153	169.2	104.5	49.8	1520.0	安山岩	27U4	II



第43図 三屋原B遺跡出土近世陶磁器ほか

敲石・磨石（第41図265・266、図版28） 敲石が2点、磨石が5点出土している。円磨された扁平の河床礫を素材とし、37の花崗岩を除く他の6点は安山岩からなる。

敲石の266は、大きく欠損しており、その全体をつかむことはできないが、側縁部に細かい連続した敲打痕が観察できる。他の1点は、平面形が楕円形で、先端部に敲打痕をもつ。

磨石の265は、最大長125.0mm、重量555.0gを計る。平面形は楕円形をなし、その一方の側縁部に細長い磨り面が観察できる。他の4点は、最大長87.0～125.2mm、重量340.0～820.0gの範囲に入る。平面形は楕円形で、周縁部には局部的に小さな磨り面をもつ。

石皿（第42図271・272、図版29）2点出土している。271は八角形で厚さ7cmほどの板状を呈している。片面には磨り痕が認められるほか、幅2cmの浅い溝状のくぼみが10～13条認められる。そのほかに正面には石の節理により段をなしている。裏面は滑らかな自然面を残している。縁辺は打ち割りにより八角形となっている。272は直方体を呈した自然石の片面を磨り面としているものである。ほとんどを欠損し、全体の器形は不明である。わずかに磨り面を有するもので典型的な石皿とは異なり、砥石などの機能も考えられる。

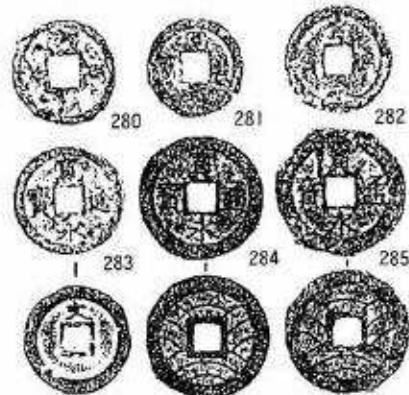
c) 近世陶磁器ほかの遺物（第43図、図版29）

縄文時代以外の土器には、弥生土器甕1、越中瀬戸焼皿1、唐津焼鉢2、瀬戸焼壺1、染付碗2がある。いずれも南側の平坦面の旧水田耕作地から出土している。

273は二重口縁の甕の口縁部である。頸部はすばまり段をなしたのち口縁部は外反する。端部はやや角ばる。体部内面はヘラ状工具で撫でられている。暗褐色を呈し、胎土は緻密である。外面にススが付着する。口径14.0cm。弥生時代末から古墳時代初頭の所産と考えられる。周辺に弥生時代後期の玉作り遺跡である後生山遺跡などが存在し、本遺跡周辺に当該期の遺跡の存在が想定される資料である。

274は越中瀬戸系胸器の皿である。底部は欠損していて不明である。口縁部は指によるつまみ上げにより細かい波状口縁を呈している。外面および内面のほとんどに鐵釉がかかる。胎土は明茶褐色を呈している。口径11.0cmを測る。275・276は唐津焼の鉢の口縁部である。内外面とも淡灰緑色の釉がかかる。

275は体部途中でやや屈曲したのち外反する口縁と



第44図 三屋原B遺跡出土銭貨 S=%

なり、端部は外ソギ状で断面方形を呈する。276は口縁端部が肥厚しておわるものである。胎土は暗灰色を呈している。内面には茶褐色のハケ状工具による文様が認められる。どちらも小片のため口径は不明である。277は瀬戸焼の壺か鉢の把手部分である。白っぽいきめの細かい胎土で焼成は良好で、外面には濃緑色の釉がかかる。278・279は染付碗の小片である。278は口縁部に二条の線が、279は体部中央に花文状の文様が施され、底部外面には圈文がめぐる。どちらもくすんだ淡青色の呉須色で、器表面は青灰色を呈している。胎土は白灰色を呈する。いずれも江戸時代後期の所産と考えられる。

d) 銭貨 (第44図、図版29)

寛永通宝8点が出土し、判別できるもの6点を図示する。280～283は、尾根先端部、東側斜面の28Nの焼土集中地区より出土する。寛文8年(1668)以降に鋳造された新寛永で、283の裏面に「文」の字がみられる。径2.2～2.4cmを測る一文銭である。284～285は、新寛永の正字(11波)で、明和6年(1769)以降に鋳造されたものである。径2.8cmを測る四文銭である。いずれも銅製である。

5. 小結

三屋原B遺跡は、開墾による削平で平坦面が形成されており、旧地形とはかなりの相違をみせていたことが確認された。以下、数は少ないが、遺構・遺物について略記する。

遺構は、削平のため、掘り込みの深いものの底面がわざかに確認されたにすぎない。いずれも尾根の中央部に集中する傾向が認められた。住居跡3棟・土坑14基・溝2条・風倒木痕11基である。住居跡3基は隅丸方形を呈するものである。遺物の出土した遺構が少なく、年代についてははっきりしないが、わずかに出土した遺物から、S I 17は縄文時代中期と考えられる。ほかの土坑や溝は配置に規則性が認められず、性格は不明である。

遺物は削平を受けた地区ではあまり検出されず、主に北西斜面から多く出土している。土器と石器の出土量は、ほぼ1：5で石器が多い。土器の1類は縄文時代前期の田戸上層式に類似し、2類は前期の諸磯b式と考えられ、また3・4・6類は胎土に纖維を混入することから、縄文時代前期の所産であろう。5類は朝日下層式に比定される。なお5類・8類などは石川県真鶴遺跡(高橋ほか1986)などの類例から縄文時代前期末葉のものと考えられる。土器の主体を占める7～17類の竹管文・蓮華文・B字状文は石川県徳前C遺跡(西野ほか1983)・新潟県タテ遺跡(高橋ほか1985)などから新崎式に類例があり、縄文時代中期前葉のものである。

石器は多くの種類が出土している。なかでも磨製石斧および未成品が多く出土しており、製作工程の復元が可能である。大型の磨製石斧は完成時の大きさを意識して、拳大の河床礫を素材とし、縁辺に剥離・敲打を加えて整形し、その後研磨している。小型の磨製石斧については剥片を使用し、剥離を加え、研磨している。大型品・小型品とも石斧は橢円形もしくは刃部の幅が広い撥形を呈するもので、断面は凸レンズ状を呈している。また、緑色系の石を使用した装身具は長さ8cm・幅3cmほどの河床礫を直接研磨しているものが認められた。

第VI章 塚ノ越遺跡

1. 地形と層序（第5図・第45図）

遺跡の存在する地形面は西に緩やかに傾斜し、調査区西隅には小さな沢が入り込んでいる。遺跡の現状は畠地であり、耕作により包含層がかなりの範囲で削平や攪乱を受けたものと考えられる。

基本土層は表土下すぐに褐色粘質土の地山となり、沢の部分では地山まで深さ50cm~1mを測る。土層は沢部で3層となる。I層表土、II層黒色土層一部に暗褐色砂質土層、III層褐色粘質土（地山）である。遺物は確認調査時に、II層から土器の小片が数点出土した。破片が小さく、縄文土器か否かは明確ではない。他に沢のII層中から石器が出土している。

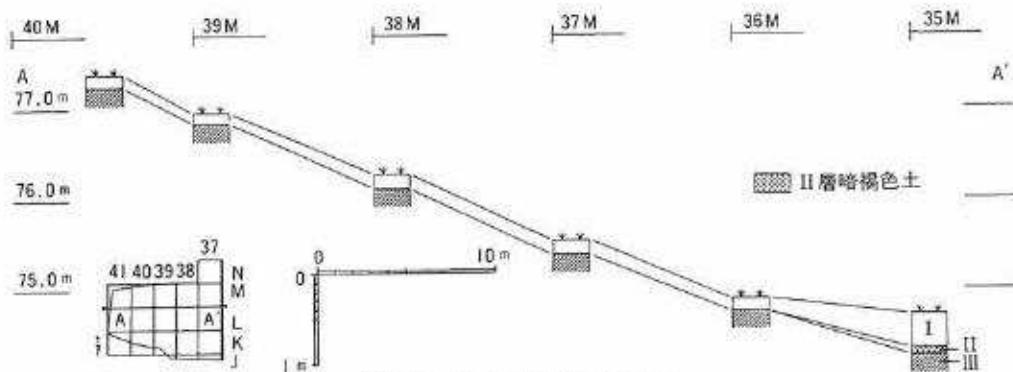
2. グリッドの設定（第46図）

グリッドは三屋原遺跡の項で詳細に述べたが、10m×10mの大グリッドは、37~42、J~Nまでが含まれる。調査区は台形を呈している。10m×10mの中に2m×2mの小グリッドを25個設定し、北西隅の1から各小グリッドは東へ1・2…5、南へ6・11・16・21とし南東隅の25までとした。各グリッドは南東隅の杭を呼び、小グリッドまで呼ぶときは37M 1区などと呼称する。

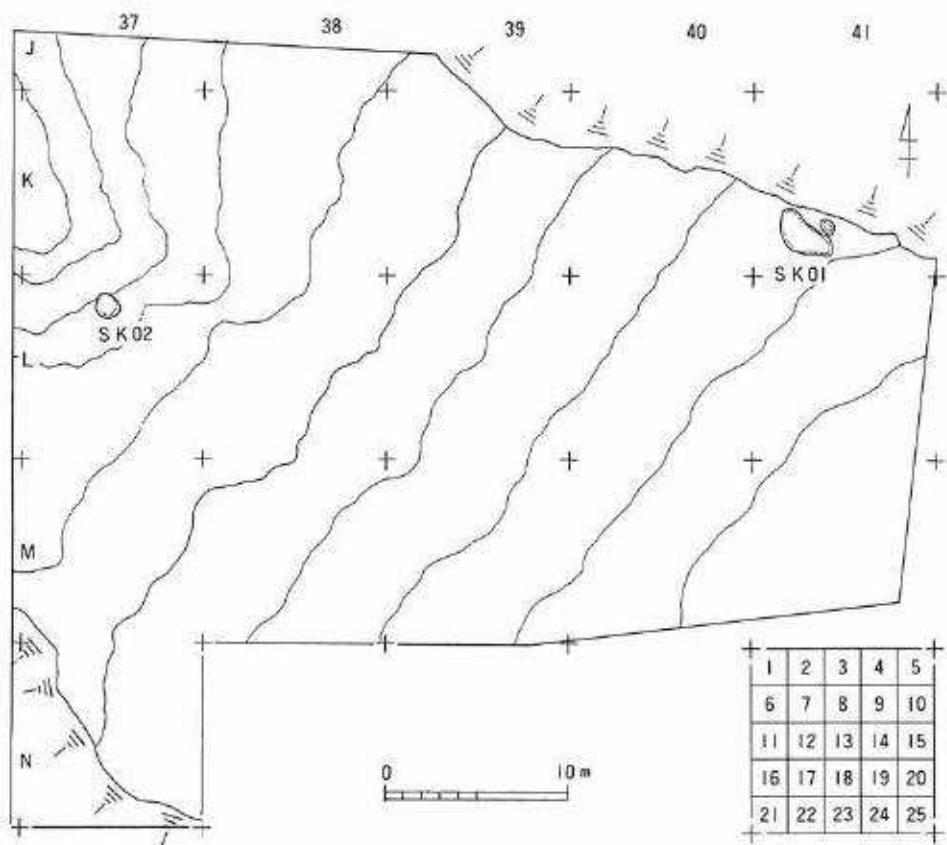
3. 遺構（第47・第48図、図版30）

検出された遺構は土坑が2基である。遺物を伴なっておらず所属する時期、性格は不明である。土坑は調査区の東側と西側の小さな沢の肩口に検出された。

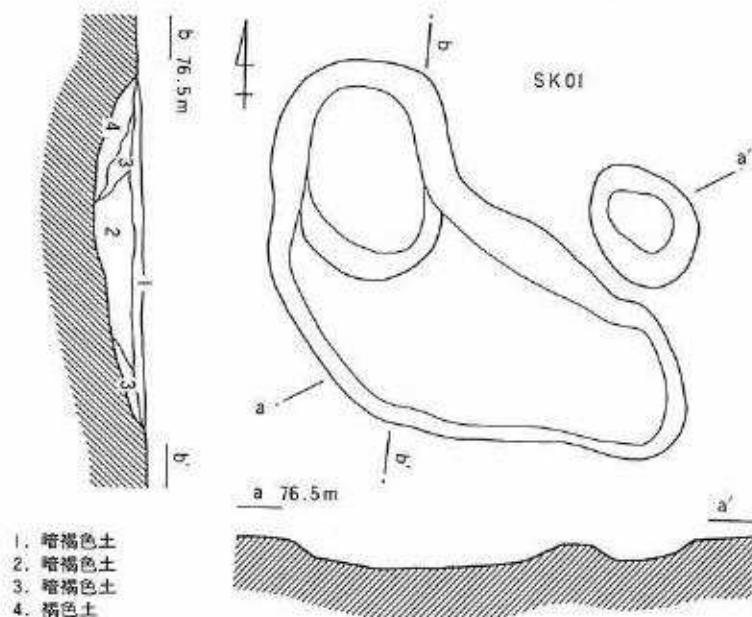
SK01（第48図、図版30） 長軸3.5m・短軸1.6mを測る。長楕円形の土坑である。北側の底面は深さ約0.5mと深く、底面はへこんでいる。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は4層に分けられる。1層は耕作土の残ったものと考えられ、2・3層は暗褐色土で、レンズ状の堆積を呈している。



第45図 塚ノ越遺跡土層柱状図



第46図 塚ノ越遺跡遺構全体図



第47図 塚ノ越遺跡土坑平面図

SK02 (第49図) 発掘区の西側37L3区に位置している。沢の肩口にあり、北に緩く傾く斜面上にある。径1.2mほどの不整円形を呈し、深さ10cmほどで、底面は平らで、北側にわずかに傾斜している。覆土は暗褐色土の単層である。底面は軟質である。

4. 遺物 (第49図、図版30)

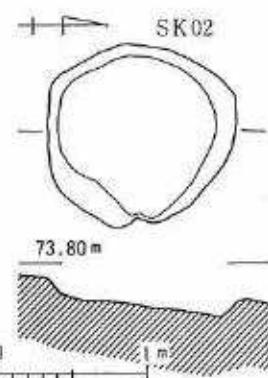
遺物は石器と土器片である。土器は細片化しており、年代、器種などは不明である。

石器も少なく、剥片石器・礫石錐・石皿が各1点ずつ出土するのみである。主に、遺物包含層の残る36ライン以西のグリッドで出土している。いずれも遺構とは関係していない。

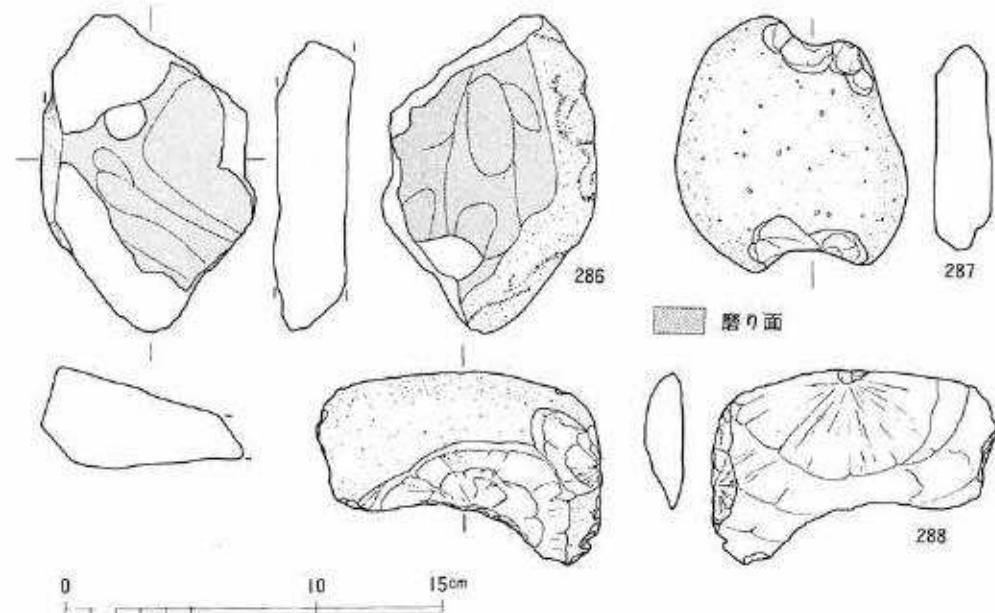
剥片石器 (第49図 288、図版30) 円磨された河床碟から打撃によって得た剥片を二次加工している。すなわち、主要剥離面の裏面に逆方向から打撃を加え、さらに細かい調整で刃部を作り出している。石質は玄武岩である。

礫石錐 (第49図 287、図版30) 円磨された扁平な河床碟を素材とする。その長軸方向の両端部に打撃を加え、抉りを作り出しているが、抉り部分は磨耗している。石質は安山岩である。

石皿 (第49図 286、図版30) 欠損が大きく、全体をつかむことはできないが、正・裏両面に磨り面が観察でき、それは中央に向かって傾斜している。石質は中粒砂岩である。



第48図 塚ノ越遺跡土坑平面図



第49図 塚ノ越遺跡出土石器 S = 1/3

5. 小結

塚ノ越遺跡は、西に緩やかに下る斜面上にあり、耕作によりかなり削平を受けていた。遺構は土坑が2基検出されたのみである。遺物量も少なく、遺構・遺物の時期・性格を確定できない。

第6表 塚ノ越遺跡出土石器観察表

No.	分類	注記No.	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	出土区	土層
288	剥片石器	3	77.0	113.2	18.0	159.8	玄武岩	36N 4	I
287	礫石錐	4	101.8	92.7	24.0	300.0	安山岩	36L 25	II
286	石皿	欠損	125.4	85.1	40.2	410.0	砂岩	36O 25	II



遺跡遠景

第VII章 四割・杉沢遺跡

1. 立地と層序 (第51・52図)

調査区は縄文時代早期から晩期にわたる長者ヶ原遺跡が立地する段丘と同一段丘上の先端にあり、長者ヶ原遺跡の北辺から約50m北方に位置している。段丘は幅約70mほどで南北にのびる尾根状を呈して、標高は60mから70mの間にある。調査区のほぼ中央には幅約12m、深さ約3mほどの沢があり、これにより2つの尾根に分けられている。基本層序は東側の尾根上の土層と沢部の土層の検討から尾根部のものとした。尾根部では5層に分層された。I層表土、II層褐色土層、III層暗褐色土層、IV層褐色砂質土層、V層黄褐色粘質土であり、遺物包含層はII層・III層・IV層である。V層は地山層である。沢部(5F区)においては地山層を含めて4層となる。このうち上層の1層は尾根部のI層・II層が混じりあつたものである。以下、2層から尾根のIII層・IV層・V層に各々対応している。なお沢底部のIV層は尾根部に比較して厚く堆積している。また、III層の尾根部に比べて沢部では暗い色調を呈している。IV層からの遺物は沢の底面直上から块状耳飾が出土しているのみである。遺構の中で土坑状の炭窯の一つはII層を掘り込んで構築されている。

2. グリッドの設定 (第51図)

グリッドは道路工事用のセンター杭No380を基準にし、南北に軸線をとり、東西南北に10m×10mのグリッドを設定した。さらに各グリッドを2m×2mの小グリッドに分けた。基準となつたNo380の工事用杭は、グリッドの10Dの南東隅のものである。各グリッドは10Dの基準杭から北へC・B・Aと、南へE・F…J、東へ11・12、西へ9・8…1とし、南北A～M、東西1～11までとした。小グリッドは北西隅の1から南東隅の25までとし、10D25区などと呼称する。

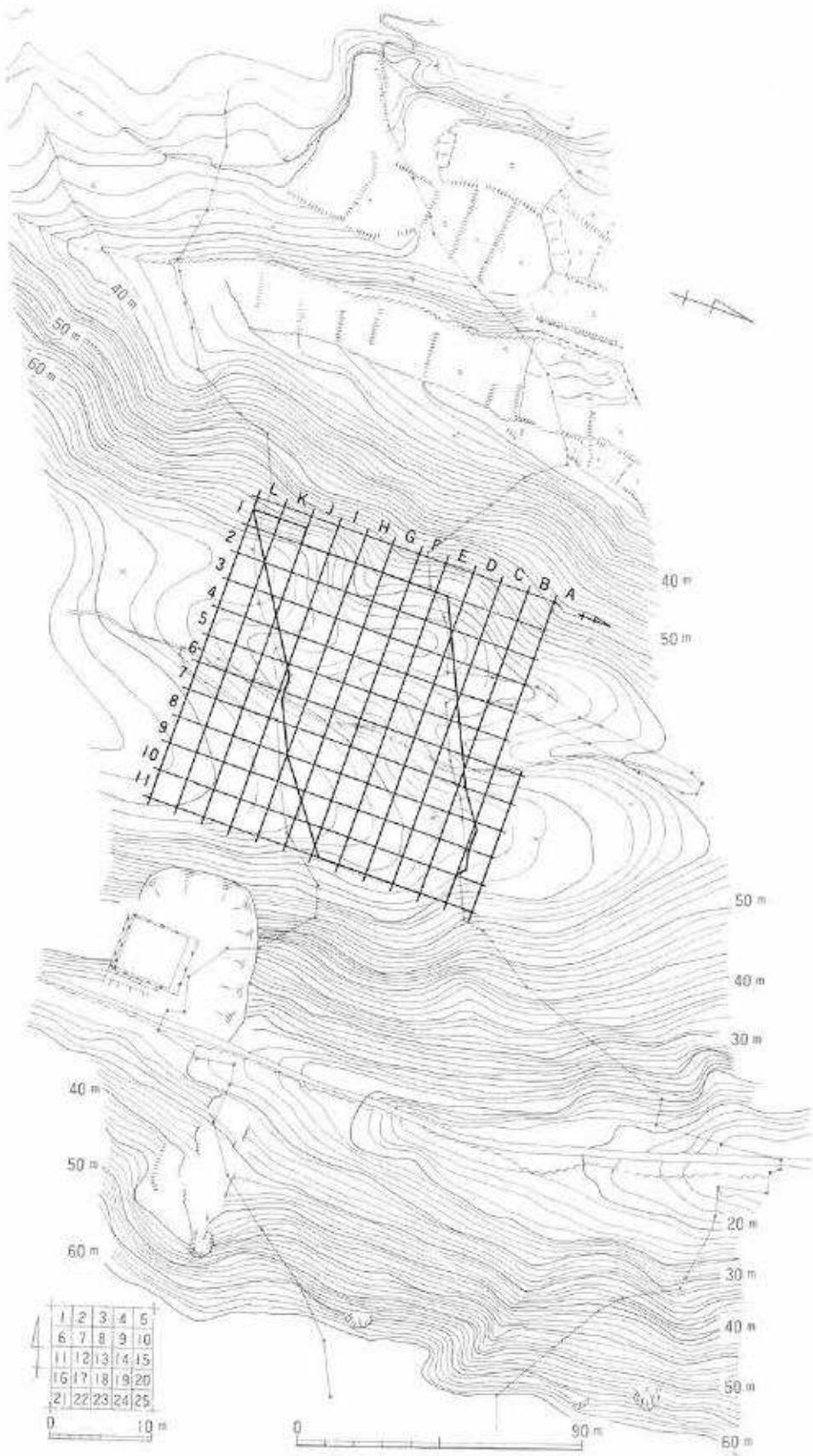
3. 遺構 (第53図)

検出された遺構は土坑1基・溝11条・炭窯12基・道路状遺構2条・廐倒木痕などである。尾根の平坦面には土坑や円形の炭窯・溝があり、斜面や沢の底部には大型の炭窯や道路状遺構が認められる。

a) 土坑 (第54・56図、図版35・図版36)

1基確認されている。調査区の東北隅に近い10C19区に検出された。周辺の地形は北東に緩く傾斜する斜面の平坦面から斜面となる肩口にあたる。

SK03 (第56図、図版36) 平面形は不整の楕円形を呈し、長軸2.0m、短軸1.2m、深さ0.3mを測る。底面はすり鉢状を呈し、壁の立ち上りは緩いものである。覆土は3層に大別される。上

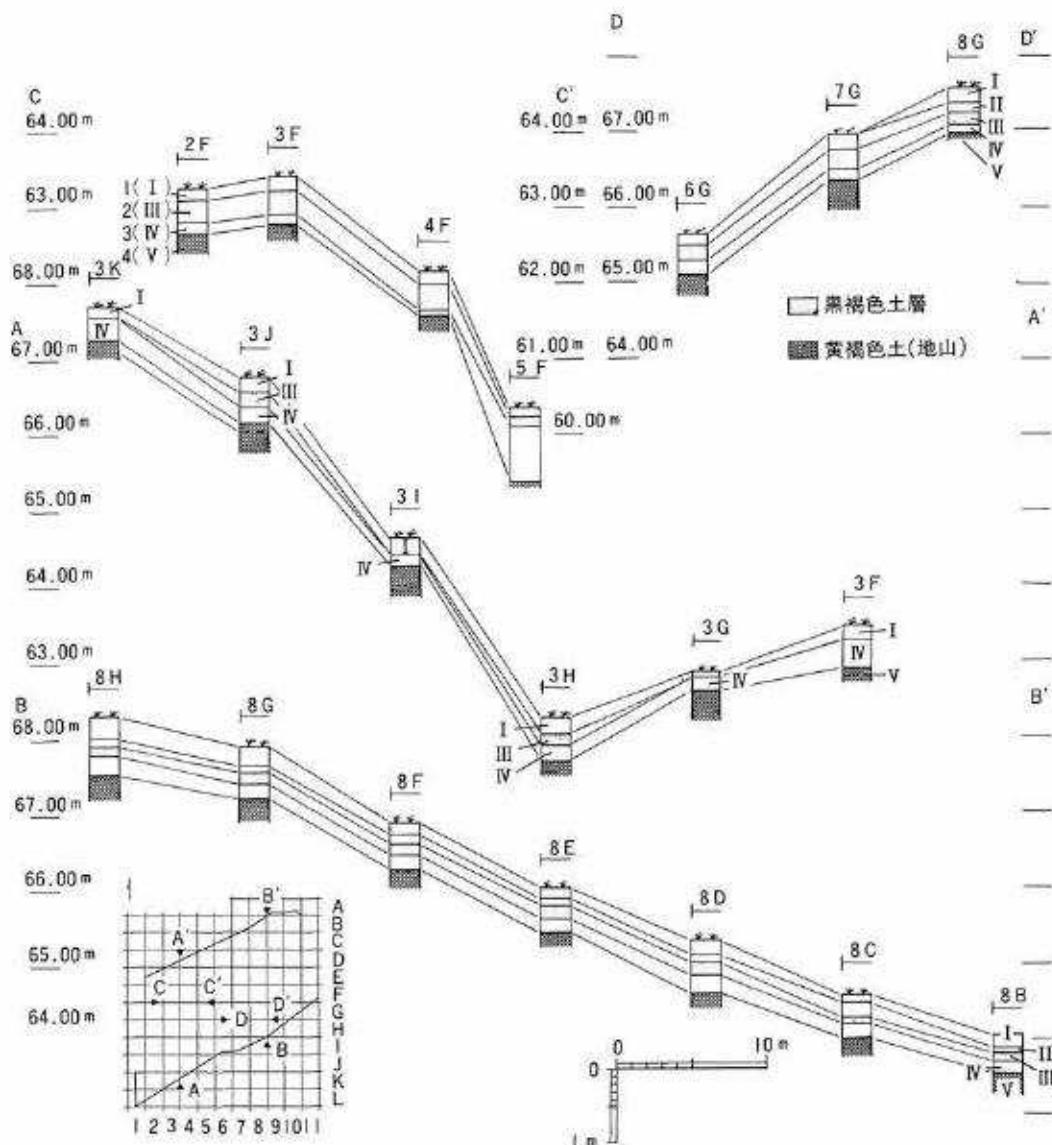


第50図 四割・杉沢遺跡地形およびグリッド設定図

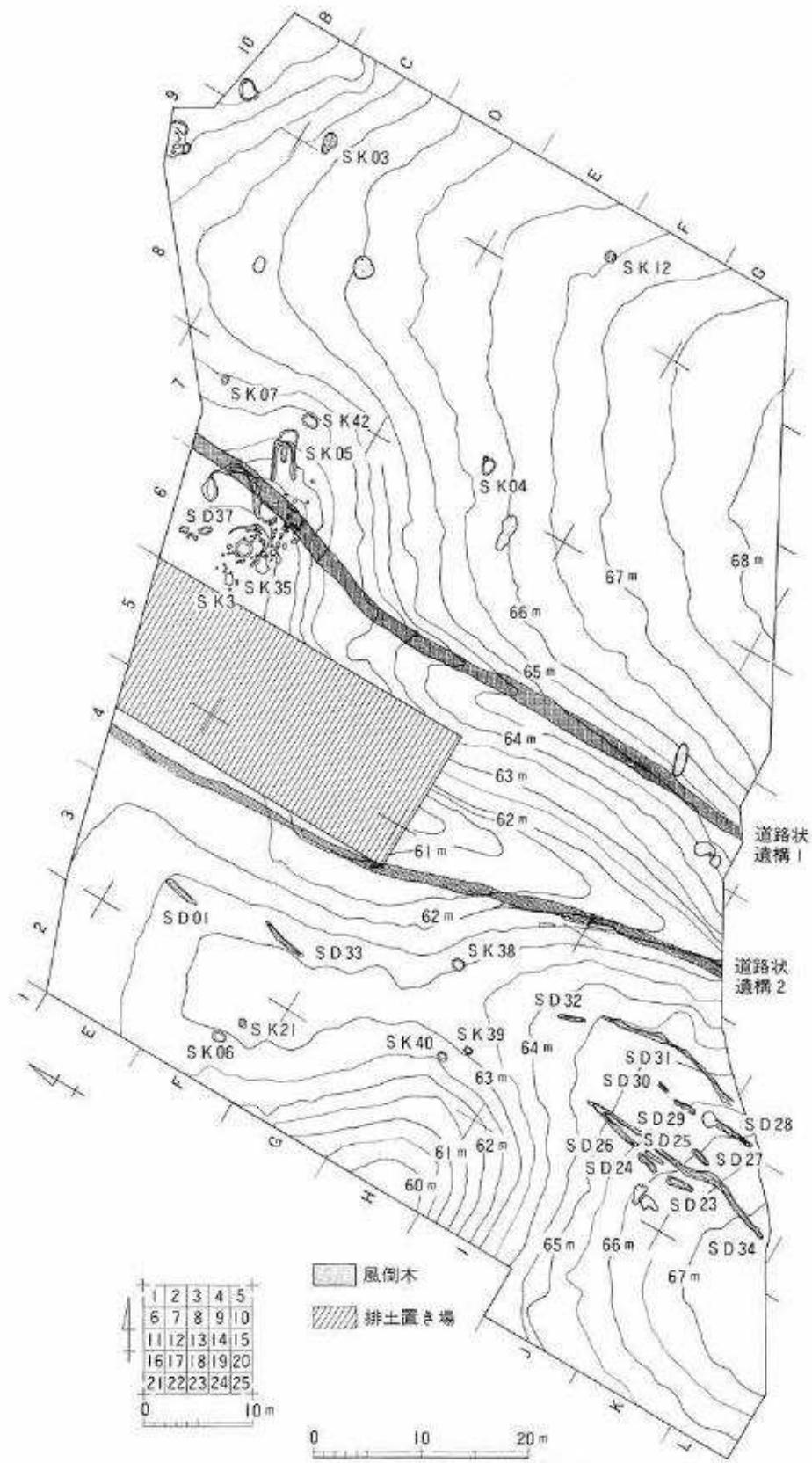
から1層褐色土、2層暗褐色土、3層褐色砂質土である。下層になるにしたがって炭化物粒・焼土粒の混入が多くなる。遺物は縄文土器の破片が2個体分出土している。加曾利E式に類似するもので縄文時代中期後半の年代が想定される。

b) 炭窯 (第53図～第55図、図版33)

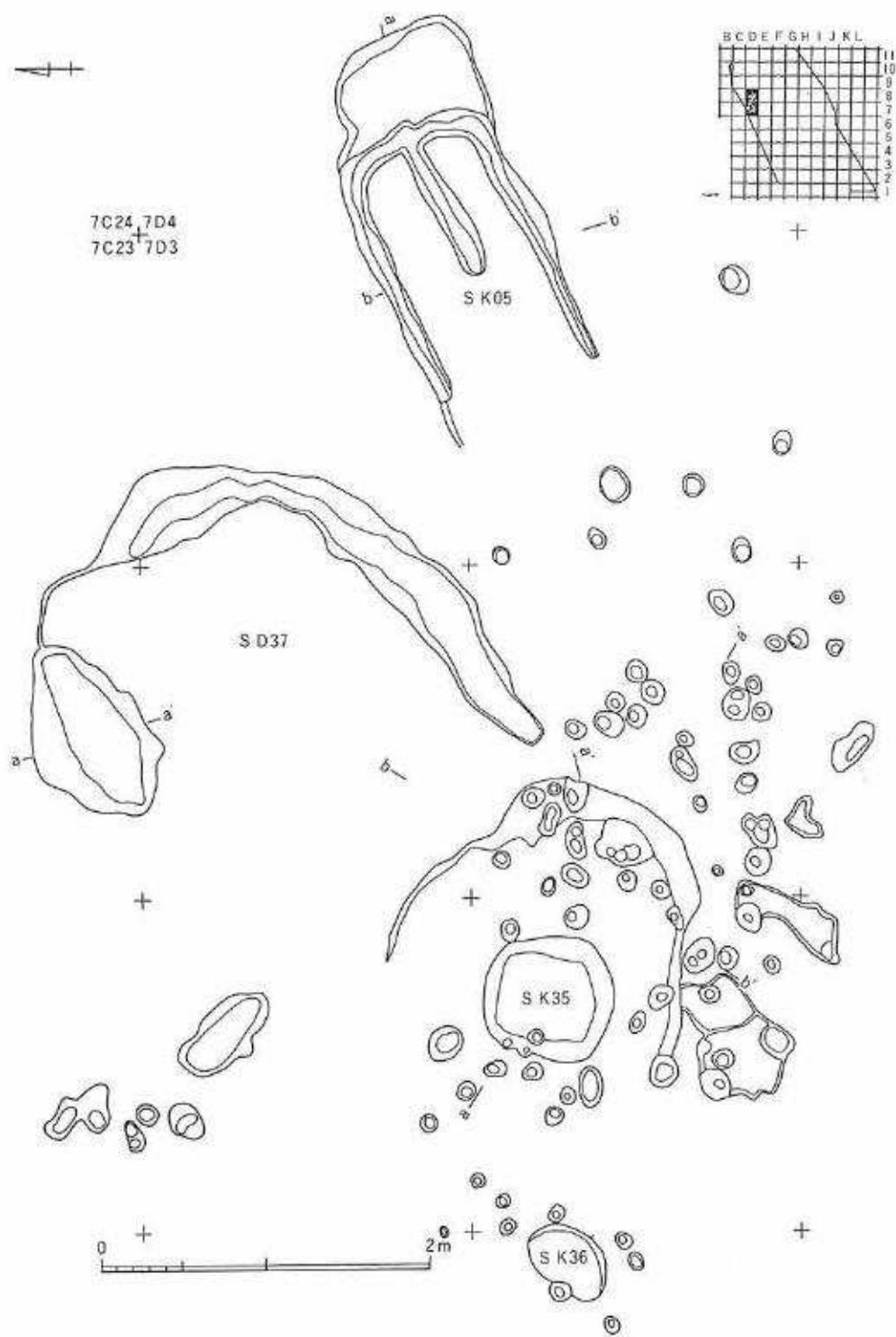
炭窯は計12基検出された。平面形および大小から2種に大別される。A類は幅2m、長さ4m以上の大きなもので、平面形は方形である。須恵器の平窯に類似するものである。B類は竪穴状に掘り下げた土坑で、平面形によりI類方形のもの、II類橿円形のもの、III類円形のもの



第51図 四割・杉沢遺跡土層柱状図



第52図 四割・杉沢遺跡遺構全体図

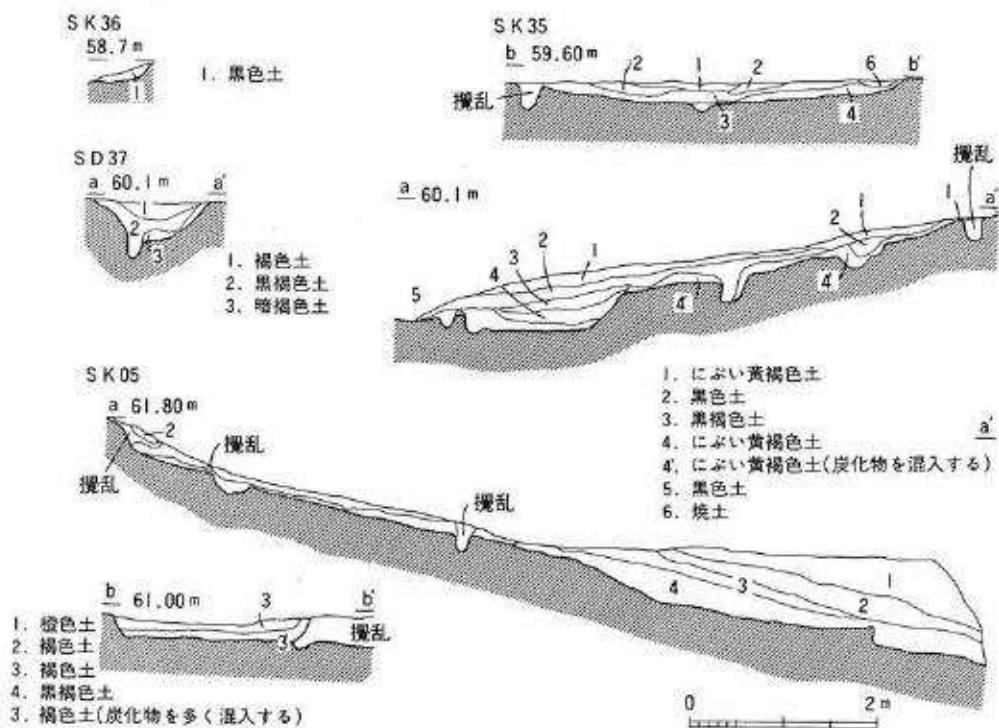


第53図 四割・杉沢遺跡遺構平面図

に分けられる。I～III類は各々に法量に差が認められるが、細分はしていない。以下A類から記述してゆく。

A類 方形で幅2m以上、長さ4m以上のものである。須恵器の平窯と同様な形態を有するものである。

S K05 (第54図・第55図、図版32・図版33) 東尾根の西斜面4B13区周辺で検出された。主軸はN 80°Wを測る。長軸3.84m、短軸2.2mを測る。西側は一部斜面に削られており長さはこれよりやや伸びるものと考えられる。調査区中央を南北に走る市道(道路状遺構1)の下に確認された。表土を20cmほど掘り下げた段階で平面形を確認したもので、調査前には凹地状などは確認されていない。覆土は暗褐色土と床面直上の炭化物層である。暗褐色土は斜面に沿ってゆるやかに下り、この上に厚さ50cm以上の1層・2層の盛土がなされ、市道(道路状遺構1)となっている。主軸はほぼ東西方向を向き、斜面の等高線に直交している。平面形は方形で、底面は傾斜に沿ってわずかに西に傾いている。底面の周囲には周溝状に幅15~20cm、深さ10cmほどの溝がまわり、床中央にも長軸方向に溝が掘られている。床面の中央はやや硬化するが、周溝の周辺ではあまり硬化してはいない。溝内には炭化物が多く堆積していた。出土遺物は炭のみで、土器などは出土していない。構築年代は不明である。しかし市道はかなり古くから市街地と長者ヶ原地区を結ぶ道として存在しており、遺構が道のできたときより古いことは土層の堆積状況から理解される。また、炭焼きをしていたという言い伝えは確認できなかった。



第54図 四割・杉沢遺跡遺構土層断面図

B類 (第56図、図版35~36) いわゆる土坑状を呈したもので、壁はいずれも垂直に立ち上がるものである。平面形から、B1類方形のもの、B2類円形のもの、B3類どちらにもならない不定形のものに分けられる。大小が認められるが、今回は分類の基準とはしなかった。

B1類 隅丸方形を呈するもの。SK04・SK06・SK12・SK35・SK38・SK39・SK42である。

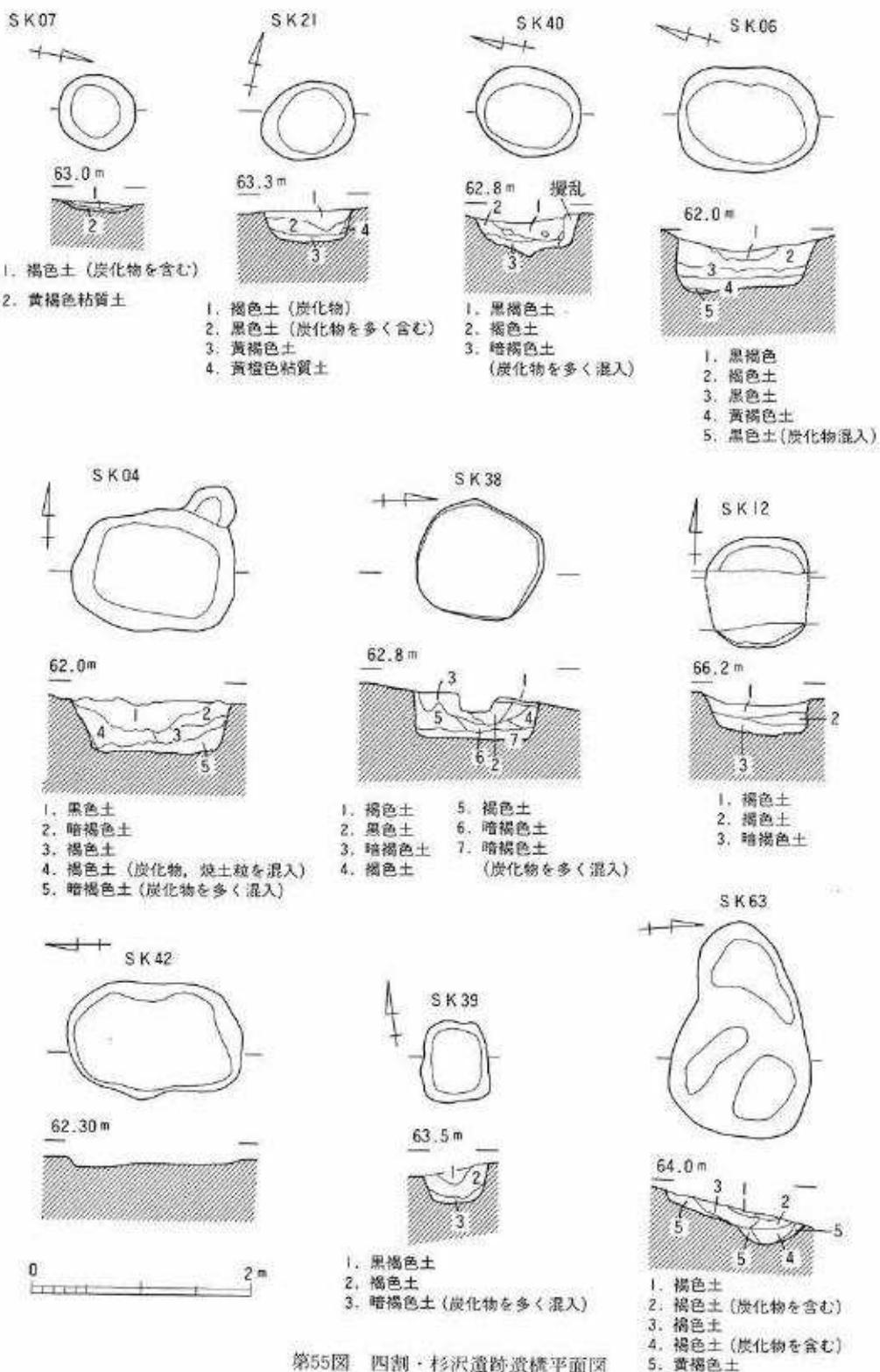
SK04 (第55図、図版35) 8F2区に位置し、段丘の平坦面にある。主軸はほぼ東西を指している。確認調査時に、トレーニングにかかったため表土からの土層観察ができた。H層を切って構築されており、長軸1.5m、短軸1.13m、深さ0.67mを測る。北東隅に径40cm、深さ13cmほどの張り出し部を設ける。床面は平坦で、壁は直立している。床面、壁面どちらも火をうけて硬化している。覆土は4層に分層され、いずれの層にも炭化物を混入するが、下層に下るに従って混入の割合が高くなる。上層はレンズ状に堆積している。

SK06 (第55図、図版36) 2F18区に検出された。西側尾根の斜面の肩口に位置する。長軸1.28m、短軸0.96m、深さ0.45mを測る。比較的大型な方形を呈している。底面は平らで、壁は直立して立ち上がる。底面と北側の壁が良く焼けた状態で硬化している。覆土は5層に分けられた。上から黒色土層、褐色土層、黒色土層、茶褐色土層、そして最下層が炭化物層である。炭化物を含む黒色土と地山の土を混入する褐色系の土が互層を呈して堆積し、しかも水平に堆積していることから、人為的に埋め戻している可能性が高い。楕円形とも認められるが、方形の頂に入れておくこととした。遺物は出土していない。

SK12 (第55図) 9E3区に位置し、段丘の平坦部にある。中央部は試掘トレーニングにより削平されてしまった。長軸1.01m、短軸0.95mとほぼ正方形に近い形を呈している。底面は平らで、壁はほぼ直立している。床面・壁面とも火をうけて厚さ約4cmほど硬化している。覆土は3層に分けられ、最下層にのみ炭化物粒が混入する。

SK35 (第55図、図版36) 3B13区にあり、東側尾根の西側斜面の高い位置にある。東へ約3mのところにSK05があり、西へ斜面を2mほど下ったところにはSK36が存在する。確認時は周辺に径6mほどの黒褐色のシミ状を呈した堆積土が存在したが、それらを10cmほど掘り下げるとき長軸1.6m、短軸1.35mの方形の平面形が確認された。深さは0.36mと比較的深いものである。底面はほぼ水平で、壁もほぼ直立気味に立ち上がっていた。底面は軟質で火をうけ硬くなったり部分は明確ではない。しかし覆土には炭化物が多く混入していた。周辺には径20cm~30cm、深さ15cm~30cmほどのピットが巡るが、規則性は認められなかった。遺物は周辺からも、遺構内からも出土していない。

SK55 (第56図、図版35) 4H12・16区にまたがり検出された。長軸1.13m、短軸1.05m、深さ0.41mと比較的深い土坑である。平面プランはほぼ正方形を呈している。底面は水平に近く、壁は直立気味である。覆土は4層に大別され、最下層は炭火物の混入の度合が高くなる。底面には約5cmほどの厚さに炭火物が堆積していた。その上層には褐色系の土が水平に堆積して



第55図 四割・杉沢遺跡遺構平面図

おり、さらに上層では、中央部は黒色土がレンズ状堆積を呈している。底面は焼けて硬化している。堆積状況から当初、半分ほど人為的に埋め、その後自然に堆積したものと考えられる。

S K39 (第56図、図版36) 3 H18区に検出された。西尾根斜面の途中に位置する。主軸は約10°西にふれている。長軸0.75m、短軸0.5mの隅丸方形を呈する。深さは0.32mと深い。底面はほぼ水平で平坦な面となり、壁はやや崩れていますが直立気味に立ち上がっている。覆土は、1層黒褐色土、2層褐色土、3層暗褐色土があり、底面には炭火物が多く認められる。また3層には焼土粒も多く混入している。底面、壁面とも火を受けて硬化している。1層の黒褐色土層から、縄文時代の磨製石斧や土器が出土しているが、後世の混入と考えられる。

S K42 (第56図) S K05の東側、斜面の上方約2mの肩口部8 B区に位置する。長軸はほぼ東西を指す隅丸方形で長軸1.0m、短軸0.9mを測る。深さは平均で約10cmと浅い。床面はほぼ水平で、壁はほぼ直立している。斜面に構築されているため東側は約15cmと高くなっている。覆土は斜面に立地することからほとんど確認されず、最下層にあった炭化物のみが残って検出された。炭化物の量に比べて底面の硬化はそれほどではなく、軟質な底面である。

B2類 円形を呈するもので、S K07のみである。

S K07 (第56図) 7 C14区に検出された。東尾根の頂部に位置する。長軸0.71m、短軸0.69mとはば正円を呈している。深さは約8cmと浅い。表土を約20cm掘り下げた段階で確認されたもので、炭化物と焼土を混入する層のみが検出された。壁はほとんど削平されており不明であるが、底面はやや凹んで丸底状を呈している。底面はかなりの熱を受け、硬質となっている。

B3類 1類にも2類にも分類できない楕円形の平面形を呈しているものである。S K21、S K36、S K40の3基である。

S K21 (第56図、図版36) 2 F19区に検出された。長軸0.88m、短軸0.71m、深さ約0.3mで地面を掘り込んでいる。南北にやや長い楕円形を呈し、底面は平坦で、壁は直立する。覆土は上から褐色土、黒褐色土、茶褐色土と3層に分けられる。黒色土には炭化物が多く混入する。底面と壁は赤く焼けて硬化している。出土遺物はない。

S K36 (第56図、図版35) S K35の西側約2mのところに検出された。西斜面にあり、西側は確認できなかった。長軸1.1m、短軸0.8m、深さは斜面東側で約20cmを測る。底面はほぼ水平である。斜面に存在しているため、覆土は暗褐色土と炭化物のみが検出されている。

S K40 (第56図、図版35) 3 H12区に検出された。長軸0.96m、短軸0.8m、深さ0.3mを測る。南北に長い楕円形を呈している。底面にはやや凹凸が認められ、中央部が凹んでいる。南側は根の攪乱をうけており、壁は明確ではない。覆土は3層に分けられ、上・下層が暗褐色土で炭化物・焼土を多く混入する層である。中層は褐色砂質土で炭などの混入は少ない。底面・壁などには火による硬化は認められない。遺物は出土していない。

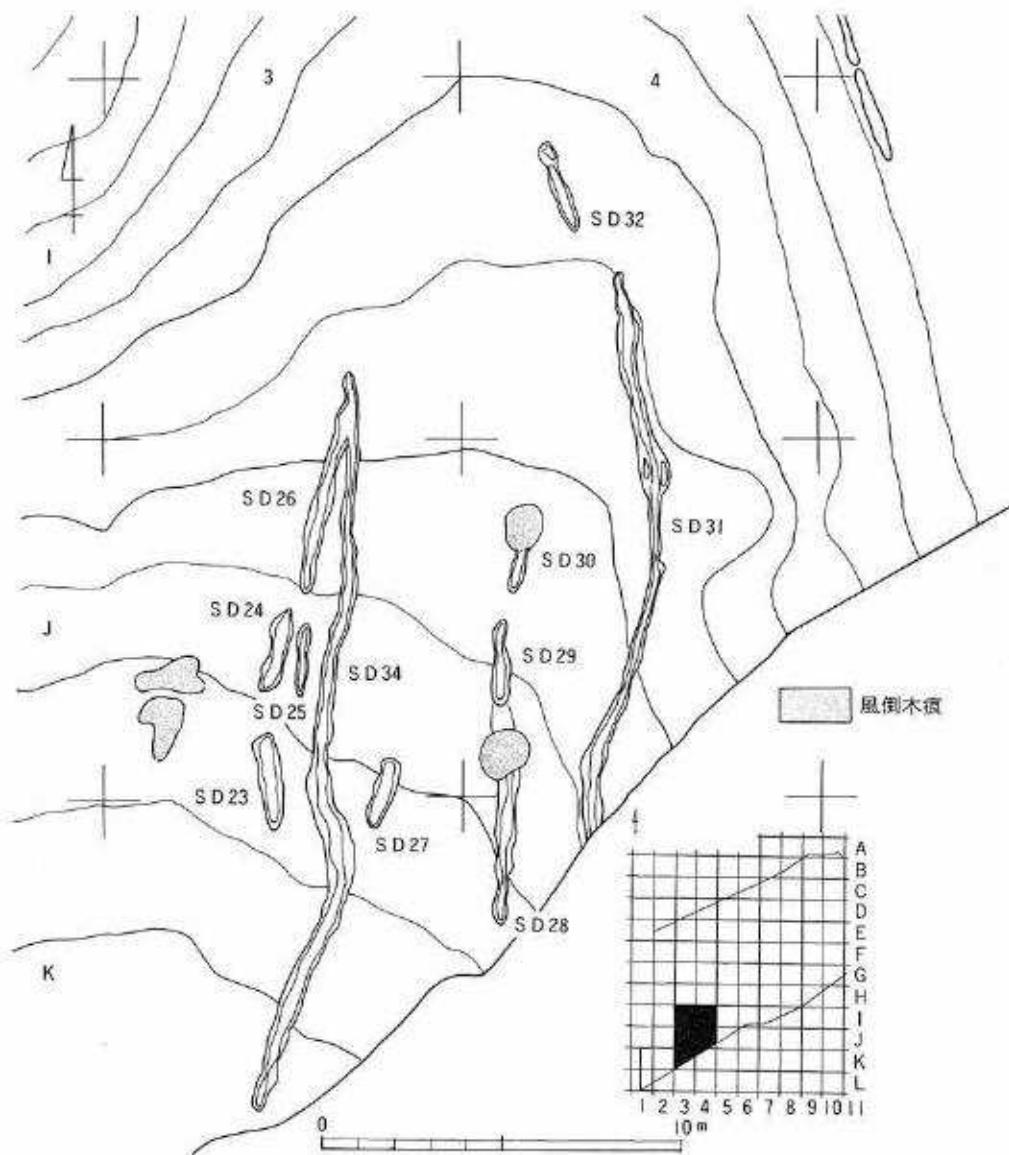
c) 溝状遺構 (第55・57図、図版34)

S D23～S D32 溝は調査区西側の尾根上にその大半が集中している。ただ1例S D37は、S

K05(炭窯)周辺にあるもので、他とは異なった分布を示している。いずれも尾根の頂部に集中する傾向が認められ、尾根の方向に沿ってほぼ南北方向に流れている。いずれも蛇行するものが多く、配置には規則性が認められない。幅は約30cm、深さ5cm~15cmと浅く、ところどころで寸断されている。断面はU字形を呈している。

SD37 斜面の等高線とは直交する馬蹄形で掘られている。掘り方は幅30cm~50cmで規則性はない。覆土の褐色砂質土中から、径3cmほどの大粒の炭化物が検出された。

SD41 沢の中央に南北に延びる道路状遺構に平行し、斜面を段切状に幅約20cm、深さ約20



第56図 四割・杉沢遺跡遺構平面図

cm、長さ約2mにわたって削平した痕跡である。遺物は出土していない。

d) 道路状遺構 (第53図、図版34)

道路状遺構は2条検出された。道路状遺構1は、5ラインに南北に走っているもので、市道と重複している。一部東側尾根の西縁辺を幅3mほど、深さ1mほど削平し、その上を北側の沢部に盛土している。市街地と長者ヶ原地区を結ぶ道で十二曲りといわれている。年代は不明である。道路状遺構2は、西側と東側の尾根に挟まれた沢の中央部をわずかに蛇行しながら南北にのびるものである。沢底部の西側寄りは幅30cmほどの硬くしまった暗褐色土が長さ約30mに渡って確認された。沢の最下層上面に構築されており、底面直上から玦状耳飾が1個出土している。明確な掘り方など不明である。

4. 遺物

遺物の総量は平箱で11箱である。繩文土器と石器のみである。石器や礫・剝片が全体の10箱とその大半を占めている。遺物の出土状況はII・III層遺物包含層中から出土するものがほとんどである。2G～2J・4H区の西側尾根上に集中する傾向が認められる。東側の尾根上ではSK03の覆土から土器と磨製石斧が出土したほかは散漫な分布を呈している。

a) 繩文土器 (第58図、図版37)

土器の総量は74片と小量である。いずれも細片となっているものが多く、完形品に近いものや、器種・器形が判別できるものは少ない。出土地点は西尾根の中央部2J5区・2J10区・4J16区・2I区・2J7区などに集中する。またSK03とSK39からは各2片ずつ、やや文様の判明する大きさの破片が出土している。いずれも細片化しているため、文様から分類した。

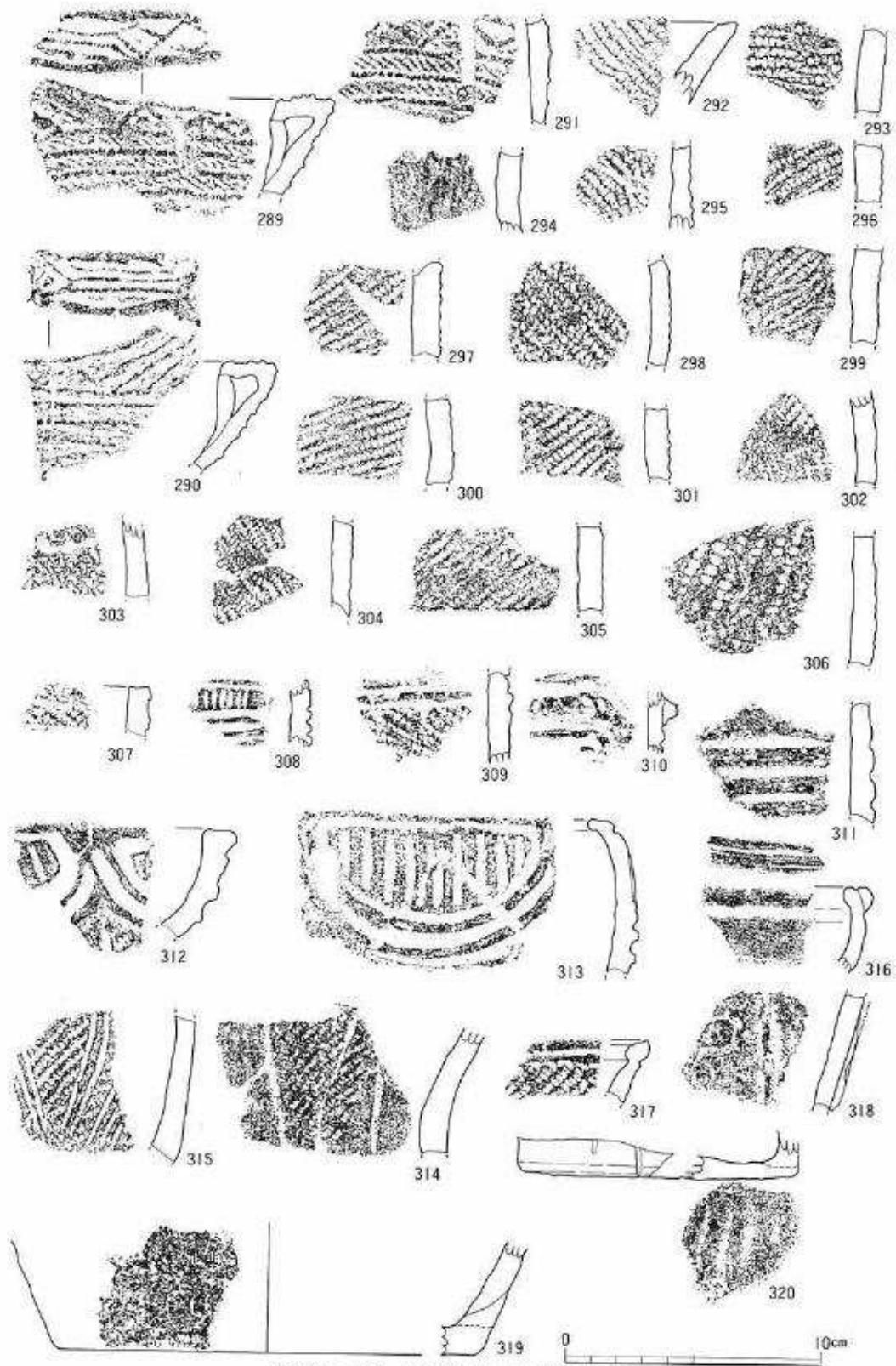
1類 結節状浮線文を施すもの	4類 半截竹管文のみのもの
2類 繩文を施すもの	5類 貼り付け文を施したもの
3類 半截竹管文と繩文を施すもの	6類 無文および底部

1類 (第58図289～291、図版37) 地文に繩文を施したのち、結節状浮線文を施したものである。289から291は同一個体と考えられるものである。外反する口縁部をもつ深鉢で、口縁は波状を呈している。口唇部は内側に屈曲し幅広の口唇帶となり、そこにも結節状浮線文で2条の横位の条線と菱形文を描いている。口縁部は、上段にやはり結節状浮線文により鋸歯状に施文したのち、下に4段以上水平に同じ浮線文を施している。胎土は茶褐色を呈し、やや軟質の焼成である。内面に炭化物の付着が認められる。

2類 (第58図292～396、図版37) 繩文を施すものである。細片となっているものが多く、器種・器形を伺い知るものは少ない。胎土・色調により次の3種に細分される。

2a類 (303) 胎土に纖維を含み、軽く、焼成も不良なものである。胎土断面は黒色を呈している。繩文は粒のやや大きい単節RLである。

2b類 (292～299、304～306) 胎土には長石粒などを含み、纖維がわずかながら混入すると思



第57図 四割・杉沢遺跡出土土器 S=1/2.5

われるものである。内面にササラ状工具の痕での認められる292~296などがある。292~296は色調は暗い灰色もしくは暗褐色を呈している。繩文はいずれも単節Rしが多く、細かい繩目も多い。292・296・304・305は全体として焼成の軟質なものが多い。胎土は同じであるが、繩文がやや大きく色調が茶褐色の306もある。これは細かい繩文を施文したものと別の類を設定することも考えられるが、小片であるため一応この類で一括した。292は口縁端部で内側に棱をなすもので、土器の傾きもやや立つものかもしれない。

2 c 類 (300~303) 灰茶褐色を呈し、きめの細かい良質な胎土で、長石粒・石英粒を混入するものである。いずれも単節で300・301・303は単節RL、302は単節LRである。焼成が良く硬質のものである。

3 類 (第58図307・308・312~315・317、図版37) 半截竹管文と繩文を施すものである。地文には繩文を使用している。胎土・文様から、a・bの2種に細分される。

3 a 類 (307・308・317) 胎土は緻密で砂粒の混入はあまりない。焼成は良く、色調は暗褐色を呈している。繩文は単節RLで、半截竹管文で半隆起線文を施す。307は直立気味に立つ口縁部で、口縁端部は断面方形を呈している。317は口縁端部が丸く撫でられておわるもので外反する口縁部である。

3 b 類 (312~315) 胎土・文様から同一個体の口縁部片、胴部片である。やや粗い胎土で明茶褐色を呈しているものである。312・313は口縁部片、314・315は胴部片である。口縁部は平縁のキャリバー形を呈し、やや内湾する。口縁端部は文様の関係から肥厚し方形となる312と、丸く撫でられておわる313がある。312・313は竹管の背の部分を使用し、連弧文状の半円を描きその中に縦位の沈線を8条入れる。胴部は単節RLの斜繩文を施文したのち、半截竹管文で縦位の平行沈線文を施す。SK03から出土している。

4 類 (第58図309・311・320、図版37) 半截竹管文を施すものである。いずれも細片であるため、3類と同一個体もしくは同類のものを含んでいる可能性がある。309は竹管文で沈線の間の無文帯に縦にヘラ状工具で刻目を入れたものである。灰褐色を呈し、焼成の良い土器である。311は胴部片で2条の半截竹管文が認められる。竹管の幅は広い。灰褐色を呈し、焼成は不良である。320は底部でわずかに縦位の竹管文が認められる。底部には網代痕がかすかに残る。胎土・焼成は311と類似する。

5 類 (第58図310・316・317、図版37) 粘土帯を貼りつけて文様をつくり出しているものである。310は深鉢の胴部で、粘土で隆帯をつくり、周囲を竹管で撫でている。隆帯にはヘラ状工具で刻目が入れられる。316は浅鉢の口縁部で、口縁端部に粘土紐をはりつけて肥厚させている。どちらも砂粒の混入の少ない胎土で、焼成はやや軟質である。色調は灰褐色を呈している。318は胴部片で縦位に粘土紐がミズばれ状に貼られている。胎土・焼成とも312~315に類似している。

6 類 (第58図319、図版37) 無文で底部の319の1点である。底部で、底径は約20cmと大きい。灰褐色を呈し、胎土は緻密で、焼成は良好である。

b) 石器

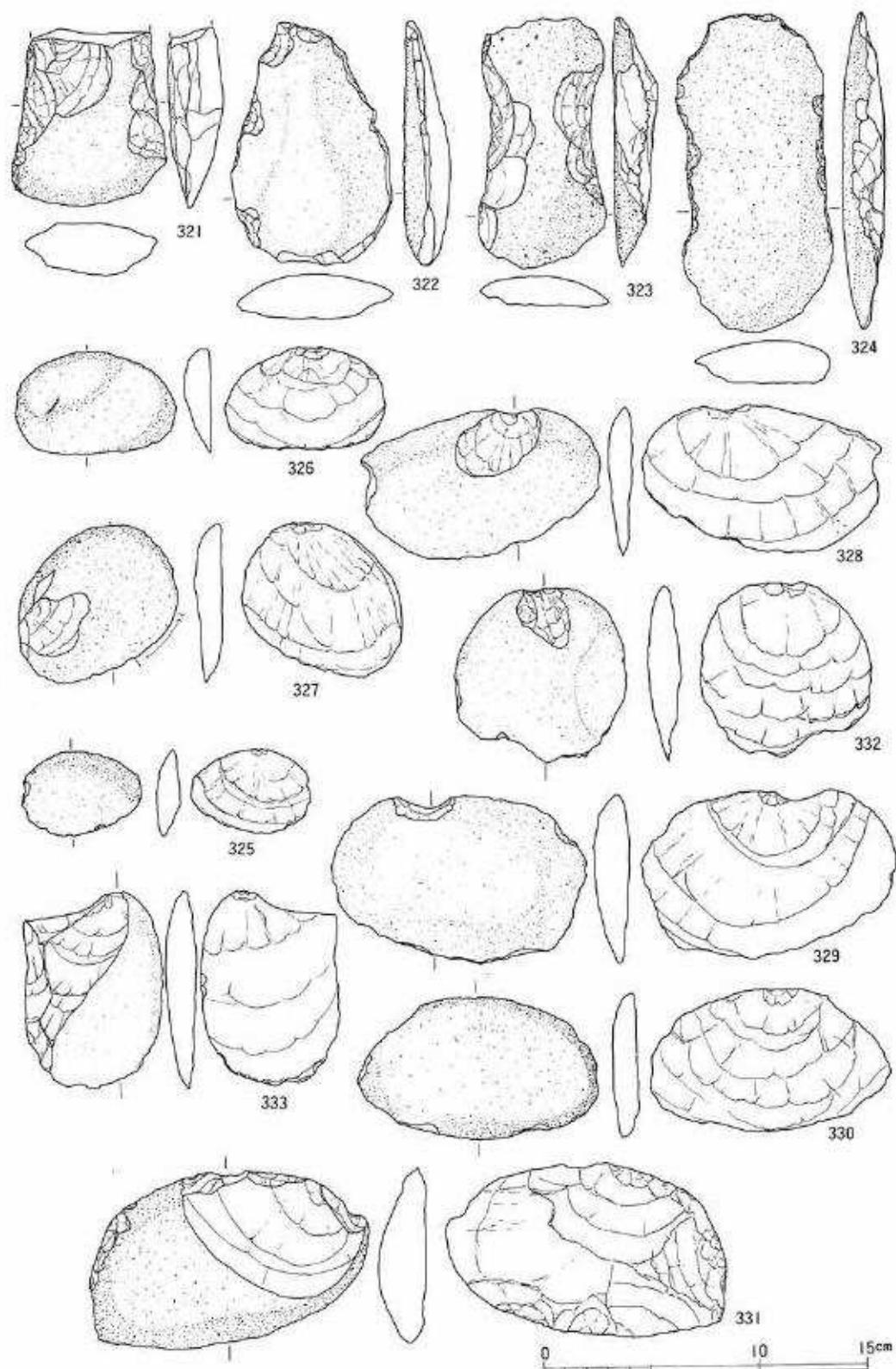
石器は平箱で10箱出土している。このなかには河床礫や、石器の剝片が大半を占めており、二次調整、磨面などのある石器は、97点出土している。内訳は剝片石器42点、磨製石斧の未製品および磨製石斧片24点・凹石7点・石皿5点・磨石4点・打製石斧4点・礫石錐3点・敲石3点。块状耳飾および勾玉の未製品玉各1点が出土している。その他に新しい時代のものと思われる砥石2点がある。これらのうち蛇紋岩製の磨製石斧および未製品は、石器の中の24.5%打製石斧を含めた剝片石器は45%を占めており、この両者で約70%の割合を本遺跡が占めている。資料の量が少ないが、磨製石斧および未製品はSK39周辺の1～2H・Iグリッド周辺に集中して分布する。また剝片石器については、2G～2I・2K～2Lの2ヶ所に集中地點が認められる。いずれも遺構と直接結びつくものではないが、西側尾根に石器の集中が認められ、また南北にのびる尾根のわずかに馬の背状の平坦な部分に集中することが言えよう。

剝片石器（第59図321～331、図版38）

打撃によって円礫から得た剝片を利用し、側縁に調整を加えて打製石斧にした321～324と、剝片をそのまま使用し一部に使用痕を残すこのいわゆる貝殻状の剝片325～333の2種がある。打製石斧は4点のみである。貝殻状の剝片は計42点あるが大きさに大小の変化があり、各部から代表的なものおよび、下縁部に使用痕、磨耗痕のあるものを図化した。

打製石斧（第59図321～324、図版38）4点出土している。いずれも正面に自然面を残し、裏面は横からの打撃による剥離痕が認められる。大きな河床礫の表面に近い部分の1回の打撃によって得られた剝片を使用している。刃部付近の幅に対しても頭部の幅が狭く「楔形」と言われるもの（321～323）と石器長軸に直角に側縁がほぼ平行する。いわゆる短冊形の324がある。321は基部を欠損しているが、側辺から剥離によって仕上げられている。刃部先端は一部磨耗しており、使用痕と考えられる。比較的厚いものである。322はいちじく形を呈するもので、正面には自然面を残す。側縁は細かい剥離によって仕上げられ、刃部はやや丸味を有し、鋭さは認められない。323は短冊形の側縁に細かい剥離が認められ、抉りが入っている。刃部は正面からの細かい剥離調整が加えられている。324は横長の剝片を素材とし、右側縁は細かい敲打により叩きつぶされており、左側縁には細かい剥離が認められ、刃部先端にはわずかに磨耗した痕跡が認められ、基部には細かい剥離が施されている。いずれも安山岩製である。

貝殻状の剝片（第59図325～333、図版38）貝殻状の剝片はいわゆる二枚貝の貝殻状を呈している。325～333はいずれも大きい円礫の表皮をはがすように剥離した剝片を使用したもので、横長の剝片を素材としている。これら剝片の核となった石核などは検出されていない。長さは1.1cm～12.1cm、幅3.0cm～13.0cm、重さ4g～220gと大きさにはバラエティーが認められるが、長さ4.0cm～8.0cm、幅5.0cm～11.0cmの間に大きさが集中する傾向が認められる。厚さは1.0cm～2.0cmの間にほぼまとまっている。下端（刃部？）側の厚さが薄くなるものが一般的である。325～330は下端縁辺に細かい剥離を施されている。331・333のように相異なる二方向（正面・裏面）



第58図 四割・杉沢遺跡出土石器(1) S=1/3

からの剥離を加えられているものもある。また、下端部に磨耗痕を残す 330 もある。石質は、325・328が砂岩、その他は安山岩である。

打製石斧と剥片石器との関係については以下のことが考えられる。打製石斧は正面に自然面を残す細長い剥片を使用するが、厚さが剥片石器に比して厚く、また長さもやや長いものを利用している。このことは剥片石器が打製石斧の素材ではなく、まったく別目的のためのものである可能性を示している。

磨製石斧および未成品（第60図・61図、334～350、図版39）

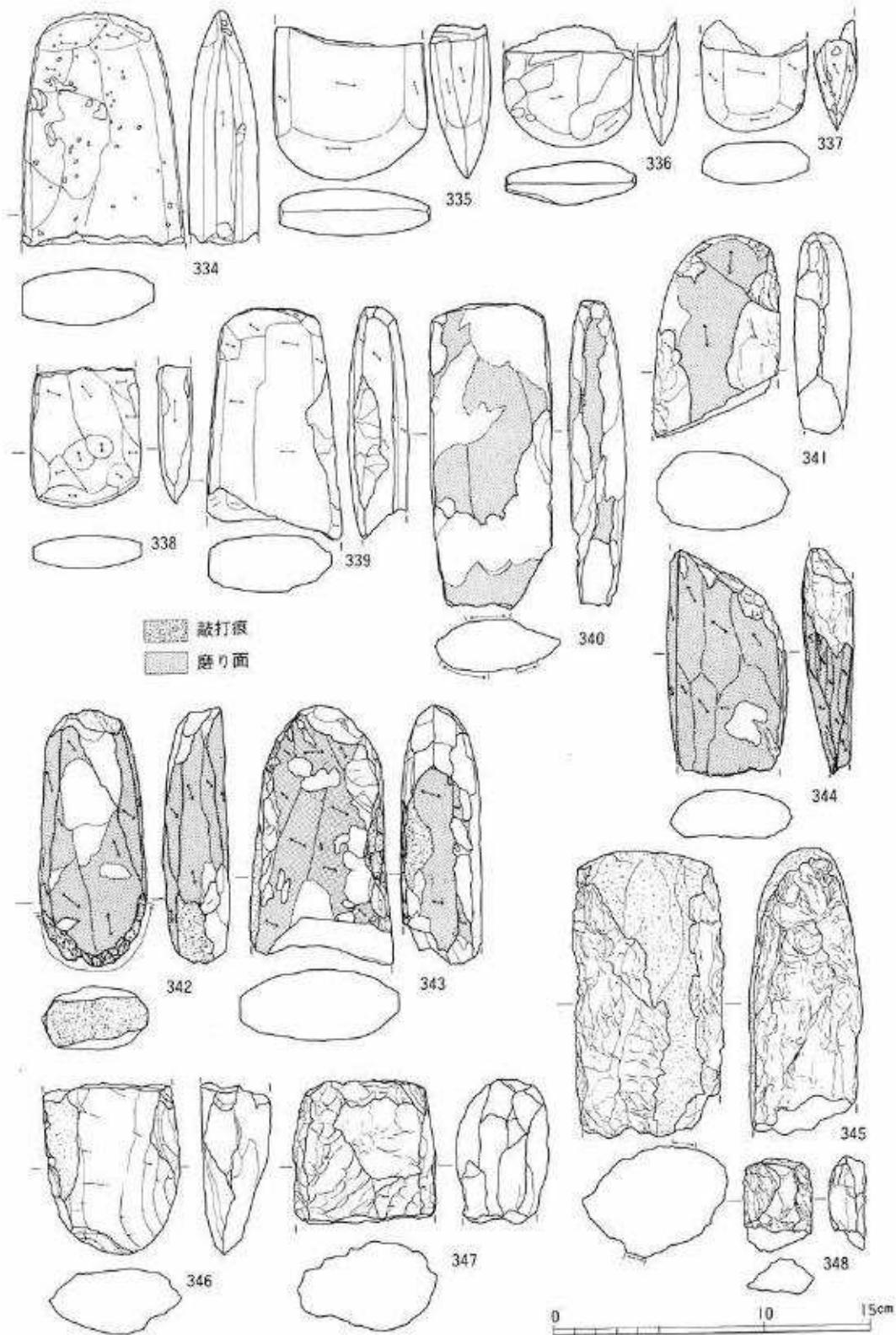
この項では、磨製石斧と蛇紋岩製で一部に磨り面を有するものおよび、磨りの工程に入る前の荒削りや敲打痕が認められるものも一括した。

磨製石斧（第60図、334～339、図版39） 8 個出土しているが、いずれも基部もしくは刃部が欠損していて完形品はない。6 点を図示したが、他の 2 点は刃部先端のみの破片であり割愛した。334～335が安山岩製で、334は頭部片である。335の刃部は円刃のものである。

どちらも材質のためか、また研磨が進み、丸味をおびているためか研磨痕が認めずらく、研磨方向は明確ではない。336～339は蛇紋岩製である。339は刃部が欠損するもので、他は刃部のみのものである。いずれも側面は研がれている定角式磨製石斧である。研磨は粗く、研磨面が多く残っている。339の右側縁には研磨の前に受けた敲打痕が残る。

磨製石斧未成品（第60図340～348、図版39） 未成品と判断したものは、いずれも蛇紋岩製で12点が存在する。研磨の粗いもの340～344、剥離痕、敲打痕の認められるもの(345)、荒削りされたもの(346～348)などである。形状から 3 つの工程が考えられ、各工程のものを選んで図化した。I 荒削工程・II 剥離・敲打調整工程・III 研磨工程に大別される。製品に近いIII工程から I 工程への逆順で説明する。

340～344は研磨の III 工程のものである。340は未成品の中に分類したが、側面にも定角式磨製石斧を想定した研磨が施され、基部も形成されていることから完成品の刃部が欠損したものとも考えられる。研磨面に認められる細かい凹凸は、敲打によるものか剥離によるものかは断定しがたい。344は側面に明確な稜を有するもので、他の定角式のものとは異なる。各面の研磨はまだ面取り状に継続の多面体となっており、研磨途中のものと考えられる。基部・刃部は欠損しているが、破損面の断面は鋭利ではなくやや丸味をおびたものとなっている。正・裏面に剥離もしくは自然の凹凸と考えられる凹みを残している。341は厚さ約1.5cmと比較的扁平な自然礫を素材とし、正面・裏面の一部を研磨している。刃部は欠損し、基部には自然面を残す。側面には敲打痕と思われる細かく叩いた痕跡が残る。342は棒状の自然礫の正面・裏面・側面の 4 面を角柱状に研ぎ出したものである。上・下端面は研磨前の自然な凹みを残している。研磨は粗いもので、一般的に長軸方向の研磨痕が認められる。343は342と同様細長い自然礫を角柱状に調整し、3 面に研磨を施したものである。右側面の一面は細かい敲打痕で平坦に叩きつぶされており、定角式の磨製石斧を想定したものと考えられる資料である。磨製石斧の完成品に比



第59図 四割・杉沢遺跡出土石器(2) S = 1/2

して厚さが約4cmと厚く、この段階からかなり研磨して厚さを減じてゆくことが想像されるものである。下端は欠損し不明である。

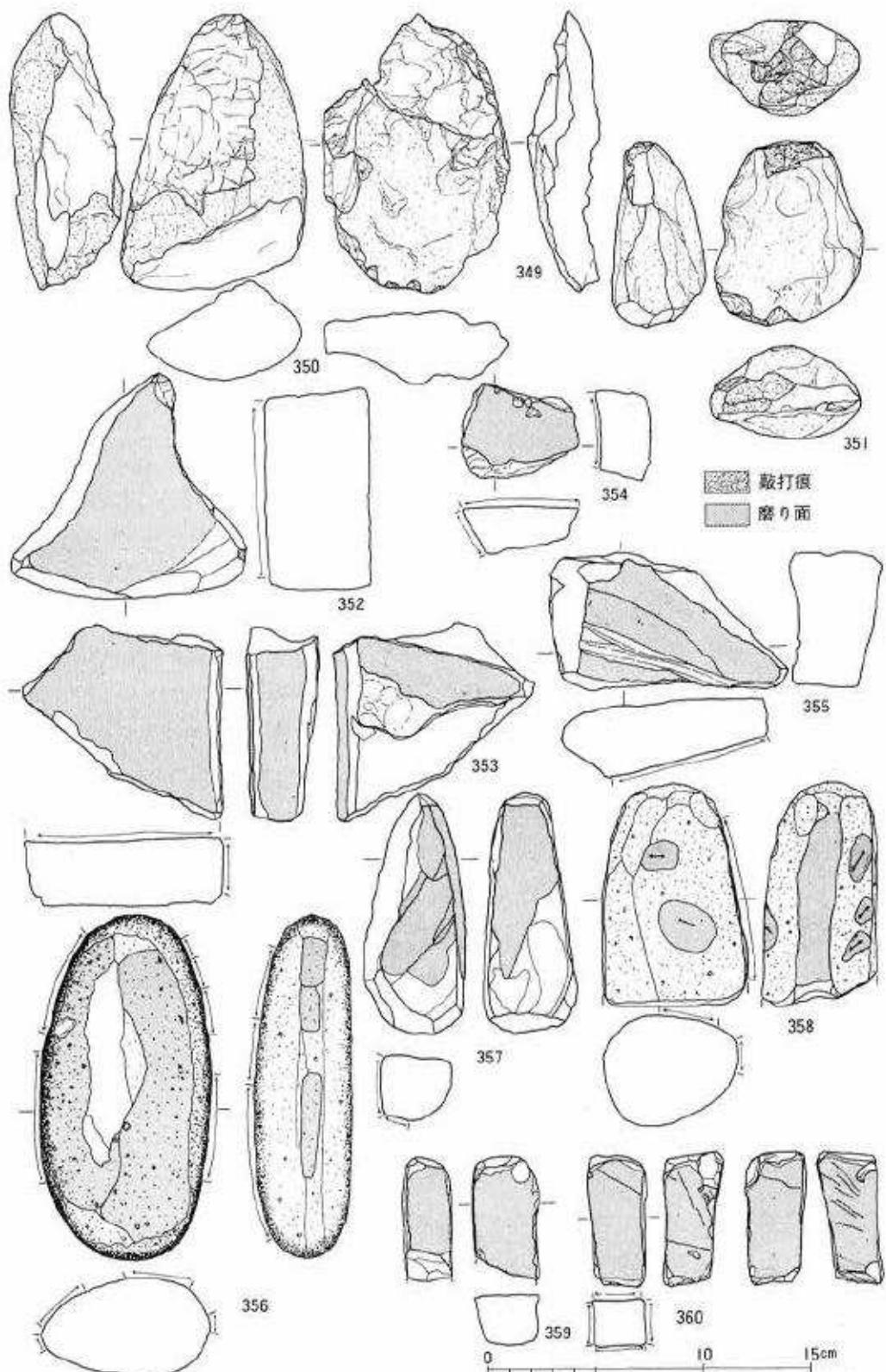
345～348は剥離もしくは敲打によって石斧の形を作り出しているII工程のものである。345・346は一部に自然面を残している。347・348はどちらも頭部と考えられるもので、348は長さ4cmと小型である。正面・裏面とも剥離を加え、直方体をつくりだしている。剥離については石質が蛇紋岩であり、明確には読みとることができない。本遺跡からは、348のような半加工品からつくりだされたと考えられる小型品の磨製石斧完成品は出土していない。345は重量1kgに近い拳大よりやや大きい河床礫を利用し、側辺を剥離および敲打によって調整している。頭部・端部と正面・裏面に自然面を残している。厚さが製品に比べて4cm以上とかなり厚いため、剥離・研磨のいずれで薄く仕上げるか、定かではないが、II工程敲打調整工程の途中のものと考えられる。346は平面形円刃を呈する磨製石斧未完成品の刃部と思われる。断面は楕円形を呈し、剥離調整により形をつくり出している。正面左側にわずかに自然面を残している。

I工程粗割段階のものとしては2例を図示する。350は手のひら大のやや厚い断面三角形を呈する河床礫である。下端および左側辺を剥離しており、裏面および右側面には自然面を有している。とくに、裏面の自然面は光沢をおびてあたかも磨かれたようにも見られる。正面の自然面はやや凹凸のある面となっている。下端面は大きく剥離したのち、割れ口の先端部に細かい剥離調整を施しており、刃部と想定される。断面が三角形を呈しているため、三角形の頂点を剥離により調整し、平らな素材を作り出そうとしている。剥離の状況については、石質が蛇紋岩であり明瞭には看取できなかった。349は手の平大の楕円形を呈する剥片で、正面にのみ自然面を有する。裏面は剥離によっており、扁平な板状を呈している。

蛇紋岩製敲石（第61図351、図版39） 磨製石斧および未完成品と同様に蛇紋岩製のものであるが、他の蛇紋岩製品に比べてやや硬質なものである。平面形・断面とも丸味のある三角形を呈している。上端および下端には細かい敲打痕が残る。周辺部は自然面を残し、光沢を有している。

砥石および石皿（第61図352～355、図版40） 研磨面を有する砂岩質のものを一括して述べる。石皿と考えられる355以外はいずれも砥石であろう。石質は表面がややザラついた砂岩で、荒砥もしくは中砥であろう。354は裏面（底面）は平坦な自然面となっており、正面は研磨によりやや凹み、中に2条の溝がある。条ののびる方向に磨られて滑らかとなっており、側面の3面は割れて欠損している。355は厚さ5.5cmの板状の石材を利用し、1側面のみ残し、他は欠損していて全体の形態は不明である。正面の研磨面は緩く凹状に湾曲し、側縁から内側・中央部にかけて薄くなる。352は方形の板状を呈するもので、3方が欠損している。正面・側面・裏面の一部が研磨をうけている。なお、側面には面取りが施されている。

研石（第62図359～360） ほかに2例だけ、砥石・石皿とは形態・石質を異にする砥石が存在する。これらは形態などから、縄文時代より新しい時代の所産の砥石と思われる。359・360とも角柱状を呈し、やや肥大し丸味をおびる端部をもつもので、いずれも下端は欠損している。360



第60図 四割・杉沢遺跡出土石器(3)

$S = \frac{1}{3}$

は直方体の4面を磨り面とし、359は2面を磨り面としている。石質は安山岩でいずれも粒子の細かいものであり、仕上げ砥と考えられる。

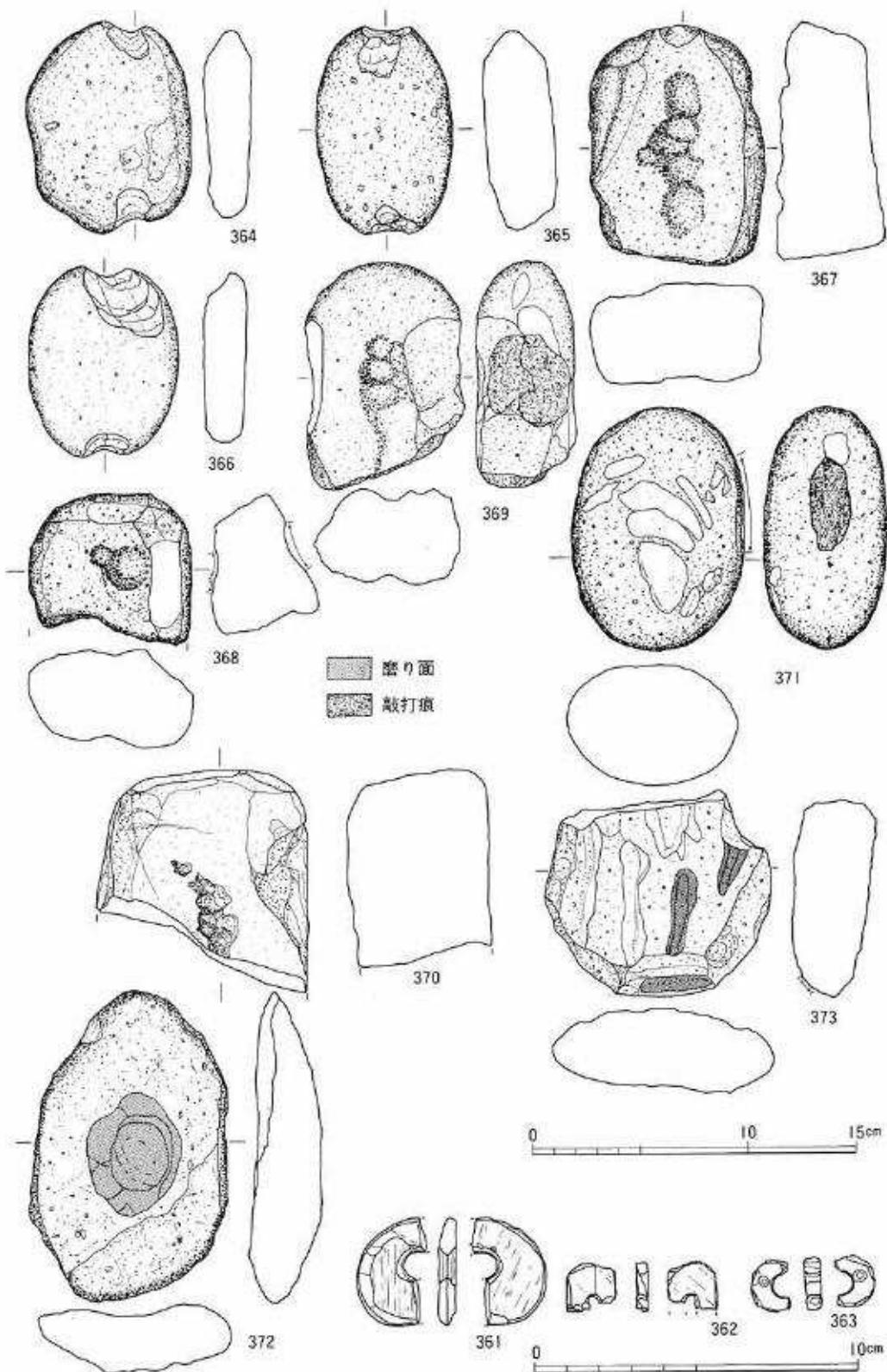
磨石（第61図356～358、図版40） 3個体ある。ほかに拳大の安山岩の円碟が5点存在するが、表面が風化し、磨り面が判別しにくいものや、自然面のみで磨り面の確認ができないもののみで、この項からはずした。356は長さ12.5cmの長楕円形の自然石を使用し、正面と側面の一部を磨り面としている。磨り面の状況は細かい観察でようやく分かるほどのものである。磨りは少ない。357は四角錐状の自然面を利用し、正面の上端部と左側面の一部を磨り面としている。側面については幅3cmほどの凹み状を呈している。他の面は風化が著しく磨り面であるか否かは不明瞭である。358は断面三角形の角柱状の石材を用いて、三角形の稜の部分を磨り面としている。磨り面に隣接する面には、あたかも人間の指の位置にあたるように左に3か所、右側面に2か所の浅い凹みが認められる。この凹みもなめらかとなっている。磨り面以外の他の2つの稜線部分については風化が激しく、磨り面があったか否かは不明である。

礫石錐（第62図362～366、図版40） 磨石錐はいずれも拳大の扁平な碟を用いたもので、長軸方向の上・下端部に2か所の打撃を加えて抉りをつくり出している。各々の抉りは正・裏面からの剥離・敲打を重ねたり、使用で磨耗されたりして、丸味を帯びた抉り部となっている。366は砂岩、364・365は安山岩である。366は他の2例に比べ、幅が狭く、厚さが厚いすん胴の碟を用いている。

凹石（第62図367～370、372、図版40） 5点出土している。367～369は拳大の自然碟に2個ないし3個の凹みをもつものである。367は直方体の自然碟を使用している。正面にのみ3個の凹みがあり、裏面は平らな自然面である。368は面取りされた直方体の砂岩で正面・裏面に各1個の凹みがある。369は拳大の自然碟を使用しており、両側面を敲打していくびれさせて分銅形としている。凹みは正面に2個、裏面に1個がある。いずれも砂岩を石材とし、風化が著しくもろくなっている。370は長方体を呈する自然碟をそのまま使用している。下端部は欠損していて不明である。正面のみに凹みが2個認められる。凹みは上面からの敲打によってできたもので、敲打の回数が少ないため凹みは浅い。石質が他と異なり緑泥片岩で、重量も他に比して重いため台石とも考えられる。372は平面木の葉形を呈し、断面は扁平な半円形を呈している。正面中央に磨りこまれた径4cmほどの凹みがある。器表面は風化により荒れているが、磨り面は滑らかな球面状を呈している。形状・石質が他の凹石（367～369）と異なり、また凹みも他に比べ2倍と長い。

敲石（第62図371、図版40） 磨り石と区別のつかない形態を呈している。拳大よりやや大きい円碟で、側面には2cm×4cmほどの平坦となる敲き面が存在する。正面には浅い溝状の凹みが3条ほど認められる。石質は安山岩である。ほかに蛇紋岩質のもの（351）がある。磨製石斧との関係から前述した。

その他、不明品（第62図373、図版40） 拳大の扁平な石の一面に幅5mm、長さ5cmほどの溝が5条ついている。下端には、上記の溝と直交する一条の溝がある。どの溝の断面もU字状を呈し、



第61図 四割・杉沢遺跡出土石器(4) 361~363 S = 1 ほかは S = 1/3

なめらかになっている。石質は粒の粗い安山岩である。筋砥石とも考えられるが、石質が他の砥石とは異なるためどのように使用されたかは不明である。

玉および装身具類（第62図361～363、図版40） 勾玉1点・装身具未成品1点・玦状耳飾1点が出士している。いずれも沢の中央部、道状遺構2の底面直上から出土している。363はやや角ばったC字状を呈している勾玉である。研磨も粗く丸味が少ないもので研磨途中の未成品と考えられる。正面・裏面とも平坦に磨かれ、穿孔は正面と裏面の両側穿孔である。正面からの穿孔は裏面に比べてやや幅の広い円すい形を呈している。濃緑色と黒色のまだら状を呈する結晶片岩系の石質である。長さ1.6cm、重さ1.4gを測る。362は玉の未成品である。方形を呈し、下半は欠損している。正面中央に縦位の棱を有するが、裏面は平坦になっている。横断面は五角形を呈している。穿孔は正・裏面の両面から施され、孔の中央には稜が認められる。3F区の焼土中から出土している。古墳時代の石製模造品である剣形石製品に類似する形であるが、ここでは玉とする。いつの所産かは不明である。研磨痕は粗いため、未成品であろう。結晶片岩製、重さ1.25gと軽い。361は縄文時代前期の玦状耳飾で、中央で割れている。やや扁平な楕円形を呈し、藤田氏の分類ではB1類に属する（藤田1983）。両側から穿孔し、その後抉り部の切れ込みを入れたもので、この切れ目の側面には両端からの研磨で生じた稜が明瞭である。断面はカマボコ状を呈し、正面側が側辺も丸味をもって研磨されているが、裏面は研磨痕も粗く、擦痕が明瞭に認められる。北陸地方の編年（藤田1983）から縄文時代前期後葉の時期の所産と考えられる。

5. 小結

四割・杉沢遺跡では長者ヶ原遺跡と同一段丘上に隣接し、段丘先端部に立地する。遺物は長者ヶ原遺跡と同時期のものが検出されたが、遺構については、縄文時代の土坑は1基検出されたのみであった。しかし炭窯が12基とまとまって検出された。以下、遺構・遺物について記述する。

遺構は、縄文時代の土坑1基と炭窯12基である。縄文時代の土坑はSK03のみである。出土土器から縄文時代中期後葉の所産と考えられる。炭窯は平窯状のA類と土坑状のB類がある。A類は1基（SK05）で、斜面上に立地しており、B類は尾根の平坦面に多く立地している。炭窯の時期については共伴する遺物がなく、不詳である。県内のA類に類似したものでは、片田遺跡（戸根ほか1977）・カナクソ谷遺跡（戸根ほか1987）などがあり、近世以降の所産と考えられている。しかし近年富山県（関1986）や福島県向田E遺跡（福島県文化センター1985）において、古代の炭窯が確認されつつあり、今後県内においてこれら類例が増加するものと考えられる。

遺物は縄文土器と石器が出土しており、合計で平箱11箱である。縄文土器は計74片で、いずれも細片となり時期のわかるものは少ない。1類は北陸地方の福浦上層式に類似するもので、前期後葉と思われる（高塙1986）。また5類はSK03からのみ出土した。加曾利EII式もしくは加曾利EI式に並行するものに類似するもので中期後葉の所産と考えられる。2類は前期の所

第7表 四割・杉沢遺跡出土石器觀察表(1)

No	器種	注記No.	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	出土区	土層	
321	打製石斧	頭部欠損	93	84.0	71.0	24.0	160.0	安山岩	3 K 10	III
322	打製石斧		76	113.0	75.0	22.0	190.0	安山岩	3 G 9	II
323	打製石斧		7	115.0	59.0	20.0	140.0	砂岩	7 E 2-3	II
324	打製石斧		142	147.0	71.0	20.0	260.0	砂岩	2 I 2	II
325	剝片		94	39.0	55.0	11.0	22.0	砂岩	2 L 5	II
326	剝片		63	48.0	74.0	12.0	50.0	砂岩	4 F 9	II
327	剝片		133	73.0	74.0	12.0	80.0	頁岩	2 H 13	II
328	剝片		20	64.0	110.0	12.0	90.0	砂岩	3 E 1-5	II
329	剝片		107	76.0	116.0	14.0	133.0	砂岩	4 G 2	II
330	剝片		45	66.0	111.0	12.0	100.0	砂岩	2 I 3	II
331	剝片		147	79.0	132.0	23.0	220.0	砂岩	2 H 3	II
332	剝片		32	80.0	80.0	15.0	163.0	砂岩	5 F 3	III
333	剝片		40	91.0	64.0	13.0	88.0	頁岩	2 L 12	II
334	磨製石斧	刃部欠損	113	108.0	72.0	34.0	420.0	安山岩	2 H 19	II
335	磨製石斧	頭部欠損	76	68.0	73.0	27.0	200.0	石英安山岩	3 G 9	II
336	磨製石斧	頭部欠損	105	56.0	60.0	19.0	79.0	蛇紋岩	4 H 1	II
337	磨製石斧	頭部欠損	106	47.0	51.0	19.0	58.0	蛇紋岩	7 D 6	II
338	磨製石斧	頭部欠損	27	65.0	52.0	16.0	120.0	蛇紋岩	2 F 18	I
339	磨製石斧	刃部欠損	58	100.0	62.0	26.0	310.0	蛇紋岩	S K 03	覆土
340	磨製石斧未成品		124	131.0	46.0	15.0	410.0	蛇紋岩	2 L 2	II
341	磨製石斧未成品		34	105.0	46.0	15.0	220.0	蛇紋岩	—	表採
342	磨製石斧未成品		13	91.0	44.0	14.0	210.0	蛇紋岩	7 B 10	II
343	磨製石斧未成品	刃部欠損	34	120.0	50.0	32.0	310.0	蛇紋岩	—	表採
344	磨製石斧未成品	刃部欠損	37	123.0	68.0	38.0	520.0	蛇紋岩	J K 25	I
345	磨製石斧未成品	刃部欠損	105	58.0	60.0	20.0	85.0	蛇紋岩	4 H 1	II
346	磨製石斧未成品	頭部欠損	120	84.0	63.0	34.0	235.0	蛇紋岩	1 H 24	I
347	磨製石斧未成品	刃部欠損	88	65.0	67.0	47.0	330.0	蛇紋岩	2 L H	II
348	磨製石斧未成品		20	45.0	32.0	17.0	33.0	蛇紋岩	3 E 1-5	II
349	磨製石斧未成品		40	128.0	86.0	34.0	340.0	蛇紋岩	2 L 12	II
350	磨製石斧未成品		28	130.0	83.0	51.0	58.0	蛇紋岩	2 K 19	I
351	敲石		118	87.0	68.0	44.0	330.0	蛇紋岩	2 H 24	II
352	砥石	欠損	144	96.0	95.0	37.0	490.0	安山岩	2 H 19	II
353	砥石	欠損	135	79.0	61.0	22.0	325.0	安山岩	2 H 14	II
354	砥石		67	43.0	27.0	12.0	70.0	安山岩	3 J 15	II
355	砥石		134	196.0	57.0	28.0	300.0	安山岩	3 I 23	II
356	磨石		39	143.0	67.0	34.0	780.0	安山岩	3 L 23	II
357	磨石		52	97.0	35.0	36.0	290.0	安山岩	2 G 13	II
358	磨石		90	84.0	53.0	42.0	550.0	安山岩	3 K 18	II

第8表 四割・杉沢遺跡出土石器観察表(2)

No	器種	注記No	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	出土区	土層	
359	鐵石	欠損	31	57.0	31.0	24.0	63.0	砂岩	2 F 13	II
360	鐵石	欠損	17	63.0	28.0	29.0	60.0	安山岩	2 H 5	II
361	珠狀耳飾	右欠損	3	32.0	40.0	05.0	14.0	流紋岩	4 F 20	III
362	玉 未成品	下半欠損	3	15.0	15.0	04.0	125.0	結晶片岩	3 F 25	II
363	勾玉	148	15.0	12.0	05.0	49.5	結晶片岩	3 H 10	III	
364	石錐	3	77.0	60.0	08.0	180.0	安山岩	1 F 3	II	
365	石錐	21	85.0	64.0	106.0	220.0	安山岩	2 F 6	II	
366	石錐	1	82.0	52.0	20.0	275.0	安山岩	—	表採	
367	凹石	99	96.0	66.0	37.0	615.0	安山岩	1 L 15	II	
368	凹石	29	89.0	60.0	33.0	420.0	安山岩	2 E	I	
369	凹石	72	53.0	63.0	39.0	225.0	安山岩	1 L 4	II	
370	凹石	36	76.0	84.0	52.0	110.0	安山岩	1 L 8	I	
371	敲石	98	99.0	68.0	47.0	730.0	安山岩	2 I 2	II	
372	凹石	2	131.0	72.0	20.0	460.0	安山岩	—	表採	
373	磨石?	20	79.0	88.0	27.0	410.0	安山岩	3 E 1~5	II	

産、4~6類は中期の所産と考えられる。土器片の主体を占めるものは前期後葉を中心とするもので、前期の土器群は西側尾根の中央部に集中して分布する。

石器は多種多様のものが認められるが、蛇紋岩製の磨製石斧およびその未成品が多い。これらは河床疊を素材とし、完形品に近い大きさの河床疊を荒割りし、敲打・剝離調整を加えてから、研磨したものである。完成品をみると短冊形を呈した定角式磨製石斧であり、いずれも大型品が主体である。ほかに同石材の敲石や砥石も出土しており、本遺跡が石器製作跡であった可能性が高い。これら石器群の分布と縄文時代前期後葉の土器群は同地区に集中して分布する。

第VII章　ま　と　め

三屋原遺跡、三屋原B遺跡、塚ノ越遺跡、四割・杉沢遺跡の調査の概要を個々に前述したが、これら4遺跡を概観し、調査のまとめとしたい。

1. 遺跡について

三屋原遺跡・三屋原B遺跡・塚ノ越遺跡については、昭和30年代始めの開墾により削平を受け、遺構・遺物の遺存状況はあまり良いものではなかった。各遺跡も遺構の数は調査面積に比較して少ない。このような状況の中で三屋原遺跡では、県内でも数少ない縄文時代前期の住居跡と推定される遺構が確認され、また三屋原B遺跡でも数棟の住居跡と推定される遺構が確認された。

遺構が少ないことは、開墾で多くの遺構が削平されてしまったとも考えられるが、それ以外の理由も考えられる。つまり長者ヶ原遺跡という縄文時代早期から晩期にかけて延々と営まれた遺跡に近接した地域では、本来大規模な集落が営まれなかつた可能性もある。また、塚の腰遺跡を除く3遺跡の主な時期が縄文時代前期後葉から中期前葉と比較的限られていることから、当該期には長者ヶ原遺跡を含めて、遺跡が広い範囲に点在していたと推定される。今後、長者ヶ原遺跡周辺の遺跡の解明により、縄文時代の集落に関する問題が明らかにされることを期待したい。

2. 遺物について

塚ノ越遺跡では遺物はほとんど出土しなかつたが、そのほかの3遺跡においては各遺跡で平均12箱ほどの土器・石器が出土した。石器は、磨製石斧およびその未成品・貝殻状の剥片の比率が高い。このうち、磨製石斧については未成品の比率が高いことから石斧製作を主体とする遺跡と考えられる。以下、縄文土器・剥片石器と磨製石斧製作について述べる。

a. 縄文土器

4遺跡から出土した土器は細片となっているものが多く、器形のわかるものは数点と少ない。三屋原遺跡では、胎土に纖維を混入する縄文時代前期の土器群と、竹管文を主とする中期前葉の土器群の2群が出土した。三屋原B遺跡では、蓮華文・B字状文・軌軸文・竹管文を主とする中期前葉の土器が出土している。四割・杉沢遺跡では、結節状浮線文を主とする縄文時代前期終末の土器群と、竹管文による沈線文を主とする縄文時代中期後葉の土器群が出土した。

三屋原B遺跡の蓮華文・B字状文の土器は新潟県内においてはタテ遺跡(高橋ほか1985)・古屋敷遺跡(中島1976)など、多くの遺跡で類例が認められる。石川県徳前C遺跡(西野1983)、真脇遺跡

(高橋ほか1986)など北陸地方に類例を認めることができる。また四割・杉沢遺跡の結節状浮線文の一群は福浦上層式(越坂1983・高橋ほか1986)や十三菩提式に類似する。このように新潟県南西部に位置する糸魚川地区という地域性から北陸地方との結びつきが強い半面、三屋原B遺跡の諸磯b式土器や四割・杉沢遺跡の加曾利E II式もしくはこれに並行する土器群にみられるように、中部高地・関東地方に類例のある土器があることも注目される。以上、真脇遺跡での土器編年を利用して、各遺跡の土器を細別し、順序をまとめると前期から中期前葉にかけて三屋原遺跡→四割・杉沢遺跡→三屋原B遺跡の順となる。その後、中期後葉に四割・杉沢遺跡が認められる。

b. 石器について

剥片石器

打製石斧と貝殻状の剥片の2種がある。どちらも大きな円錐に打撃を加えて得られた厚さ1~2cmの剥片を素材としており、片面に自然面を残している。貝殻状の剥片については、県内では中原遺跡(高橋ほか1986)において注目され、糸魚川地区の各遺跡では出土例が多い。

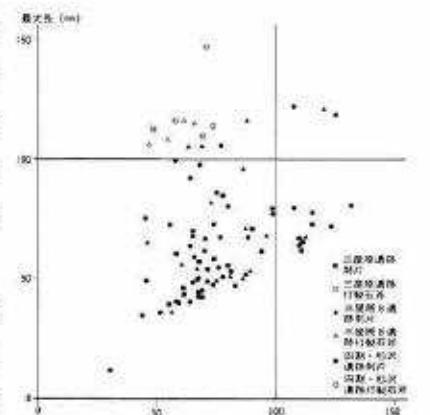
貝殻状の剥片は次のような特徴を呈している。
 ①形態は貝殻状を呈する。
 ②縁辺に細かい剥離調整を加えるものや磨耗痕を認めるものがある。
 ③長幅比が7:10に近い横長の素材が多く、大小にバラエティがある。
 ④使用痕は打点位置とは反対の縁辺に認められる。

これに対し、本遺跡出土の打製石斧は①貝殻状の剥片を素材とする。
 ②両側縁に剥離調整を加えて、短冊形・分鋸形・撥形石斧を作る。
 ③長さは15~17cm・幅が4~7cmほどである。このように打製石斧と貝殻状の剥片を観察すると、素材獲得の方法は同様であり、また第62図のように幅が一定で長さの長いものが打製石斧に使用されている。また貝殻状の剥片は石核と共に伴しないことも注目される。貝殻状の剥片については磨耗痕などから皮はぎや土掘り具の機能を考えられているが、詳細は今後の課題としたい。

磨製石斧

三屋原・三屋原B・四割・杉沢遺跡では蛇紋岩製の磨製石斧およびその未成品が出土した。

塚ノ越遺跡以外の3遺跡から出土した蛇紋岩製の磨製石斧完成品および未完成のなかでも完成品に近いものの形態は3種に大別される。I類2側辺が平行に近い状態を呈するいわゆる短冊形を呈している。側面は面取りされ断面方形の定角式である。刃部は断面形両刃、平面形は円刃である。II類正面形が橢円形を呈するもので、断面は凸レンズ状を呈し、刃部は断面形は両刃、平面形は円刃である。III類頭部がやすぼまり、刃部が開くいわゆる撥形を呈するもので、断面は方形を呈する定角式である。刃部は両刃・円刃を呈する。以上が本遺跡群から



第62図 出土剥片・
打製石斧長幅分布図

出土している石斧の形態であるが、刀部については平面扁刃のものもいくつか認められる。I類は四割・杉沢遺跡に、II類は三星原B遺跡に、III類は三星原遺跡に出土している。第63図から長さ10cm・幅7cmに境界が認められ、長さ10cm・幅7cm以上のものを大型品、以下のものを小型品とした。小型品はIII類の撥形である。なお磨製石斧の長幅比は2:1となるものが多く(第63図)、この傾向は完成品に限らず、未完成品にも認められることから、磨製石斧の製作の過程において剥離調整や敲打調整が施される段階から成品の大きさ・形態が想定されていたと思われる。

磨製石斧製作の工程について

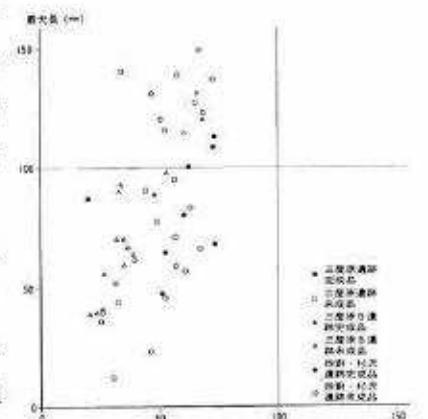
富山県馬場山遺跡群(松島1985・山本1987)や新潟県寺地遺跡(阿部1987)など糸魚川周辺の遺跡での磨製石斧(蛇紋岩製)の製作工程が明らかとなっている。これらの成果を考慮しつつ製作工程について考えてみたい。工程は大別して①石器の素材づくり(粗削), ②次に剥離・敲打を加えて形の大略をつくる整形工程, ③形ができたものを研磨し、細部をつくりだす工程(研磨)がある。これらの工程をまとめると第9表のようになる。

なお、研磨については刃部研磨の方向などを細かく観察すると細分が可能であるが、ここでは除外した。また擦り切り技法の前に敲打・剥離調整・研磨の工程も指摘されている(岡村1979)、ここでは各個体の観察からは明確でないため項目を設定しなかった。

第9表から三星原遺跡などの石斧未完成品を分類すると、三星原遺跡では大型品はIII Aa, III Caの2種。小型品はIII Bc。三星原B遺跡では大型品はIII CbとIII Xaの2種、小型品はIII CxとI Aaの2種。四割・杉沢遺跡では大型品はI CaとIII Caの2種、小型品は数量が少なく不明であった。これらの分類と前節の土器の項で述べた時期とを組み合せると以下の通りとなる。

三星原遺跡(縄文前期)	四割・杉沢遺跡(前期末葉)	三星原B遺跡(中期前葉)
大型品 III Aa, III Ca	I Ca, III Ca	III Cb, III Xa
小型品 III Bc		III Cx, I Aa

のことから、大型品については円礫を核として、敲打・剥離調整により形をつくり、縱位の研磨を施し、完成品とするものが一般的である。しかし前期末葉には原石を粗削りして素材



第63図 磨製石斧長幅分布図

第9表 磨製石斧製作工程表

1. 素材づくり	2. 剥離・敲打整形	3. 研磨
I. 大きい河床礫を粗削する	A. 敲打のみで整形	a. 縦位の研磨
II. 大きい河床礫を振り切る	B. 剥離のみで整形	b. 横位の研磨
III. 手ごろな河床礫を選ぶ	C. 剥離と敲打を合せて整形	c. 不規則な研磨
	X. 全く調整しないもの	x. 不明

するものが認められる。擦り切り技法については本遺跡群には認められない(註)。

また小型品については一面に自然面を残す剥片を使用し、周縁に細かい剥離など施して研磨するものが一般的である。これは素材が小さいため、細かい作業に費やす時間的浪費をなくすことと、失敗を防ぐことの2つの理由からと思われる。

これらの地区の磨製石斧は、越川などにおいて適当な河床礫が入手しやすいことから、粗削や、擦り切りなどせず円礫をそのまま使用したものと考えられる。

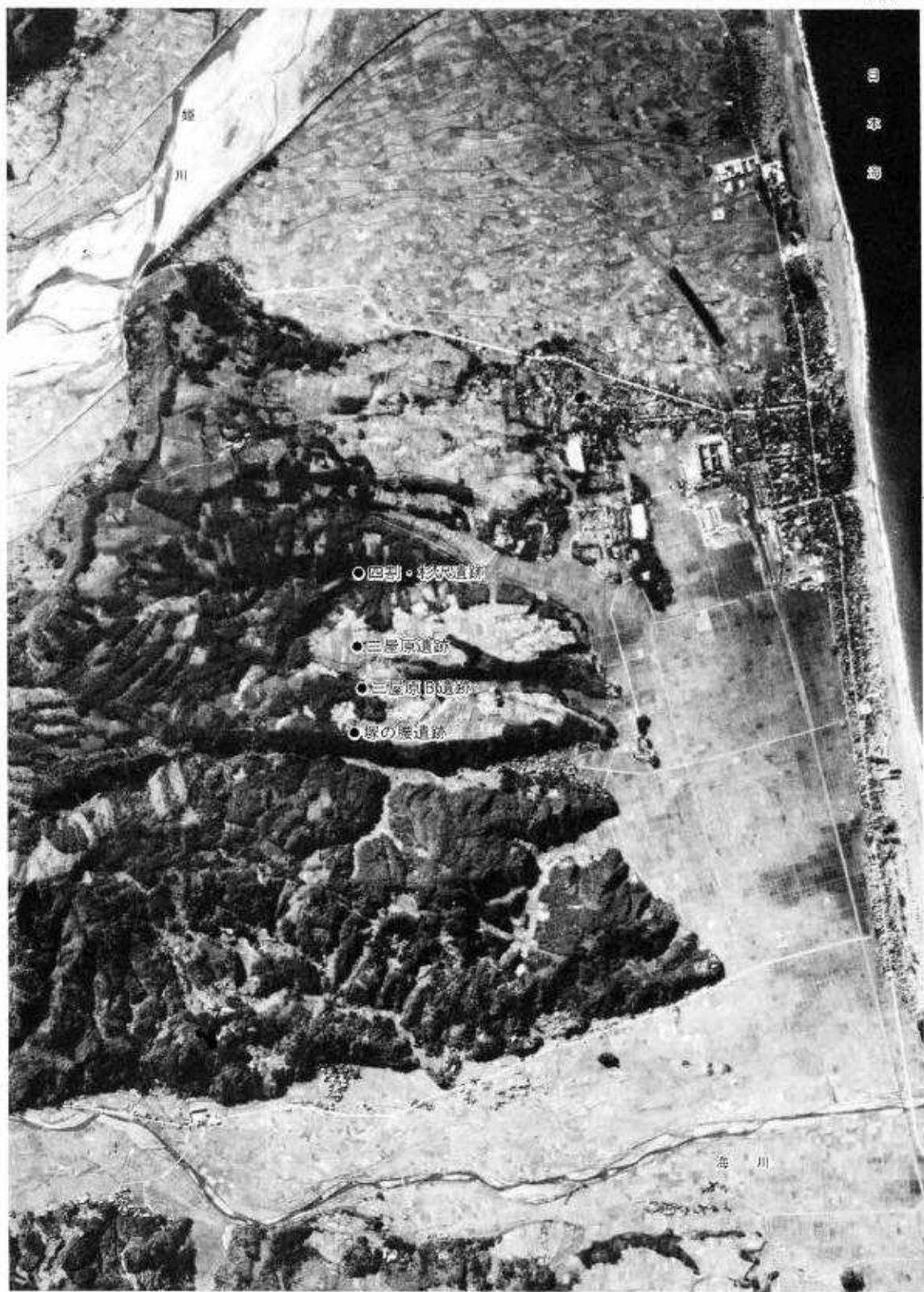
時期的にはいずれも中期前葉を中心とし、前期末葉からの時期が考えられるが、本遺跡群では土器の出土量も少なく、不明な点が多い。

なお、敲打・剥離整形に使用する敲石は、ヒスイなど硬度の高い石質が考えられているが本遺跡では、ヒスイ製のものではなく、四割・杉沢遺跡で比較的硬い蛇紋岩質のものが1例検出されたのみであった。また三屋原B遺跡で未完成の項に入れた蛇紋岩質の側縁に敲打痕のあるものなども、これらの道具であった可能性であろう。

引　用　文　獻

- あ、阿部朝衛1987「磨製石斧生産の様相」『史跡寺地遺跡』新潟県青海町教育委員会
お、大森勉ほか1985『新潟県糸魚川市遺跡詳細分布調査報告書』新潟県糸魚川市教育委員会
岡村道雄1979「区石岸」「聖山」東北大学文学部考古学研究会考古学資料集別冊2
こ、越坂一也1983「北陸地方における縄文時代前期中・後葉の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
小島俊彰ほか1982「長者ヶ原遺跡範囲確認調査概報(第4次・第5次)」新潟県糸魚川市教育委員会
た、高橋保、田辺早苗1985「タテ遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第39』新潟県教育委員会
高橋保、小池義人、竹田和夫1987「中原遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集』新潟県教育委員会
高堀勝喜ほか1986「石川県能都町真鶴遺跡」石川県能都町教育委員会、真鶴遺跡発掘調査団
ち、茅原一也ほか1978『新潟県地質図説明書』新潟県
そ、戸根与八郎、家田順一郎1977「片田遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第9』新潟県教育委員会
戸根与八郎、田海義正、鈴木俊成1987「カナクゾ谷遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第47』新潟県教育委員会
な、中島栄一ほか1976「古屋敷遺跡」『田上町文化財調査報告書第2輯』新潟県田上町教育委員会
に、新潟県史編纂委員会1984『新潟県史 原始古代編 資料編1』新潟県
西野秀和ほか1983「鹿島町徳前C遺跡調査報告書(IV)」石川県立埋蔵文化財センター
ふ、福島県文化センター1985「向田D・E遺跡の木炭窯群」『福島県文化財調査研究報告書第15集』福島県教育委員会・財團法人福島県文化センター
藤田富士夫1983「块状耳飾の編年に関する一試論」『北陸の考古学』石川考古学研究会
藤田亮策ほか1964「長者ヶ原」新潟県糸魚川市教育委員会
ま、松島吉信ほか1985「北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編2—」富山県教育委員会
や、山本正敏ほか1987「北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編3—」富山県教育委員会

註、擦り切り技法については、長者ヶ原遺跡の表採資料の中に例があることを木島氏から教示をうけた。資料整理途中のため内容については不明な点が多い。今後の課題であろう。



周辺地域の空中写真 (国土地理院が発行したものを利用した。
1947年撮影 25UU 31PRS M627A 314CW 4NOU 47 27)



近景（発掘調査前 東から）



住居跡(SI39)周辺完掘（西から）



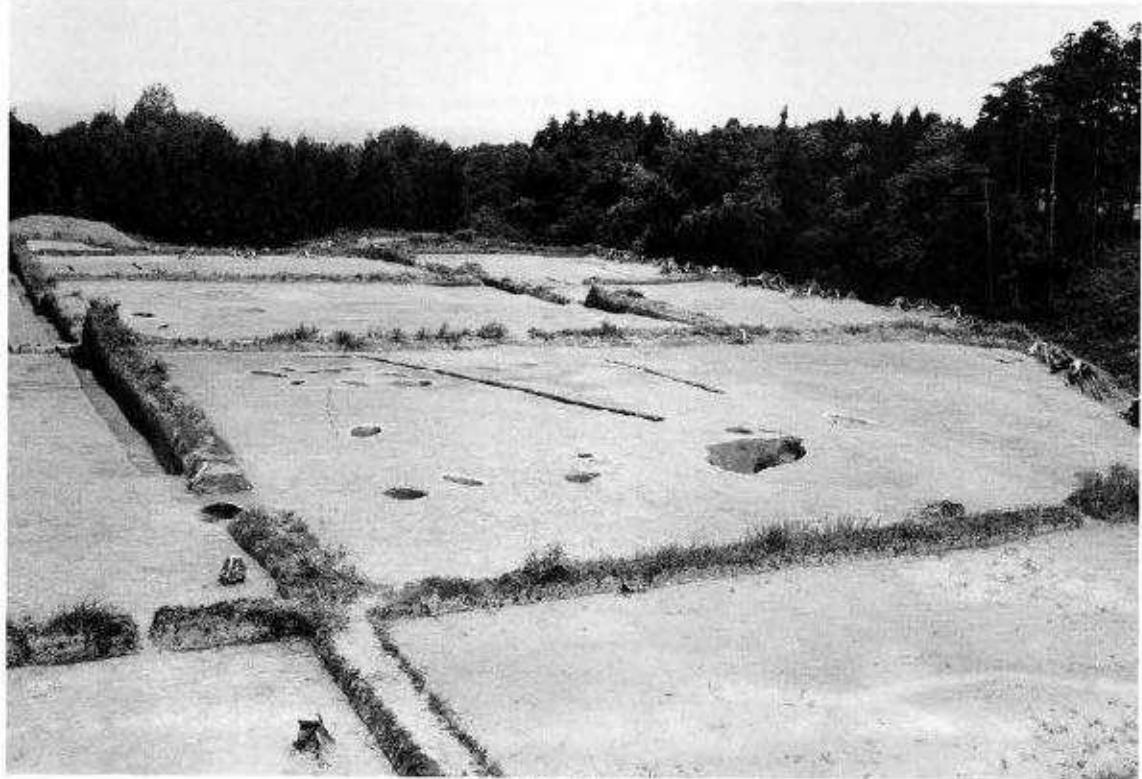
西側沢部土層断面（北から）



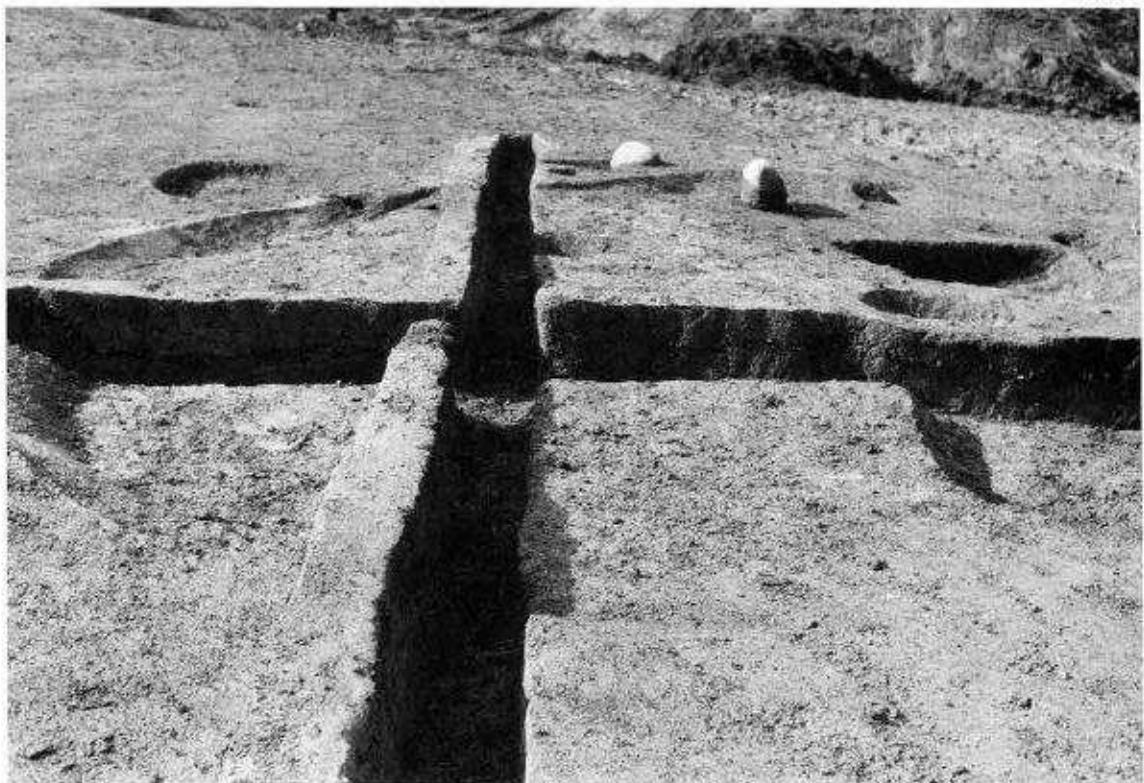
西側沢部土層断面（南から）



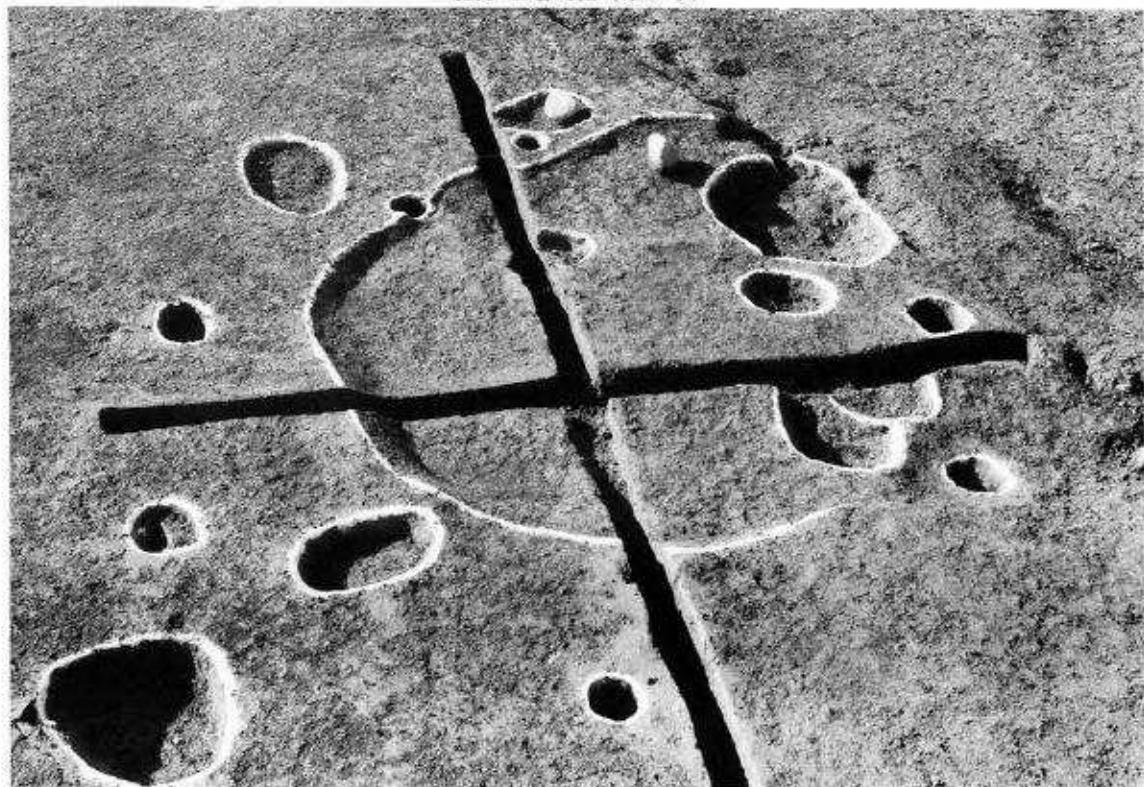
西側沢部完掘状態（南から）



北側地区完掘状態（南から）



SI39 土層断面（東から）



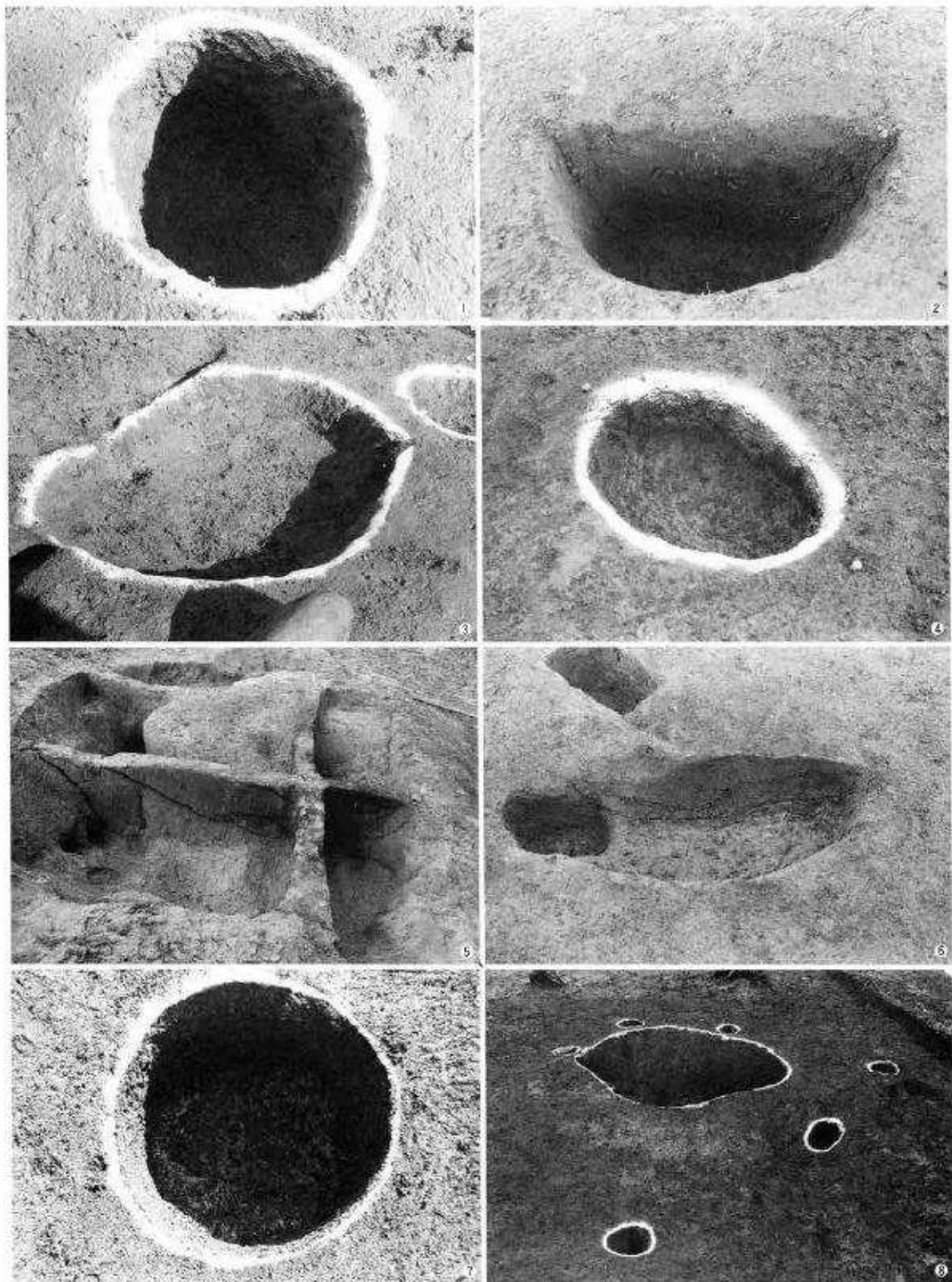
SI39 完掘状態（東から）



SK44 完成状態（南から）



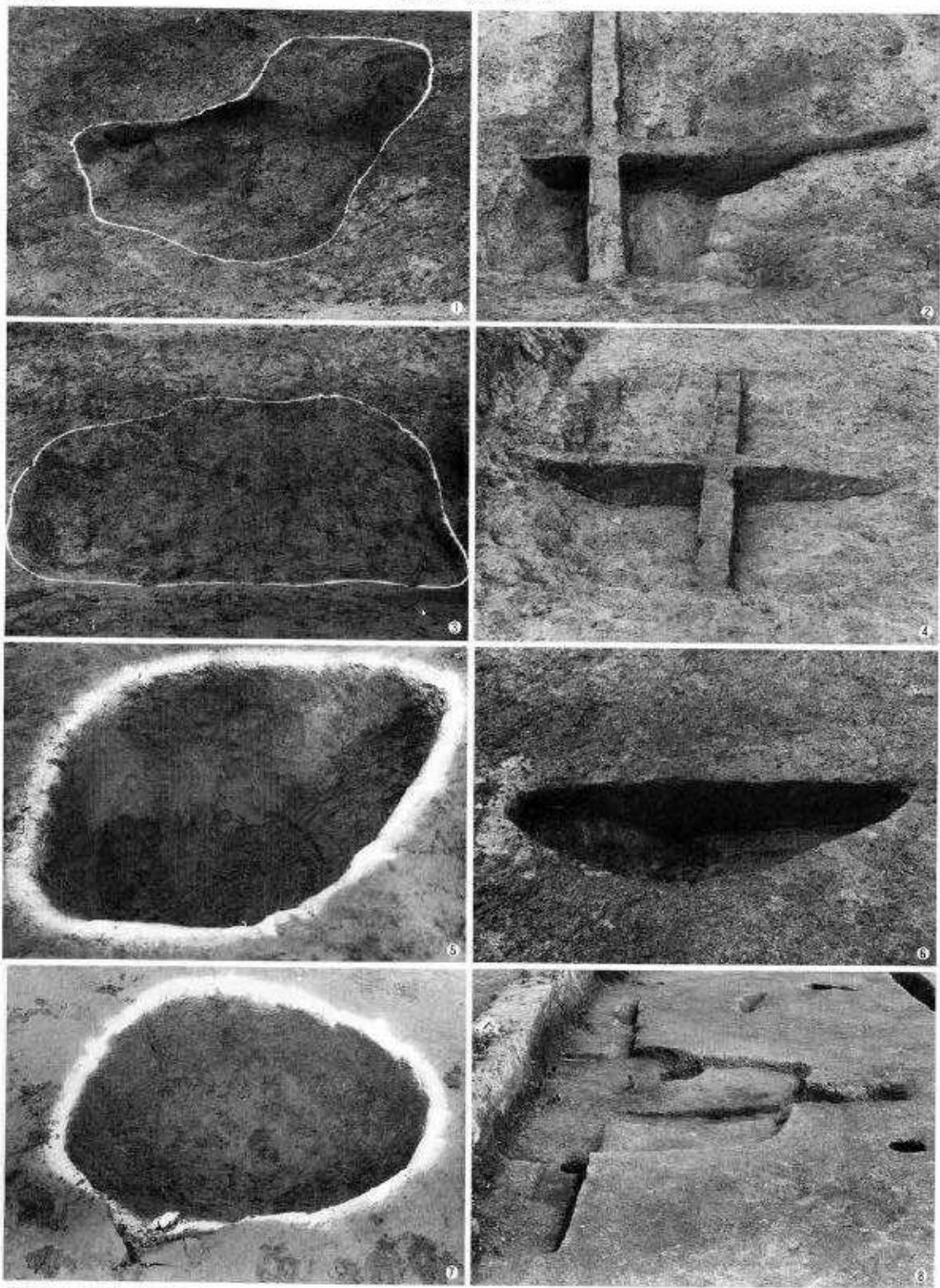
SI39 調査風景



① SK45 完掘（西から） ② SK45 土層断面（西から） ③ SK41 完掘（南から）
 ④ P4 完掘（西から） ⑤ SK20 土層断面（東から） ⑥ SK42 土層断面（南から）
 ⑦ SK33 完掘 ⑧ SX06(楓倒木)周辺の状態

図版8

三 塚 原 遺 墓



① SK18 完掘（西から）

④ SK19 土層断面（北から）

⑦ SK02 完掘（東から）

② SK18 土層断面（西から）

⑤ SK40 完掘（南から）

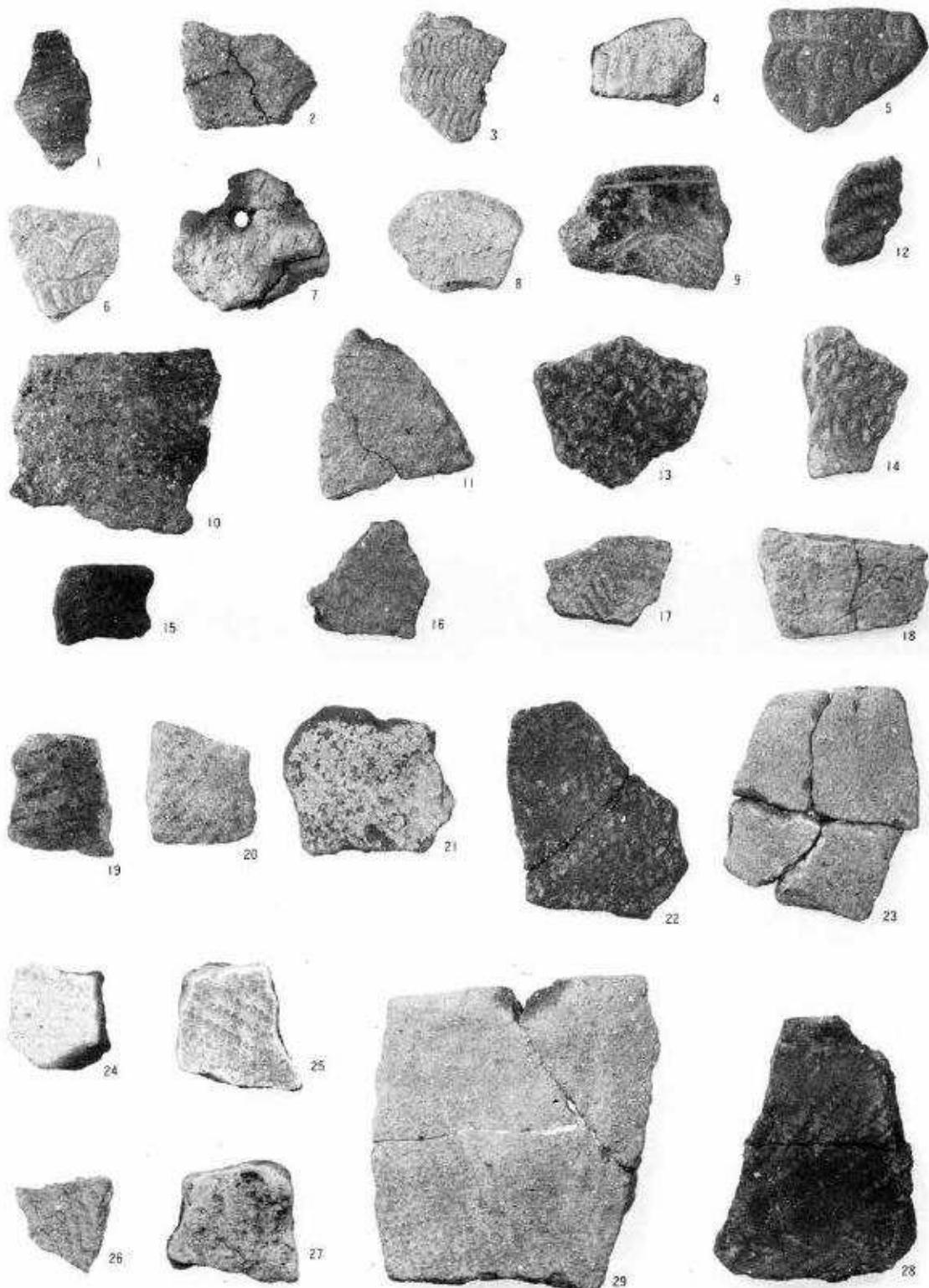
⑧ SX61 完掘（南から）

③ SK19 完掘（西から）

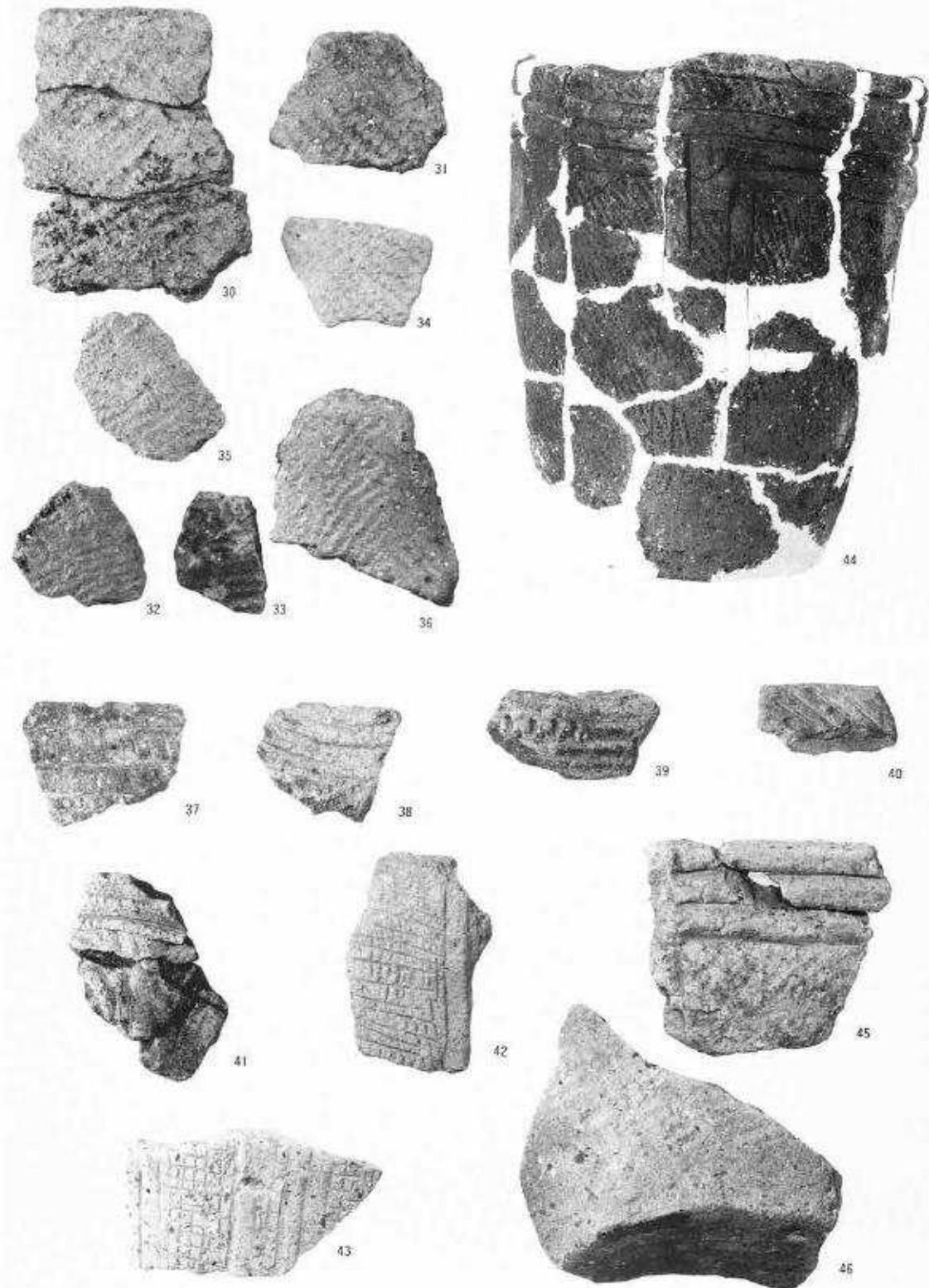
⑥ SK40 土層断面（南から）

三屋原遺跡

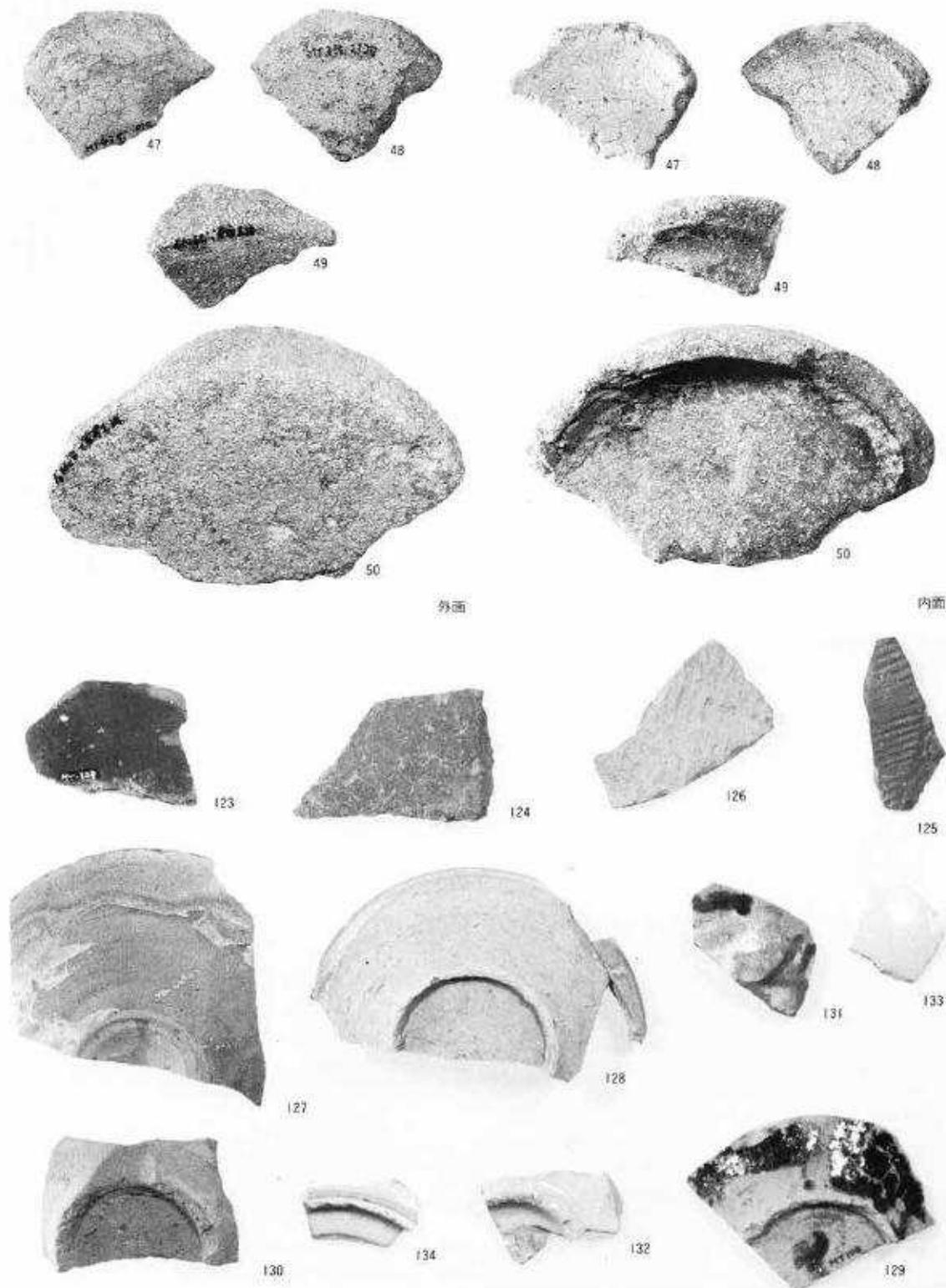
図版9



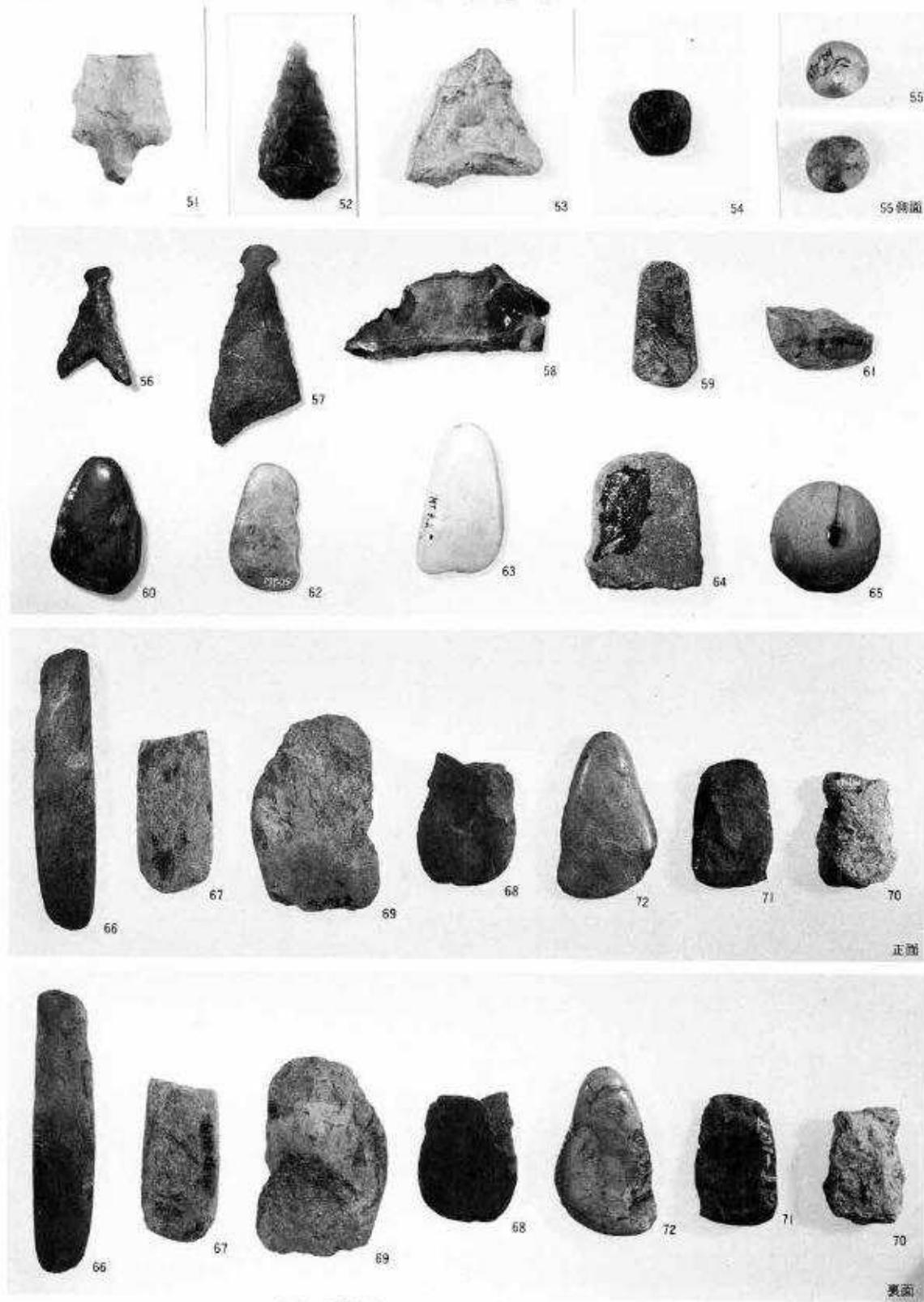
出土縄文土器(1) ($S = 1/2$)



出土縄文土器(2) (44はS=1/25、ほかはS=1/2)



出土縄文土器(3) 近世陶磁器ほか (S=1/2)



出土石器(1) (51~55は S = 1/1, ほかは S = 1/2)



73



74



75

正面



73

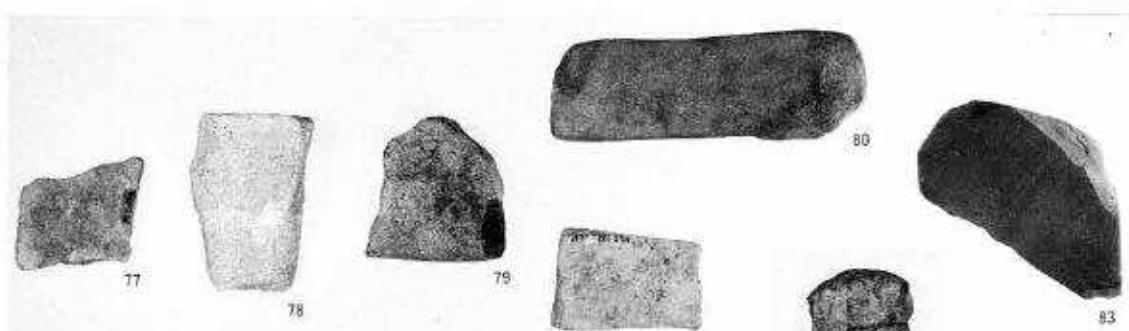


74



75

裏面



77

78

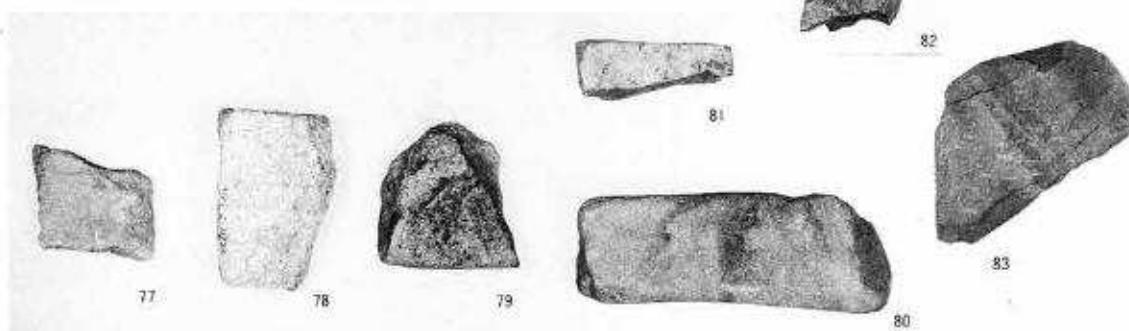
79

80

83

81

正面



77

78

79

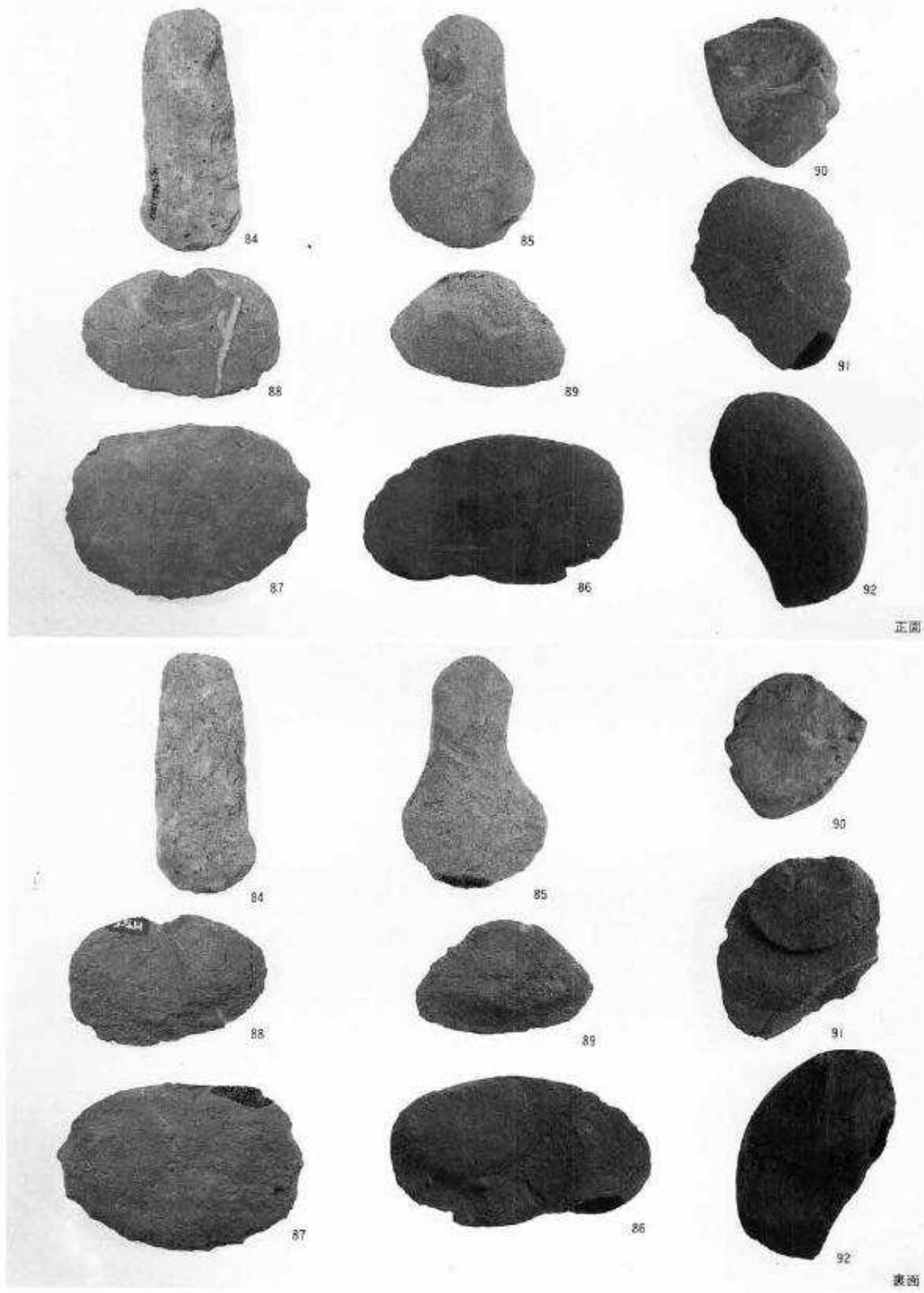
81

83

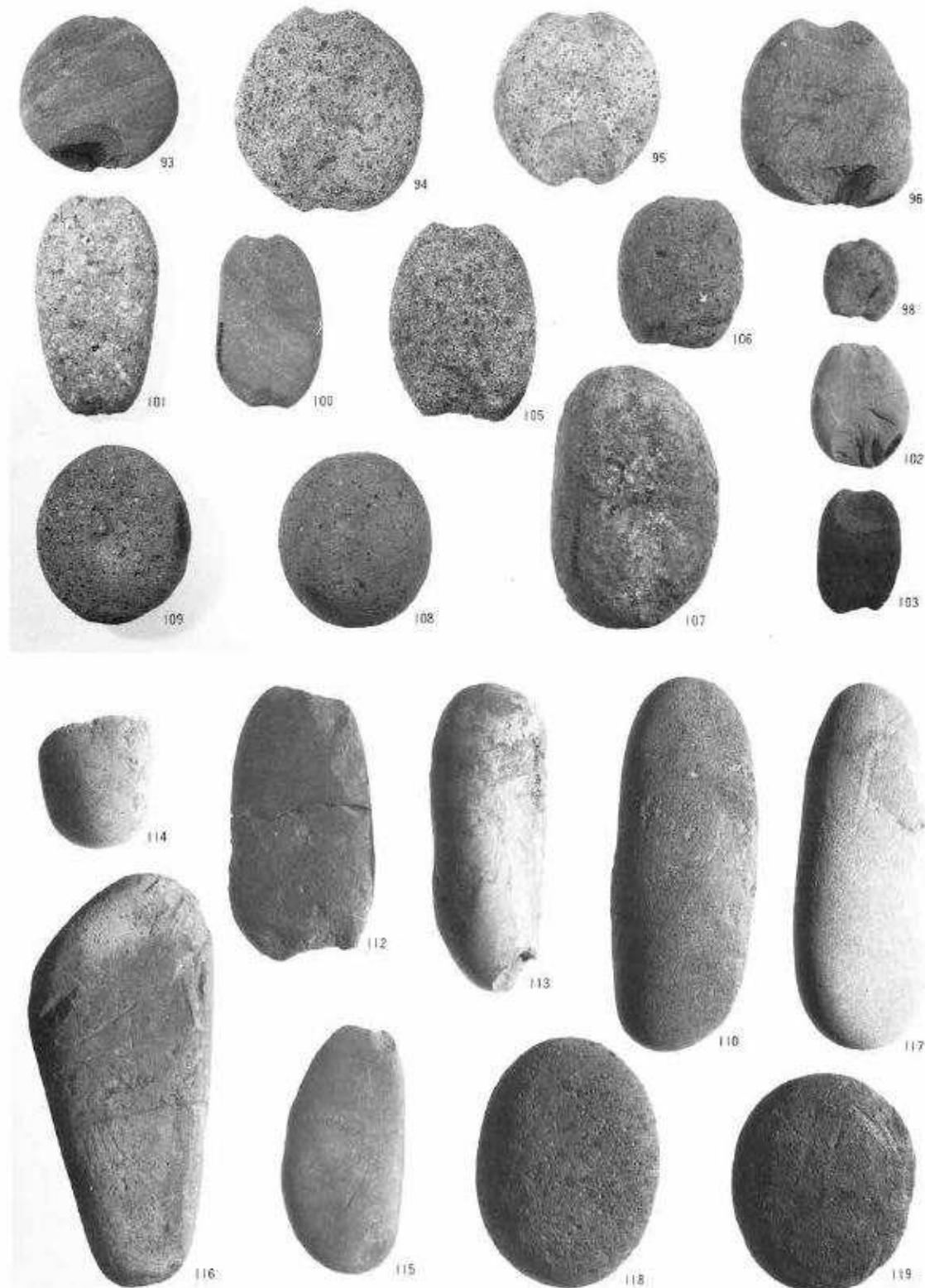
80

裏面・側面

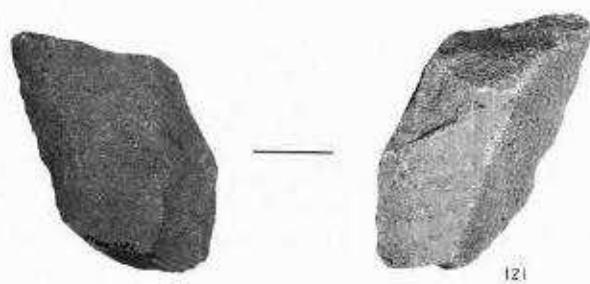
出土石器(2) (S=1/3)



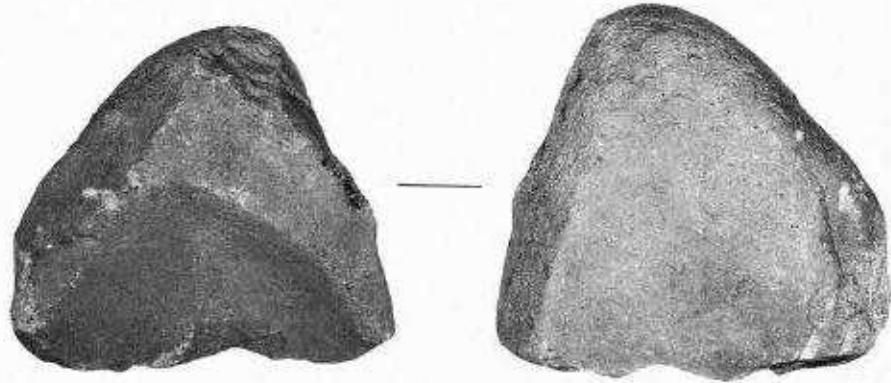
出土石器(3) (S=1/3)



出土石器(4) (S = 1/3)



121



120



出土石器(5) (S = 1/4)



調査前の状態（東から）

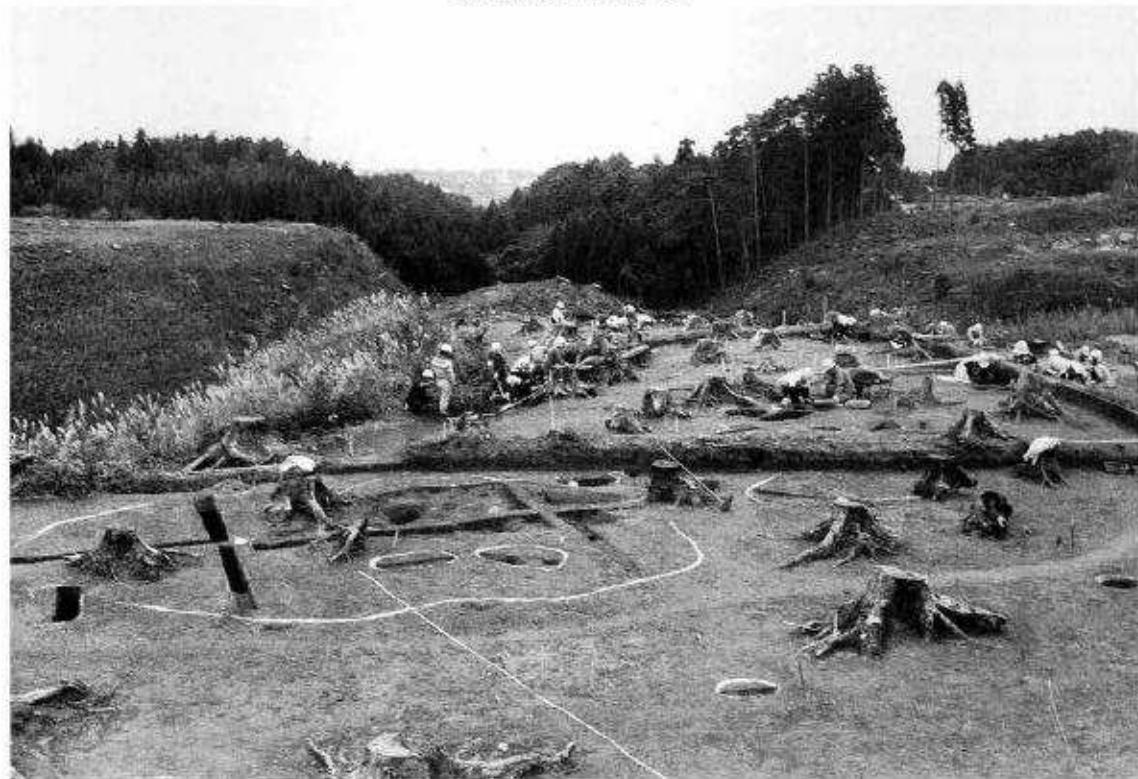


完掘状態（東から）

三 星 原 B 遺 踪



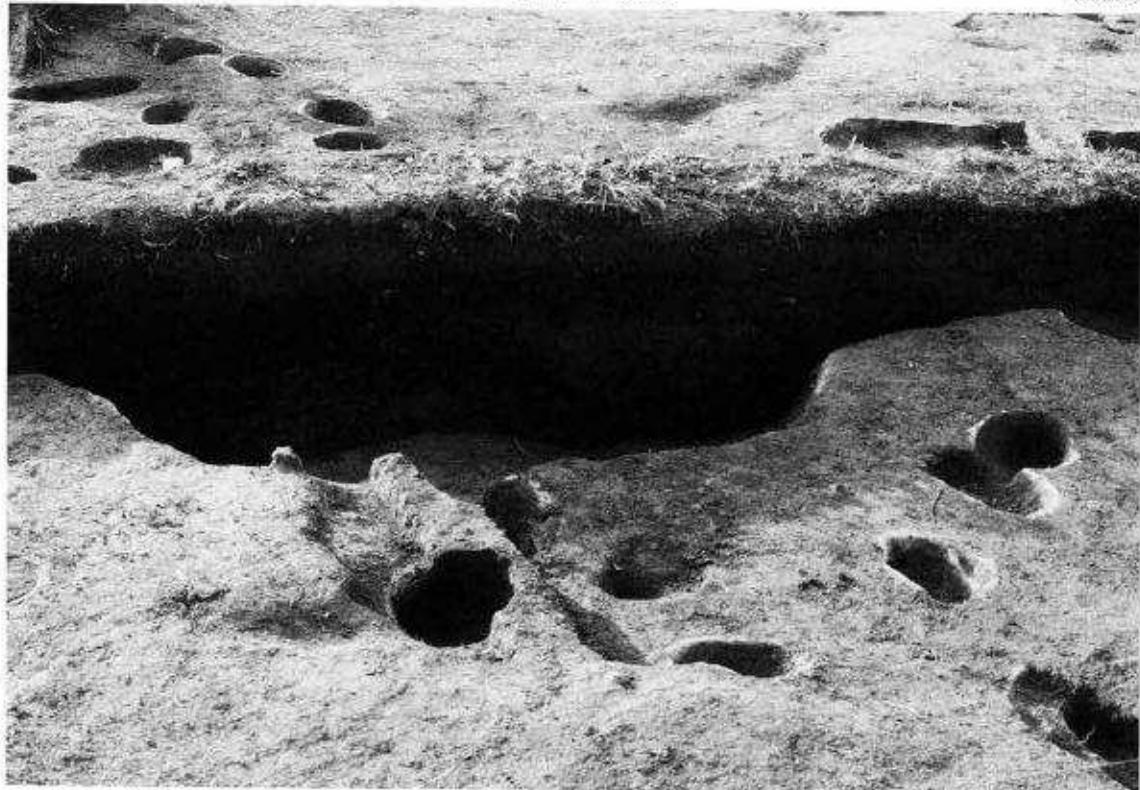
完掘状態東側（南から）



完掘状態西側（南から）

三屋原B遺跡

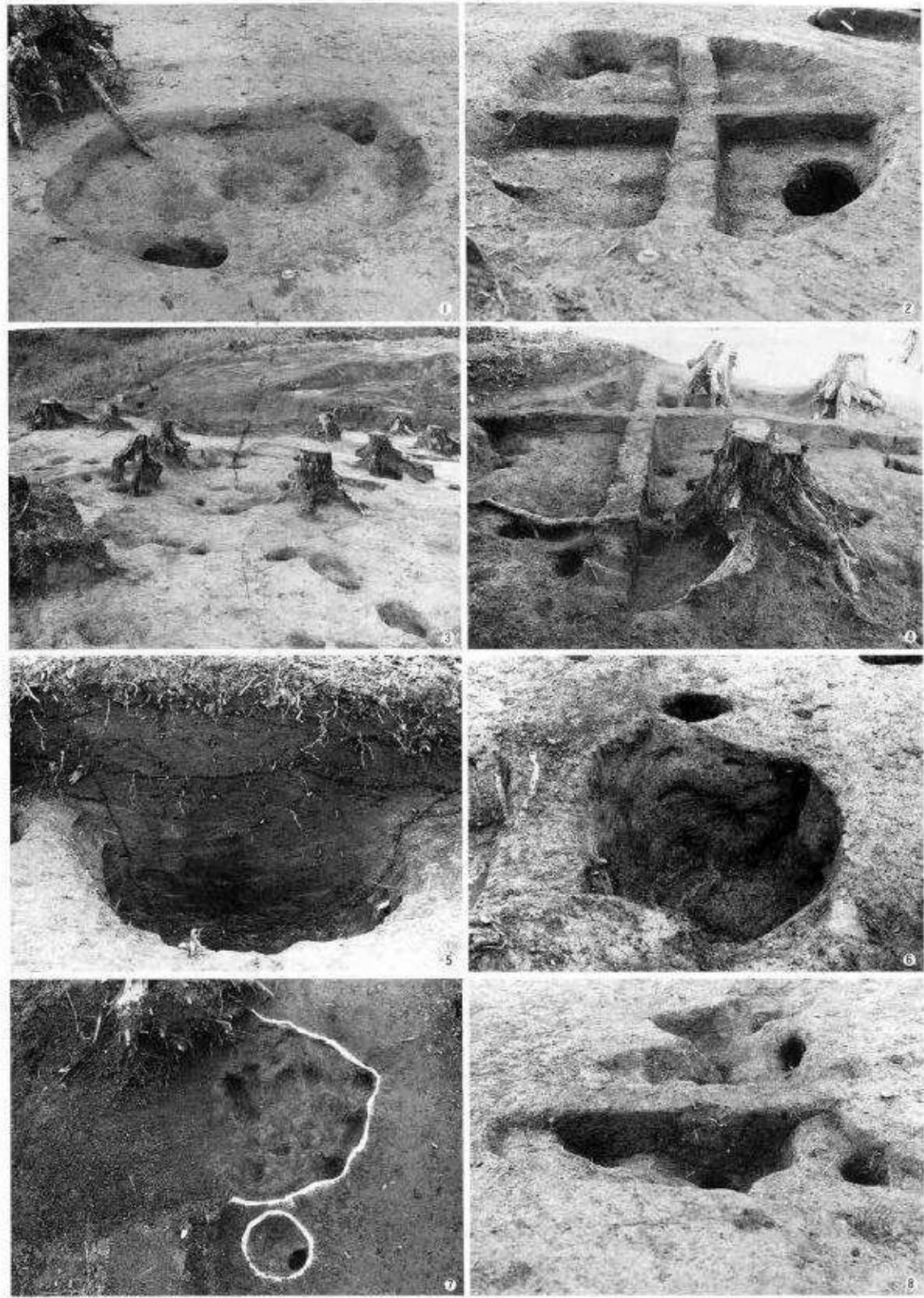
図版19



SI17 土層断面（東から）



SI17 完掘状態（南東から）



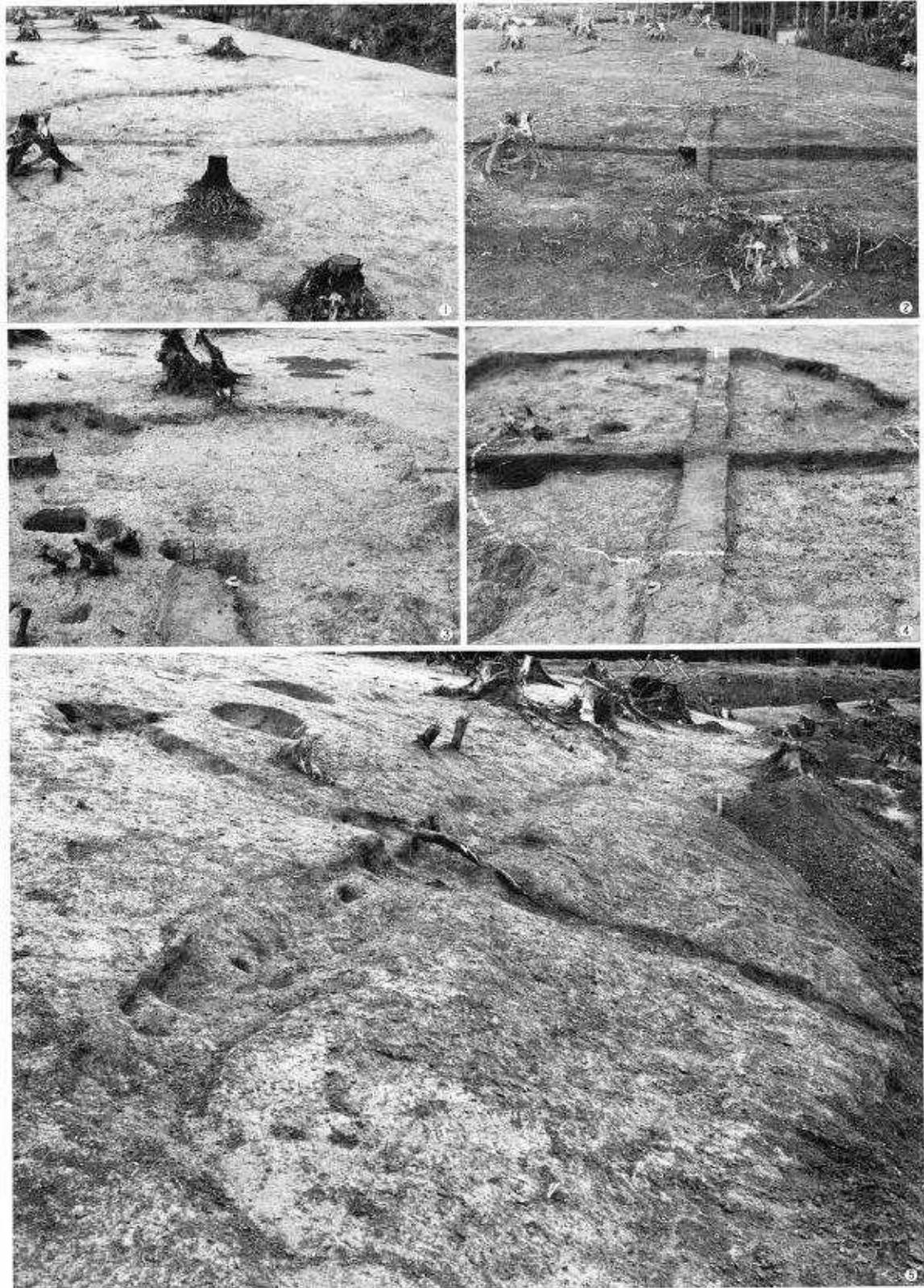
① SI08 完掘（北から）
④ SK10 完掘（西から）
⑦ SK09 完掘（南から）

② SI08 土層断面（北から）
⑤ SK25 土層断面（東から）
⑧ SX20(風倒木痕) 土層断面（南から）

③ SK10 土層断面（南から）
⑥ SK25 完掘（北から）

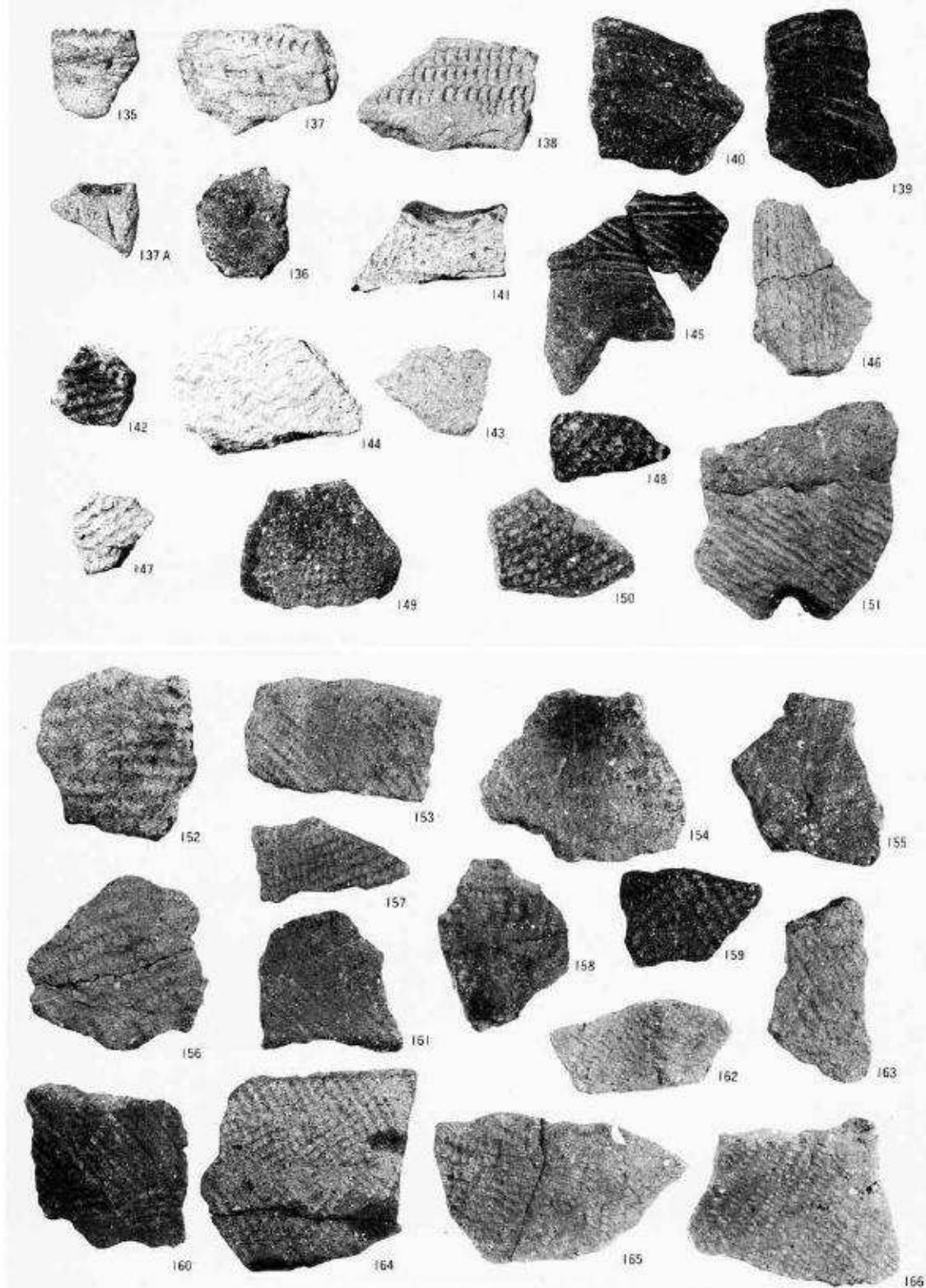
三屋原B遺跡

図版21

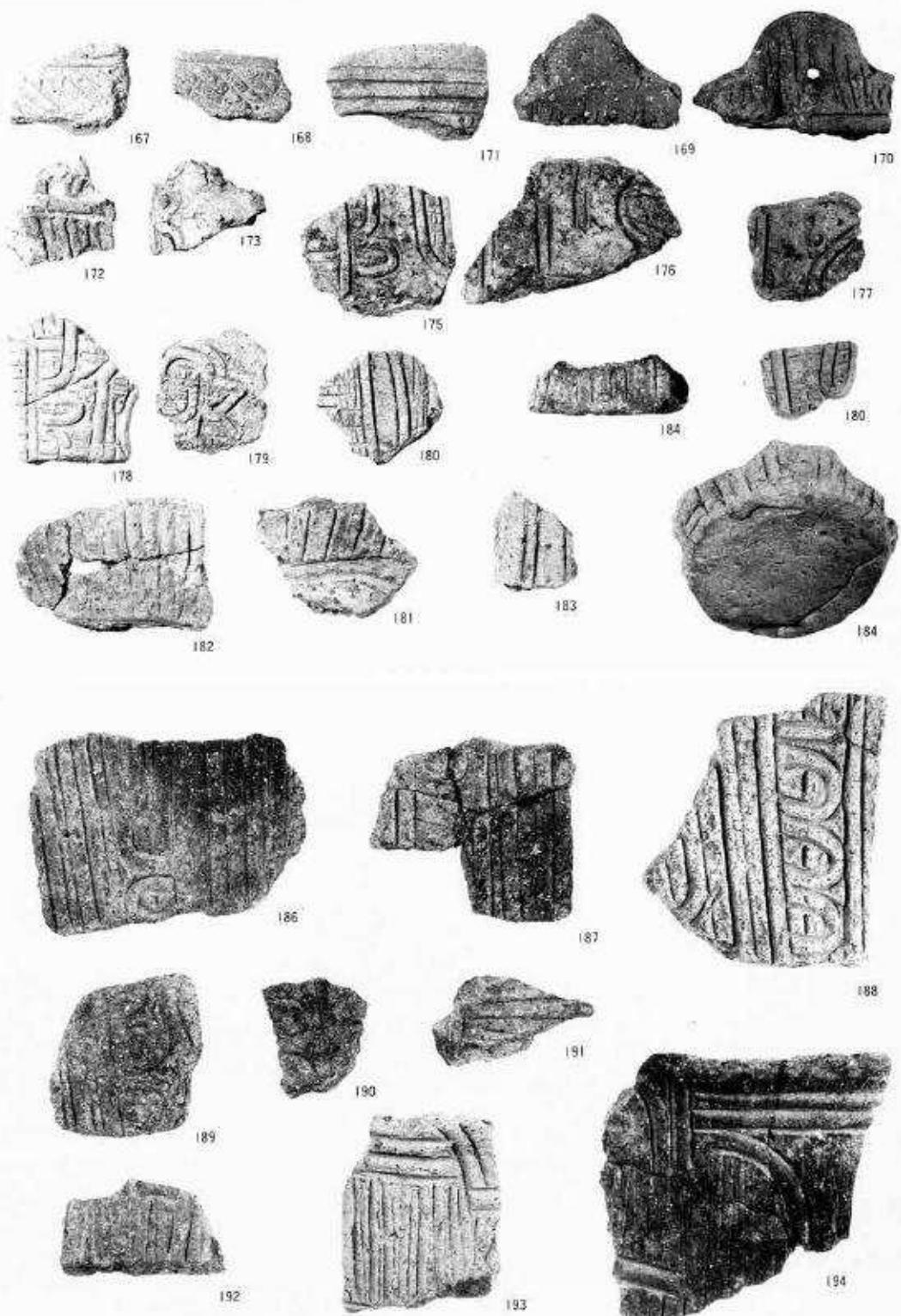


① SK21 完堀（西から）
④ SI26 土層断面（南から）

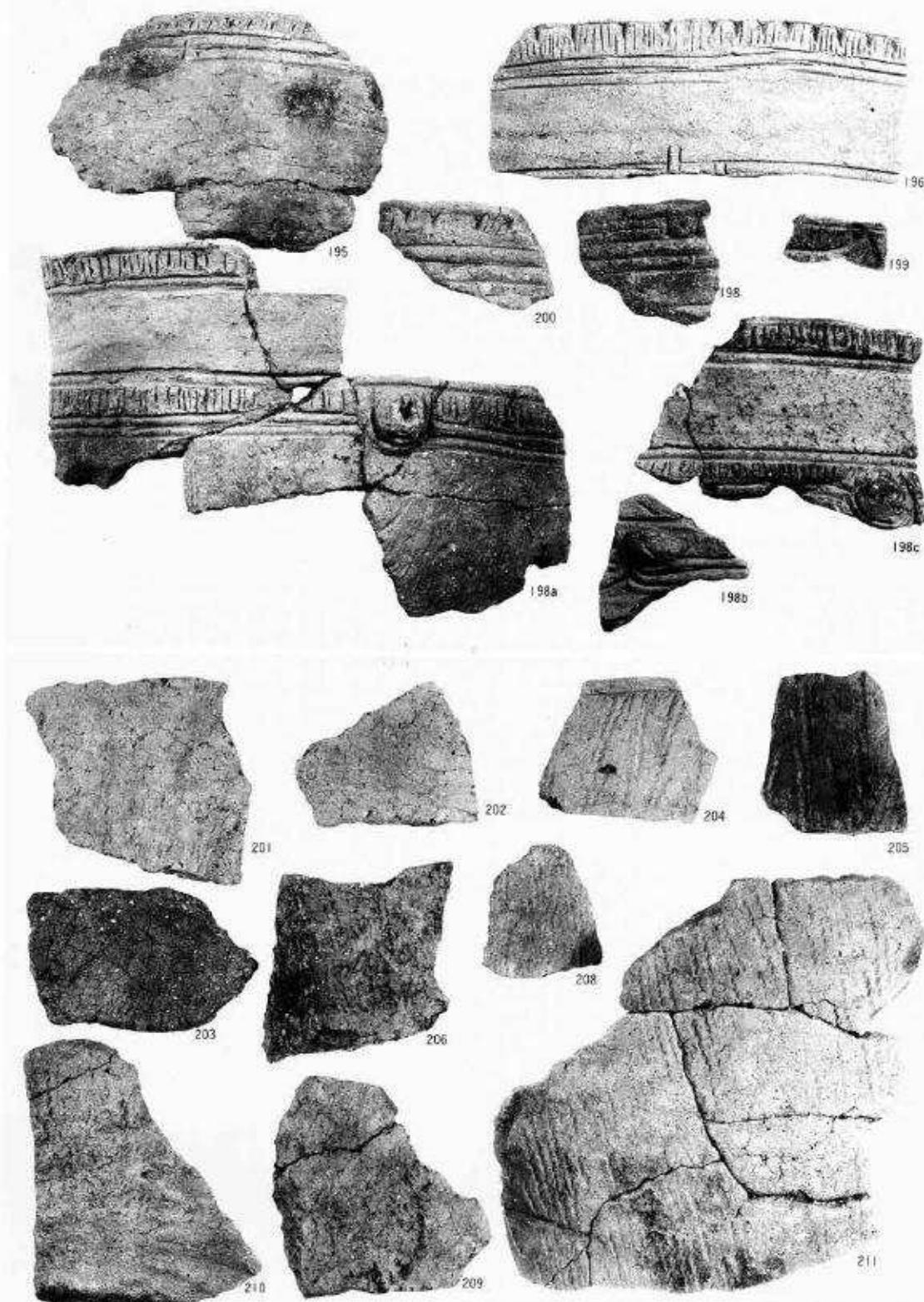
② SK21 土層断面（東から）
⑤ SD40・SD41 完堀（南から）
③ SI26 完堀（南から）



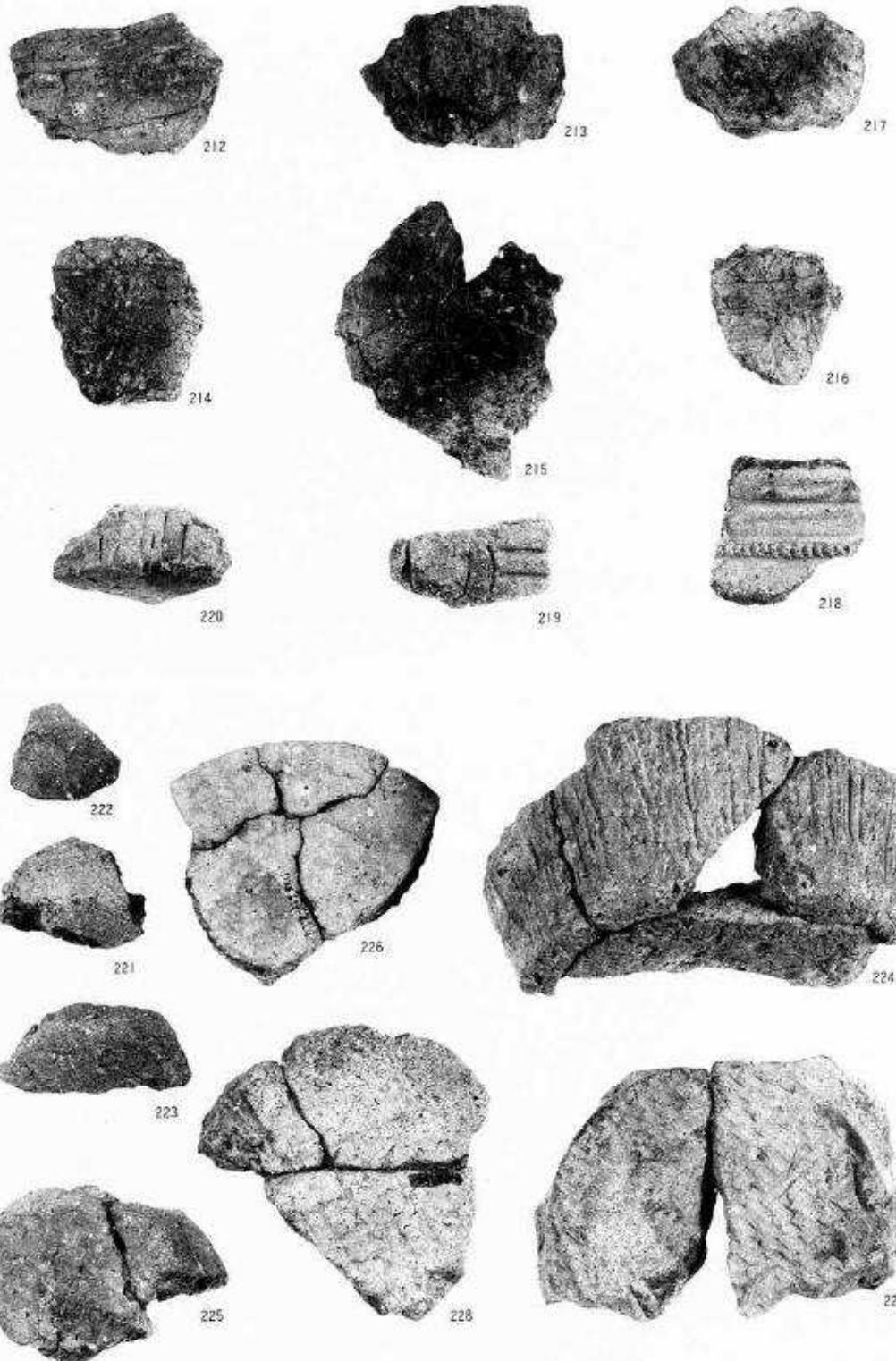
出土繩文土器(1) (S=1/2)



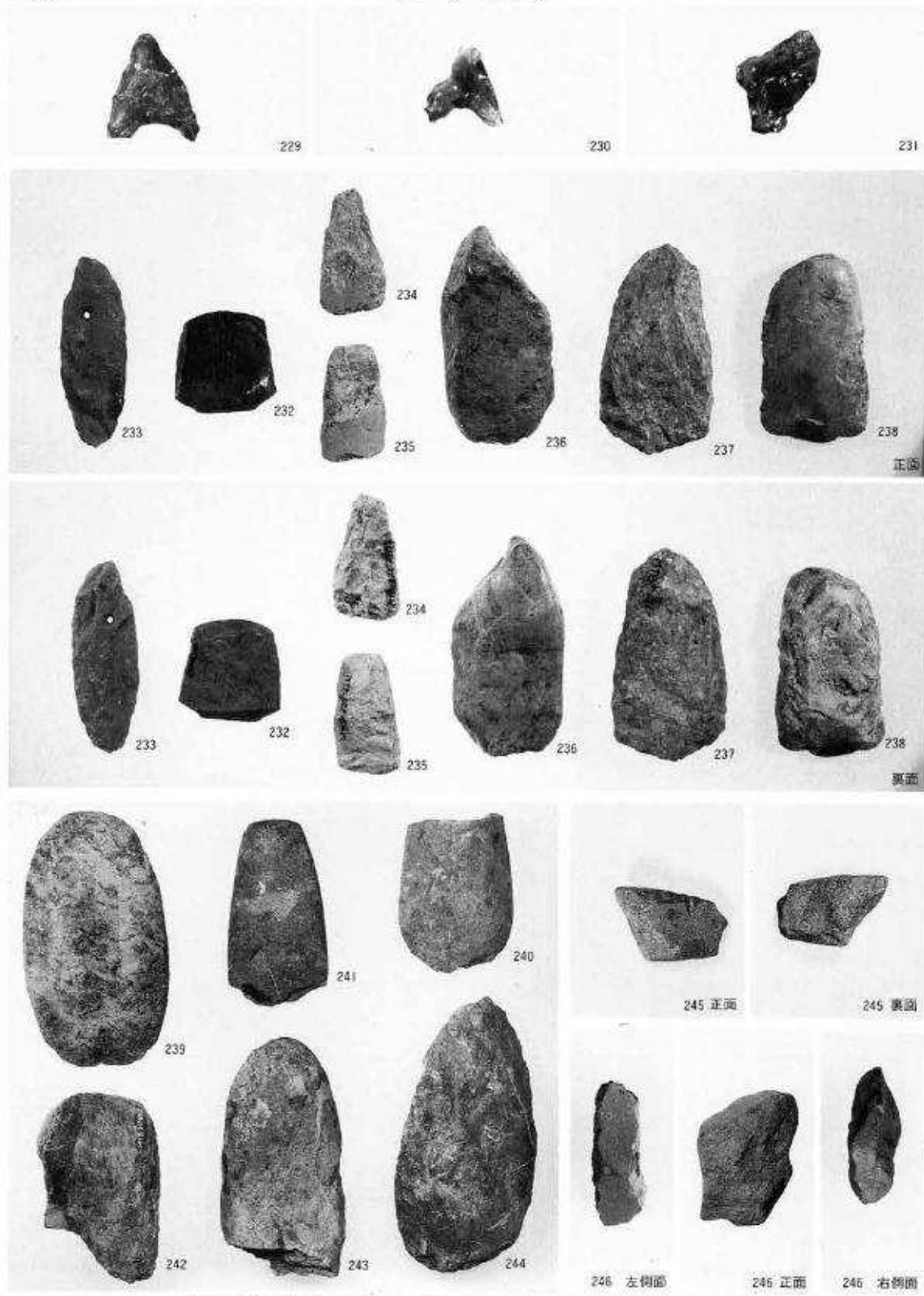
出土織文土器(2) (S = 1/2)



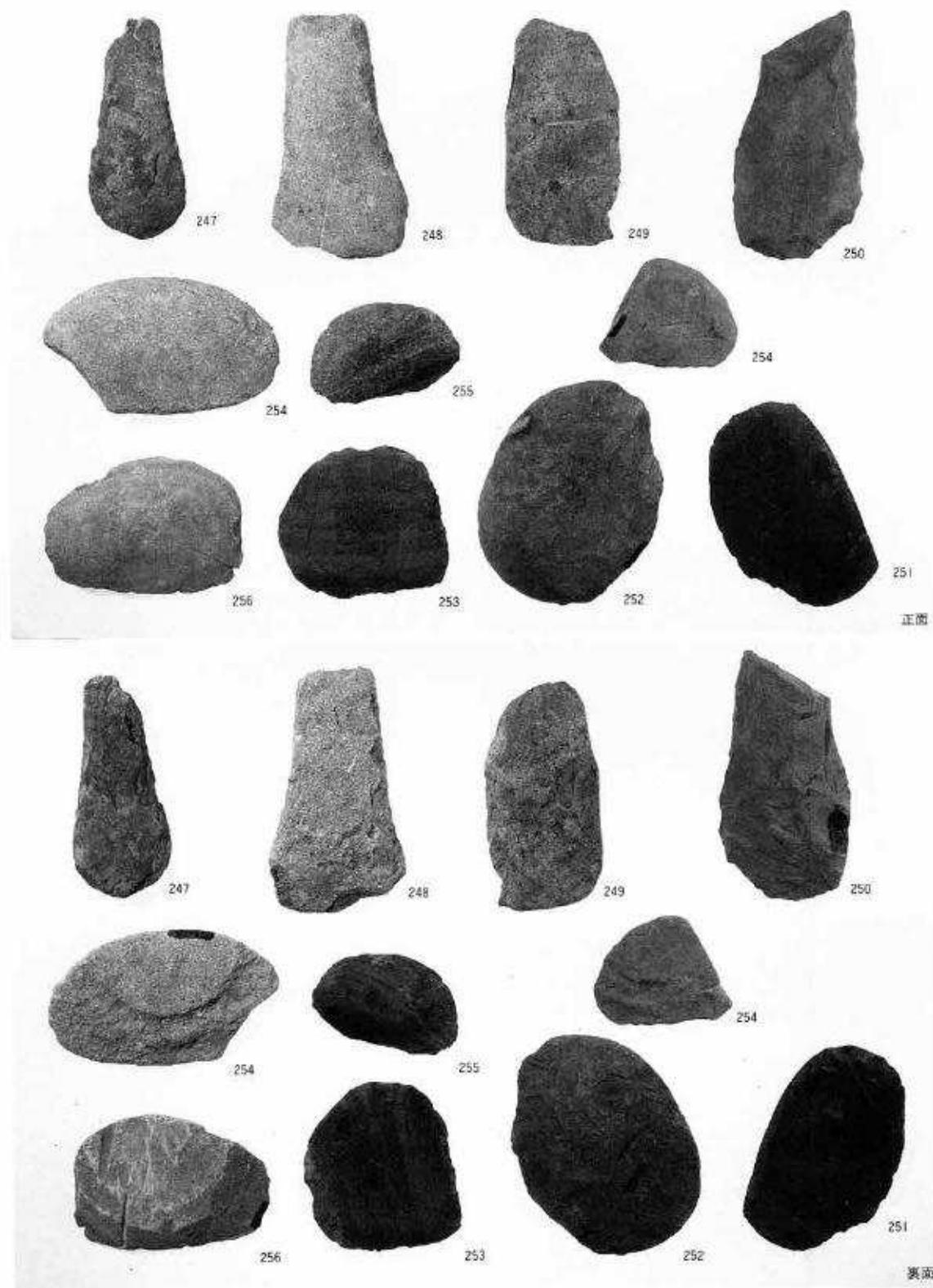
出土縄文土器(3) (S=1/2)

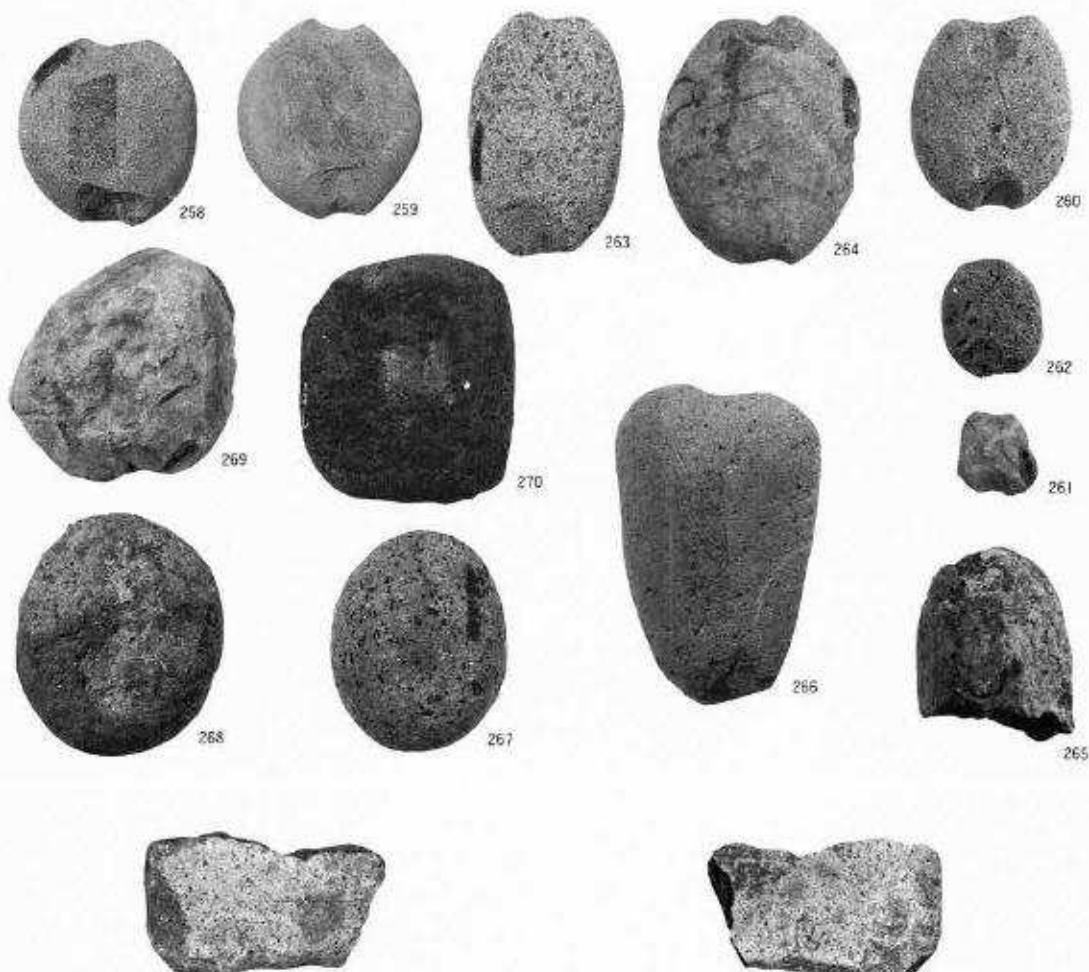


出土縄文土器(4) (S=1/2)



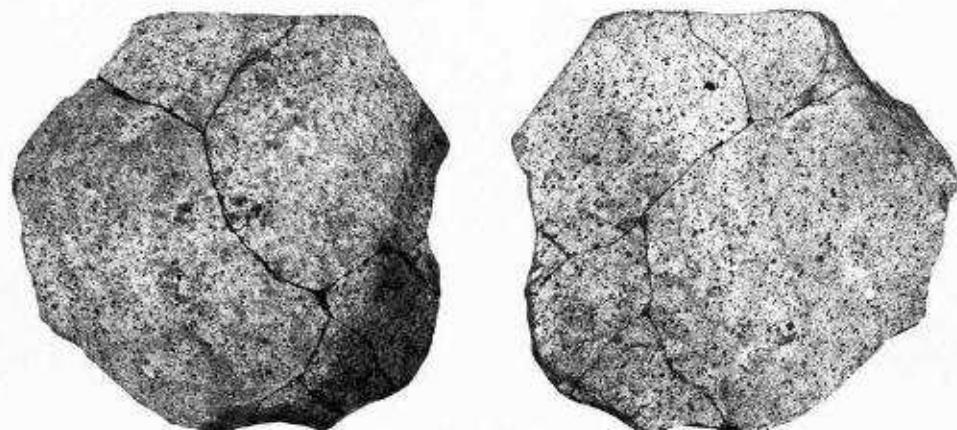
出土石器(1) (229~231はS=1/1, ほかはS=1/3, 233~238はS=1/2)





272 正面

272 裏面

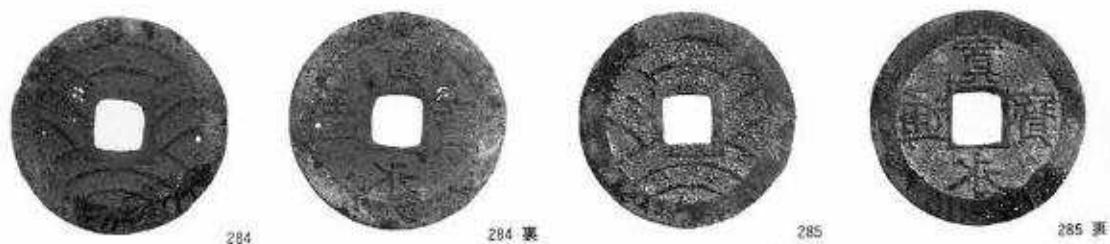


271

出土石器(3) (258-270は S = 1/3, 271・272は S = 1/4)

三屋原B遺跡

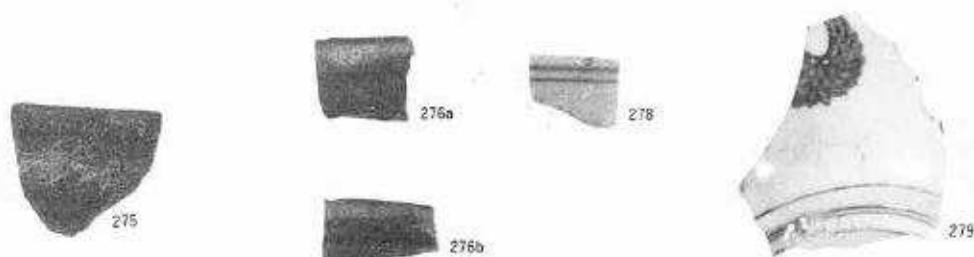
図版29



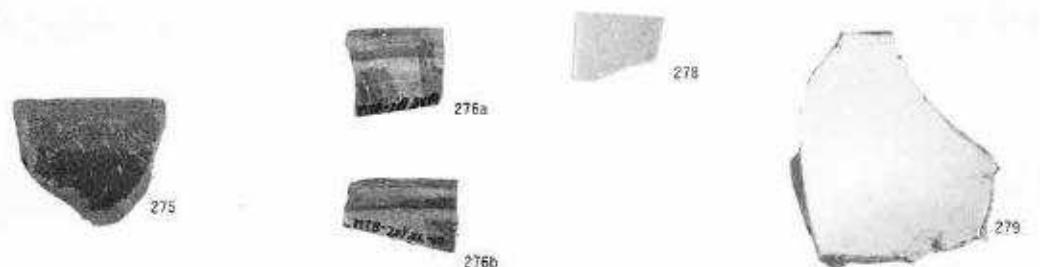
外面



内面

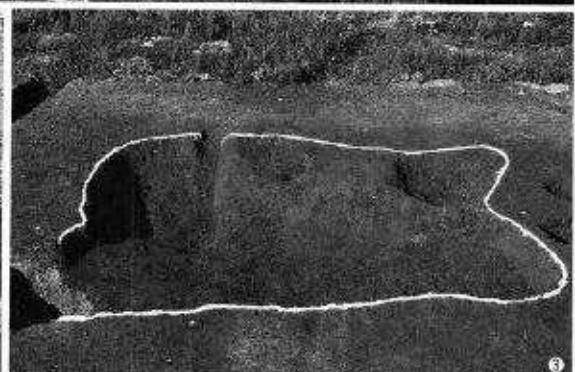


外面



内面

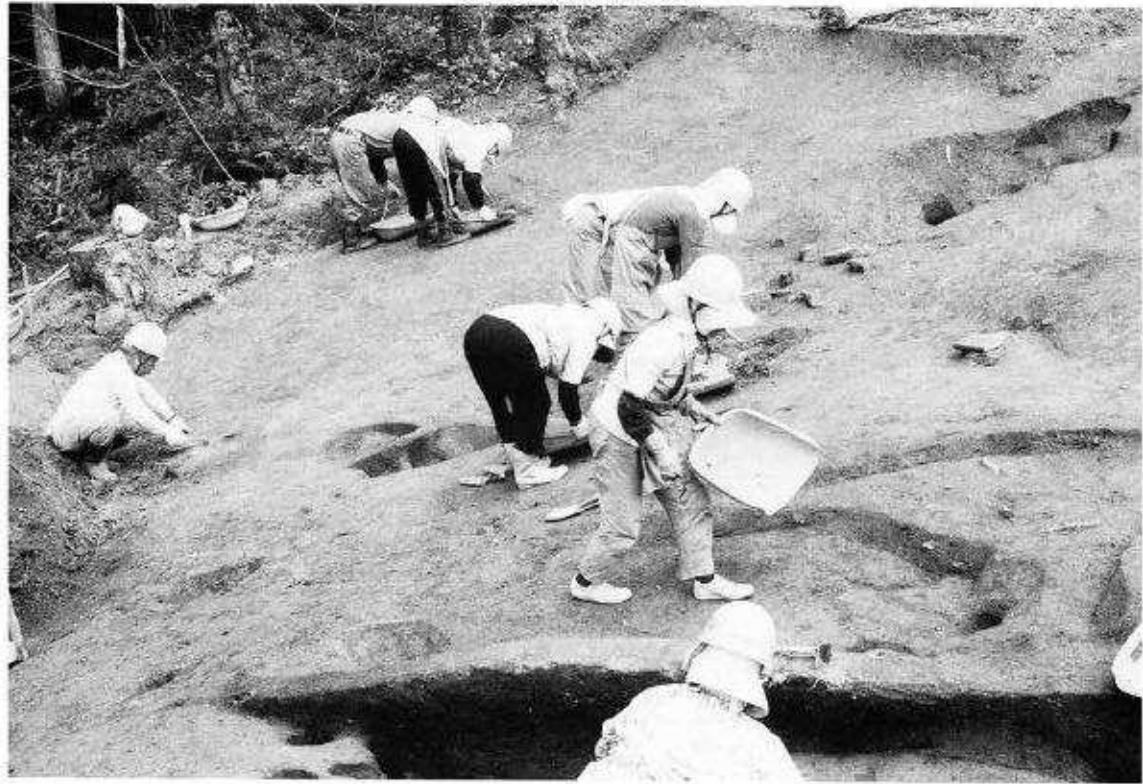
出土錢貨・近世陶磁器ほか (280~285は S = 1/1, ほかは S = 1/2)



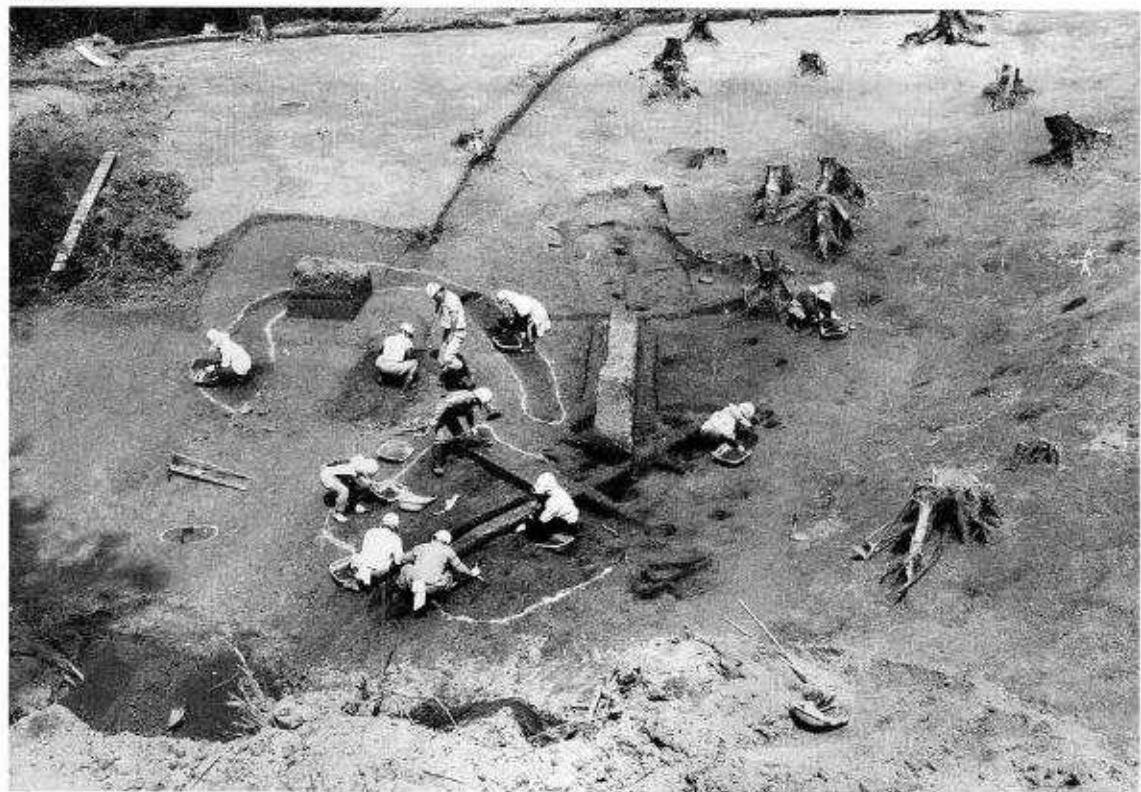
① 完掘状況（西から） ② SK01 土層断面（東から） ③ SK01 完掘（西から） ④ 出土石器（S=1/3）



発掘調査風景（北から）



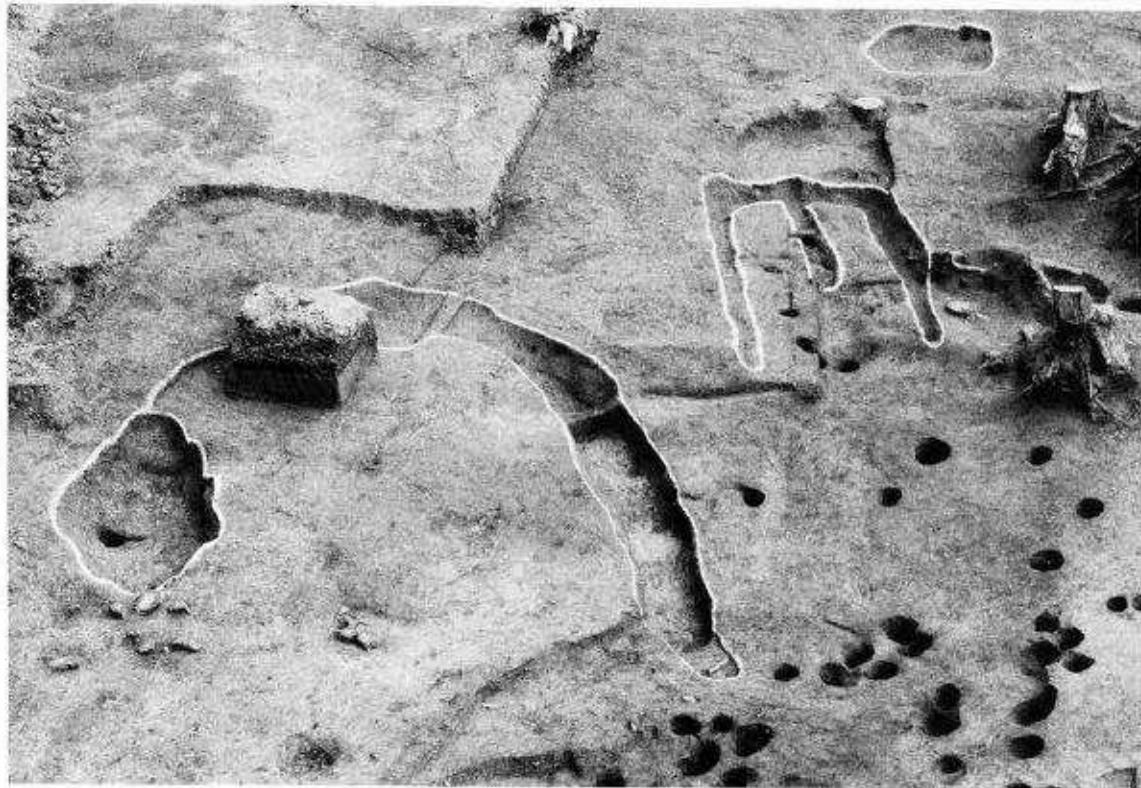
発掘調査風景（南から）



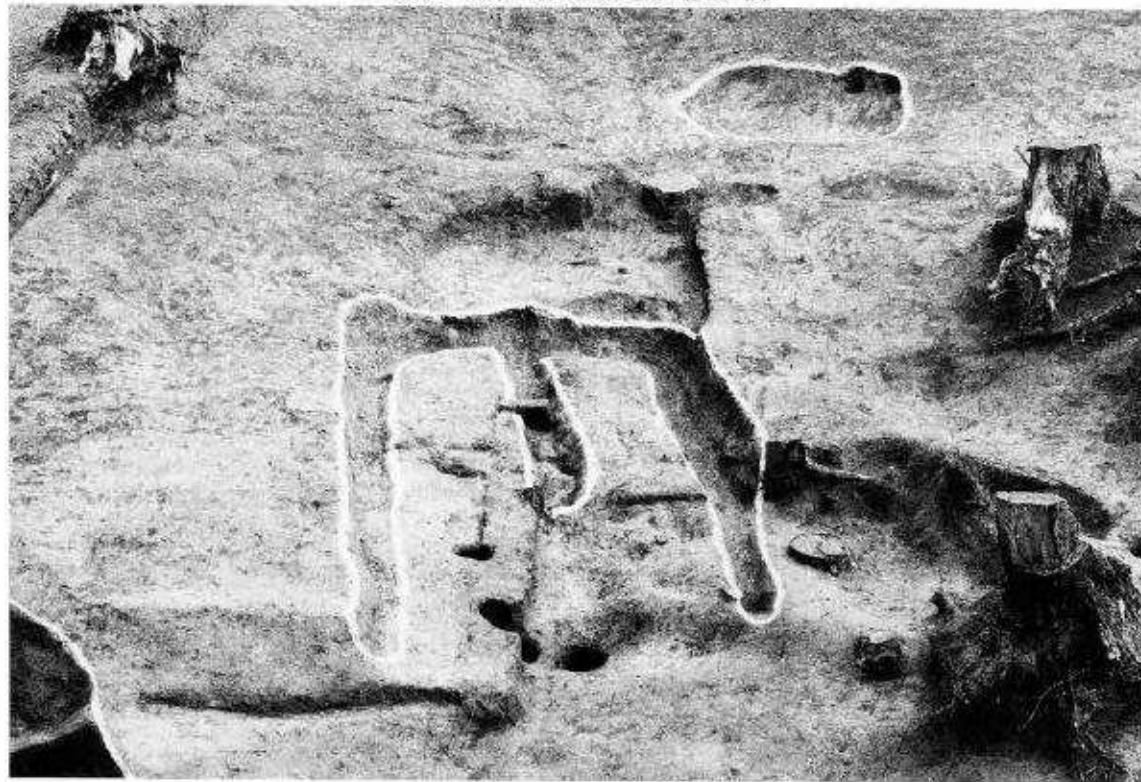
SK05 発掘風景（西から）



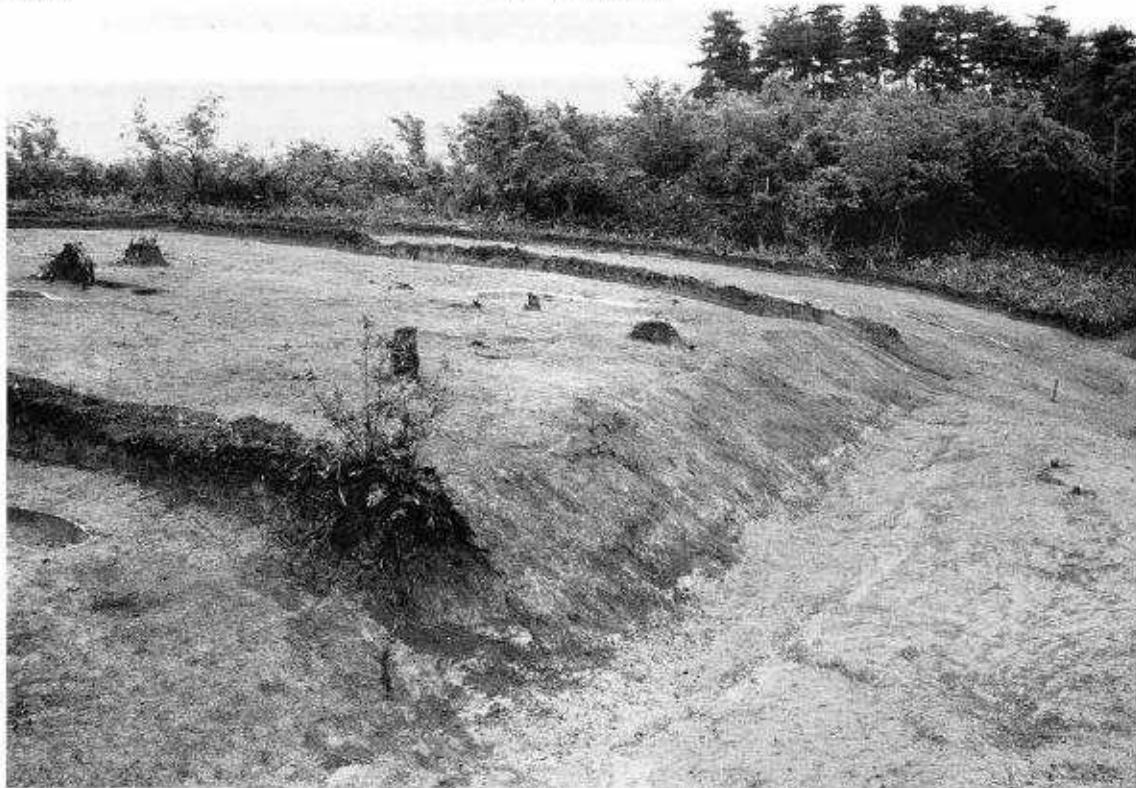
SK05 土層断面（北から）



SK05・SD37 周辺完掘状態（西から）



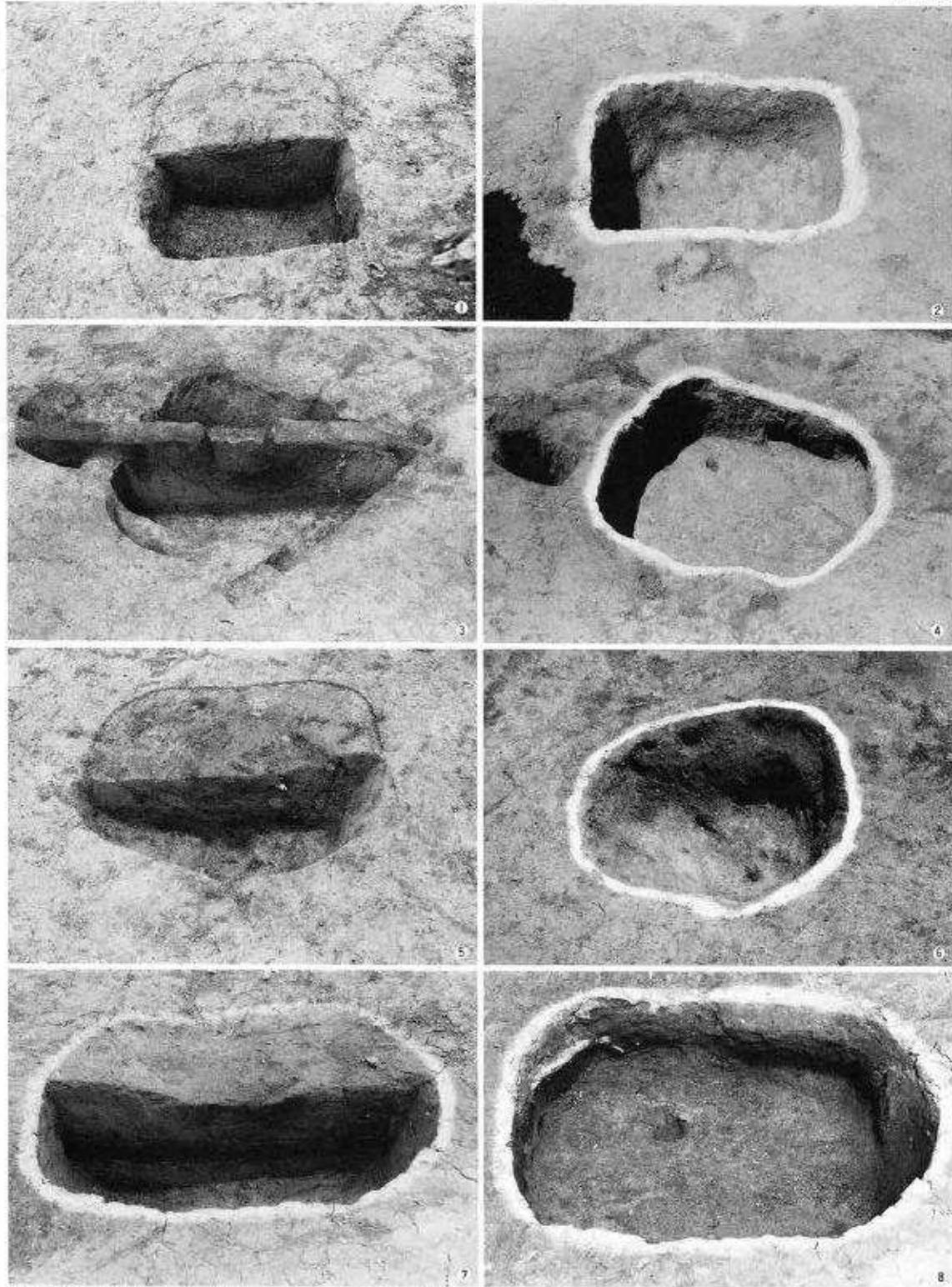
SK05 完掘状態（西から）



道路状遺構1 完掘（北から） 奥は長者ヶ原遺跡



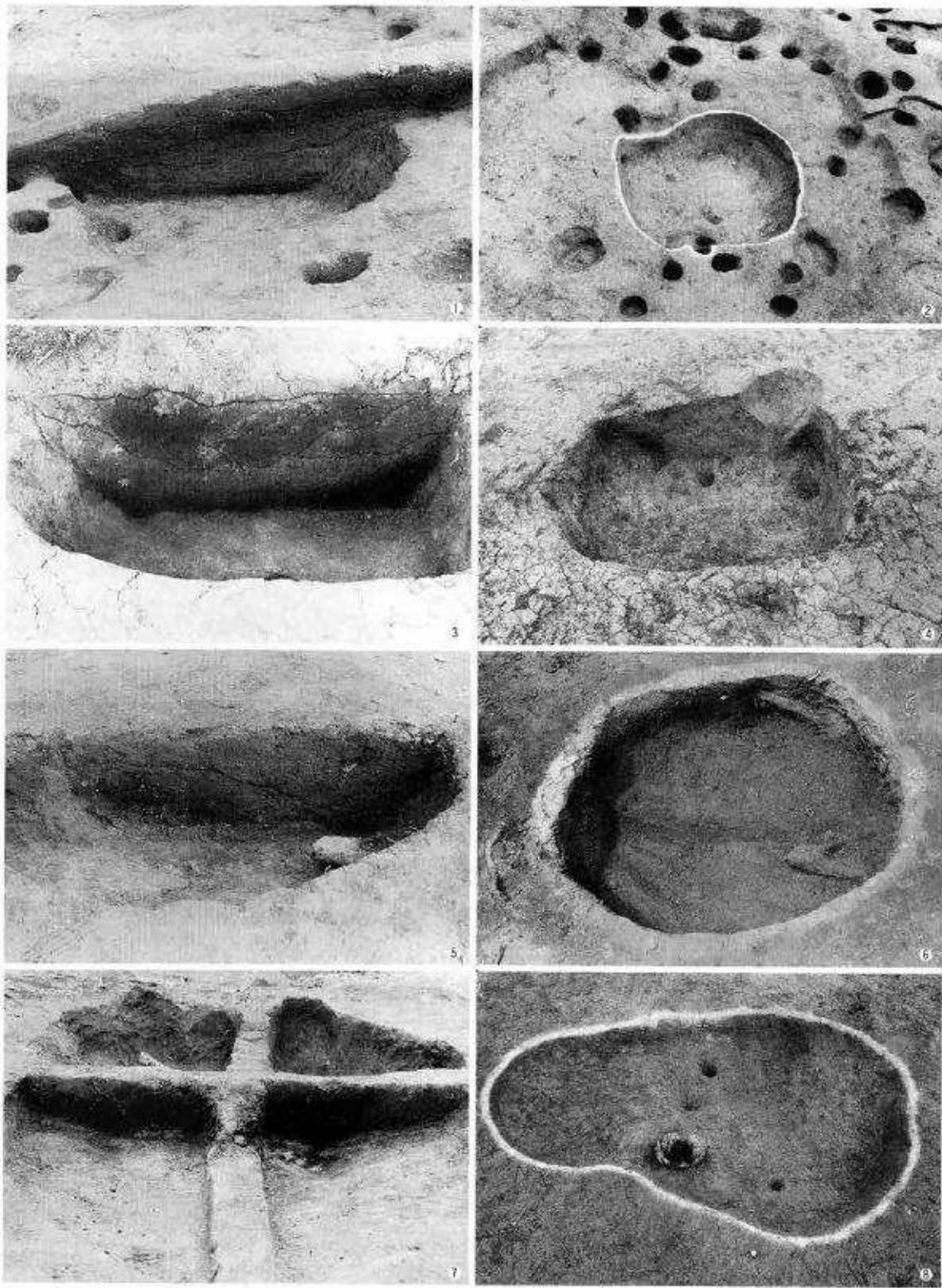
溝群 完掘（南から）



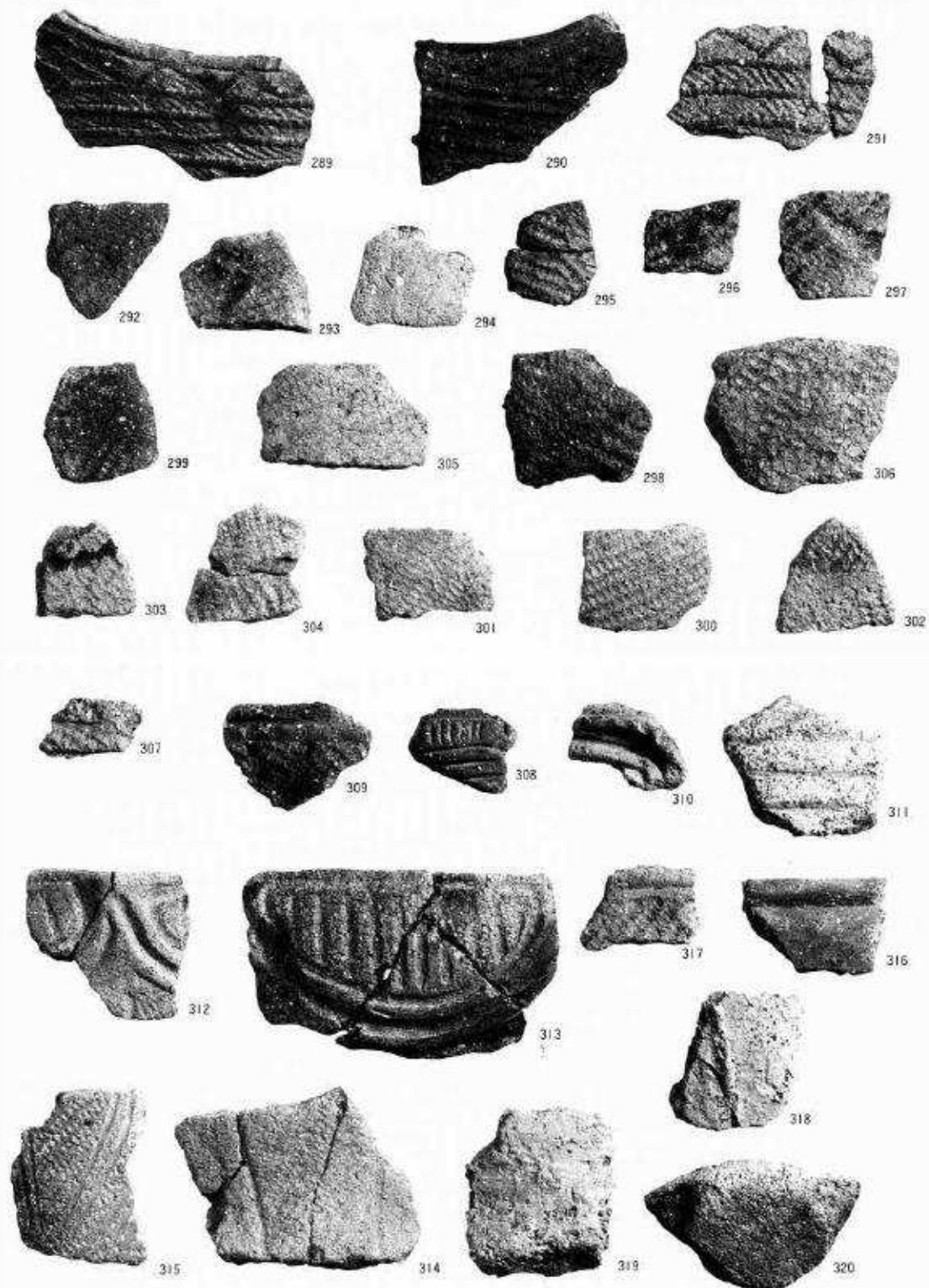
① SK39 土層断面（南から）
④ SK38 完掘（東から）
⑦ SK06 土層断面（西から）

② SK39 完掘（東から）
⑤ SK40 土層断面（西から）
⑧ SK06 完掘（西から）

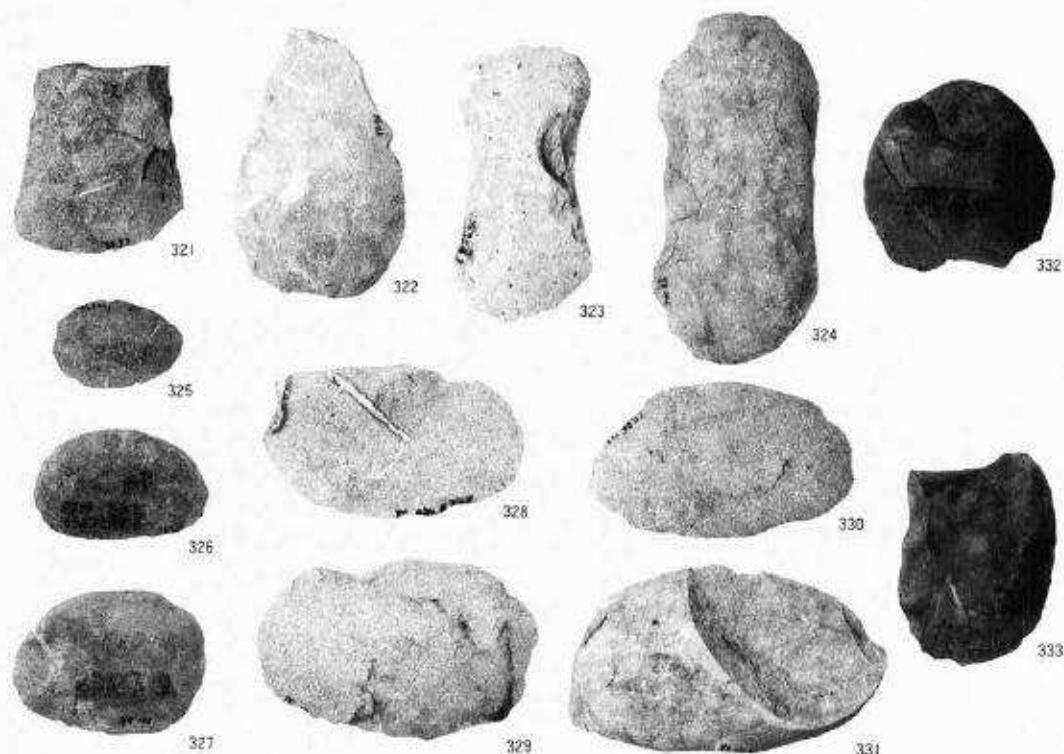
③ SK38 土層断面（東から）
⑥ SK40 完掘（西から）



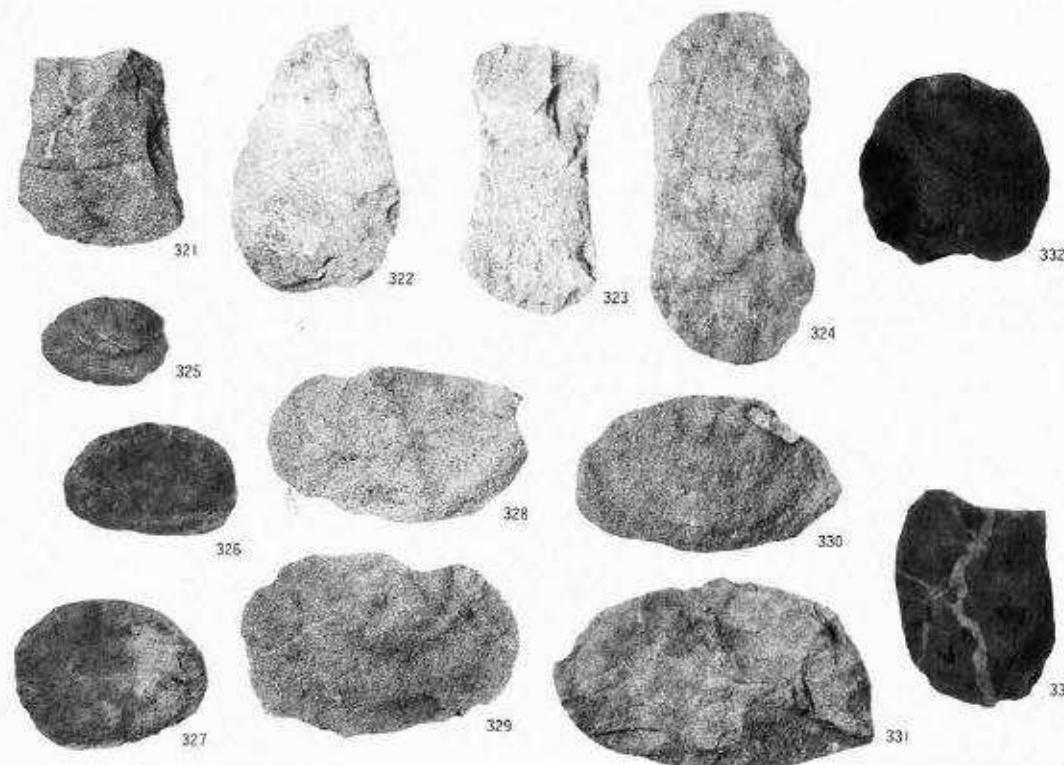
① SK35 土層断面（西から） ② SK35 完掘（西から） ③ SK04 土層断面（南から）
 ④ SK04 完掘（南から） ⑤ SK21 土層断面（南から） ⑥ SK21 完掘（南から）
 ⑦ SK03 土層断面（東から） ⑧ SK03 完掘（南から）



出土縄文土器 (S = 1/2)

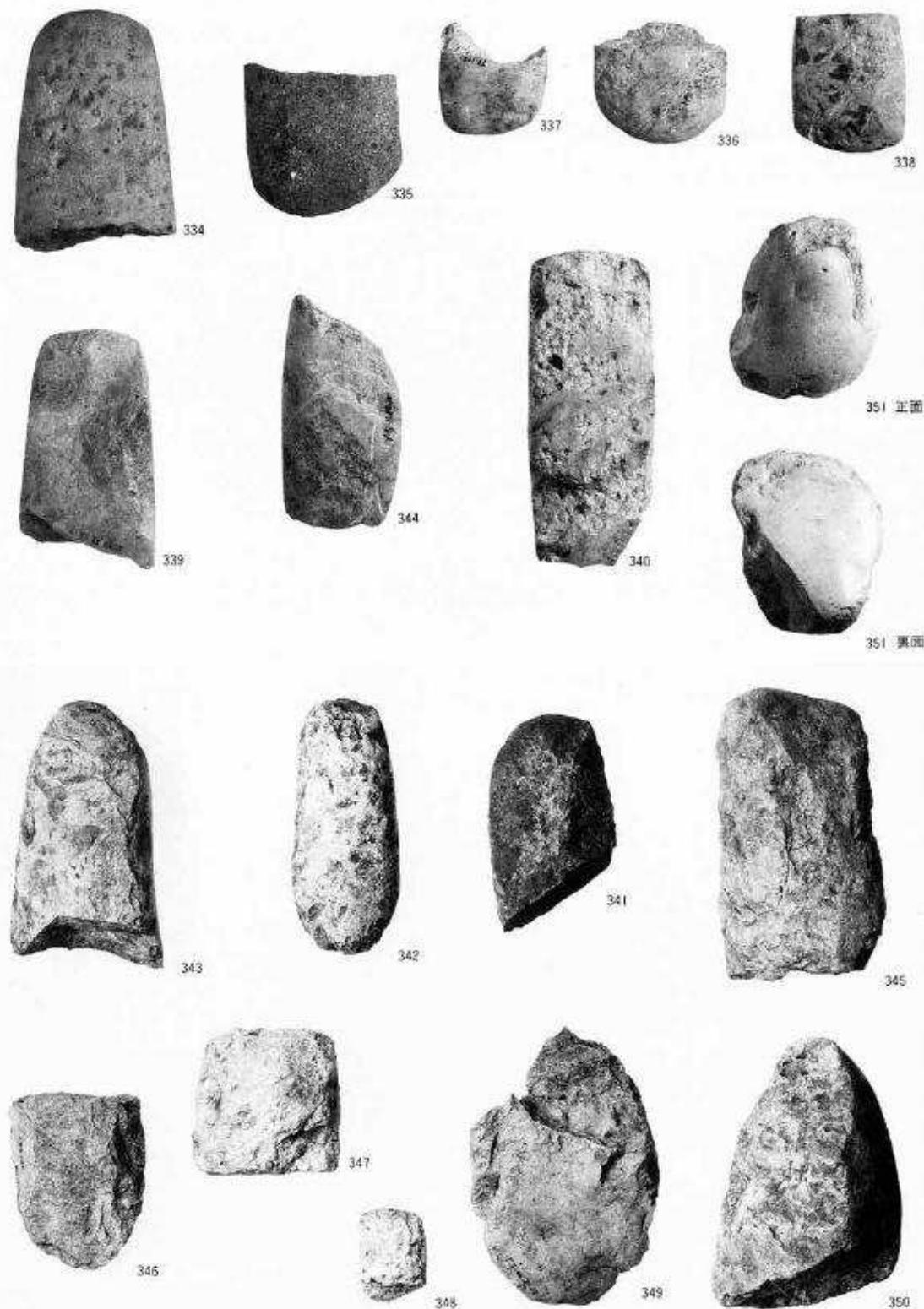


正面

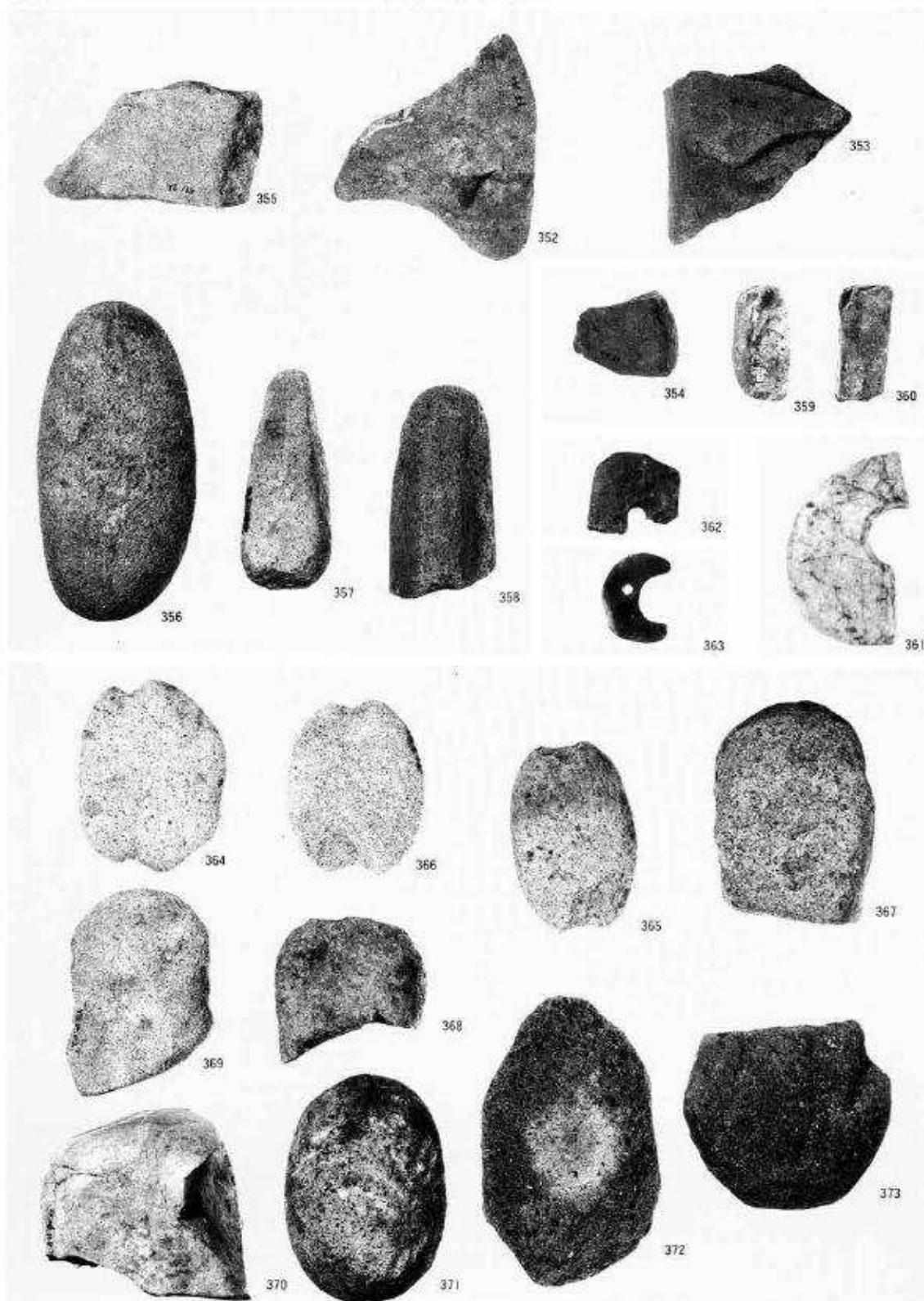


裏面

出土石器(1) (S=1/3)



出土石器(2) (S = 1/3)



出土石器(3) (361~363はS=1/1、ほかはS=1/3)

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第52集

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書VI

三屋原遺跡

三屋原B遺跡

塚ノ越遺跡

四割・杉沢遺跡

昭和63年3月25日 印刷 発行 新潟県教育委員会
昭和63年3月31日 発行 〒950 新潟市新光町4-1

☎ 025-285-5511

印刷第一印刷所
〒950 新潟市和合町2丁目4番18号
☎ 025-285-7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第52集『三屋原遺跡・三屋原B遺跡・

塚ノ越遺跡・四割・杉沢遺跡』 正誤表

2018年11月追加

頁	誤	正
図版7	② SK45 土層断面（西から）	② SK45 土層断面（南から）
図版20	① SI08 完掘（北から）	① SK21 完掘（北から）
図版20	② SI08 土層断面（北から）	① SK21 土層断面（北から）
図版21	① SK21 完掘（西から）	① SI08 完掘（東から）
図版21	① SK21 土層断面（西から）	② SI08 土層断面（東から）